

---

# 遊戯の弟子は闇使い

鷹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯の弟子は闇使い

### 【Nコード】

N1820V

### 【作者名】

鷹

### 【あらすじ】

伝説の決闘王武藤遊戯の弟子にしてペガサスミニオンという人脈がチート過ぎる主人公がアカデミアに入学して十代達とドタバタやる小説……かな？

主人公は別の世界から転生した訳でもなければトリップした訳でもないです。

## プロローグ（前書き）

プロローグでいきなりデュエルしているという……プロローグっぽいものになっているのは後半からです。

## プロローグ

「『可変機獣 ガンナードラゴン』で『激昂のミノタウルス』に攻撃！」

俺の攻撃宣言と共に、龍と戦車が一体となったような機械龍……『可変機獣 ガンナードラゴン』が、自身に付いているキャタピラで向きを変え、斧を持った獣人に向けて大砲を振り放した。

獣人……『激昂のミノタウルス』が破壊されるのと同時に観客から歓声があがるが、守備表示だった為、相手にダメージは無い。

「メインフェイズ2でする事は無い。俺はターンエンドだ」

??? LP2700 手札4枚

場

モンスター

可変機獣 ガンナードラゴン(ATK2800)

魔法・罫

スキルドレイン

テッド・バニアス LP1800 手札3枚  
場

モンスター

幻獣王ガゼル(DEF1200)

魔法・罨  
なし

「くっ…俺のターン！」

そう言いながら、俺の対戦相手である何故かいつも眼の下に隈のあ  
るオッサン…テッドさんがカードをドローした。

ドローしたカードを見た瞬間に表情が少し変わったけど、何か良い  
カードでも引いたのかな？

「俺は手札から『死者蘇生』を発動し、墓地から『激昂のミノタウ  
ルス』を特殊召喚！」

『死者蘇生』の効果で、さっきのターンで破壊された『激昂のミノ  
タウルス』が再び場に現れた。

「更に俺は『薬食い《やくぐい》』を発動！『幻獣王ガゼル』と『  
激昂のミノタウルス』を生贄に『アサルト・リオン』を召喚！！『  
薬食い』の効果対象は『激昂のミノタウルス』だ！」

薬食い

魔法カード（遊戯王R）

生贄召喚を行った時、生贄にしたモンスターの半分の攻撃力・守備  
力と特殊効果をその召喚モンスターに与える（複数場合は一体選  
ぶ）

アサルト・リオン

モンスターカード（遊戯王R）

属性 不明（この小説内では地属性に設定）  
種族 不明（この小説内では獣族に設定）

7

ATK 2600  
DEF 2500

効果 なし

テッドさんの場に顔だけライオンに似ている獣人が、右手に『幻獣王ガゼル』を、左手に『激昂のミノタウルス』を持って現れた。

そして『激昂のミノタウルス』を口元に持って行って……食べた。それはもう頭からバリバリと。カード効果の為とはいえ正直言つて気持ち悪い。

戦闘で破壊され、復活したと思つたら食べられる。悲惨だな……頼むから化けて出ないでくれよ？アーメン。

ちなみに『幻獣王ガゼル』は握り潰された。こつちもこつちで悲惨だ。それ以前に何で握り潰したんだ？てか、何故持った？こつちも化けて出ないで、アーメン。

「『薬食い』の効果で『アサルト・リオン』は『激昂のミノタウルス』の半分の攻撃力・守備力と効果を得る。尤も、『激昂のミノタウルス』から得た効果はお前の『スキルドレイン』で無効になるがな」

アサルト・リオン

ATK 2600 3450

DEF 2500 3000

海馬さんの『青眼の白龍』ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンのステータスをあっさりを超えたな

『スキルドレイン』発動してて良かった良かった。

あれで獣、獣戦士、鳥獣族に貫通効果を付けられたら厳しいからな。  
『アサルト・リオン』自身も獣族だし。

「『アサルト・リオン』で『可変機獣 ガンナードラゴン』に攻撃  
！！」

『可変機獣 ガンナードラゴン』が迎撃しようとするも、『アサルト・リオン』の速さに着いていけずに、後ろから殴られて撃破される。

「チツ、撃破されたか……」

??? LP2700 2050

「ターンエンドだ」

??? LP2050 手札4

場

モンスター

なし

魔法・罫

スキルドレイン

テッド・バニマス LP1800 手札1

場

モンスター

アサルト・リオン（ATK3450）

魔法・罾

なし

「俺のターン。ドロー」

来たカードはつと……『マジック・ジャマー』かよ。さっきのターンに来てればなあゝまあ、良いけど。

「手札から『天使の施し』を発動。カードを3枚ドローし、2枚捨てる。更に手札から『神獣王バルバロス』を生贄なしで召喚！」

俺の場に右手に槍を持ち、左腕に盾を装着した神に仕えし獣の王、『バルバロス』が現れる。

「『神獣王バルバロス』はレベル8のモンスターだが、生贄なしで召喚出来る！ただ、生贄なしで召喚した『神獣王バルバロス』の攻撃力は1900となってしまうが、俺の場にある『スキルドレイン』の効果でその効果は無効になる。よって『神獣王バルバロス』の攻撃力は3000！」

「はっ！その程度じゃあ俺の『アサルト・リオン』は倒せねーぞ！」

テッドさん。そういう事を言つと大概やられるって城之内さんが言つてましたよ……てか、俺の手札的にそうなります。



「墓地の『可変機獣 ガンナードラゴン』と『不屈闘士レイレイ』をゲームから除外し、手札から『獣神機王バルバロスU r』を攻撃表示で特殊召喚!!」

さつき出した『神獣王バルバロス』に『神機王ウル』をくつつけただけにしか見えないモンスター…… 『獣神機王バルバロスU r』が俺の場に現れる。

こいつが『神獣王バルバロス』と『神機王ウル』が融合した姿に見えるのは、俺の目が悪いからという理由だけじゃない気がする。

「『獣神機王バルバロスU r』の攻撃力は3800だが、このカードが戦闘を行う場合、相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは0になるという効果を持つ。尤も、この効果も『スキルドレイン』の効果で無効になるがな」

まあ、『アサルト・リオン』さえ潰せば『神獣王バルバロス』の攻撃で終わりだからどっちでも良いけど。

それにぶっちゃけちゃうと前のターンで2体とも出せたんだよな。何で無駄にピンチにならないといけないんだか。

まあ、それも今日までか……

「バトル! 『獣神機王バルバロスU r』で『アサルト・リオン』に攻撃!! 閃光烈破弾!!!」

『獣神機王バルバロスU r』の両腕に付いている『神機王ウル』の腕が2つに割れて、砲門が2つずつ出る。その砲門からビームが出

て『アサルト・リオン』を貫く。

「俺の『アサルト・リオン』が……」テッド・バニアス LP18  
00 1450

「これで終わりだ！『神獣王バルバロス』でダイレクト・アタック！トルネード・シェイパー……！」

「ぐああああ……！」

テッド・バニアス LP1450 0

「決まったあああ……！！カードプロフェッサー同士のデュエルはやはり！やはり！！大方の予想通りデュエルを制したのはブラック・デュエルディスクを持つカードプロフェッサーNo.1デュエリストT・Tだあああ……！！！」

『神獣王バルバロス』が持つ槍がテッドさんに当たった瞬間、デュエルディスクからデュエル終了を告げるブザーが鳴る。

それと同時に今まで黙っていた実況が喋りだす。てか、凄いリーゼントだな。中にフランスパンでも入ってんのか？

まあ、そんな事は置いといて控え室に戻るか。

カードプロフェッサーの任期は、今日で終わったから明日から何をしようかな？そうだ！ペガサス様や月行義兄さん達の手伝いでもしようかな。

時は少々遡る

童実野町某所

遊戯 Side

「ラッキーカードだ。こいつが君の所に行きたがっている」

【クリクリ〜】

「あ、ありがとうございます！あの！貴方は遊戯さん…ですよ？」

「ああ。そうだ」

「俺、遊城 十代って言います！遊戯さんデュエ「待った…：君は急いでいたようだけど、大丈夫なのか？」 うわあああ！！そうだった！遊戯さん。すみませんがまた今度！」

此方が忠告すると少年は、慌てて走り去って行った…：…と思ったら凄いい勢いで戻ってきた。

「受験票落としたー！！」

「これの事かい？」

足下に落ちていた紙を渡す。どうやらデュエルアカデミアの受験票のようだ。

「ありがとうございます！」

そう言って今度こそ少年は走り去って行った。

まるで台風が過ぎた様だったな。しかし、ハネクリボーが行きたがるとは……それだけあの少年が純粹という事なのだろうか？

【主よ。速く行かねばデュエルが始まってしまふのでは？】

「ああ！そうだった！」

ブラック・マジシャンの言葉で思い出す。今日は教え子の貴志のデュエルを見に行くんだった！

【まったく、大事な弟子のデュエルを見に行くと言って速く家を出たのに、沢山寄り道をした挙句、話し込むとは……もう余裕はありませんぞ】

「ブラック・マジシャンも言ってくれば良いのに」

ブラック・マジシャンと軽口を叩きながら、教え子である貴志がデュエルしているデュエルドームに向かった。

## プロローグ（後書き）

デュエルが途中からなのはミスではないので悪しからず。

遊戯やマハードの口調ってあんな感じで良いのかな？ついでに言つと遊戯の一人称は俺か僕で悩んでいたりします。

感想やミスの指摘等、お願いします。

《次回予告的な何か》

「師匠！！」

「デュエルするか？」

「よし、デュエルアカデミアに入学する事な」

「師匠…受験の日はとっくに過ぎてます」

「ここで書いたセリフが出るとは限りません。」

## 第1話 VS伝説の決闘王（前書き）

カード効果の説明はアニメオリジナル等のオリカを除き地の文かセリフで説明します。

カード名には『』をつけますが、精霊の名前には特に何もつけていません。

てか、普通第1話でデュエルする相手じゃねえ。

## 第1話 VS伝説の決闘王

試合を終えて控え室に戻り、素早く鍵を閉める。

「ふう暑かった」

椅子に座り、身長を誤魔化す為に履いていた厚底ブーツを脱ぎ、顔を隠す為に被っていたフードを取り、声を変える為に付けていたマスク型変声機も取る。

エンターテイメント的にミステリアスな人物を演出する為とはいえ、やり過ぎだと思う。

夏だけじゃなく、冬の時ですら暑かったし……

【クエー】

「クシル」

俺の精霊の一羽(?)である『ダーク・シムルグ』のクシルが実体化し頭の上に乗ってきた。

デュエル以外の時は力を抑える為、幼鳥の姿になっているから負担は全く無い。むしろほのぼのするなあ〜

- コンコンツ -

と思っていたら誰か来た。

終わった後は誰も来させないようにって、スタッフの人に言っていたのに……

慌てて変装セット（ブーツ、フード、マスク）を身に付け、対応すべくドアを開ける。

「久しぶりだな貴志」

「師匠！何故此処に？あつ、立ち話もあれなんでどうぞ」

「済まない」

ドアを開けると師匠である遊戯さんが居た。部屋の中に招き入れる。まあ、俺の部屋じゃないけど。

「師匠。さっきも聞きましたが、何故此処に？」

「弟子のデュエルを身に來ただけだ。途中からだっただけだな」

うわあ〜師匠が來てるんだったら、雇い主の言葉を無視して無駄にピンチにならずにさっさと終わらせたのに。

「ただ、デュエルを見て確かめたい事が出來た」

「確かめたい事ですか？」

「ああ。ボクとデュエルしよう」

「へ？」



師匠の言葉の後、師匠の家の前でデュエルをする事になった。夕暮れ時だが、周りに人影はない。

ちなみに変装セットとブラック・デュエルディスクはポストンバツクの中に入れた。

今、装着しているのは市販のデュエルディスクだ。まあ、こっちの方がじっくりくるけど……使うデッキもカードプロフェッサーの時に使うデッキじゃなく、正真正銘自分のデッキだし。

「こうしてデュエルするのも久しぶりだな」

「そうですね。俺がカードプロフェッサーになる前なので、もう1年ぐらい前になりますね」

つまり、俺が自分のデッキを使うのも1年ぶりか……久しぶりにクシル達が出せるかな。来たらの話だけど。

「さあ始めよう」

「はい！」

「デュエル！」

俺 LP4000 遊戯 LP4000

「先攻はお譲りします」

「分かった。ボクのターン！ ドロー！ 『クイーンズ・ナイト』を攻撃表示で召喚！」

師匠の場に絵札の3剣士の紅一点『クイーンズ・ナイト』が姿を現す。

「更にカードを1枚セットしてターンエンドだ！」

『クイーンズ・ナイト』

レベル4 光 通常 戦士族 攻1500 守1600

遊戯 LP4000 手札3枚

モンスター

『クイーンズ・ナイト』 (攻1600)

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン！ドロー 『スピード・ウォリアー』を召喚！」

俺の場にローラースケートを履き、特徴的な頭をしている戦士が現れた。

『スピード・ウォリアー』 レベル2 風 効果 戦士族 攻900  
守400

「バトル！ 『スピード・ウォリアー』で『クイーンズ・ナイト』に

攻撃！更に『スピード・ウォリアー』の効果を発動！召喚に成功したターンこのカードの元々の攻撃力をバトルフェイズ終了時まで倍にします！」

『スピード・ウォリアー』 攻900 1800

「リバースカード発動！『攻撃の無力化』 攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させるよ」

『クイーンズ・ナイト』に『スピード・ウォリアー』が突撃したが、渦に阻まれ失敗する。

『スピード・ウォリアー』 攻1800 900

多分、師匠のターンに絵札の3剣士が揃うな。でも……

「カードを1枚セットしてターンエンドです」

俺 LP4000 手札4枚

モンスター

『スピード・ウォリアー』（攻900）

魔法・罫

伏せ 1

遊戯 LP4000 手札4枚

モンスター

『クイーンズ・ナイト』

魔法・罫

なし

『ボクのターン！ 魔法カード『増援』を発動！この効果によりデッキからレベル4以下の戦士族モンスターを手札に加える。そして手札に加えた『キングス・ナイト』を通常召喚！更に『キングス・ナイト』の効果を発動し、デッキから『ジャックス・ナイト』を特殊召喚！』

師匠の場に絵札の3剣士唯一の効果モンスターである『キングス・ナイト』が現れ『クイーンズ・ナイト』と剣を交える。すると剣が光を発し、光が消えると『ジャックス・ナイト』が『キングス・ナイト』と『クイーンズ・ナイト』の間に現れていた。

『キングス・ナイト』

レベル4 光 効果 戦士族 攻1600 守1400

『ジャックス・ナイト』

レベル5 光 通常 戦士族 攻1900 守1000

「更に手札から永続魔法『連合軍』を発動！ボクの場に存在する戦士族・魔法使い族モンスターは合計3体。よってボクの場に存在する戦士族モンスターの攻撃力は600アップするよ」

『キングス・ナイト』

攻1600 2200

『クイーンズ・ナイト』

攻1500 2100

『ジャックス・ナイト』  
攻1900 2500

「行くよ『ジャックス・ナイト』で『スピード・ウォリアー』に攻撃！！」

「トラップ発動！『フローラル・シールド』 このカードの効果により『ジャックス・ナイト』の攻撃を無効にし、カードを1枚ドロ―します」

『ジャックス・ナイト』に『スピード・ウォリアー』は斬り掛かるが、無数の花びらに阻まれる。

「なら『キングス・ナイト』で『スピード・ウォリアー』に攻撃！！」

今度は『キングス・ナイト』が『スピード・ウォリアー』に斬り掛かり『スピード・ウォリアー』は真つ二つになった。

俺 LP4000 2700

「更に『クイーンズ・ナイト』でダイレクトアタック！」

『クイーンズ・ナイト』の剣をデュエルディスクで防ぐがそのまま斬られる。

俺 LP2700 600

アテム師匠が言っていた「デュエルディスクは盾」理論失敗！やっぱり防げないよね。

「ぐっ……俺の場にカードが存在せず、師匠がコントロールするカードによってダメージを受けたこの瞬間、手札の『冥府の使者ゴーズ』を特殊召喚します！出でよゴーズ！」

『冥府の使者ゴーズ』  
レベル7 闇 効果 悪魔族 攻2700 守2500

【主の危機に俺様参上！クウ〜俺様カツコイイ！！】

俺の場に俺の精霊の1人であり若干、性格に難がある『冥府の使者ゴーズ』が現れる。

「更に『冥府の使者ゴーズ』の効果発動！俺が受けたダメージは戦闘ダメージ。よって受けた戦闘ダメージと同じ数値の攻撃力・守備力を持つ『冥府の使者カイエントークン』を特殊召喚します。現れる！『冥h【来てくれ！マイハニー！】オイオイ……」

俺のセリフを取るなよ……別にマイハニーなんて言わないけどさ。

【主の求めに応えるべく、いざ参らん】

ゴーズの呼び掛けに応えるかのように俺の精霊の1人でゴーズと違い、性格がまともそうに見える『冥府の使者カイエン』が現れる。

『冥府の使者カイエントークン』

レベル7 光 トークン 天使族 攻？(2100) 守？(2100)

ゴーズ達を使い始めて3年経つけど、何で俺が使うゴーズ達と師匠やアテム師匠が使うゴーズ達とで、ここまで性格が違うのかなあ。師匠達を使うゴーズ達はまさしくクールを絵に描いた感じなのに。

【ハニーが冷たい】

【今はデュエル中よ。真面目にやりなさい】

この会話だけを聞けば、カイエンがまともに見える。そう、この会話だけなら……

「貴志のゴーズ達も相変わらずの様だね」

「ええ。俺的には変わって欲しいのですが」

「ふふつ。ボクはカードを1枚セットしてターンエンド」

俺 LP600 手札5枚

モンスター

『冥府の使者ゴーズ』 (攻2700)

『冥府の使者カイエントークン』

(攻2100)

魔法・罫  
なし

遊戯 LP4000 手札2枚

モンスター

『キングス・ナイト』

(攻2200)

『クイーンズ・ナイト』

(攻2100)

『ジャックス・ナイト』

(攻2500)

魔法・罾

『連合軍』

伏せ 1

「俺のターン！ ドロー！」

狙い通りゴーズとカイエンを出せたけど、思ったよりもダメージを受けたな。『連合軍』はちょっと予想外だったし。取り返せるかな

……

「バトルフェイズに入り、『冥府の使者ゴーズ』で『ジャックス・ナイト』に攻撃！冥府の剣めいふのてん斬撃剣！」

師匠のデッキには戦士族・魔法使い族が多い。ならば、数が揃う前に攻撃力の高い順に潰す。

ゴーズと『ジャックス・ナイト』が剣を交える……かに見えたが『ジャックス・ナイト』が相手にしたのは残像。そして『ジャックス・ナイト』の後ろに本物のゴーズが現れる。

【冥府に沈め！斬撃剣！】



ゴーズに『ジャックス・ナイト』は斬られ、破壊された。

遊戯 LP4000 3800

『キングス・ナイト』

攻2200 2000

『クイーンズ・ナイト』

攻2100 1900

【イヤッホ〜！やったぜ！】

これが無ければ、普通に格好良いのに……

【きゃ〜！ゴーズカッコ……ゴーズ、やったじゃない】

カイエン。今、素が出かけたな……まあ良いか。

イラストの雰囲気と違い過ぎる2人の性格にももう慣れたし。それでも時々、頭が痛くなるけど。

「続いて『冥府の使者カイエン』で『キングス・ナイト』に攻撃！  
冥府の舞めいふのまゆめつけん 斬滅剣！！」

【行くわよー！】

カイエンが飛び上がり、落下すると共に『キングス・ナイト』を両断する。

「っっ」

遊戯 LP3800 3700

『クイーンズ・ナイト』

攻1900 1700

【流石はマイハニーだぜ！】

【私よりもゴーズの方がカッコイイわよ。でも…ありがとう】

デュエル中にイチャつきそうなバカツプルは放っておいておこう。  
それより師匠の伏せたカードは何なんだろう？除去するカードが手札に無いから、どうしようもできないけど。

「俺はモンスターをセット。更にカードを3枚セットしてターンエンドです」

俺 LP600 手札2枚

モンスター

『冥府の使者ゴーズ』

(攻2700)

『冥府の使者カイエントークン』

(攻2100)

伏せモンスター 1

魔法・罫

伏せ 3

遊戯 LP3700 手札2枚

モンスター

『クイーンズ・ナイト』

(攻1700)

魔法・罫

『連合軍』

伏せ 1

「ボクのターン！ドロー！」

ドローしたカードを見た師匠が少し笑った気がした。多分……とい  
うよりほぼ確実にヤバイ事になるな。

「手札から『強欲な壺』を発動！デッキからカードを2枚ドローす  
る。更に『天使の施し』を発動！デッキからカード3枚ドローして  
手札からカードを2枚捨てる」

手札交換……これはマジでヤバイ！いや、これは師匠に限らずか……

「『クイーンズ・ナイト』を生贄に『ブラック・マジシャン・ガ  
ル』を召喚！そして魔法カード『賢者の宝石』を発動してデッキか  
ら『ブラック・マジシャン』を特殊召喚！！」

『クイーンズ・ナイト』がフィールドから姿を消し、代わりに師匠  
の相棒の1人にして精霊の『ブラック・マジシャン・ガール』が現  
れる。そして宝石を胸に抱き、何かを祈る様になるとすぐ傍に魔方  
陣が描かれ其処から師匠の相棒兼切り札にして精霊の『ブラック・  
マジシャン』が現れた。

「お、お久しぶりです。マナさんにマハードさん」

多分だけど俺の顔は少し引きつてると思う。何故ならこの2人が揃ったターン＝ラストターンになるから！

【久しぶりだね〜】

【久しいな。だが、手加減はせんぞ！マナも手加減はするなよ】

【はい！】

【俺様達も負ける気はないぜ！】

【その通りよ】

イチャつきそうだったゴーズ達もマハードさん達の方を向く。

確かに俺も負ける気は全く無いし諦めても無い。

だが……

「行くよ？リバースカードオープン！『黒・魔・導』《ブラック・マジック》！このカードの効果で貴志の魔法・畏を全て破壊する！」

やっぱり出た！『ブラック・マジシャン』がフィールド上に居ないと使えないけど、相手の魔法・畏を全て破壊するカード。まさか伏せていたとは……

それと何でこういう時に限って『魔宮の賄賂』や『マジック・ジャマー』が毎回無いんだろうか……

『ブラック・マジシャン』もといマハードさんが飛び上がり、杖に魔力を溜める。

【ハアアアア！！！行くぞ！『黒・魔・導』！】

マハードさんが杖に溜めた魔力を解放する。解放された魔力は俺の魔法・罨ゾーンに降り注ぎ、容赦なく俺の魔法・罨を破壊する。

伏せていた『ドレインシールド』『リビングデッドの呼び声』『呪縛牢』が破壊される。

俺の場にはゴーズが居るからと樂觀……できないな師匠相手だと。

「バトル！『ブラック・マジシャン』で『冥府の使者カイエントークン』に攻撃！！ブラック・マジック！」

【ウオオオツ！まれんだん魔連弾！】

マハードさん！技名が違います！

それでも放たれた黒い弾？みたいなのにカイエンは包まれ姿を消す。

俺 LP 600 400

【クツ…済まないマイハニー】

それ俺が言うセリフだと思つ。マイハニーなんてやっぱり言わないけどさ。

「続けて『ブラック・マジシャン・ガール』でセットモンスターに攻撃！ブラック・バーニング！」

【行っきまーす！それえ！】

『ブラック・マジシャン・ガール』が放つた色とりどりの弾？みたいなのにモンスターが包まれて破壊される。

「破壊され墓地に送られた『クリッター』の効果を発動！デッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える。俺は『ジャンク・シンクロン』を加えます」

これで次のターンにある程度希望が持てる。耐えきれれば………だけど。

「手札から速攻魔法『ディメンション・マジック』を発動！『ブラック・マジシャン』を生贄に捧げ手札から『サイレント・マジシャン LV4』を特殊召喚！！」

『ディメンション・マジック』が発動された瞬間マハードさんが「えっ？私？」みたいな顔をしたが、生贄にされ姿を消し、新たに白い導士服を着た少女が現れる。

技名を変えた事を根に持たれたのかな。

「更に『ディメンション・マジック』の効果によりフィールド上に存在するモンスター1体を破壊する！『冥府の使者ゴーズ』を破壊

「！」

【今逝くよマイh】

ゴーズが喋っている途中だったが『サイレント・マジック LV4』が容赦なく消した。

ナイスタイミング！と言いたいが、俺のモンスターなのでそうも言えない。

「これで終わりだ！『サイレント・マジシャン LV4』でダイレクトアタック！！サイレント・マジック！！！！」

『サイレント・マジシャン』が手に持つ杖を俺に突き付ける。杖の先端には既に魔力が溜まっている。

魔力を解放する時『サイレント・マジシャン』が少し笑っていた気がした。

俺 LP4000

遊戯 Side

「負けました。やはり師匠は強い」

貴志とデュエルしてみて、さっき感じた違和感がはっきりと分かった。

今の貴志は純粋にデュエルを楽しめていない。しかもそれを本人は自覚していない。

どうするべきか……『ハネクリボー』達の力を借りて、僕自身ともう一人のボクとデュエルさせるといいのが良いのかもしれない。そうすればきつとデュエルの楽しさを思い出す事ができる筈だ。

そう思つてデッキケースを開ける。

「ああ！」

「師匠？」

「いや、何でもない」

そうだった。『ハネクリボー』はさっきぶつかった少年にあげたんだった。

ん？そうだ。

「貴志」

「何ですか師匠？」

「確かカードプロフェッサーとしての任期は今日で終わりだったよね？」

「ええ。そうですけど」

「なら今年からデュエルアカデミアに入学しなさい」

『ハネクリボー』が初対面にもかかわらず行きたがったあの少年な



ら貴志にデュエルの楽しさを思い出せる事ができるかもしれない。  
理由が理由だからペガサスや月行くん達も反対はしない筈だ。

「……………ええー！！！！！！」

溜めに溜めて貴志が叫んだ。ちょっと近所迷惑になるな。

## 第1話 VS伝説の決闘王（後書き）

クシルについてですが地縛神とは無関係です。一応シグナーの竜や地縛神は現時点で存在してない設定なので。

後は『ダーク・シムルグ』で他にダムとかダルシムぐらいしか思いつかなかったのでクシルになったり。

ゴーズとカイエンはある意味性格が崩壊。あえて軽い感じに。

そして負けた主人公。師匠は手札を使いきって華麗に勝利。まあ、勝てないのは当然と言えば当然ですね。

次はオリ主の設定です。

では！

## 主人公設定とRの用語集（前書き）

この小説の設定でRの内容はバトルシティ編とドーマ編の間にあつた出来事とします。ドーマ編にペガサス出てましたし。

GXはアテムが冥界に帰つた5年後という事にしています。

主人公が関わる以外で原作と違う所には をつけてます。

## 主人公設定とRの用語集

【名前】	天道 貴志
【年齢】	14歳（R時代は9歳）
【誕生日】	6月7日
【血液型】	O型
【身長】	166？
【体重】	57？

### 容姿

ポケットモンスターSPECIALのシルバーの髪を少し短くして黒髪にした感じ。

職業（第1話時点）  
プロデュエリスト  
（カードプロフェッサー）

所属（第1話時点）  
ペガサスミニオン

### 備考

教育の賜物が周りの影響の為か機械に強い。

精霊が見え（ペガサスミニオンになった要因の1つ）自分の精霊は1体を除き閻属性。

デッキは複数あるが、作る際に主力モンスターが閻属性になるクセがある為、基本的に全デッキ共通で閻属性モンスターが切り札。

（メインデッキ以外を使う比率は低め）

カードプロフェッサーとしてデュエルする時は、エンターテイメント重視の為（と主人公は思っている）ミステリアスな人物を表現するように言われていた為、顔などは明かさず、デッキも攻撃力2000以上モンスターが中心の派手なデッキを使っていた。

ペガサスミニオンになった経緯

赤ん坊の時に、とある孤児院の前に捨てられていたのを保護される。

6歳まで孤児院で育ったが、デュエリストとしての才能に恵まれており『神童』と呼ばれていた。その噂を聞いたペガサスが孤児院に赴き、才能を見極める為のデュエル後（結果は主人公の敗北）ペガサスミニオンとして迎えられる。

ペガサスに見極められた才能は本物で、ペガサスミニオン内では『パーフェクト』デュエリストと呼ばれた天馬月行には勝てないものの、月行以外には勝ち越していた。

ちなみに、エドやヨハンとは顔見知り。

遊戯達との関わり

ペガサスミニオンになって3年後、決闘者の王国で、ペガサスが消息不明になった後、邪神に取り憑かれた天馬夜行を月行と共に止めようとするも月行共々、邪神の力で体に乗っ取られる。

その後、バトルシティ終了後の遊戯達と海馬コーポレーション本社ビルを舞台にして戦う。主人公は『邪神 イレイザー』を使い遊戯と戦うも敗れ、正気に戻る。

夜行VSアテム戦の後にシャードイーがペガサスを連れて現れ、事の真相を聞き和解。（1）

ドーマ編ではダーツに襲撃され(2)ペガサスの魂が封印された後、他のミニオンと同様にダーツに挑むも敗れ魂が封印される。

ドーマ編後、本物の強さを教えて貰う為、邪神に打ち勝った遊戯とアテムに弟子入りする。その為DM時代のデュエリストとは一部を除き顔見知り。

記憶編では遊戯達に同行した。戦いの儀の時も同行した為、アテムVS遊戯戦を見ている。

4年後、ペガサスミニオンでカードプロフェッサーNo.1のリッチー・マーセッドとNo.2のデブレ・スコットがタッグプロデュエリストに転向した際に、リッチー達の頼みという事と修行になると思い、後釜としてカードプロフェッサーになる。

カードプロフェッサーとしてデュエルするうちに、知らず知らず純粋にデュエルを楽しめなくなり、若干冷めた感じになる。

(1)

漫画版ではペガサスは死んでいる為、ペガサスは居ない。シャーデーも出ていない。

GXにRを合わせる為に、ペガサスが千年目を闇バクラに決り取られ、瀕死状態になったところをシャーデーが助け、療養しているところを消息不明にされたという感じにしました。

(2)

ペガサスを襲撃したのはダーツではなく、孔雀舞。こっちはDMのデュエリストと主人公でRのキャラをギクシャクさせるのもなあ〜  
と思いチェンジ。

もう1つ理由がありますがそれは2年目まで秘密という事で。

## 用語説明

### 遊戯王 R

原作遊 戯 王の作者高橋和希先生のアシスタントをしていた伊藤 彰先生が作者の遊戯王のアフターストーリー

この小説ではバトルシティ編とドーマ編の間の出来事にしました。

### 邪神

ペガサスが3幻神が暴走した時の為に、抑止する存在としてデザインしたものの創造をためらった神のカード。3幻神の対になるかのように3体存在し原作の3幻神と同じく大抵の魔法・罫は効かない上、神のランクは3邪神ともラーと同等の為、オシリスとオベリスクの効果すら効かない。

### ペガサスミニオン

ペガサスが世界中から集めた優秀な孤児達。ペガサスはゲームデザイナーやデュエリストを育成していた。

### 天馬夜行

ペガサスミニオンの1人。邪神を完成させ、ペガサスを復活させる為にR・A計画を計画するが失敗。アテムとの最終決戦にて邪神から解放され和解する。

### 天馬月行

ペガサスミニオンの1人。夜行の双子の兄でもある。R・A計画を止めようとするが体に乗っ取られ、R・A計画の片棒を担がされる。『邪神 ドレッド・ルート』を使いアテムとデュエルするも『邪神 ドレッド・ルート』が破壊された時に正気に戻り、以後力を貸す。

リッチー・マーセッド

ペガサスミニオンの1人。カードプロフェッサーNo.1デュエリストでもある。月行に勝つが『邪神イレイザー』を使ったキースに敗れた。

デプレ・スコット

ペガサスミニオンの1人。カードプロフェッサーでもある。表の人格の遊戯とデュエルするも、敗れる。

カードプロフェッサー

雇われデュエリスト集団。巨額な賞金が架かっている大会等で主催者が大会を裏からコントロールする為に雇われたりする。(簡単に言えばサクラみたいなもの)

Rでは賞金が懸けられた遊戯や城之内、海馬と戦った。

この小説内では、Rの話の後、インダストリアル・イリユージョン社がスポンサーになり、主に大会を盛り上げる為に雇われるデュエリスト集団になってます。

ブラック・デュエルディスク

カードプロフェッサー最強のデュエリストの証。当初はリッチーが持っていたが、キースに敗れた為キースの手に渡りその後、キースに勝った城之内の手に渡るも、Rのエピローグにて城之内がカードプロフェッサーの1人ティラ・ムークに渡っていた。

テッド・バニアス

カードプロフェッサーの1人。正直言ってやられ役。月行に敗れた。

ティラ・ムーク



ヴァンパイアデッキを使い。アテムとデュエルするも敗れる。デュエルディスクを城之内に貸した。

## 主人公設定とRの用語集（後書き）

用語集はアレで大方あつてるところなのですが間違いがあれば指摘してください。

感想等お待ちしております！

《次回予告？》

なんとも都合の良いことだ……

この問題は海馬さんが考えたのかなあ

か、海馬さん……

おい、自重しろよ

よし。白いオカッパー（ホワイト・オカッパー）と命名しよう。

スピード・ウォリアー。お前は何がしたいんだ？

ジャンクよ……お前もか。

第2話 入学試験 VS クロノス (前書き)

海馬が若干暴走ぎみです。

## 第2話 入学試験 VS クロノス

師匠がとんでも発言をした日から早数週間、俺はデュエルアカデミアの受験会場に来ていた。

あの後、師匠がペガサス様と電話で何か話すとペガサス様は、あっさり受験を受ける事を許可をしてくださった。むしろ「貴志には人生経験がアリマセーン。よって、アカデミアで人生経験を積んでくるのデース！」や「アナタの歳なら学校に通って当然デース！」と言いだめた程だ。

確かに接する人間が偏ってる気がするけど、そこまでじゃない気がする。

学業も基本的なのは終えてるし。

後、受験の日は過ぎてると思ったけど、俺が師匠とデュエルした日にあつた受験は選抜1で、定員が足りないから、もう一度受験が行われるらしい。

なんとも都合の良い……裏でペガサス様達が動いたって事は無いよね？

まあ俺としてもデュエルばかりできるってのも悪くないから良いけどさ……でも、何か裏がある気がするんだよね

「それでーは筆記試験を開始するノーネ」

髪がオカッパで顔が若干白塗りのおそらくデュエルアカデミアの先

生と思われる人が言った。

今は眼前の事に集中するか。ペガサスミニオンと師匠の弟子として、落ちる訳にはいかないし。

室内に正解の時に出る『ピンポン!』という音と不正解の時に出る『ブー!』という音が響く。

筆記試験の内容は4択問題形式で、机に埋め込まれたスクリーン上に問題が表示され、その問題の答えの記号にタッチする。「これ筆記試験って言うの?」という内容だった。

しかも問題が、カードの種類を当てるとかカードの名前を当てるとかの問題はわかりだ。白い忍者のカードイラストが出て『このカードの名称は?』という問題の時、選択肢の中に虹色の忍者や金色の忍者があった時は流石にあり得ないと思った。忍者的にその色は無いと思うのは俺だけじゃ無い筈だ。

問72 次のカードの中でこの俺、海馬瀬人を不快にさせるカードは?

- A 青眼の白龍 ブルーアイズ・ホワイトドラゴン
- B 青眼の究極竜 ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
- C 青眼の光龍 ブルーアイズ・シャイニングドラゴン
- D ブルーアイズ・トゥーン・ドラゴン

この俺って……問題は海馬さんが考えてるのか?てか、分かりやす!絶対Dじゃん!!他のは全部海馬さんのデッキに入ってるし。Dと……正解みたいだな。

『ピンポン!』と正解の音がする。次の問題はつと……

問73 次のカードの中で最も元々の攻撃力が高いモンスターは?

- A ブルーアイズ・ホワイトドラゴン 青眼の白龍
- B ブラック・マジシャン
- C サイレント・ソードマン LV7
- D 凡骨の意地

か、海馬さん……凡骨の意地で……モンスターですらない……おまけに離れてるし。

答えはAつと。次は

問74 次のモンスターの内、最も元々の攻撃力が高いモンスターは?

- A ブルーアイズ・アルティメットドラゴン 青眼の究極竜
- B オシリスのてんくうりゅう オシリスの天空竜
- C ラーのよくしんりゅう ラーの翼神竜
- D オベリスクのきよしんへい オベリスクの巨神兵

おい、自重しろよ……どんだけブルーアイズ好きなんだ海馬さんは? 確かに神に勝ってるけどさ。Aつと。そんな感じで筆記試験は終わった。

海馬さんの職権濫用な気がするよ……

筆記試験を終えて実技試験の会場に向かう。

デュエルフィールドが十個あるから、百人ぐらい居る受験生を教員十人で相手するみたいだ。

後、何故かギャラリーが居た。ギャラリーの服装と受験案内に付いたパンフレットに確かあんな服装の人が居た気がするから、多分デュエルアカデミアの生徒だと思う。

「受験番号1から10！デュエルフィールドに来なさい！」

俺の受験番号は8だから初めからデュエルをするみたいだ。ちなみに番号の基準は申し込んだ順らしい。

「宜しく願います」

先に居た先生に挨拶する。どうやら俺の相手は筆記試験の時に居たオカツパの人みたいだ。

「アナタの相手は実技担当最高責任者であるこのワタシ。クロノス・デ・メデイチがやってあげるノーネ（ドロップ・アウトボーイに負けた汚名を返上する為、生贄になってもらうーノ）」

実技担当最高責任者か。強いのかな？てか、クロノスねえ。シロノスのがしっくり来そうだけど。

「デュエル」「デュツェール」

俺 LP4000

クロノス LP4000

「先攻は譲ってあげるーノ（この手札なら、いきなり切り札を出せるノーネ）」

「そうですか。俺のターン！ドロー」

手札は…まあまあだな。

「モンスターをセット。カードを2枚セットしてターンエンド」

俺 LP4000 手札3枚

モンスター

伏せ 1

魔法・罫

伏せ 2

「ワタシのターン。ドロー」

先生がデッキからカードをドローする。今更だが使いにくそうなデュエルディスクを使ってるな。

「ワタシは手札から『融合』を発動。手札の『古代の機械巨人』アンティーク・ギア二体と『古代の歯車』アンティーク・ギアを手札融合するーノ。現れよ古代の機械究極巨人アンティーク・ギア！アルティメット・ゴーレムアンティーク・ギアナイト！！更に『古代の機械騎士を召喚ナノーネ』」



「ブッ！」

思わず吹いてしまった。1ターン目から攻撃力4400かよ。ちょっとキツいな。

そう思っていると、歯車が肩等に埋め込まれている巨人二体と手み  
たいなのが生えた歯車が一瞬だけフィールドに現れ、一つに重なる  
するとケンタウロスみたいな姿の巨大なモンスターが出現する。そ  
の後、槍と歯車の盾を持った騎士が召喚される。

同時に観客席から「終わったな」や「憐れだ」という声が聞こえて  
きた。「古代の機械兵士<sup>アンティーク・ギアソルジャー</sup>」じゃ無い分マシな気がするけどな。

『古代の機械究極巨人』

レベル10 地族性 融合/効果 機械族 攻4400 守3400

『古代の機械騎士』

レベル4 地族性 効果/デュアル 機械族 攻1800 守500

「バトルなのーネ！『古代の機械究極巨人』で守備モンスターを攻  
撃！アンティーク〜アルティメット〜パウンド〜！！『古代の機械  
究極巨人』の効果によってこのカードが攻撃する場合、相手はダメ  
ージステップ終了時まで魔法・罫を発動する事ができないノーネ。  
更にこのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を  
超えていれば、その数値分ダメージを与えるノーネ！」

無駄に技名伸ばしやがった！てか、マジでヤバいな。

『古代の機械究極巨人』が放った拳は壁モンスターとして出した『  
クリッター』を貫通し俺に届く。

「ぐあああー!!」

俺 LP4000 200

「ぐう！クリッターの効果によりデッキから『スピード・ウォリアー』を手札に加える」

「そんな事をしテモ無駄ナノーネ！『古代の機械騎士』でダイレクトアタックするーノ！」

「トラップカード発動！『フローラル・シールド』！このカードの効果により『古代の機械騎士』の攻撃を無効にし、カードを1枚ドロウする」

耐えた事により観客席から「お〜」という声がする。

大ダメージは受けたが、勝つ準備は整った。次で決める。

「ターンエンドナノーネ（次のターンで決めてやるーノ）」

俺 LP200 手札5枚

モンスター

なし

魔法・罫

伏せ 1

クロノス LP4000 手札1枚

モンスター

《古代の機械機械究極巨人》（攻4400）

《古代の機械騎士》

（攻1800）

魔法・罫

なし

「俺のターン！ドロー！俺は『スピード・ウォリアー』を攻撃表示で召喚！更に手札のモンスター1体を墓地に送り、手札から『クイツク・シンクロン』を特殊召喚！」

俺の場に『スピード・ウォリアー』とガンマン風のモンスター『クイツク・シンクロン』が召喚される。

『スピード・ウォリアー』レベル2 風属性 効果 戦士族 攻900 守400

『クイツク・シンクロン』  
レベル5 風属性 効果 戦士族 チューナー 攻700 守1400

「墓地に送った『レベル・ステイラー』の効果を発動！自分フィールド上に存在するレベル5以上のモンスター1体のレベルを1つ下げ、墓地から特殊召喚！」

『クイツク・シンクロン』レベル5 4

俺の場に、背中に星が描かれた虫が現れる。

『レベル・ステイラー』 レベル1 閻属性 効果 昆虫族 攻6  
00 守0

「まさかシンクロ召喚する気ナノーネ!？」

「いいえ。まだしませんよ」

本当はしたかったよ。 『クリッター』と『レベル・ステイラー』とさっきのターンに引いた『ケイック・シンクロン』で『ジヤंक・デストロイヤー』をこのターンでシンクロ召喚したかったよ。

ただ『古代の機械究極巨人』が予想外だったんだよ。

「俺は手札から『進化する人類』を発動し『スピード・ウォリアー』に装備!俺のライフは先生より下。よって『スピード・ウォリアー』の元々の攻撃力は2400になる」

『スピード・ウォリアー』 攻900 2400

まあライフの優劣が逆で元々の攻撃力が1000になっても『スピード・ウォリアー』の攻撃力は900だからどのみち上がるけど。

「バトル!『スピード・ウォリアー』で『古代の機械騎士』に攻撃!更に『スピード・ウォリアー』の効果発動。このカードの召喚に成功したターンこのカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了時まで倍になる」

『スピード・ウォリアー』 攻2400 4800

『スピード・ウォリアー』が自由の女神のポーズを真似たと思った  
ら『スピード・ウォリアー』が巨大化した。巨大化した『スピード・  
ウォリアー』は右拳を天に向かって伸ばし、左腕をくの字に曲げて、  
左拳を顔の近くに持ってきている。

『スピード・ウォリアー』……お前は何がしたいんだ？

そう思っていると『スピード・ウォリアー』が飛び上がり空中で無  
駄にアクロバティックな動きをし、『古代の機械騎士』を蹴り倒した。  
心なしか脚が燃えてた気がする。

クロノス LP4000 1000

「な、なかなかやるノーネ（次のターンで『古代の機械究極巨人』  
で倒してやるノーネ）」

「ここで、トラップ発動！『緊急同調』このカードはバトルフェイ  
ズ中のみ発動する事ができるトラップカード。このカードの効果に  
よりシンクロモンスターを1体シンクロ召喚します」

夜行義兄さんが師匠や海馬さん達とモンスター達との堅い絆を見て  
考案したデュエルの新たな可能性シンクロ召喚。久しぶりに使うな。

観客がざわつく。まあシンクロを使う人はあまり居ないからな。

「行きます！レベル1『レベル・スティーラー』にレベル4『クイ  
ック・シンクロン』をチューニング。5つの星集まりし時、現れる  
戦士よ。戦友ともの力を結集しその力を示せ！シンクロ召喚！我が障害  
を粉碎せよ『ジャンク・ウォリアー』！！」

『クイック・シンクロン』が4つの星の輪になりその輪を『レベル・ステイラー』が通過し、光に包まれると青を基調とし肩にブースターを付けている戦士『ジャンク・ウォリアー』が光から現れる。

『ジャンク・ウォリアー』レベル5 闇属性 シンクロ 戦士族  
攻2300 守1300

「『ジャンク・ウォリアー』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力分の合計分アップする！『スピード・ウォリアー』のレベルは2。よって攻撃力4800アップ！」

『ジャンク・ウォリアー』攻2300 7100

「な、ナンデス〜ト!!！」

『ジャンク・ウォリアー』も『スピード・ウォリアー』と同じく巨大化し『スピード・ウォリアー』と同じ様なポーズをしている。違うのは右手が開いているというぐらいか…てか、ジャンクよお前か。

「バトル！『ジャンク・ウォリアー』で『古代の機械究極巨人』に攻撃！スクラップ・フィスト!!！」

『ジャンク・ウォリアー』がブースターを使って勢いをつけて『古代の機械究極巨人』を殴りそのまま先生の所まで押していく。

そして先生の所まで行くと『古代の機械究極巨人』が爆発した。

「ペペロンチーノ」

クロノス LP1000 - 1700

先生が『古代の機械究極巨人』の破片に押しつぶされた。相変わらず海馬コーポレーションのソリットビジョンシステムは凄いな。

「ありがとうございました」

俺はフィールドを去って観客席に向かった。

余談だがあの白塗り先生は、その後ほぼワンキルで勝っていた。

## 第2話 入学試験 VS クロノス（後書き）

感想やアドバイスをお待ちしております！

### 《次回予告》

「此処がデュエルアカデミアか……」

ブルーアイズホワイト……

あれは…… 『ハネクリボー』!?

ハ、ハゲッター…… 失礼過ぎるか。



第3話 デュエルアカデミア入学（前書き）

デュエル無しで短いです。

### 第3話 デュエルアカデミア入学

今俺はデュエルアカデミア行きの船に乗っている。

入学試験の結果は文句なしの合格だったが、選抜二での入学という理由で俺はオシリス・レッドでの入学となった。

多分俺が無名だから、実力を疑問視されてるってのもあるんだろうけど。

カードプロフェッサー『T・T』としての公式試合記録はあるけど『天道貴志』としては無名だからなあ』

そういや、オシリス・レッドで思い出したけど、デュエルアカデミアにはランク制がある。

でも何でオシリス・レッドが一番下でオベリスク・ブルーが一番上なんだ？普通ラー・イエローが一番上じゃないのか？神のランク的に。

海馬さんの職権濫用じゃ……無いよな。それならブルーアイズ・ホワイトを作りそうだし。

攻撃力で決めたのかな？オベリスクは4000で安定。

オシリスは手札の枚数×1000と安定しない。

ラーもだけど、ラーは俺のトラウマである第二の能力を使えば、蘇生召喚でも初期ライフのままなら攻撃力は3999になるし。

それとも対邪神での活躍？ラーは元々、三邪神と神のランクは同格で邪神を倒せる能力もある。出なかつたけど。

オベリスクは神専用のカードを使ったけど、打倒不能と言われたアバターと相討ちになった。

オシリスだけは確か、敗れていた筈。能力的にも邪神には勝てない。まあ気にしても仕方ないか。

【クエー】

「どうしたクシ……って『ハネクリボー』？」

【クリクリ〜】

実体化はしてはないが、肩に乗っているクシルが騒ぎだしたので鳴き声がした方を見ると『ハネクリボー』の精霊が居た。

つて精霊！？珍しいな……

「お〜い相棒〜どこだ〜」

そう思つてるとおそらく『ハネクリボー』の持ち主らしき人が来た。

赤い制服だから俺と同じオシリス・レッドなのだろう。

【クリッ！クリクリ〜】

主人に気付いた『ハネクリボー』が声を上げる。

「あっ居た。相棒どうしたんだよいきなりどこかに飛び出して」

【クリツクリクリ〜】

「へー同じ精霊の気配を感じたのか」

よく『ハネクリボー』の言葉が分かるな。

俺はクシルと同じ鳥獣族の精霊であるアレクに通訳してもらわないと分からないのに。

「この『ハネクリボー』は君の？」

「ああ！俺の相棒だ！この鳥はお前のか？」

「ああ。『ダーク・シムルグ』のクシルだ」

「『ダーク・シムルグ』ってもつと大きくなかったか？」

「デュエルの時以外は力を抑えてるから小さいんだよ。人型以外の精霊はこうするらしい」

現にゴーズとカイエンにアレク、今は冥府で修行中のマルスと里帰り中のアスディは通常サイズだし。

「お〜い。アニキ〜」

『ハネクリボー』の持ち主と話していると眼鏡を掛けた赤い制服の生

徒と黄色い制服を着た生徒がこっちに向かって来た。

「アニキどうしたんすか？いきなり走り出して」

「悪い翔に三沢。ちょっと色々あつてな」

兄貴？この二人は兄弟なのか？でも全く似てないな。俺や義兄さん達と同じ感じなのかな？

「君は？」

俺がそう思っていると黄色い制服を着た人が俺の方を向いて聞いてきた。

「俺は天道貴志だ。選抜二で入学した見ての通りオシリス・レッドの生徒だよ。そう言う君は？」

「俺は三沢大地だ。宜しくな」

「僕は丸藤翔つス。宜しくつス」

「へー貴志って言うのか。俺は遊城十代！宜しくな」

「一緒に居たのに名前も知らなかったんすか？」

「そっいや、お互い名乗ってなかったな遊城」

「十代でいいぜ。俺も貴志って呼ぶし」

「分かった十代」

それから四人で話した。

そこで知ったんだが、選抜二の実技を担当する教師はデュエルアカデミア内でも屈指の実力者らしい。

それを聞いた十代にデュエルしようぜと言われ、入学式の後デュエルする事になった。

-----

デュエルアカデミアに着き、今はハゲッター……は失礼過ぎるか。鮫島校長の話を聞いている最中だ。

しかし話長いな。後、反射する光が眩……睨まれたから止めておこう。

隣の十代は立ったまま寝てるし。本当に暇だ。

「それでは新入生の皆さん。学園生活を楽しみデュエルに励んでください」

校長先生の話が終わったみたいだ。

「十代起きろ。寮に行くぞ」

「んあゝよく寝た」

会って間もないが、図太いな。

「此処がオシリス・レッドの寮か」

オシリス・レッドの寮は少し古いアパートだった。

「部屋割りは……俺が一人部屋で十代と翔は隣みたいだな」

「それじゃあまた後でな貴志」

「ああ」

そう言っただけで部屋に入ったのだが、部屋の中はわりとしっかりしていた。

問題はセキリュティか……後でカークさん直伝の罫でも仕掛けるか。

隣から『デス・コアラ』！と驚いている翔の声が聞こえた。翔も精霊が見えるのだろうか？

「貴志。デュエルしようぜ！」

十代がドアを開けて言ってきた。ノックぐらいしようよ。

「十代か。ちょっと待ってくれ。荷物を受け取りに行かないといけないんでな」

というより校長に用があるんだけどな。主に俺の事で。

「ええ〜マジかよ〜。じゃあ戻ったらデュエルな！」

「了解」

「失礼します」

周りに誰も居ない事を確認して校長室に入る。

「天道君か。何か私に用かな？」

「ええ。私がペガサスミニオンである事とカードプロフェッサーだった事、武藤遊戯の弟子である事は秘密にして欲しいのです」

俺の入学届は直接校長に渡されたから校長は俺の事を知っている。

「一応口止めしとかないと。『ペガサスミニオン』や『カードプロフェッサー』、『武藤遊戯の弟子』ではなく『天道貴志』として見てもらいたいからな。」

「良いでしょう。もとよりそのつもりだったので」

「ありがとうございます」

鮫島校長に礼をして校長室を出た。

.....

校長室を出て寮に向かおうとしたら、デュエル場で十代と翔がブルの生徒と何か言い合っていた。



「十代、どうかしたのか？」

「ん？ああ！万丈目さんこいつも入学試験でクロノス教諭を倒した奴ですよ！」

眼鏡を掛けた制服からブルーの生徒が鳥頭に向かって言った。

選抜二の時も観客が居たから見られていてもおかしくないけど、万丈目ってどっかで聞いた事があるような、無いような……

「お前もクロノス教諭が手抜きをしていたとはいえ、勝った奴か。まぐれかどうかその力を見せてもらいたいな」

『古代の機械究極巨人』を使って手抜きか……なら本気出したらどんだけ強いんだあの先生は？まあそれは良い。

「まぐれかどうか確かめてみるか？」

まぐれ呼ばわりは気に入らないな。

「万丈目さんが出るまでもありません俺にやらせてください！」

「良いだろう」

そう言っつて万丈目は下がり、取り巻きらしき奴は俺と向き合いデュエルディスクを構えた。

「デュエルちょっと待ちなさい！何をしているの！」

デュエルしようとしたら、気の強そうな女子生徒に止められた。

「て、天上院君か。なに、こいつらにデュエルアカデミアの厳しさを教えようと思ってね」

急に慌て始める万丈目。どうかしたのか？

「そう。でも、もう少しで寮の歓迎会が始まるわよ」

「くっ、行くぞお前等」

帰りだした万丈目。どうやらこの人には逆らえないらしい。

「貴方達もアイツ等と関わらない方が良いわよ。アイツ等碌でもない奴等なんだから」

吐き捨てるように言ってるが、一体何があったんだ？

「さっ、貴方達も自分の寮に帰りなさい。あと、万丈目君の挑発に乗らないようにね」

その後、自己紹介をして寮に帰った。

そっぴや、十代とデュエルする時間無くなったな。

### 第3話 デュエルアカデミア入学（後書き）

次回はデュエルを二回分書く予定です。

後、マルスはオリカの精霊です。

決してどっかの亡国王子ではありません。

## 第4話 弟子VS継ぐ者(前書き)

十代戦が思いの外長引いたので、十代戦だけにしました。

## 第4話 弟子VS継ぐ者

レッド寮に戻って来たのは良いのだが、まだ準備が出来てないらしく時間があるので十代とデュエルする事になった。

寮の前にあるレッド寮のデュエル場で向き合う。

「貴志君はどんなデッキを使うんスか？」

「ん〜色々」

翔の質問だけど本当に色々なんだよね。精霊全部入ってるのとか、ドラゴン族のとか……

取り敢えず、精霊全部入ってるのを使うか。組み替えるの面倒だし。

「んじゃやるか」

「くう〜ワクワクするぜ！」

「デュエル！」

俺 LP4000 VS 十代 LP4000

「俺の先攻！ドロー！」

さてどんなのが飛び出すのか……

「俺は『E・HERO エレメンタロー スパークマン』を攻撃表示で召喚！」

十代の場に黄色い鎧のような物を付け、手から雷を出しているモンスターが現れた。

『E・HERO スパークマン』

レベル4 光属性 通常 戦士族 攻1600 守1400

「カードを一枚伏せてターンエンド！」

十代 LP4000 手札4枚

モンスター

『E・HERO スパークマン』（攻1600）

魔法・罫

無し

「俺のターン！ドロー！」

レベル4以下のモンスターが居ねえ！？まあ何とかなるか。

「手札を一枚捨てて『THE トリック』を特殊召喚！」

俺の場に顔と胸に『？』と書かれている魔導師が現れる。

『THE トリック』

レベル5 風属性 効果 魔法使い族

攻2000 守1200

「バトル！『THE トリック』で『スパークマン』に攻撃！トリッキーイリュージョン！」

『トリック』が三人に分身し、『スパークマン』に向かう。

『スパークマン』が迎撃すべく、手から雷を出す。一人目、二人目と雷に当たり消える。

『スパークマン』が三人目に雷を打ち出し、それは『トリック』に当たる。だが、その『トリック』も消えた。

『スパークマン』が辺りを見回すが見当たらない。すると上から体を半分スライドさせた『トリック』が『スパークマン』めがけ蹴りを放った。

「ヒイイイ！」

翔が悲鳴を上げる。『トリック』の体が半分スライドしてるから、体内が見えたのだろう。

蹴りを受けた『スパークマン』が消滅する。

十代 LP4000 3600

「くっ…：トラップ発動！『ヒーロー・シグナル』！この効果でデッキから『E・HERO・フェザーマン』を守備表示で特殊召喚！」

空に『H』というマークが浮かんだと思ったら、何処からともなく

鳥男とも言つべき、羽が生えた男が現れた。

『E・HERO フェザーマン』  
レベル3 風属性 通常 戦士族 攻1000 守1000

「十代のデッキはHEROデッキか……」

「ああ！次から次ぎえと現れるカツコイイ、HERO達。ワクワクするだろ？」

「確かに。カードを一枚伏せてターンを終了する」

俺 LP4000 手札3枚

モンスター

『THE トリック』

(攻2000)

魔法・罫

無し

十代 LP3600 手札4枚

モンスター

『E・HERO フェザーマン』(守1000)

魔法・罫

無し



「俺のターン！」

HERO使いならやっぱり『融合』主体なのか？手札の消費が激しい気がするが……

「俺は魔法カード『融合』を発動！場の『フェザーマン』と手札の『バーストレディ』を手札融合！現れる！マイファイバリットモンスター『E・HERO フレイム・ウイングマン』！！」

一瞬だけ、赤を基調とした衣装に身を包み、両手から火を出している女性が現れれ『フェザーマン』と融合した。

そして二体のHEROが居た所には、右手が竜の口なっていて羽が片翼だけついているモンスターが現れた。

人相が若干悪いと思ったが、間違っていないと思う。

『E・HERO フレイム・ウイングマン』

レベル6 風属性 融合/効果 戦士族

攻2100 守1200

「更に俺は『E・HERO ワイルドマン』を召喚！」

十代の場に剣を背負った野生人とも思えるモンスターが現れる。

『E・HERO ワイルドマン』

レベル4 地属性 効果 戦士族 攻1500 守1600

そういや、十代のデッキには『一族の結束』や『連合軍』は入っているのか？だとしたら、使われるとかなりヤバいんだが……

「バトル！『フレイム・ウィングマン』で『トリツキー』に攻撃！  
フレイム・シユート！」

「悪いが『トリツキー』は破壊させん。トラップ発動『亜空間物質転送装置』このカードの効果で『トリツキー』をエンドフェイズまでゲームから除外する」

「でもそれだとダイレクトアタックになるぜ？」

「別にいい。受けるダメージは同じだ」

『フレイム・ウィングマン』は自身が戦闘で破壊し、墓地に送ったモンスターの攻撃力分のダメージを与える効果があった筈だからな。

『トリツキー』が突如現れた機械から発射された光線を受けて姿を消す。

『フレイム・ウィングマン』の攻撃は俺にきた。

「つて炎かよ！」

右手の竜の口から炎が吐き出される。技名にフレイムってあったからまさかとは思ったけどさ……

俺 LP4000 1900

【クエー】

クシルが喜んでいいる。自分と同じで、自身の属性と違い炎の攻撃をする仲間を見つけたからだろう。

自分の主がこんがり焼かれてるのにその反応はどうかと思うけど。

「俺は手札の『冥府の使者ゴーズ』の効果を発動！俺の場にカードが存在しない場合、相手のカードによりダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚できる！来い！『冥府の使者ゴーズ』！」

『冥府の使者ゴーズ』

レベル7 闇属性 効果 悪魔族 攻2700 守2500

俺の場に『冥府の使者ゴーズ』が現れたが何故か元気が無い。

【んも〜何もデート中に呼び出すこたあないでしょーよ】

その言葉に俺と十代はずっこける。

「貴志。まさかそいつもか？」

「ああ。そつだ」

「でも秀囲気が」

「言つな……言わないでくれ」

「ははは……」

流石の十代もびっくりしたみたいだ。この空気は何とかしないと……

「んん！更に『冥府の使者ゴーズ』の効果を発動！俺が受けたのは戦闘ダメージ。よって受けた戦闘ダメージと同じ攻撃力・守備力を持つ『冥府の使者カイエントークン』を特殊召喚する！現れる『冥府の使者カイエン』！！」

【……………】

『冥府の使者カイエントークン』

レベル7 光属性 トークン 天使族

攻？（2100） 守？（2100）

空気を変える為、咳払いをした俺の場にカイエンが現れる……が様子がおかしい。

【……………さない】

「え？」

【ゴーズとのデートを邪魔した貴方は絶対に許さない！】

「俺！？貴志じゃないのかよ！？」

様子がおかしいと思ったらキレてたんだ……十代、色々済まん。

「カ、カードを二枚伏せてターンエンド」

「この時『亜空間物質転送装置』の効果で除外された『THE トリック』は場に戻る」

俺 LP1900 手札3枚

モンスター

『THE トリック』

(攻2000)

『冥府の使者ゴース』

(攻2700)

『冥府の使者カイエントークン』

(攻2100)

魔法・罫

無し

十代 LP3600 手札0枚

モンスター

『E・HERO フレイム・ウィングマン』

(攻2100)

『E・HERO ワイルドマン』

魔法・罫

伏せ 二枚

「俺のターン！ドロー！」

やっとレベル4以下が来たよ。まあまずは

「手札から速攻魔法『サイクロン』を発動！俺から見て右側のカー

ドを破壊する」

突如現れた風の渦によって十代の伏せたカード『攻撃の無力化』は破壊された。

「よし！バトル！『ゴーズ』で『フレイム・ウィングマン』に攻撃！冥府の剣 斬撃剣！「トラップ発動！『聖なるバリア - ミラーフォース - 』！！」「何！？」

『フレイム・ウィングマン』に斬り掛かるゴーズだが、突如現れたバリアに防がれ、そのバリアから出た光線により破壊される。攻撃表示のカイエンと『トリツキー』も同じように破壊された。

【俺達はやられちゃったけど、頑張れよマイブラザ〜】

【これでやっとデートが再開できる！（頑張りなさい）】

待て！ゴーズのはともかくカイエンのはおかしいだろ！？

「形勢逆転だな（カイエンを破壊できて良かった）」

「大丈夫。問題ない」

実際かなりあるけど。

「俺はモンスターをセット更にカードを一枚伏せてターンエンド」

俺 LP1900 手札1枚

モンスター

伏せ 1

魔法・罾

伏せ 1

十代 LP3600 手札0

モンスター

『E・HERO フレイム・ウィングマン』

(攻2100)

『E・HERO ワイルドマン』

(攻1500)

魔法・罾

無し

「俺のターン！ドロー！俺は手札から『サイクロン』を発動！貴志の場のリバーズカードを破壊するぜ」

「なっ！」

さつきは十代を襲った風の渦が今度は俺を襲い俺の『次元幽閉』を破壊する。

「バトル！『フレイム・ウィングマン』で守備モンスターに攻撃！フレイム・シユート！」

『フレイム・ウィングマン』が俺がセットしたモンスターを容赦なく燃やす。

燃やされたのは白い犬のようなモンスターだった。

『ライトロード・ハンターライコウ』

レベル2 光属性 効果 獣族 攻200 守100

「『ライトロード・ハンターライコウ』のリバース効果発動。フィールド場のカードを一枚破壊する事ができる。俺は『ワイルドマン』を破壊する。そして『ハンターライコウ』の効果でデッキの上から三枚墓地に送る」

『ライコウ』が野生人……『ワイルドマン』に噛み付き破壊する。

捨てられたカードは……『蜘蛛の糸』と『機械仕掛けのマジックミラー』と『命削りの宝札』……あ、悪夢だ。

「くっ……でも『フレイム・ウィングマン』の効果によりダメージを受けてもらっぜ」

『フレイム・ウィングマン』が先程とは違い、小さすぎる炎で攻撃してくる。こんなもの俺が受けた精神ダメージに比べたら……

俺 LP1900 1700

「ターンエンドだ」

俺 LP1700 手札1枚

モンスター

無し



魔法・罾  
無し

十代 LP3600 手札0枚

モンスター

『E・HERO フレイム・ウィングマン』  
(攻2100)

魔法・罾  
無し

「俺のターン」

『命削りの宝札』は墓地に行ったがまだ『天よりの宝札』がある…  
…頼む来い！

「ドロー！」

【クエー】

お前か…だが、かなり良いタイミングだ。

「俺は墓地の『冥府の使者ゴーズ』と『THE トリックイー』をゲームから除外し手札から『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！」

俺の場にいつものように力を抑えた幼鳥の姿では無く、真の姿としてクシルが現れる。

『ダーク・シムルグ』

レベル7 闇/風属性 効果鳥獣族 攻2700 守1000

「バトル！『ダーク・シムルグ』で『フレイム・ウィングマン』に攻撃！！ダーク・フレア！」

クシルが『フレイム・ウィングマン』に炎を吐く。その炎はクシル自身が起こす強風で勢いを増し大きくなっていく。

大きくなった炎は『フレイム・ウィングマン』を飲み込んだ。

「くっ…『フレイム・ウィングマン』が…」

十代 LP3600 3000

「カードをセットしてターンエンドだ」

俺 LP1700 手札0

モンスター

『ダーク・シムルグ』

(攻2700)

魔法・罫

伏せ 1

十代 LP3000

手札、場 0

「俺のターンー!!」

十代がドロートした瞬間、空気が変わった。

「俺は魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動!俺は墓地の『スパークマン』と『フレイム・ウィングマン』をゲームから除外して『E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン』を融合召喚!」

マジか!このタイミングで引くか普通……

十代場に光輝くHEROが降り立つ。『フレイム・ウィングマン』よりずっとHEROっぽい。

『シャイニング・フレア・ウィングマン』  
レベル8 光属性 融合/効果 戦士族  
攻2500 守2100

「『シャイニング・フレア・ウィングマン』は自分の墓地に存在する『E・HERO』と名のつくカード一枚につき300ポイントアップする!墓地に存在する『E・HERO』は三枚!よって攻撃力が900ポイントアップだ!」

『シャイニング・フレア・ウィングマン』  
攻2500 3400

「攻撃力3400か……」

「バトル!『シャイニング・フレア・ウィングマン』で『ダーク・シムルグ』に攻撃!シャイニング・シュート!!これで俺の勝ちだ

！」

「悪いが負けるつもりは全く無い！トランプ発動！『プライドの咆哮』！！戦闘ダメージ計算時、俺のモンスターは攻撃力が相手モンスターより低い場合、その差分ライフを払って発動！ダメージ計算時のみ、自分のモンスターの攻撃力は相手モンスターの攻撃力の差分+300ポイントアップする！迎撃しろ『ダーク・シムルグ』！ダーク・フレア！！」

「くっ、行つけええ！！」シャイニング・フレア・ウィングマン『！！』

俺 LP1700 1000

『ダーク・シムルグ』  
攻2700 3700

クシルと『シャイニング・フレア・ウィングマン』がぶつかると。始めは押されていたクシルだが『シャイニング・フレア・ウィングマン』を押し返す。

【クエー！！】

大きく叫び『フレイム・ウィングマン』を倒した時よりもずっと大きい炎を吐き出す。

そして……『シャイニング・フレア・ウィングマン』は炎に吞まれて消えた。

十代 LP3000 2700

「ターンエンドだ。クッソオオオ!!!」

「俺のターン！バトル！『ダーク・シムルグ』でダイレクトアタック！ダーク・フレア!!!」

十代 LP27000

クシルが吐き出した炎により十代のライフは0になった。

同時にデュエルディスクから終了を告げるブザーが鳴る。

「ふゝ何とか勝てたか……」

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「あゝアニキに貴志君」

「あれ？翔居たのか？」

「ずっと居たっスよ！」

居たんだ。すっかり忘れてたな。

「ってそれはどうでも良いっス」

良いんだ……

「早くしないと歓迎会が始まるっスよ」

「マジでか！？早く行こうぜ貴志、翔」

十代はそう言うのと走って行った。てか、アイツ脚速いな。

っと俺も早く行かないとな。

## 第4話 弟子VS継ぐ者（後書き）

感想やアドバイス、ミスがあったら指摘等お願いします！

第5話 VS取巻……てか、自分？（前書き）

アニメのセリフと一部違う箇所があるかもしれません。



## 第5話 VS取巻……てか、自分？

寮の歓迎会が終わり部屋でのんびりしていると支給された携帯端末PDAにメールが2通来た。

どうやら今日会った万丈目という奴とその取り巻きからのメールのようだ。なんだ？と思ったがメールを開いて見てみる。

「え〜と、『今日午前0時にデュエルフィールドにて待つ。貴様等ドロップアウトボーイ達と我々オベリスク・ブルーの格の違いを見せてやる』と『お前の相手はこの俺だ』……か」

どうも万丈目って言葉に聞き覚えがあるな……

【どうかしたのか？主よ】

アレクが聞いてきた。俺の精霊達は基本的に冥界か精霊世界に居るか俺の近くに居る。

「やっぱり万丈目って言葉に聞き覚えがあつてな」ほんと何だったっけ？

【万丈目グループではないのか？】

「万丈目グループ？……あゝあの中堅企業の」

引っ掛かった事が解決してスッキリした。万丈目って名字は珍しいし多分、御曹司なんだろうな……

【それで、どうするのだ？】

「どうするって何を？」

【デュエルを受けるか受けないかだ】

「やめておく」

眠いし面倒だし。校則破りだし。

【ええ〜面白そうだし行こうぜ〜】

「悪いなゴーズ。俺は逃走を発動して全ての面倒事を避けさせてもらおう」

俺が行かないと言った事に反応してゴーズが言ってきたが、面倒なのは面倒だ。何より眠い。

大体、何故夜中にデュエルをやるんだ？明日でいいだろ……夜中の0時にやるから明日と言えば明日だけだ。

【残念だけど私達は先回りを発動して逃走の効果は無効にするわ】

ベッドの中に入ろうとしたら、実体化したゴーズとカイエンに阻まれた。

「え〜眠【私達のデートを邪魔した制裁を受けたい？】さーて行く準備をしますか」

カイエンはゴーズの為なら、実力行使も辞さないというのを忘れてた。多分、カイエンから出てるとす黒いオーラは見間違いじゃ無い

な……

てか、主を脅すカイエンといい、カイエンを止めないゴーズとアレクといい、寝ているクシルと里帰り中のアスディと冥界で修行中のマルスは良いとして、この3体は精霊として大丈夫なんだろうか……

部屋を出ると、十代と翔も出てきた。どうやら十代も俺と同じく呼び出されたようで、翔はその付き添いらしい。

そんなこんなでデュエルフィールドに着いた。

「臆病風に吹かれなかったようだな。ドロップアウトボーイ達よ」

中心地に立っている万丈目が言った。

「どうでも良いから、さっさとデュエルしようぜ」

「フン。その余裕がどこまで続くか見物だな。行くぞ取巻」

「はい！万丈目さん」

万丈目がそう言って十代の前に立つ。

俺の前には、眼鏡を掛けた万丈目の取り巻きが立つ。

てか、アイツ取巻って名前だったんだ……

「さあ行くぞドロップアウトボーイ！」

「ちょっと待ってくれ。使うデッキをまだ決めてない」

そう言ってデッキケースを取り出す。どれにしようか……これにするか。

【主よ。済まぬが我も使ってくれぬか？】

アレクの言葉に手を止める。確かに今手元に無い、アスディとマルスを除けば、アレクだけ出してないし、まあ良いか。

いつも使うデッキからアレクを取り出す。

手札に来たとして、アレクはどうやって出そうか……相手次第で出しやすいんだけど。

「終わったのか？」

「ああ、始めよう」

「「デュエル！」」

俺 LP4000 取巻 LP4000

「俺の先攻！ドロー！俺は『ゴブリン突撃部隊』を攻撃表示で召喚！」

取巻の場に金棒を持ったゴブリン達が現れる。

『ゴブリン突撃部隊』

レベル4 地属性 効果 戦士族 攻2300 守0

KCグランプリの時に、城之内さんが双六さんのデュエルの時に

使ってたけど、攻撃する様子があやじ狩りに見えたんだよなあ〜つと今はどうでも良いか。

「更にカードを二枚セットしてターンエンドだ！どうだドロップアウトボーイ！」

取巻 LP4000 手札3枚

モンスター

『ゴブリン突撃部隊』

(攻2300)

魔法・罫

伏せ 2

「どうだと言われても……俺のターン！ドロー！俺は手札から永続魔法『未来融合-フューチャー・フュージョン』を発動！俺がエキストラデッキから選ぶのは『F・G・Dだ』ファイブ・ゴッド・ドラゴン」

場にF・G・Dのカードが現れて消えた。

「そして融合素材を墓地に送る「ちょ、ちよつと待て！」 何だ？いきなり慌て出してどうしたんだ？

「お前が今使ってるデッキは入学試験の時に使ってたデッキじゃないのか！？」

「ん？ああ、そつだ」

俺がそう言つと黙り込んだけど、大丈夫なのか？てか、続けて良いのか？

「『未来融合・フューチャー・フュージョン』の効果で『F・G・D』は発動後二回目の自分のスタンバイフェイズ時に特殊召喚される。更に俺は『封印の黄金櫃』ふつじんのあごんひつを発動するが、チェーンして使うカードはあるか？」

「いや、無い」

「なら俺はデッキから『龍の鏡』『ドラゴンス・ミラー』をゲームから除外し、発動後二回目の自分のスタンバイフェイズ時に手札に加える」

闘いの儀で師匠がアテム師匠とのデュエルで使った『封印の黄金櫃』のエラッタ版。結構使いやすいなだね。

ふと十代の方を見ると

「デュエルは99%の知性と1%の運でできている。運が良いだけで勝ち続けるのは不可能だ！」

と万丈目が言っていた。

確かに運だけじゃ勝てないけど、運は重要だと思う。それに、運が1%しか無いなら、城之内さんはどうなるんだろう。

あの人は……一回のコイントスで手札補充をしたり、人の場を全滅させる。

しかも、九割失敗なし……どれだけ運が良いのだろうか。

「どうした！？ターン終了か？」

「いや、モンスターをセット。カードを一枚セットしてターンエンド」

危ない危ない。思い出してちょっとナーバスになってた。集中しないと

俺 LP4000 手札2枚

モンスター

伏せ 1

魔法・罫

『未来融合 - フューチャー・フュージョン』  
(永続魔法)

伏せ 1

取巻 LP4000 手札3枚

モンスター

『ゴブリン突撃部隊』  
(攻2300)

魔法・罫

伏せ 2

「俺のターン！（くそ！デッキが違うなら、伏せた『調律師の陰謀』は多分、あまり意味が無い……）俺は魔法カード『デュアルサモン二重召喚』を發動！この効果で俺はこのターン二回まで通常召喚できる。俺は『可変機獣 ガンナードラゴン』を召喚！更に『神獣王バルバロス』を召喚！」

取巻の場に『ガンナードラゴン』と『バルバロス』が現れる。

『可変機獣 ガンナードラゴン』

レベル7 闇属性 効果 機械族

攻2800（1400）

守2000（1000）

『神獣王バルバロス』

レベル8 地属性 効果

獣戦士族

攻3000（1900）

守1200

あれ？これって……

「『ゴブリン突撃部隊』と『可変機獣 ガンナードラゴン』に『神獣王バルバロス』ってまさか……」

「オシリス・レッドのドロップアウトボーイのくせによく分かったな！そうだこのデッキはカードプロフェッサー《T・T》のデッキを模した物だ！」

「……………」



「驚いて声も出ないようだな」

そりゃあ、自分のデッキを模した人とデュエルしてるんだから驚くよ。

「明日香さん。カードプロフェッサーってなんなんスか？」

翔がいつの間にか来ていた天上院さんに聞いた。

「カードプロフェッサーとはあるプロデュエリスト集団の事よ。

ちなみに《T・T》という人は今のカードプロフェッサーのトップの事よ」

「その通り！しかも、若手のプロデュエリストの中では《エド・フエニックス》とトップを争う程の実力を持っている！」

凄い評価だな……俺的には変装して、声変えて、シークレットブーツを履いてデュエルするというただの黒歴史なんだけど……

「どうしても良いから早くしてくれ」

このまま黒歴史をほじくり返されたら恥ずかしさで死んでしまう。

ゴーズ達はなんか笑ってるし……

「チッ！俺は伏せていた永続罫『スキルドレイン』を発動！発動コストでライフを1000ポイント失うが、このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上で表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効になる」

取巻 LP4000 3000

『可変機獣 ガンナードラゴン』  
攻1400 2800

『神獣王バルバロス』  
攻1900 3000

「アニキも貴志君もヤバイっスよ」

「フハハハ！行くぞ！バトル！『ゴブリン突撃部隊』で守備モンスターに攻撃！」

金棒を持った『ゴブリン』達が襲いかかってくる。

守備モンスターの『仮面竜』マスクド・ドラゴンが破壊される。どう見ても、リンチにしか見えないのは気のせいだろうか……

「守備モンスターは『仮面竜』だ。『仮面竜』の効果は墓地で発動する効果の為、有効。『仮面竜』の効果で、デッキから二体目の『仮面竜』を守備表示で特殊召喚」

俺の場に顔に仮面のような物を付けている胴体が赤と白の竜が現れる。

『仮面竜』

レベル3 炎属性 効果 ドラゴン族  
攻1400 守1100

「なら、『可変機獣 ガンナードラゴン』で『仮面竜』に攻撃！」

「『仮面竜』の効果で、三体目の『仮面竜』を守備表示で特殊召喚」  
「ぐつ、『神獣王バルバロス』で『仮面竜』に攻撃！」

二体目の『仮面竜』は『ガンナードラゴン』のプレスに焼かれ三体目の『仮面竜』は槍で串刺しにされた。

「『仮面竜』の効果で、デッキから『ミンゲイドラゴン』を守備表示で特殊召喚」

俺の場に竜……と言うより、亀に羽が生えた感じのモンスターが現れる。

『ミンゲイドラゴン』  
レベル2 地属性 効果 ドラゴン族  
攻400 守200

「俺は魔法カード『タイムカプセル』を発動。デッキからカードを一枚除外すし、発動後二回目の自分のスタンバイフェイズ時に手札に加える。これ以上する事は無い。ターン終了だ」

俺 LP4000 手札2枚

モンスター  
『ミンゲイドラゴン』  
(守200)

魔法・罫

『未来融合・フューチャー・フュージョン』  
(永続魔法)

伏せ 1

取巻 LP3000 手札0

モンスター

『ゴブリン突撃部隊』

(攻2300)

『可変機獣 ガンナードラゴン』

(攻2800)

『神獣王バルバロス』

(攻3000)

魔法・罫

『スキルドレイン』

(永続罫)

『タイムカプセル』

伏せ 1

「俺のターン。ドロロ 魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドロロする。……モンスターセットしてターンエンド」

後、二体墓地に行けば……

俺 LP4000 手札3枚

モンスター

『ミンゲイドラゴン』

(守200)

伏せ 1

魔法・罾

『未来融合・フューチャー・フュージョン』

(永続魔法)

伏せ 1

取巻 LP3000 手札0

モンスター

『ゴブリン突撃部隊』

(攻2300)

『可変機獣 ガンナードラゴン』

(攻2800)

『神獣王バルバロス』

(攻3000)

魔法・罾

『スキルドレイン』

(永続罾)

『タイムカプセル』

伏せ 1

「俺のターン！（『タイムカプセル』で選んだ『ライトニング・ボルトテックス』が来るのは次のターン。だが……）ドロロー！（よし！ ついてる）」

引いたカードを見て、ニヤニヤしただしたけど何を引いたんだ？

「バトル！『ゴブリン突撃部隊』で『ミンゲイドラゴン』を『可変機獣 ガンナードラゴン』で守備モンスターに攻撃！」

『ゴブリン突撃部隊』のリンチで『ミンゲイドラゴン』が『可変機獣 ガンナードラゴン』のブレスで守備モンスターとして出した『神竜 ラグナロク』が破壊される。

「更に『神獣王バルバロス』でダイレクトアタック！トルネード・シエイパー！！」

「リバース・カード『くず鉄のかかし』を発動。この戦闘によって『神獣王バルバロス』の攻撃を無効にする」

『神獣王バルバロス』が突き出した槍がかかしに防がれる。かかし強いな！

「更に『くず鉄のかかし』は発動後墓地に送らず、セットされる」

「くっ……だが、俺は魔法カード『光の護封剣』を発動する。これでF・G・Dが召喚されても攻撃できねえぜ。ターンエンドだ！」

俺の場に空から無数に降ってきた光の剣が突き刺さる。あくだから笑ってたのか、納得。

俺 LP4000 手札3枚

モンスター

無し

魔法・罫

『未来融合・フューチャー・フュージョン』  
(永続魔法)  
伏せ 1

取巻 LP3000 手札0

モンスター

『ゴブリン突撃部隊』

(攻2300)

『可変機獣 ガンナードラゴン』

(攻2800)

『神獣王バルバロス』

(攻3000)

魔法・罫

『スキルドレイン』

(永続罫)

『タイムカプセル』

伏せ 1

「俺のターン！ドロー！俺のスタンバイフェイズ時に『未来融合・フューチャー・フュージョン』の効果によって『F・G・D』を攻撃表示で特殊召喚！」

俺の場に闇、風、炎、水、地属性をそれぞれ司る五つの首を持ったドラゴンが現れる。

『F・G・D』

レベル12 闇属性 融合/効果 ドラゴン族

攻5000 守5000

「俺は更に『封印の黄金櫃』の効果で『龍の鏡』を手札に加える。ちなみに『ミンゲイドラゴン』の効果は発動しない」

これで墓地にドラゴンが10体溜まったな。

「俺は手札から『巨竜の羽ばたき』を発動。『F・G・D』を手札に戻し、フィールド上の魔法・罫を全て破壊する！」

『F・G・D』が羽ばたき何処かに飛び去る。その時に起こった風によって、フィールド上の魔法・罫も何処かに飛んでいく。

「クツ、だが！『龍の鏡』でエキストラに戻った『F・G・D』を出してもライフは削りきれないぜ！（何とか時間を稼がないと）」

「んな事は分かってる。俺は『龍の鏡』を発動。更に「ガードマン」が来るわ！時間外に施設を無断で使ってるから、最悪退学になるわよ！」チツ……」

「このデュエルは俺の勝ちだな」

「ちよつと待てよ！」

「待たん。行くぞ取巻、幕谷」

「今回は引き分けにしてやる！」

「さいですか」

万丈目が帰った後に、駄々をこねた十代を無理矢理連れていき外に



出た。

「どうだったかしらオベリスク・ブルーの洗礼は？」

「大した事ねえ。な」

「でも、危なかった様に見えたわよ？」

「最後に引いたカードはなんだったんスかアニキ？」

「へへ、これさ」

そうして十代が出したカードは……

「『死者蘇生』……」

「ああ！これで墓地の『フレイム・ウィングマン』を特殊召喚して攻撃すれば俺の勝ちだぜ」

どんな状況かは知らんが十代の引きって一体……

「貴方が『龍の鏡』を使った時に使おうとしたカードは何だったの？」

「ん？これだけど」

そう言っただけカードを一枚見せる。

「れ、『連続魔法』……まさか」

「そう。これで『F・G・D』を二体出そうと思ったんだけど、時間切れとはね」

せっかくボコボコにできると思ったのに残念だ……

そういや、アレク手札に来なかったな。あの状況なら特殊召喚できただんだが……

「んじゃ眠いんで俺はこれで」

そう言って寮への帰路つく、ゴーズ達も満足したみたいだし、良かった良かった。

第5話 VS取巻……てか、自分？（後書き）

デュエルを1から考えるのは、難しいですね。

ルールミスの指摘や感想やアドバイス等、お願いします！

## 第6話 覗き王？（前書き）

アニメや漫画等のオリカの効果は未OCGWikiの奴と漫画の効果そのままにする等、ごちゃ混ぜにします。一部とんでもない効果もあるので。

## 第6話 覗き王？

万丈目と取り巻きーズとのデュエルから三日。

特に何も起こらず、平和な日常を送っている。

今はクロノス先生の授業中だ。

7年前に教わった事を復習するだけだから正直、暇だ。

そう思っていると、翔が当てられた。どうやらフィールド魔法について答える様言われたみたいだ。

「えっ、あ、え」と

翔が答えられず、しどろもどろになっているとブルーの生徒から茶々が入る。

「もう良いノ〜ネ。流石はオシリス・レッド。こんな問題にも答えられないとは驚きなノ〜ネ」

それで、更に慌てて答えられなくなった所でクロノス先生が打ち切り、笑みを浮かべるが

「でも、先生。実戦と知識は関係ないですよね。だって俺、入学試験の時に先生に勝っちゃったし」

十代の発言により、一気に不機嫌になった。

でも、十代よ知識は大事だと思っぞ。

知識があれば多彩な戦術を考えられるし、俺は知識と才能でデュエルを始めてたった二ヶ月で、カードプロフェッサーになった人を知っている。

てか、十代ってクロノス先生に勝ってたんだな。

いつの間にか、クロノス先生に当てられた天上院さんがフィールド魔法について答えた所で授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

次は……確か体育だったな。

-----

室内運動場に移動したが、今日の体育の内容は自由にして良いらしい。

「なあ、貴志。翔が見当たらないんだけど、知らねえか？」

「いや、知らないな」

十代に言われて周りを見ると、確かに翔が見当たらない。

自由と言っても、運動場から出るなんて事は無いよなあ

「ん？十代。あそこに居るのは翔じゃないのか？」

「あっ、本当だ」

入り口付近に水色の髪をした人が居たので、十代に言ってみたが、当たったみたいだ。

二人で駆け寄るが、どうも様子がおかしい。

顔が赤く、フラフラしている。風邪かなんかか？

「十代。翔の様子がおかしいぞ」

「そうだな。取り敢えず、鮎川先生の所に連れていくか」

「大丈夫っスよ〜アニキに貴志君。ニへへ〜」

さっきの様子に、顔のにやつきが足され、どうみても大丈夫そうに見えない。

というか、まるで危ない薬を服用している人に見える。本当に大丈夫なんだろうか？……特に頭の方が。

「それじゃあ僕はこれで」

そう言っつて翔はバドミントンをしている人達の方に行った。

「本当に大丈夫なのか？あれは」

「本人がああ言っつてんだし大丈夫だろ。」

おっ！あつちでサッカーを始めるみたいだし、行こつぜ」

「そうだな」

取り敢えず、翔の事は保留にして俺達はサッカーに加わった。

オシリス・レッド対ラー・イエローで試合をしたが、十代が4ゴールを決める等して、俺達オシリス・レッドが7対0で勝った。

オーバーヘッドキックを決めるとか凄すぎだろ……

-----

「ん〜『グリッド・グライド』はやっぱり使えないか。デッキから抜いて変わりに『精神操作』でも入れるか……でも、ドローク系が減るのもなあ〜」

寮で晩飯を食べ、風呂に入った後にデッキ編成をしている。

やっぱりシンクロを使う人があまり居ないから、外すか。

ドローク系が減るのは痛いけど、他にも色々入ってるからまだ大丈夫だと思うし。

「お〜い、貴つてうわぁ！」

十代が部屋に入って来ようとしてドアを開けたが、飛んできたカード手裏剣に慌ててドアを閉める。

俺は溜め息を吐きながら、天井から垂らしてある紐を引いて罨を解除してドアを開ける。



「貴志、危ねえじゃねえか！」

「ただの防犯用だし、ノックすれば外れる仕掛けだから、普通は大丈夫。それで？なんか用か？」

ドアの前で腰を抜かしている十代に問い掛ける。

「ああ、そうだった。大変なんだ翔が攫われちまったんだ！」

「どづいつ事だ？」

十代に訳を聞くとこんな感じだった。

今から一時間程前、翔が何処かに出ていく。

今から五分前程、十代のPDAに『丸藤 翔は預かった。返して欲しければ、天道 貴志と共にブルー女子寮の裏手に来い』というメールが来る。以上。

何故だろう……凄い面倒事に巻き込まれた気がする。

このメールの内容だと俺も行かないといけないみたいだし……

それ以前に、翔を攫う理由も無いと思うが……ふむ。

「はあ。取り敢えず、行くか」

「ああ。それで……女子寮って何処だっけ？」

「さあ？俺も知らん」

その後、試しにメールの送り主に女子寮の位置が分からない旨を伝えると、島の見取り図を添付したメールを送って来てくれた。

しかも、ご丁寧に校内に掲示されているでかい見取り図を……これで部外者が誘拐した可能性は低くなったが、どうなる事やら……

-----

「アニキ〜貴志君〜」

「何をどうしたらそんな状態になるんだ？」

ボートを漕いで湖を渡り、女子寮に着くと、天上院さんと女子生徒二人に囲まれ、ロープでぐるぐる巻きにされた翔が居た。

「来たわね」

「明日香。お前がメールの送り主なのか？」

十代、それより先に聞く事があるって、翔がぐるぐる巻きにされる訳とか……まあ良いか。

「んじゃ、翔は返してもらっぞ」

「そうはいきませんわ」

翔を引き取るうとしたら、翔を囲んでいた二人の内、一人が言った。

「何で？」

「こいつ覗きをしたのよ！」

【女の敵ね】

【士の風上にもおけぬな】

翔を囲んでいたもう一人の言葉に俺の精霊達が反応した。

ん？ゴーズだけ何も言っていないな……

【これぞ覗き 王だな】

ゴーズの反応が一番ひどえ。

その後、翔が覗いてないと叫び、俺達呼び出された訳も話された。

簡単に言えば、翔が十代宛の偽ラブレターに引っ掛かり、女子寮に来て今に至る。

偽ラブレターを見せてもらったが、ナメクジが這ったような汚い字で書かれており、気持ち悪いキスマークまで付いていた。

天上院さんの書いた字を見た事が無いからどうとも言えないが、よく鵜呑みにしたな……

その後、俺と十代が天上院さんとデュエルして勝てば、今日の事は不問にして、翔を解放するという話になった。

「翔、明日ドロopan五つ奢ってもらっぞ」

「ええ〜！」

「じゃ、俺はこれで」

「ああー！！奢るツ奢るツスから行かないで〜！」

「毎度あり」

今回は翔の注意不足が招いた事なので、これぐらいのお灸は据えな  
いと。

デュエルアカデミア内の通貨であるDPデュエリストポイントをカードを買う以外はあま  
り使いたくないという理由もあるけど……

.....

ボートで湖の中心地まで行きデュエルの準備をする。

始めに十代がデュエルする事になり、デュエルした。

デュエル内容は簡単に纏めれば融合合戦だった。

勝者は十代でフィニッシャーは『E・HERO サンダー・ジャイ  
アント』召喚時の効果で天上院さんの『サイバー・ブレイダー』を  
破壊してダイレクトアタックを決めた。

「次は俺か」

ボートを漕いで、天上院さんの前に出る。

「貴志君に頼むっスよっ!!!」

丁度中間地点に居る翔が言った。

「分かってるよ。じゃ、始めますか」

「デュエル!」

俺 LP4000

天上院 LP4000

「私の先攻!ドロー!私は『ソニックバード』を召喚するわ」

天上院さんの場にゴグルとジェットエンジンを着けた鳥が現れる。

『ソニックバード』

レベル4 風属性 効果 鳥獣族 攻1400 守1000

「更に『ソニックバード』の効果でデッキから『機械天使の儀式』を手札に加える。カードを一枚伏せてターンエンドよ」

天上院 LP4000 手札5枚

モンスター

『ソニックバード』

(攻1400)

『ソニックバード』か……デッキを変えた素振りは無かったから、天上院さんのデッキは融合モンスターと儀式モンスターが主力なのか？ そうだとしたらかなりの確率で手札事故を起こすと思うけど……

「俺のターン！ ドロー」

今は考えても仕方ないか……

「相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。現れる！ チューナーモンスター」テックシーナス 『TG ストライカー』！」

俺の場に黒と青を基調とした戦士が現れる。

『TG ストライカー』 WA - 01

レベル2 地属性 効果 戦士族/機械族

攻800 守0

「『TG』！？ 貴方、珍しいカードを持つてるわね……」

「数枚しか持ってないけどな」

現に『TG』シリーズはかなり珍しい。ペガサスミニオンの俺ですら、持つてるのは四枚だけだし……

「俺は更に『ラーニング・エルフ』を召喚し、レベル3『ラーニン

グ・エルフ』にレベル2『TGストライカー』をチューニング！  
五つの絆の証が集いし時、現れる正義を冠する物よ……その力で他の者を滅せよ！シンクロ召喚！  
現れる『A・O・J』アリー・オブ・ジャスティスカタストル』！」

俺の場に知的な女性『ラーニング・エルフ』が現れた後、『TGストライカー』が光の輪となり、それを『ラーニング・エルフ』が通過する。

そして俺の場に白と金をメインカラーとし、中心に黒と赤が彩られた四つ脚の機械が現れる。

『ラーニング・エルフ』 (遊戯王R)  
レベル3 風属性 効果 天使族 攻1400 守1500  
効果

このカードがフィールド上から墓地に送られた時、自分のデッキからカードを一枚ドローする。

『A・O・J』カタストル』レベル5 闇属性 シンクロ/効果  
機械族  
攻2200 守1200

「『ラーニング・エルフ』の効果でカードを一枚ドロー。バトル！『カタストル』で『ソニックバード』に攻撃！『カタストル』は闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する！」

「っ！そうはいかないわ！トラップ発動！『攻撃の無力化』！」

『カタストル』が顔？から放った光線は渦に吸い込まれた為、『ソニックバード』には届かなかった。

「破壊できなかったか……カードを二枚伏せてターンエンド」

俺 LP4000 手札3枚

モンスター

『A・O・J カタストル』（攻2200）

魔法・罫

伏せ 2

天上院 LP4000 手札5枚

モンスター

『ソニックバード』

（攻1400）

魔法・罫

無し

明日香Side

「私のターン！」

『TG』を持つてるなんて彼は何者なのかしら？いや、まずは目の前のデュエルに集中しないとね。



「私は『マンジユ・ゴツド』を攻撃表示で召喚し、効果発動！このカードが召喚・反転召喚に成功した時、自分のデッキから儀式モンスターか儀式魔法を手札に加える事ができる。」

私は『サイバー・エンジェル・茶吉尼』を手札に加えるわ」

私の場に泥？みたいな物で形成されたモンスターが現れる。正直、本当に天使族なの？と思ってしまう。

『マンジユ・ゴツド』

レベル4 光属性 効果 天使族 攻1400 守1000

何はともあれ、今引いたカードと合わせてこれで一気に私のエースモンスターが出せるわね。

明日香Side out

『サイバー・エンジェル・茶吉尼』か……面倒だな。

「私は手札から儀式魔法『機械天使の儀式』を発動。場の『ソニックバード』と『マンジユ・ゴツド』を生け贄に『サイバー・エンジェル・茶吉尼』を儀式召喚！」

天上院さんの場に四つの手に、二振りの剣と一つな雑刀を持った機械天使が降臨した。これで天使族と言うのだから、天界という場所はおっかない所だと思う。

『サイバー・エンジェル・茶吉尼』

レベル8 光属性 儀式/効果 天使族

攻2700 守2400

「更に『サイバー・エンジェル・荼吉尼』が特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するモンスター一体を相手が選択して破壊するわ」

「俺の場には『カタストル』のみ。よって『カタストル』を破壊する」

『荼吉尼』に切り刻まれて『カタストル』はバラバラにされた。

「更に私は魔法カード『融合』を発動！手札の『エトワール・サイバー』と『ブレード・スケーター』を融合！現れなさい『サイバー・ブレイダー』！」

天上院さんの場にスケート選手のような滑り方をしている人物が現れた。

さっきの十代とのデュエルでは『フレイム・ウィングマン』を倒してたな。

『サイバー・ブレイダー』

レベル7 地属性 融合/効果 戦士族

攻2100 守800

「バトルよ！『サイバー・エンジェル・荼吉尼』でダイレクトアタック！」

「トラップ発動！『ガード・ブロック』戦闘ダメージを0にし、カードを一枚ドローする」

剣と薙刀が俺に振り下ろされたが、バリアに阻まれる。

「っ！なら『サイバー・ブレイダー』でダイレクトアタック!!」

水上を滑り向かってきた『サイバー・ブレイダー』が上段蹴りを顔付近に放つ。それをデュエルディスクで防ぐ。

「ぐっ、う!!」

俺 LP 4000 1900

「私はターンを終了するわ」

俺 LP 1900 手札4枚

モンスター

無し

魔法・罫

無し

天上院 LP 4000 手札1枚

モンスター

『サイバー・エンジェル - 荼吉尼 -』

(攻2700)

『サイバー・ブレイダー』

(攻2100)

魔法・罫

無し

「俺のターン！ドロー！俺は手札を一枚墓地に送り、『THE トリックキー』を特殊召喚！更に手札を一枚デッキの上に戻し、墓地の『ゾンビキャリア』を特殊召喚！」

俺の場に全体的に少し太めのゾンビが現れる。

『ゾンビキャリア』

レベル2 闇属性 効果

アンデット族

攻400 守200

「『THE トリックキー』の召喚時に墓地に送ったのね」

「そういう事。じゃあ一気にせて貰う！レベル5『THE トリックキー』にレベル2『ゾンビキャリア』をチューニング！

七つの絆の証が集いし時、現れる魔術師よ

魔力を用いて我が障害を滅殺せよ！シンクロ召喚！

現れる！『アーカナイト・マジシャン』！！」

うーん。『THE トリックキー』が光の輪を通過しているのは良いんだが、『トリックキー』の顔が『？』のせいで笑いそうになってしまう。まあ、それは置いて……

俺の場に白と紫を基調としたローブを纏っている魔術師が現れる。

『アーカナイト・マジシャン』

レベル7 光属性 シンクロ/効果 魔法使い族

攻400 守1800

「『アーカナイト・マジシャン』がシンクロ召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを二つ置く。そして『アーカナイト・マジシャン』の攻撃力は自身に乗っている魔力カウンター一つにつき、攻撃力は1000ポイントアップする！」

『アーカナイト・マジシャン』

魔力カウンター0 2

攻400 2400

「攻撃力2400……でも貴方のモンスターは一体……『サイバー・ブレイダー』は戦闘で破壊できないし、『サイバー・エンジェル・荼吉尼』の攻撃力にも届かないわ！」

「そんな事は分かってるさ。俺は『アーカナイト・マジシャン』の効果発動！自分フィールド上に存在する魔力カウンターを一つ取り除く事で、相手フィールド上に存在するカードを一枚破壊する。俺は『アーカナイト・マジシャン』に乗っている魔力カウンター二つを取り除き、『サイバー・エンジェル・荼吉尼』と『サイバー・ブレイダー』を破壊する！」

『アーカナイト・マジシャン』が杖に自身の魔力を集約する。そして杖に溜まった魔力を天上院さんのフィールド目がけて解き放った。

杖から出た魔力は『サイバー・ブレイダー』と『サイバー・エンジェル・荼吉尼』に当たり、この二人を葬った。

「サイバー・エンジェル達が……」

『アーカナイト・マジシャン』

魔力カウンター 20

攻 2400 400

「更に俺は墓地の『A・O・J カタストル』と『ラーニング・エルフ』をゲームから除外して手札から『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！現れる！クシル！！」

水上に火柱が立ち、その火柱の中からクシルが現れる。

その様子に焼き鳥にならないのか？と思っただら睨まれた……

「バトル！『ダーク・シムルグ』でダイレクトアタック！！ダーク・フレア！」

「うっ、くっ……でもまだライフは残るわ！」

天上院 LP 4000 1300

「この瞬間、トラップカード『連撃』を発動！自分フィールドのモンスター一体が相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時に発動できる。そのモンスターはもう一度だけ攻撃を行う！」

「なんですって!？」

『連撃』（遊戯王R）

通常罠

効果（遊戯王未OCGWik）

自分フィールド上のモンスター一体が相手プレイヤーに戦闘ダメージ

ジを与えた時に発動できる。  
そのモンスターはもう一度攻撃を行う。

クシルがもう一度炎を溜める。このデュエルを終わらせる為に……

「行くぞクシル！追撃のダーク・フレア！！」

【クウエエー！！！！】

「きゃああああ！！！」

天上院 LP13000

デュエルディスクから終了を告げるブザーが鳴り、カードが消える。

.....

「約束通り、翔は解放してもらおう」

「ええ。分かったわ」

あの後、女子生徒二人が騒いだが、天上院さんが宥め、陸地に戻り、翔を解放してもらった。

「ううゝアニキ、貴志君ありがとうッス」

「気にすんなよ翔」

「明日ドローパーン五つな」

「うう〜分かってるスよ〜」

よしこれでDPが浮いた。

その後、それぞれPDAのアドレスを交換して帰った。

・翌日・

「これとこれとこれ。後、これとそれだな。じゃ会計よろしく〜」

昼休みに約束通り翔にドローパーンを五つ奢って貰い、食べ始める。

「一つ目……納豆パンかよ」

完全にパンに合わないな……外れか。

「二つ目……クサヤパン……」

これも外れか……

「貴志。大丈夫か？」

二回連続の外れを引いた為か、十代が心配してきた。

「大丈夫だ。気を取り直して三つ目ドロパーン……って辛あああ……!!  
!み、水!水!水!」

.....



「だ、大丈夫つすか？」

「ぜえぜえ、だ、大丈夫だ……」

あの後、俺は近くの自動販売機で水（1・5？）を買って飲み、何とか助かった。

「激辛唐辛子パン……外れの中の外れパン。まさか引き当てるとはな」

「そ、そうだな三沢。だが！これより下は無い！四つ目ドロー！！……こ、この訳の分からない味が交じりあってるパンはまさか伝説の……デイ、ディステイニーパン……」

「と、取り敢えず水で流し込むんだ！」

水で無理矢理流し込む。少し気持ち悪い。

「な、何故ここまで外ればかり……」

ここまで来れば、最後のパンは一体どうなるんだ？

「もうやめるんだ貴志！」

「そうっす！次は何が起こるか分からないっす！」

「十代達の言う通りだ！止めた方が良いと思うぞ」

「ありがとう皆。だが、俺は最後まで諦めない。これ以上、下は本  
当に無い！行くぞ、ラストドロー！！」

五つ目のパンを食べるが……味が無い

「カードパンか……」

「確か、カードが数枚付いてるパンだったな」

パンが入っていた袋を探るとカードが入った袋が出てきた。

「何のカードが当たるか……これが真のラストドローだ！」

入っていたカードは……

「……ス、スカゴブリン……」

「グフツ……」

「た、貴志！」

正直、これが一番ダメージがでえ……

ああ何だか十代達の声が遠く聞こえるよ……

・ガクツ・

「貴志ー！！」 「貴志！」 「貴志君！」

俺は昼休み後、その日の授業は全て欠席する羽目となった。

## 第6話 覗き王？（後書き）

鷹「今日の最強カードは」

貴志「おい。急に何してんだ？」

鷹「これだ！」

貴志「無視かよ」

『スカゴブリン』

レベル1 闇属性 通常

悪魔族 攻400 守400

完璧な『スカ』の文字を極めるため、日々精進するゴブリン。その全てを一筆に注ぐ。

貴志「ふざけんなあ！！普通は『連撃』だろうが！！」

鷹「ある意味止めを刺した的な感じで？」

貴志「余計ふざK……」

鷹「てな訳でまた次回！」

貴志「ふ・ざ・け・ん・なあー！！」

## 第7話 VS取巻再び

ドローパンの悲劇から数日、俺は明日の月一試験に備えてデッキの調整をしている……しているんだが、集中できない。何故なら……

【ウフフ。ゴーズ、あ〜ん】

【あ〜ん。いや〜カイエンが食べさせてくれる冥府リンゴは美味し  
いなあ〜】

ゴーズ、カイエンの精霊という名のバカカップルが居るからだ。

おかげで気が散ってしょうがない。

さっきなんて【見てごらん。あんなに数多く輝く星も君の美しさの  
前では霞んで見える】とかほざいてたし。

「お前等何故、まだ此処に居る？愛の巣とやらに帰るんじゃないの  
か？」

『冥界リンゴって何だよ。』とか、『今更だが、精霊って飯食うの  
かよ』とか突っ込みを入れない所はあるが、一番疑問に思った事を  
聞く。

時刻は23時。本来ならこのバカカップル達は冥界にある家（愛の巣）  
に帰ってるから、居ない筈だ。

【ん？あ〜今日は駄目なんだわ。バ サン焚いてるからな】

バ サン？冥界で……バ サン？

「百歩譲ってバ サンを焚いてる事にしよう。だが、此処でイチヤつくのは、気が散るから止めてくれ」

【しゃくねえでしょうよ。俺達は現世と冥界しか行き来出来ねえし、現世じゃマイブラザーの近くにしか居られねえんだから】

【ちなみに私達がイチヤつかないという選択肢は無いわ。何故ならゴーズが其処に居るんですもの】

【俺も同じ気持ちさマイハニー】

駄目だこのバカップル達、早く何とかしないと……もう手遅れに見えるけど。

【ただいまあれ？皆どしたん？】

「アスデイ……帰ってきたか」

【へーい『墮天使アスモディウス』ただいま里帰りを終えて主の元に帰って来ました〜】

「ふむ。それじゃあ構成を練り直すか」

バカップル達は放っておく事にして、アスデイをデッキに入れる為に構成を練り直す事にした。

「え〜と『万能地雷グレイモヤ』に『炸裂装甲』リアクティブアー

マー』に『破壊指輪』それに『爆弾かめ虫』と……はっ！俺は何をしてるんだ？」

アステイをデッキに入れる為に、構成を練り直してるのに、何故こ  
うも爆発系のカードを選んだんだ？ほぼ使わねえぞ……真面目にや  
るか。

後ろでゴーズが【俺達は爆発しねえぞ？】と言っているが、何の事  
何だろうか？

- - - - -

「やっと終わった」

時刻は0時を回った頃、やっとデッキの調整が終わった。

「そろそろ寝るか」

部屋の明かりを消して、ベッドに入る。

「ふぁ～おやすみ」

睡魔は直ぐに襲ってきた。

朝飯を食べ、準備をして校舎に向かう。

クシルのおかげで、頭は痛いが寝坊はしなかった。

ハネクリボーに頼まれ、夢の中に居る十代達を起こそうとしたが、

起こそうとしても起きず、時間も無くなったので放置した。

流石に実体化した幼鳥状態のクシルに頭を突かせるといふのは止めておいた。

そんなこんなで筆記試験の時間になったが、十代達は現れない。

まあ十代は実技で何とかなるとして、翔だけでも起こすべきだったか……

結局、十代達は筆記試験終了15分前に来た。

.....

「あゝもう〜終わりっス〜！」

「翔。気にすんなって、次の実技で頑張れば良いじゃねえか」

「アニキは強いからいいっスけど僕は」

確か実技試験は、実力が拮抗してる人どうしで当たるから、強い弱いは関係無いと思うが……

と書いていたら翔も気を取り直したようだ。購買部に行ってカードを買ったと言って、十代と共に購買部に向かって行った。

俺は……別にいいや。さっさと実技試験会場に行こつと。

・その頃とある場所にて・



「クソツ！一体誰なんだ！？カードを買い占めた奴は？」

「それは私なノーネ！」

苛立つ万丈目の取り巻きである取巻の問い掛けにアタツシユケースを持った男が答えた。

「誰だ貴様は？」

「シニョール万丈目。この私にそんな口を聞いていいノーネ？」

アタツシユケースを持った男が変装を解く……すると其処には

「『クロノス教諭！』」

クロノスが居た。

「シニョール万丈目。シニョール取巻。アナタ達々が入学式の時々にドロップアウトボーズとデュエルしたのは知ってるノーネ」

「な、何故それを！」

「私を甘く見てはいけないノーネ。そこでアナタ達々にやってもらいたい事がアル」

クロノスはアタツシユケースを開けて、万丈目達に中身を見せる。

「このカードを使ってデッキを強化してドロップアウトボーズを倒すノーネ！」

「分かりましたクロノス教諭。取巻やるぞ！」

「はい！」

「おっと忘れる所だったノーネ。シニョール取巻にはこれも渡すノーネ」

クロノスは一枚のカードを取り出し取巻に渡した。

「こ、このカードは！？クロノス教諭ありがとうございます！！」

「絶対にドロップアウトボーイズを倒すノーネ（私）の給料二ヶ月分をかけてるから色んな意味で勝って欲しいノーネ」 「何故こうなった……」

筆記試験の後、何者かがカードを買い占めた為、十代達はカードが買えなかったらしい。

十代はカードを貰えたらしいが、翔は意気消沈していた。

ただ、実技試験でレッド生と当たり、勝つてからは一気に元気が出た。

まあそんな事はどうでも良い……だが、

「さあデュエルだ！ドロップアウトボーイ！」

何故俺の相手が取巻なんだ？後ろのデュエルコートの十代の相手は万丈目みたいだし……

「オツホン！オシリス・レッドの遊城十代と天道貴志の八入学試験で、この私を倒してるノーネ。

ナノーデ、同じオシリス・レッドの生徒ではなくオベリスク・ブルーであるシニョール万丈目とシニョール取巻とデュエルしてもらうノーネ」

クロノス先生からの説明が入る。負けた事を気にしてる割には、自分で負けた事を広めるのな……

「はあ……まあ良いか」

相手が誰であろうとやる事は変わらないし。

「あの時の決着を付けてやる！」

「はいはい」

「デュエル！」

俺 LP4000

取巻LP4000

「先攻は貰う！ドロー！」

俺は『ダーク・ヒーロー ゾンパイア』を攻撃表示で召喚！」

取巻の場に黒の衣に身を包み、赤のマントを羽織った戦士が現れた。

『ダーク・ヒーロー ゾンパイア』

レベル4 闇属性 効果 戦士族 攻2100 守500

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ！」

取巻 LP4000 手札4枚

モンスター

『ダーク・ヒーロー ゾンパイア』

(攻2100)

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン。ドロー！」

『ダーク・ヒーロー ゾンパイア』か。融合素材に使うんじゃないければ、デッキは前と同じく『T・T』を模した物か……全く何が嬉しくて自分のデッキを模した物と、デュエルしないといけないのやら。

手っ取り早く行くか……この手札なら、このターンで終わらせられる事ができる。

「手札を一枚捨てて『THE トリック』を特殊召喚。更にデッキの一番上を墓地に送り、墓地の『グローアップ・バルブ』を特殊召喚」

墓地に行ったのはクシルか……むしろラッキーだな。

俺の場に球根の部分に目玉がある花が現れる。

『THE トリック』

レベル5 風属性 効果

魔法使い族

攻2000 守1200

『グローアップ・バルブ』

レベル1 地属性 効果

植物族 攻100 守100

「モンスター二体を特殊召喚だど!?」

この程度なら、師匠達は難なくやってのけるぞ?特にアテム師匠は、後攻一ターン目に、モンスターを三体特殊召喚して神を召喚してきた事があったぞ……っと脱線したな。

「ちなみに『グローアップ・バルブ』はチューナーモンスターだ。

行くぞ!レベル5『THE トリック』にレベル1『グローアップ

・バルブ』をチューニング!

六つの絆の証が揃いし時、現れる魔術師よ

我が可能性を生贄に、我が敵を葬れ!シンクロ召喚!現れる!『マジックテンペスター』!」

『グローアップ・バルブ』が輪になり、その輪を『トリック』が通過する。

そして俺の場にローブを身に纏い、死神等が持つであろう鎌を持った魔術師が現れる。

『マジックテンペスター』  
レベル6 闇属性 シンクロ/効果 魔法使い族  
攻2200 守1400

「『マジックテンペスター』はシンクロ召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを一つ置く」

『マジックテンペスター』  
魔力カウンター0 1

「フハハハ！掛かったな！俺は永続トラップ『調律師の陰謀』を発動！『マジックテンペスター』は頂くぜ！」

紳士風の男性が現れ『マジックテンペスター』を捕えて取巻の場に連れて行った。

「マジかよ……」

- 観客席Side -

「『調律師の陰謀』か……」

「知ってるんすか？三沢君」

「ああ、相手フィールド上にシンクロモンスターが特殊召喚された時に発動できる永続トラップで効果はそのシンクロモンスターのコントロールを得るものだった筈だ。だが、シンクロモンスターを使う人があまり居ない以上、入れる人は居ないと思うが……」

「あれ？そういえば何でシンクロモンスターを使う人が少ないんすか？僕は単純に持ってないからっすけど」

「簡単に言えば、出て直ぐに禁止カードになったカードが多いのよ  
『ゴヨウ・ガーディアン』に『ダーク・ダイブ・ボンバー』、『氷  
結界の龍 トリシューラ』と『ミスト・ウォーム』とかはパックの  
発売二ヶ月後に禁止カードになったわ」

「天上院君の言う通りだ、その為、殆どの人はシンクロモンスター  
を敬遠する。直ぐに禁止になるかもしれないからな。だから、シン  
クロモンスターを対策するカードを入れる人も居ないと思うんだが  
……」

「試験の日にそこまで相手よがりのカードを入れているという事は  
……試合を仕組んだクロノス先生が怪しいわね」

「それだと、アニキもヤバイッスよ」

「普通はそうだが、十代と貴志の表情を見る限りだと大丈夫そうだ  
な」

- 観客席 Side out -

「面倒だな」

『マジックテンペスター』が奪われたせいで、このターンで終わら  
せられないじゃないか……

「どうだ！お前のシンクロモンスターを奪ってやったぞ！」

「……俺は手札の『デッド・ガードナー』と『スピード・ウォリアー』をゲームから除外して墓地の『ダーク・シムルグ』を特殊召喚する」

「何だと!？」

黒炎が立ち上ぼりクシルが姿を現す。

『ダーク・シムルグ』

レベル7 闇属性 効果

鳥獣族 攻2700 守1000

「更に俺は『左腕の代償』を発動。手札を全て捨て、デッキから魔法カードを一枚選択して手札に加える。『天よりの宝札』を手札に加え、発動。互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドロースる」

『左腕の代償』(アニメ)

通常魔法

効果

このカードの発動時、手札を全て捨てる。その後、自分のデッキから魔法カードを一枚選択して手札に加える。

『天よりの宝札』(原作)

通常魔法

効果

お互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにカードを引く



「バトル！『ダーク・シムルグ』で『マジックテンペスター』に攻撃！ダーク・フレア！」

クシルの口から放たれた炎に飲み込まれ、『マジックテンペスター』は消滅した。

「クツ、クソツ！」

取巻 LP4000 3500

「『ラーニング・エルフ』を守備表示で召喚。更に『封印の黄金櫃』を発動。『レベル・アワード』を選択し、カードを二枚伏せてターンエンド」

布石は打った。後は強力なモンスターを出すことを祈るか。

『ラーニング・エルフ』

レベル3 風属性 効果 天使族 攻1400 守1500

俺 LP4000 手札2枚

モンスター

『ダーク・シムルグ』

(攻2700)

『ラーニング・エルフ』(守1500)

魔法・罫

伏せ 2

取巻 LP3500 手札6枚

モンスター

『ダーク・ヒーロー ゾンパイア』

(攻2100)

魔法・罫

無し

「俺のターン！ドロー！俺は魔法カード『大嵐』を発動！フィールド上の魔法・罫を全て破壊する！」

大きな竜巻が発生し、フィールド上に存在する魔法・罫を全て破りさった。

「俺は更に『可変機獣 ガンナードラゴン』を召喚し、手札から『禁じられた聖杯を発動！』『ガンナードラゴン』攻撃力400ポイントアップし、効果を無効にする！」

『可変機獣 ガンナードラゴン』

レベル7 闇属性 効果

機械族

攻2800 (1400) 守2000 (1000)

『可変機獣 ガンナードラゴン』

攻1400 1800 3200

伏せていた『フローラル・シールド』と『くず鉄のかかし』が破壊されたから、防ぐのは無理か。

「バトル！『可変機獣 ガンナードラゴン』で『ダーク・シムルグ』を攻撃！」

クシルが炎を吐いて迎撃するが、『ガンナードラゴン』のプレスと相殺になり、『ガンナードラゴン』が放った砲撃が当たり倒された。

「済まんクシル……」

俺 LP4000 3500

「行くぜ！『ダーク・ヒーロー・ゾンパイア』で『ラーニング・エルフ』に攻撃！」

『ダーク・ヒーロー・ゾンパイア』が放った光線により、『ラーニング・エルフ』は破壊される。

『ダーク・ヒーロー・ゾンパイア』  
攻2100 1900

「俺は『ラーニング・エルフ』の効果でカードを一枚ドローする」

「はん！俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ！」

『可変機獣 ガンナードラゴン』  
攻3200 2800

俺 LP3500 手札3枚

モンスター及び魔法・罫  
無し

取巻 LP3500 手札3枚

モンスター

『可変機獣 ガンナードラゴン』

(攻2800)

『ダーク・ヒーロー ゾンパイア』

(攻1900)

「俺のターン！ドロー！俺は魔法カード『強欲な壺』を発動してカードを二枚ドロー。更に『天使の施し』を発動。カードを三枚引いて二枚捨てる。俺はカードを二枚伏せてターンエンド」

俺 LP3500 手札3枚

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 2

取巻 LP3500 手札3枚

モンスター

『可変機獣 ガンナードラゴン』

(攻2800)

『ダーク・ヒーロー ゾンパイア』

(攻1900)

魔法・罨

伏せ 2

「俺のターン！（来た！クロノス教諭に貰ったカード！）俺は手札の『可変機獣 ガンナードラゴン』と『不屈闘士レイレイ』をゲームから除外して『獣神機王バルバロスU』を特殊召喚！」

『獣神機王バルバロスU』

レベル8 地属性 効果

獣戦士族

攻3800 守1200

マジか……正直面倒過ぎるが、問題無いな……

「更に俺は伏せておいた『スキルドレイン』を発動！「リバーズ・カードオープン『砂塵の大竜巻』！『スキルドレイン』を破壊する！」何だと!？」

『大嵐』が起こした竜巻よりかは小さい竜巻が『スキルドレイン』を破壊した。

『スキルドレイン』の発動コストで取巻のライフが減る。

取巻 LP3500 2500

「無駄にライフが減ったな」

「うるさい！ならば『ダーク・ヒーロー ゾンパイア』と『可変機獣 ガンナードラゴン』、『獣神機王バルバロスU r』を生贖にして『神獣王バルバロス』を召喚！」

『神獣王バルバロス』

レベル8 地属性 効果

獣戦士族

攻3000 守1200

「『神獣王バルバロス』の効果発動！三体のモンスターを生贖にしたこのカードが召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する！」

「ならば速攻魔法『サイクロン』を発動！そちらの最後の伏せカードを破壊する！」

カードから竜巻が出て取巻のセットカードを破壊する……って『歓喜の断末魔』だと！？破壊できて良かった……

その後、『バルバロス』が地面に槍を突き刺して地震を起こす。

それによって盛り上がった土によってカードが串刺しにされた。

だが、これで取巻の手札と伏せカードは無くなった。

それと同時に俺が負ける可能性無くなった……

「バトル！『神獣王バルバロス』でダイレクトアタック！」

「この瞬間、手札の『バトルフェーダー』の効果発動。このカードを特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる！」

俺の場に時計の針を模したモンスターが現れ、ベルを鳴らして攻撃を止めた。

『バトルフェーダー』

レベル1 闇属性 効果

悪魔族 攻0 守0

「くっ、ターンエンドだ…」

俺 LP3500 手札2

モンスター

『バトルフェーダー』

(守0)

魔法・罫

無し

取巻 LP2500 手札0

モンスター

『神獣王バルバロス』

(攻3000)

魔法・罫

無し

「俺のターン。ドロー！スタンバイフェイズに『レベル・アワード』は手札に加わる。俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚！効果で墓地の『闇の仮面』を特殊召喚！」

「なっ！いつの間に!？」

「『左腕の代償』の時だ。更に魔法カード『精神操作』を発動し、『神獣王バルバロス』のコントロールを得る。そして『レベル・アワード』を発動して『神獣王バルバロス』のレベルを1にする！」

『レベル・アワード』

(遊戯王R)

効果

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して、1～8を宣言する。

このターンのエンドフェイズ時まで選択したモンスターのレベルは宣言した数字と同じになる。

『神獣王バルバロス』

レベル8 1

「これで終わりだ！レベル2『闇の仮面』にレベル3『ジャンク・シンクロン』をチューニング！

五つの絆の証が揃いし時、現れる戦士よ

戦友の力を結集し、己の力とせよ！シンクロ召喚！

現れる！『ジャンク・ウォリアー』!!」



『ジャンク・ウォリアー』  
レベル5 闇属性 シンクロ/効果 戦士族  
攻2300 守1300

「『ジャンク・ウォリアー』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする！俺の場にはレベル1となった『神獣王バルバロス』が居る。よって攻撃力3000ポイントアップ！」

『ジャンク・ウォリアー』  
攻2300 5300

「攻撃力5300だと!?!」

「バトル!『ジャンク・ウォリアー』でダイレクトアタック!スクラップ・フィスト!!」

『ジャンク・ウォリアー』が繰り出した拳は正確に取巻を捕えてぶっ飛ばした。

「うわあああ!?!」

取巻 LP2500 0

さてと十代の方はと……

「『フェザーマン』でダイレクトアタック!」

「ぬわああ!!」

丁度終わったみたいだな。

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「良いデュエルを見させて貰いました」

十代がいつもの挨拶を言った所で、ハゲッターじゃなかった校長が出てきた。

「あなた方のカードを信じる心とデュエルタクティクスを賞してラ  
ー・イエローへの昇格を認めます」

昇格……ねえ。俺はやめとこ。

ここ数日でこの学園の事は把握した。正直言って、オシリス・レットが一番気楽でいい。

「校長先生。済みませんが、昇格は辞退させていただきます」

「俺も昇格は止めときます」

「ふむ。そうですか、まあそれも良いでしょう」

こうして、月一試験は終わった。

## 第7話 VS取巻再び（後書き）

貴志「今日の最強カードはこれだな」

『レベル・アワード』

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して、1～8のいずれかを宣言する。

エンドフェイズ時まで選択したモンスターのレベルは宣言した数のレベルとなる。

貴志「夜行義兄さんがアテム師匠とのデュエルの時に使ったカードで『スターレベル・シャツフル』とのコンボで墓地の『神獣王バルバロス』を場の『メタルデビル・トークン』と入れ替えてたな」

正直OCG化したらヤバイカード。作者は『ジャンク・ウォリアー』の効果用にするか、シンクロ素材のレベルを操作するぐらいしか思い浮かびませんでしたか……

## 第8話 怒り（前書き）

デュエル無しです。

後、DMキャラクターが名前を変えて出てきます。

## 第8話 怒り

- 波止場 -

其処では二人の男が何やら話をしていた。

「あなた達々が闇のゲームを行なえくる闇のデュエリストナノーネ？」

その中のオカツパの男……クロノス・デ・メディチが二人組に言った。

「そうだ。私の名はタイタン。闇のデュエリストだ」

「俺は……ヤミーと名乗っておこうか。それで、ターゲットは？」

二人組……仮面のような物を付けているタイタンとフードを被っているヤミーが言った。

「この二人。遊城十代と天道貴志ナノーネ」

クロノスは二人に写真を見せる。

「承知した。では、お前の給料六ヶ月分を指定の口座に振り込んでもらおうぞ」

「きゅ、給料六ヶ月分！？そ、それはちょっと高過ぎナノーネ……」

「だめだ。どんな事があっても、報酬は依頼主の給料六ヶ月分だ」

クロノスがごねようとしたが、タイタンがそれを拒否する。

「わ、分かったノーネ」

「交渉成立だ。フッフ……………」

「き、消えたノーネ!？」

クロノスが渋々、了承するとタイタンとヤミーは消えた。

……………

「皆さん何をやってるのかにゃ〜?」

十代、翔、二人と同室の隼人達と食堂で怪談話をしているとレッド寮の寮長であり、錬金術の講師である大徳寺がヌツと後ろから現れた。

「カードを引いてそのレベルに見合う怪談話をしてたっス」

「今、俺と十代の話が終わった所なんですよ」

「十代のはともかく、貴志のは怖かったんだな〜」

「そうっス。朝起きたら、頭が血だらけになってるとか怖過ぎるっス」

クシルが俺を起こす時に、力加減を間違えた時の話をしただけだけだな。まああの時はヤバかったが……

「ん〜それなら、私もやってみますのじゃ」

十代がカードの束を先生に渡し、先生がカードを引く。それは……

「「「「「F・G・D」」」」」

レベル12のF・G・Dだった。

「これは凄いのが出たな」

「ああ、そうだな。あっ、先生。使うならこの懐中電灯をどうぞ」

先生に懐中電灯を渡す。さて、どんな話なのか。

先生は椅子に座り、語りはじめた。

「皆さんはこの島の北にある今は、廃寮を知ってますかじゃ〜？」

おお！それっぽい入り方だ。語尾が残念だけど。

「その寮は特待生専用の寮だったんだじゃ〜」。

その寮が廃寮になった訳は、その寮で幽霊を見た人や行方不明になった人が続出したからなんだじゃ」

翔と隼人が若干、震えはじめた。

「必死の捜索にも関わらず、行方不明の人達は見つからなかったのですじゃ。」

その後、その寮を取り壊す事にしたけど、壊そうとした人は必ず事

故に遭った為、取り壊さずに残す事にしたのにな」

そう言っつて、先生は立ち上がった。どうやら話は終わりのようだ。

「あ、そうそう。その寮は今立ち入り禁止にやってるけど、絶対に行つては駄目なのですにゃ」

先生はそう言っつて食堂から出ていった。

でも先生。そういう言い方をすれば、逆に十代は行きたがりですよ。その後、十代が廃寮に行くと言いだし、俺達も一緒に行く事になった。

.....

そんなこんなで廃寮に着いた。

「うおー！スツゲー！」

「中々、雰囲気があるな」

「うう。怖いっス」

「翔の言う通りなんだな」

四者四様の反応を見せたが、廃寮はかなりそれっぽい雰囲気を放つていた。

お化け屋敷が開けるんじゃないか？と思えるぐらい。



しかし、子供の様に目を輝かせる十代と怯える翔達……見てて面白いな。

「あれ？明日香じゃないか」

十代が指差す方を見ると、確かに明日香が居た。あつ、こつちに気付いたみたいだ。

「十代、貴志。翔君と……」「前田隼人なんだな」隼人君。何をしているの？此処は立ち入り禁止よ」

「アニキ、立ち入り禁止なら、帰ろうよ」

「明日香は何故此処に居るんだ？」

俺が聞くと明日香は俯いた。真面目そうだから、わざわざ立ち入り禁止の場所に来ないと思つて聞いたんだが……

「此処で兄が行方不明になったのよ。いつか帰ってくる事を信じてこうして花を飾っているの」

行方不明……ねえ。てつきり、先生の話はただの怪談話と同様、嘘八百だと思つたんだが。

「なら、俺達が何か手掛かりがないか探して来るぜ。それなら、立ち入り禁止の場所に入つても大丈夫だろ？」

十代の肝の太さには感心するな。実際に行方不明になったと聞いて、即断するとはな。

だが、十代よ……問題は問題だと思っぞ。

「でも、それがクロノス先生に知れたら」

「知られなきゃ大丈夫だって。それに明日香の為になるなら、咎められる事じゃないさ」

まあ見張りも居る訳じゃないし、知られる事は無いし良いか……

「勝手になさい」

【素直じゃないねえ〜】

そっぽを向いた明日香を見てゴーズが言った。

てか、愛の巢に帰らなくて良いのか？

【何か面白そうな事がありそうだからな。ちなみにハニーも居るぞ】

心を読むな心を。

-----

「ミレニアムアイ千年眼に千年パズルか……懐かしいな」

廃寮に入って数十分。とある部屋で見付けた千年アイテムが描かれ

ている壁画を見て眩く。

冥界に居るから元気とか言うのは変だが、アテム師匠は元気なんだろうか……マルスが帰ってきたら、アテム師匠の様子でも聞こうかな。

「ん？何だこれ？」

どうやら、十代が何か見つけたみたいだな。

十代が見付けたのは写真で、10 JOINとサインがしてあった。

「この写真の人、明日香に似てねえか？」

「言われてみれば、そんな気がするんだな」

「ふむ。後で明日香に見せてみよう。違えばそれで良いし、あつてたら手掛かりになるかもしれない」

「そうだな。じゃあひとまず出「キャアアアア！！！」何だ！？」

いきなり女性の悲鳴が聞こえてきた。

「行ってみよう！」

「大丈夫だ。もしもの時はこれで……」

そう言ってスタンガンを取り出す。

「何でそんな物を持つてるんスか!？」

「護身用」

「ある意味貴志が恐ろしく見えるんだな」

他にもカード手裏剣用の絵柄が何も描かれて無いカードとかもあるんだがな……言わないでおこう。

その後、部屋を出て悲鳴が聞こえた方に行くと『サイバー・プレイヤー』や『エトワール・サイバー』のカードが道しるべの様に落ちており、それを辿ると大広間に出た。

大広間には奇妙な二人組とその後ろに棺に入れられている明日香が居た。

「お前等は一体何者だ!」

「私の名はタイタン。こちらはヤミー。私達は闇のゲームを行う、闇のデュエリストだ」

『私は』

「を発動!」

『でプレイヤーにダイレクトアタック!』

「……………っ!」

「だ、大丈夫っスか?」

「あ、ああ。大丈夫だ」

嫌な事を思い出したな……あの時から、かなり時が経ったと言うのに、闇のゲームと聞いただけで思い出すとはな。

あのカードは存在しない。たとえ、こいつらの言う闇のゲームが本物と言えど恐れる事は無い。

何より、師匠達から学んだ筈だ。心の強さを……

「闇のゲーム？そんな物、あるもんか!？」

「フッフ、遊城十代よ。普通はそう思うだろうな。だが、私の持つ千年パズルか」

「この千年眼を使えば、闇のゲームをする事が可能なんだよ。現にこの少女の意識は深い闇に沈んでいる」

「解放するには私達と闇のデュエルを行い、勝たなければならない」

そう言って二人は、千年パズルと千年眼を出した。

.....

ゴーズ Side

「良いだろう。デュエルしてやる」

タイタンとヤミーが千年アイテムを出した瞬間、マイブラザーの雰囲気が変わった。

いつもの余裕がある感じから、怒りを全面に押し出している感じにだ。

マイブラザーの精霊になって三年経つが、周りがかなり落ち着いた年上揃いの為か、マイブラザーも基本的には冷静な方だ。誰かに対してこんなにも怒りを顕にしたのは、正直初めて見た。

【アレクのオッサン。マイブラザーは一体どうしたんだ？】

喋れないクシルを除けば、俺達の中で一番古株のオッサンに聞いた。オッサンなら何かを知ってるかもしれねえからな。

【そうか……お前達は知らぬのであったな】

俺の予想通り、オッサンは何かを知ってるらしく、俺達に話してくれた。

【主の養父であるペガサス殿は以前、千年眼を所持していた師である武藤殿は以前、千年パズルを所持していた

あれが本物にせよ偽物にせよ、悪用しているのだから主にとっては養父と師を侮辱されたようなものなのだろう。あの事を思い出したせいもあるかもしれぬが】

だから、マイブラザーはあんなに怒っていたのか。

だが、あの事ってなんだ？

【あの事ってなんなの？】

ハニーも気になったらしく、オッサンに聞いていた。

【それはな……】

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

【それは……へビーな話だな】

それが、オッサンの話を聞いた俺の感想だった。

正直に言うのと重い話だ。

【武藤殿に弟子入りしたのも、邪神を相手に一歩も引かなかった心の強さを学ぶ為だったのではな】

【そうだったのか、ありがとうなオッサン】

【どう……オッサンと言うでない！】

【突っ込み遅っ！！】

ゴーズ Side out

「分かった。デュエルしてやる」

俺がそう言つと、タイタンと名乗つた男は顔に笑みを浮かべた。

「慌てるなあ。まずはこの私と遊城十代がデュエルを行う。お前の相手をするのはその後だあ」

「貴様等は二人居るじゃねえか。俺はそっちのヤミーって奴でも良い」

どちらにせよ、ペガサス様と師匠を侮辱したこいつ等だけは許せない。

「ふん。せつかく怒りを顔にしているんだ……焦らさせてもらつよ」

「黙れ。ならタイタンが俺と「俺達が人質をとつてる事を忘れてないか？」チツ！」

思わず舌打ちが出る。挑発と分かつてはいるが、それとこれとは話が別だ。

「さあ、遊城十代。デュエルだあ！」

「ああ！やってやるぜ！」

隼人が取り出したデュエルディスクを十代が受け取り、十代とタイタンのデュエルが始まった。



第9話 十代VSタイタン 闇のデュエル!? (前書き)

十代VSタイタンです。

原作と違い過ぎますが……

## 第9話 十代VSタイタン 闇のデュエル!?

「デュエル!」

十代とタイタンのデュエルが始まった。

十代 LP4000

タイタン LP4000

「先攻は貰うぞ。ドロー!私は『インターセプト・デーモン』を攻撃表示で召喚。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

タイタンの場に六つの腕を持つフットボールの選手のようなモンスターが現れた。

『インターセプト・デーモン』

レベル4 闇属性 効果

悪魔族 攻1400 守1600

タイタン LP4000 手札4枚

モンスター

『インターセプト・デーモン』

(攻1400)

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン！ドロー！俺は魔法カード『融合』を発動。手札の『スパークマン』と『ネクロダークマン』を手札融合！現れる！『E・HERO ダーク・ブライトマン』！」

金色の鎧を纏った黒いヒーローが十代の場に現れた。

『E・HERO ダーク・ブライトマン』  
レベル6 闇属性 融合/効果 戦士族  
攻2000 守1000

「更に俺は『融合回収』フュージョン・リカバリーを発動！墓地の『融合』と『スパークマン』を手札に加える。そして『スパークマン』を召喚！」

『E・HERO スパークマン』  
レベル4 光属性 通常  
戦士族 攻1600 守1400

「バトル！『スパークマン』で『インターセプト・デーモン』に攻撃！」

「この瞬間、『インターセプト・デーモン』の効果により、貴様に500ポイントのダメージを与えるう」

『スパークマン』が手から電撃を放つと同時に『インターセプト・デーモン』が手を伸ばし、十代に襲い掛かる。

「くっ！でも『スパークマン』の攻撃で『インターセプト・デーモン』は破壊されるぜ」

『インターセプト・デーモン』は少し焦げて破壊された。

十代 LP4000 3500

タイタン LP4000 3800

「アニキの体が消えてくつス!？」

翔の言うとおり、十代の右足が少し消えていた。

どうやらあの千年パズルは本物のようだ。

なら、あつちの千年眼も本物か……クソが!絶対に許せねえ……

「行くぜ!『ダーク・ブライトマン』でダイレクトアタック!」

「そうはいかぬう!伏せていた『リビングデッドの呼び声』を発動  
う!『インターセプト・デーモン』を復活させるう!」

『ダーク・ブライトマン』とタイタンの間に『インターセプト・デーモン』が再び現れた。

「なら、『ダーク・ブライトマン』で『インターセプト・デーモン』に攻撃!」

「先程と同じく、『インターセプト・デーモン』の効果により50  
0ポイントのダメージを受けてもらう」

『ダーク・ブライトマン』の攻撃が届く前に『インターセプト・デ

「モンスター」が自身の手により十代に攻撃を加えるが、その直後に破壊された。

十代 LP3500 3000

タイタン LP3800 3200

「『ダーク・ブライトマン』は攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になる。俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ」

十代 LP3000 2枚

モンスター

『E・HERO ダーク・ブライトマン』

(守1000)

『E・HERO スパークマン』

(攻1600)

魔法・罫

伏せ 1

タイタン LP3200 手札4枚

モンスター・魔法・罫

無し

ライフと手札はタイタンが上だが、場は十代が制圧した。しかも「ダーク・ブライトマン」には破壊された時に相手フィールド上のモンスターを一体破壊する効果がある。

十代の方が有利だな。

「私のターン ドロー！私は永続魔法『天変地異』を発動するう！このカードの効果により互いのプレイヤーはデッキを裏返してデュエルを進行するう。私は更に永続魔法『デーモンの宣告』を発動う！1ターンに1度ライフを500支払いカード名を宣言する。デッキの一番上をめくり、それが宣言したカードならば手札に加え、違つた場合は墓地に送るう」

「えっ、それじゃあ……」

「『天変地異』の効果でデッキの一番上は分かっているから、毎ターン手札を増やせるんだな」

「私が宣言するのは『万魔殿 - 悪魔の巣窟 - 《パンデイモニウム - アクマノソウクツ - 》』だあ。当然、一番上のカードはこれだ。よって、手札に加えるう」

タイタン LP3200 2700

「私は手札に加えたフィールド魔法『万魔殿 - 悪魔の巣窟 - 』を発動するう」

周りの風景が変わり、まさしく悪魔の巣窟と言える感じになった。

「私は『二重召喚』を発動し、手札から『ジエネラルデーモン』と『ジエノサイドキングデーモン』を召喚するう！」

タイタンの場に威風堂々と言う言葉が合う悪魔將軍と王が現れる。

『ジエネラルデーモン』

レベル4 闇属性 効果

悪魔族 攻2100 守800

『ジエノサイドキングデーモン』

レベル4 闇属性 効果

悪魔族 攻2000 守1500

「攻撃力が2100と2000のモンスターっス！」

『ジエノサイドキングデーモン』か。かなりまずいな……

「バトルう！『ジエネラルデーモン』で『スパークマン』に攻撃力するう」

『スパークマン』が放つ電撃を剣で防ぎながら、近づき『スパークマン』を両断した。

「くっ！」

十代 LP3000 2500

「更に『ジエノサイドキングデーモン』で『ダーク・ブライトマン』に攻撃！炸裂う！五臓六腑う！」

『ジエノサイドキングデーモン』が放った沢山の蟲に包まれ、『ダーク・ブライトマン』は破壊された。正直、あまり見たくないな……

「トランプ発動！『ヒーローシグナル』！更に『ダーク・ブライトマン』の効果発「無駄だあ！『ジエノサイドキングデーモン』が戦闘で破壊したモンスターの効果は無効となるう」何だって！？くつ、『ヒーローシグナル』の効果でデッキから『E・HERO クレイマン』守備表示で特殊召喚する」

十代の場に粘土でできたヒーローが現れる。

レベル4以下の壁役としてはおそらく、十代のデッキ内では一番のカード。加えて、十代の手札には『融合』もある。十分、逆転は可能だ。

『E・HERO クレイマン』  
レベル4 地属性 通常  
戦士族 攻800 守2000

「フッフ、私はターンを終了する」

十代 LP2500 手札2枚

モンスター  
『E・HERO クレイマン』  
(守2000)

魔法・罫  
無し



タイタン LP2700 手札1枚

モンスター

『ジエネラルデーモン』

(攻2100)

『ジエノサイドキングデーモン』

(攻2000)

魔法・罫

『デーモンの宣告』

(永続魔法)

『天変地異』

(永続魔法)

『万魔殿・悪魔の巣窟』

(フィールド魔法)

「あわわ、アニキがヤバイっスよ」

「十代と十代の引きを信じるしかないんだな」

次に引くカードは『強欲な壺』か……十代ならきつと大丈夫だろう。

「俺のターン！ドロー！手札から『強欲な壺』を発動して2枚ドロ  
ー！更に『融合』を発動！場の『クレイマン』と手札の『バースト  
レディ』を融合して『E・HERO ランパートガンナー』を守備  
表示で融合召喚！」

十代の場に盾とマシンガンのような物を持ったヒーローが現れる。

『E・HERO ランパートガンナー』  
レベル6 地属性 融合/効果 戦士族  
攻2000 守2500

「何をするのかと思えば時間稼ぎか……」

「いや！『ランパートガンナー』は自身が守備表示の場合、相手プレイヤーにダイレクトアタックすることができる！」

「何い!?!」

「尤も、与えるダメージは半分になっちまうけど。行くぜ！『ランパートガンナー』でダイレクトアタック！ランパート・ショット！」  
ランパートガンナーが無数のミサイルをタイタンめがけ放った。

「ぬう！おのれえ！」

タイタン LP2700 1700

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

十代 LP2500 手札1枚

モンスター

『E・HERO ランパートガンナー』

(守2500)

魔法・罾

伏せ 1

タイタン LP1700 手札1枚

モンスター

『ジエネラルデーモン』

(攻2100)

『ジエノサイドキングデーモン』

(攻2000)

魔法・罾

『デーモンの宣告』

(永続魔法)

『天変地異』

(永続魔法)

『万魔殿・悪魔の巣窟』

(フィールド魔法)

「私のターン！ドロー！」

タイタンの口元が緩んだ。一体何を引いたんだ？表になっても、こっからじゃ見えないし……

「私は『サイクロン』を発動し、私から見て右側のカードを破壊する。」

タイタンが発動した『サイクロン』によって十代の伏せた『聖なるバリア -ミラーフォース-』が破壊された。

「更に『デーモンの宣告』の効果が発動！私が宣言するのは『死者蘇生』当然、これも当たりだあ」

タイタン LP1700 1200

「私は『死者蘇生』を発動し、墓地の『インターセプト・デーモン』を特殊召喚！更に『インターセプト・デーモン』と『ジェノサイドキングデーモン』を生贄に『プリズンクインデーモン』を召喚するう！」

タイタンの場に今までの悪魔達より、まがまがしい感じがする悪魔が現れる。

『プリズンクインデーモン』

レベル8 闇属性 効果

悪魔族 攻2600 守1700

「バトルだあ！『プリズンクインデーモン』で『ランパートガンナー』に攻撃い！」

『プリズンクインデーモン』が『ランパートガンナー』を殴り倒し、上に乗って更に打撃を加えていく……『ランパートガンナー』はバラバラにされ、場から消えた。

「この瞬間、トラップ発動！『ヒーロー逆襲』！このカードの効果



十代 LP2500 手札0

モンスター・魔法・罫  
無し

タイタン LP1200 手札0

モンスター

『ジエネラルデーモン』

(攻2100)

魔法・罫

『デーモンの宣告』

(永続魔法)

『天変地異』

(永続魔法)

『万魔殿 - 悪魔の巣窟 -』

(フィールド魔法)

「俺のターン！俺は魔法カード『ホープ・オブ・ファイブス』を発動！墓地の『スパークマン』『バーストレディ』『クレイマン』『ダーク・ブライトマン』『ランパートガンナー』をデッキに加えてシヤッフル。その後、カードを2枚ドローする。だが、このカードの発動時に自分フィールド上と手札に他のカードが存在しない場合はカードを3ドローする！」

「何だとお！？」

狼狽えるタイタン。まああんたが『天変地異』を使ったからだけだな……

「俺は墓地の『ネクロダークマン』の効果を発動！このカードが墓地に存在する限り1度だけ、レベル5以上の『E・HERO』と名のついたモンスター1体を生贄無しで召喚できる。現れる！『E・HERO エッジマン』！」

十代の場に金色に光る筋肉質なヒーローが現れた。

『E・HERO エッジマン』

レベル7 地属性 効果

戦士族 攻2600 守1800

「バトル！『エッジマン』で『ジェネラルデーモン』に攻撃！パワー・エッジ・アタック！」

『エッジマン』が『ジェネラルデーモン』に突撃を仕掛ける。『ジェネラルデーモン』も応戦しようとして剣を構えたが、それよりも早く懐に飛び込んだ『エッジマン』に倒される。

「ぬわあ!？」

タイタン LP1200 700

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

【おい、ヤミーって奴が逃げようとしてるぞ】

ゴーズ言葉を聞きヤミーの方を見ると、確かに逃げようとしていた。

「隼人、デュエルディスクを貸してくれ」

「どうしたんだな？」

「ヤミーって奴が逃げようとしてる」

「それならそれで良いんじゃないっすか？」

「頼むから貸してくれ」

「……分かったんだな」

俺の言葉に隼人は一瞬、迷ったが、デュエルディスクを貸してくれた。

「ありがとう。悪いが、十代と明日香を頼む」

俺はそう言ってヤミーを追い掛けた。

逃がす訳にはいかない……あいつだけでも絶対にぶっ潰す！



第9話 十代VSタイタン 闇のデュエル!? (後書き)

次回、ヤミーの正体が明らかにならな? ……は置いといて、サイコロ効  
果を一度も使えなかつたなあ……

主人公は冷静になろうとしたけど、なりきれなかつたと思つてくだ  
さい。

第10話 貴志VSヤミー（前書き）

ヤミーの正体が明らかに！てか、俺ネーミングセンスが無いな。

## 第10話 貴志VSヤミー

ヤミーを追い掛けだして少しすると、相手も追われている事に気付いたのか走る速度を上げた。

「逃がすか！」

懐からカードを取り出して投げる。

「おっと」

カードはヤミーの後頭部に当たるかに見えたが避けられる。

「チツ！」

【おい、冷静になれって】

「俺は至って冷静だ！」

ゴーズとの会話の最中、ヤミーが角を曲がるのが見えた。後を追って角を曲がると、ヤミーが待ち構えていた。

「観念したか？」

「（逃げようとしたら窓が開かねえ！？どうなってんだ！どうやって逃げる？そうだ……）まあ待て、俺とデュエルをしよう。お前が勝ったら、この千年眼をやる。ただし俺が勝ったら、見逃してもら（こいつは多分、ペガサスカ小僧の関係者。でなければ、千年アイテムを出した時にあそこまで反応を示さない筈だ。ならば絶対に

乗ってくる)」

「良いだろう。受けてやる」

隼人にデュエルディスクを借りたのはこいつを完全にぶっ潰す為だしな。

千年眼を奪うだけなら、持っているスタンガンで気絶させいる。

「デュエル！」

俺 LP4000

ヤミー LP4000

「先攻は貰う。ドロー！俺は『ラーニング・エルフ』を守備表示で召喚。カードを1枚伏せてターンエンドだ」『ラーニング・エルフ』レベル3 風属性 効果

天使族 攻1400 守1500

俺 LP4000 手札4枚

モンスター

『ラーニング・エルフ』

(守1500)

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン、ドロー！手札からフィールド魔法『ダークゾーン』を発動。このカードの効果で全ての闇属性モンスターの攻撃力は500アップし、守備力は400ダウンする」

空が曇り、雷が雲を割いて落ちてくる。周りを見ると焼け野原でモンスターは見当たらない。

「更に『ミストデーモン』を召喚！」

ヤミーの場に下半身が霧状の悪魔が現れる。この環境が体に合うのか元気に見える。

『ミストデーモン』

レベル5 闇属性 効果

悪魔族 攻2400 守0

『ミストデーモン』

攻2400 2900

「バトル。『ミストデーモン』で『ラーニング・エルフ』に攻撃！」

「トラップ発動！『亜空間物質転送装置』！このカードの効果で『ラーニング・エルフ』を除外する」

突如現れた機械から放たれた光線が、『ラーニング・エルフ』に当たり、消えた。だが、遮る者が消えた事で『ミストデーモン』の攻撃が直撃する。

「ぐっ！」

LP4000 1100

「馬鹿め自らを犠牲にしてモンスターを守るとはな」

「勝手にほざいてる！手札の『冥府の使者ゴーズ』の効果発動！『冥府の使者ゴーズ』を特殊召喚！更に俺が受けたダメージと同じ攻撃力・守備力の『冥府の使者カイエントークン』を特殊召喚する」

【二回ぶりの登場】

【見参……】

『冥府の使者ゴーズ』

レベル7 闇属性 効果

悪魔族 攻2700 守2500

『冥府の使者カイエントークン』

レベル7 光属性 トークン 天使族

攻？(2900) 守？(2900)

「更にゴーズは『ダークゾーン』の効果で攻撃力が500アップする」

『冥府の使者ゴーズ』

攻2700 3200

守2500 2100

「ぐう！カードを2枚伏せてターンエンドだ。この瞬間、生贄無し

で召喚した『ミストデーモン』は破壊され、俺は1000ポイントのダメージを受ける」

『ミストデーモン』が狂ったような叫びをあげ、ヤミーに襲い掛かり、霧散した。

ヤミー

LP4000 3000

『ミストデーモン』の攻撃の拍子にヤミーがかぶっていたフードが落ちる。

「っ！てめえは闇のプレイヤーキラー！」

「ほう。俺を知っているのか」

闇のプレイヤーキラー……デュエリストキングダムの際に師匠達を倒す為に、雇われたデュエリストの1人デュエリストキングダムの前に会ったから面識はあるが……何故此処に？

「どうした？デュエルの途中だぞ？」

「ぐっ。この瞬間、『ラーニング・エルフ』は俺の場に戻ってくる」

俺 LP1100 手札3枚

モンスター

『冥府の使者ゴース』

(攻3200)

『冥府の使者カイエントークン』

(攻2900)

『ラーニング・エルフ』

(守1500)

魔法・罾

無し

闇のプレイヤーキラ

LP3000 手札2枚

モンスター

無し

魔法・罾

『ダークゾーン』

(フィールド魔法)

伏せ 2

「俺のターン、ドロー！」

奴が何故、千年眼を持っているかは分からないがまあ良い。奴をぶちのめした後に聞けば良い事だ。

「俺は手札の『レベル・ステイラー』を墓地に送り、チューナーモンスター『クイック・シンクロン』を特殊召喚。更に『クイック・シンクロン』のレベルを1つ下げて、墓地の『レベル・ステイラー』を特殊召喚する」

『クイック・シンクロン』



レベル5 風属性 効果  
機械族 攻700 守1400

『クイック・シンクロン』  
レベル5 4

『レベル・ステイラー』  
レベル1 闇属性 効果  
昆虫族 攻600 守0

「レベル3『ラーニング・エルフ』とレベル1『レベル・ステイラー』にレベル4となった『クイック・シンクロン』をチューニング！」

8つの絆の証が揃いし時、現れる魔神よ  
その力で名の通り破壊者となれ！シンクロ召喚！  
現れる『ジャンク・デストロイヤー』！！」

『クイック・シンクロン』が光の輪となり、『ラーニング・エルフ』と『レベル・ステイラー』が通過する。

そして俺の場に4つの腕を持つ破壊者が現れる。

『ジャンク・デストロイヤー』  
レベル8 地属性 シンクロノ効果 戦士族  
攻2600 守2500

「『ジャンク・デストロイヤー』は自身のシンクロ召喚に成功した

時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数分フィールド上に存在するカードを選択して破壊できる。俺は貴様の伏せカード2枚を破壊する！」

「ならば、この瞬間トラップカード『喜劇の断末魔』を発動する。

このカードの効果により、お前の場に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力を0にし、元々の攻撃力分ライフを回復する」

『喜劇の断末魔』（アニメ）

通常罫

効果

相手ターンのメインフェイズのみ発動する事ができる。

相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力を0にする。

その後、そのモンスターの元々の攻撃力の合計値分、自分のライフポイントを回復する。

【ち、力が抜けるう〜】

【くっ、あぁん……】

『ジャンク・デストロイヤー』が放った衝撃波がヤミーのカードに届く前にゴーズとカイエンが膝をつき、『ジャンク・デストロイヤー』も元気が無くなった様になだれる。

『冥府の使者ゴーズ』

攻32000

『冥府の使者カイエントークン』

攻29000

『ジャンク・デストロイヤー』  
攻 2600 0

ヤミー LP 3000 8300

「フハハハ！礼を言うぞ」

「ぐっ……俺は『ラーニング・エルフ』の効果でカードを1枚ドロ  
ーする」

来たカードは……よし！

「『強欲な壺』を発動してカードを2枚ドロ！ゴーズとカイエン  
を守備表示に変更。カードを2枚伏せてターンエンドだ」

俺 LP 1100 手札 2枚

モンスター

『冥府の使者ゴーズ』  
(守 2100)

『冥府の使者カイエントークン』  
(守 2900)

『ジャンク・デストロイヤー』  
(攻 0)

魔法・罫  
伏せ 2

闇のプレイヤーキラー

LP8300 手札2枚

モンスター

無し

魔法・罾

『ダークゾーン』

(フィールド魔法)

面倒なカードを使いやがって！ライフを削ってゴーズ達を出してこれとは……まさか読まれていたのか！？いや、千年眼を使った素振りは無かった筈だが……

「俺のターン！俺は『デーモン・ソルジャー』を召喚する」

闇のプレイヤーキラーの場に刀を持ち、マントを羽織っている悪魔が現れる。

『デーモン・ソルジャー』

レベル4 闇属性 通常

悪魔族 攻1900 守1500

『デーモン・ソルジャー』 攻1900 2400

「バトル！この瞬間、トラップ発動！『マジカルシルクハット』

！」「何！」

「デッキからモンスター以外のカード2枚と場の『ジャンク・デストロイヤー』を選択し、デッキをシャッフル。更に選択したカードをシャッフルし、フィールド上にセットする。『マジカルシルクハット』の効果でデッキからセットされたカードは、攻守共に0のモンスターとして扱う」

俺の場に『?』と書かれたシルクハットが3つ降ってきて、その内1つが『ジャンク・デストロイヤー』を隠す。そしてシルクハットが幾度も重なり合い闇のプレイヤーキラーには、どのシルクハットに『ジャンク・デストロイヤー』が入っているのか分からなくなる。

「くっ、ならば『デーモン・ソルジャー』で『冥府の使者ゴーズ』に攻撃！」

「この瞬間トラップ発動！『遅れた召喚劇』！『マジカルシルクハット』で呼び出されたシルクハット2体を生贄に、手札から『墮天使アスモディウス』を特殊召喚する！」

『遅れた召喚劇』

(遊戯王R)

通常罫

効果(遊戯王OCGWiki)

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

自分フィールド上のモンスター2体を生贄にして、手札からレベル5以上のモンスター1体を選択して特殊召喚する。

シルクハット2つが燃え上がり、紫の翼を生やし、白のローブと漆

黒の鎧を纏っている墮天使……アスデイが姿を現す。

『墮天使アスモディウス』

レベル8 闇属性 効果

天使族 攻3000 守2500

【ふあゝ何？俺も戦うの？】

「……『アスモディウス』は闇属性。『ダークゾーン』の効果で攻撃力が上がる」

『墮天使アスモディウス』

攻3000 3500

「モンスターが召喚された事で巻き戻しが発生する。俺は『冥府の使者ゴーズ』に攻撃し直す！」

【何か俺がやられ役になるの多くね？】

『デーモン・ソルジャー』に斬られた時に、ゴーズが何か言っていた気がするが、スルーしよう。

【ゴーズ！絶対許さない……】

カイエンも何か言ってるが、今はどうしようもない。

「俺は魔法カード『光りの護封剣』を発動。更にカードを1枚伏せてターンエンドだ」俺 LP1100 手札1枚

モンスター

『墮天使アスモディウス』

(攻3500)

『冥府の使者カイエントークン』

(守2900)

『ジャンク・デストロイヤー』

(守2500)

魔法・罫

無し

闇のプレイヤーキラー

LP8300 手札0

モンスター

『デーモン・ソルジャー』

(攻2400)

魔法・罫

『ダークゾーン』

(フィールド魔法)

『光りの護封剣』

(通常魔法)

伏せ 1

「俺のターン！ドロー！俺は手札から俺は手札から『左腕の代償』を発動！手札を全て捨て、デッキから『命削りの宝札』手札に加え、発動！手札が5枚になるようにドローし、発動後、5ターン目のスタンバイフェイズ時に手札を全て捨てる」

この手札は……デッキが俺の怒りに呼応でもしたのか？

「手札から『シンクロキャンセル』を発動！『ジャンク・デストロイヤー』をエクストラデッキに戻して、墓地から『クイック・シンクロン』、『レベル・ステイラー』、『ラーニング・エルフ』を特殊し、再度『ジャンク・デストロイヤー』を再度シンクロ召喚！」

『クイック・シンクロン』

レベル5 風属性 効果

機械族 攻700 守1400

『レベル・ステイラー』

レベル1 闇属性 効果

昆虫族 攻600 守0

『ラーニング・エルフ』

レベル3 風属性 効果

天使族 攻1400 守1500

『ジャンク・デストロイヤー』

レベル8 地属性 シンクロノ効果 戦士族

攻2600 守2500

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果により、貴様の伏せカードを破壊する！」

「ぬう！（魔法の筒が破壊されたか）」



「『ラーニング・エルフ』の効果でカード1枚ドロ。更に『レベル・ステイラー』を生贄に『神禽王アレクツール』を召喚！」

俺の場に体が白く赤い翼を生やしているモンスターが現れる。

『神禽王アレクツール』

レベル6 風属性 効果

鳥獣族 攻2400 守2000

【主よ。1つ気になったのだが、あの千年眼は偽物ではないか？】

「（どういう意味だ？）」

【あれが本物なら奴はゴーズ達が出る前に「馬鹿め」と言っていた。主の考えが読める筈なのにだ。それに『マジカルシルクハット』にも驚かぬ筈】

言われてみればそうだ。奴は今までも千年眼を使っていない。

そもそも、千年アイテムは地底深くに沈んだ筈だ……パズルに関しては、その時にバラバラになってもおかしくない。マリクさん達がマヌケをやらかすとも思えない。

くそっ！完全に見落としていた。ただ見せられただけで、こうまで周りが見えなくなるとは……

だが！あれが偽物であるのが、ペガサス様や師匠達を侮辱している事にはかわりない……どのみちぶっ潰す！

「『アレクトール』の効果発動！1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在するカードを1枚選択する。選択されたカードの効果はこのターン中無効になる。俺は貴様の『光りの護封剣』を選択する！エフェクト・スタン！」

アレクが起こした風により、地面に突き刺さっていた光りの剣は空高く舞い上がった。

「俺は墓地の『レベル・ステイラー』と『ラーニング・エルフ』をゲームから除外し、手札の『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！『ダーク・シムルグ』は闇属性。よって『ダークゾーン』の効果で攻撃力アップ！」

『ダーク・シムルグ』  
レベル7 闇属性 効果  
鳥獣族 攻2700 守1000

『ダーク・シムルグ』  
攻2700 3200

「ば、ばかなこんな事が……」

「バトル！『ジャンク・デストロイヤー』で『デーモン・ソルジャー』に攻撃！」

『ジャンク・デストロイヤー』が4つの腕で、『デーモン・ソルジャー』を連続で殴り続けて破壊した。

闇のプレイヤーキラー

LP8300 8100

「行くぞ！『ダーク・シムルグ』、『墮天使アスモディウス』、『神禽王アレクトール』の3体でダイレクトアタック！」

「ぐわああああ！！！」

闇のプレイヤーキラー

LP8100 3900 4000 - 2000

「1つ聞く。何故、偽物の千年アイテムを使い闇のデュエリストと名乗った？」

スタンガンを取り出して闇のプレイヤーキラーに近づく。

「ふ、復讐だ。俺を地のどん底に叩き落としたペガサスとあの小僧に復讐する為だよ！」

「そうか……なら「掛かったな！」なっ！」

闇のプレイヤーキラーが偽物の千年眼を地面に叩きつけると辺り一面が光に包まれた。

「くそっ！閃光玉か！」

【目が、目があゝ！】

【きゃあー！】

【ぬうー！】

【眩し！】

【クエ〜！】

「フハハハ！サラバだ！ぬぁ！何だこれは！」

数分後、やっと周りが見えるようになり、辺りを見回すが当然、闇のプレイヤーキラーは居ない。

「くそっ、逃げられた！」

【まあしょうがないだろ。十代達の所に戻るっぜ】

【後で月行殿にでも知らせればよからう】

「……そうだな」

.....

十代達と合流し、寮の外に出る。

十代の話によると、タイタンとのデュエルは本物の闇のゲームになり、俺が戻ってくる数分前にデュエルの決着が付いたが、その後タイタンは闇にのまれたらしい。

「あ〜！もう朝っスよ〜」

翔の言う通り少しずつ明るくなってきた。

どうりでさっきから眠いわけだ。

「授業はどつするんだな」

「出る」

まあレッドは出席日数が足りなくても進級できるが、出ないわけにもいかない。

今なら少しだけ寝られるし。まあその前に月行義兄さんに電話しないといけないけど。

「う、ううん」

「あっ！明日香さんが起きたみたいっすよ」

「明日香。これ、お前のだろ？あとこれも」

十代が落ちていたカードと例の写真を明日香に渡した。

「！これは兄さんの……ありがとう」

「へへっ！困った時はお互い様だろ？」

何はともあれ、偽者の闇のデュエリスト騒動は幕を閉じた。

第10話 貴志VSヤミー（後書き）

鷹

「さて今回はちよくちよく名前が出てくるマルスを除いて貴志の精霊を全部出してみました」

???

【ちよっと待てや！】

鷹

「何ですか？ゴーズさん」

ゴーズ

【何で俺だけ最後、墓地なんだよ！】

鷹

「だって、『ジャンク・デストロイヤー』居たし」

ゴーズ

【それでも何とかして出せよ！てか、俺とハニーって精霊の中で一番デュエル時の登場回数多いけど悲惨な目にしか会わないよな？特に俺！】

鷹

「……さあ今日の最強カードは！」

ゴーズ

【無視か！それと、目を背けるな〜！】

『歡喜の断末魔』（アニメ）

通常罨

効果

相手ターンのメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力を0にする。

その後、そのモンスターの元々の攻撃力の合計値分、自分のライフポイントを回復する。

鷹

「絶対にどっかのMデコが「インチキ効果もたいがいにしやがれ！」と言つ事間違ひ無しのカード。まあんな事言つたら、原作のカードは全体的にヤバイですが……」

うる覚えですが、アニメで確か、闇バクラVS闇マリク戦で闇マリクが使用。

闇バクラがラーの翼神竜を出す前に使つて、生贄モンスターの攻撃力を0にし、ラーの翼神竜の攻撃力を0にした。

それより何でゴーズをついついやられ役にしてしまうんだろう……謎だ」

## 第11話 制裁デュエルへの序曲（前書き）

始めらへんは、TF5の龍亜のイベント（ジャックやクロウが毘に  
はまる奴）を意識してみたんですが、どうですかね？



## 第11話 制裁デュエルへの序曲

ゴーズ Side

さて、闇のプレイヤーキラーと廃寮でデュエルし、廃寮を出たのが、およそ二時間前。

マイブラザーは部屋に戻ってくるなり、月行に電話をして、事のあらましを話した後、泥の様に眠っちまった。

そろそろ起きねえとマジイが、幼鳥状態になってるクシルも眠っちまってるから、マイブラザーを起こす事はできねえな。

俺達が無理矢理起こすにも、こっちの世界で実体化できるのは、マイブラザーとクシルが起きていて尚且つ、近くに居る時だけだしな。

【オイ、どうするオッサン？】

【オッサンと言うてない！……クシルが寝ておる以上、儂等ではどうしようも無かるう。儂等がいくら叫んだ所で起きはせぬて】

【クシルは昨日……というより、今日か。とにかく遅い時間に、デュエルに出されたから、疲れて起きねえだろうし】

【でも私達じゃ起こせないわよ？】

【マルスが居りゃ良いんだけどな。そういや、あいつは何時帰ってくんだ？】

【【【さあ？】】】

【……しゃあねえから放っておくか】

こうして俺等、精霊の方針が決まった所で、ドアが激しく叩かれた。

「我々はアカデミア倫理委員会の者だ！天道貴志！貴様を連行する  
ように命令を受けている！至急、扉を開けて出頭しろ！さもなければ、  
扉を爆発し、強制連行する！」

【どうする〜？】

【どうするも何も……どうしようもないわね】

【今見て来たが、マジで爆弾を持ってたぞ】

【……流石に殺傷能力は無かるう。だが、倫理委員会の者とやらが  
哀れだな】

【【【まったくだ（よ〜）（ね）】】】

珍しく、俺等の意見がまた合った瞬間、ドアが爆音と共に吹き飛ん  
だ。

あゝあ、知らね。てか、マイブラザー……まだ寝てるよ。

「突入ー！」

そう言いながら、緑の服を着た連中が部屋に入って来ようとするが

「うわ!」

「ぎゃあ!」

「のわああ!」

入る前にマイブラザーが仕掛けていた罠。カード手裏剣乱れ打ちに襲われ、返り討ち(?)に遭う。

腕や肩、眉間に刺さったりと被害は様々みてえだな。

3回だけノックすれば、罠が解除されてたのにな。

ドアが吹き飛んだから、奥にある紐を引っ張らねえと罠を解除できねえぞ。

「おのれ!抵抗するか!第2班突入!」

玄関先の屍を乗り越え、またやられに部屋に入ってくる。

「何だこれは? 『ワッパー・エレクトロニクス手錠籠』?」

ああ、2つ目はそれか。

【ラッキーだね〜】

【確かに、3つ目以降の方がえげつないわね】

【死ぬ事は無いと思うんだがのう】

ハニー達の言う通り、罨は後になればなる程ヤバくなる。むしろ運が良いな。

「何だこれは！手錠！？ぬわああああ！！！」壁から射出された大型の手錠に倫理委員会の奴等数名が捕われ、外に出される。

ちなみに校長と寮長には許可を貰っていて、罨は全てマイブラザーが作っている。

マイブラザーに罨の作り方を教えたカーク・ディクソン恐るべしだな。

「おのれえ！第3班、第4班突入！！」

【どれくらいが、意識を保てるかしらね？】

【え〜と、10人居るから、2人ぐらいかな】

【いや、居ねえだろ】

「これは『ハンマーシユート』のカード？つて、ぎゃああああ！！」

天井に仕掛けていた槌に潰され、倫理委員会の奴等10人は意識を失った。

殺傷能力は無いから。とマイブラザーが言ってたが、大丈夫なんだろうな？それといい加減起きてくれよ……

「何だあ！？一体どうしたんだ？」

十代達が部屋から出て来たみてえだな。

「丁度良い所に！君達、天道貴志を連れ出してくれ！」

倫理委員会のリーダーらしき女性が十代達に言った。

【止めとけ。どうなっても知らねえぞ？】

【怪我をしたいならどうぞ？】

【死にはせぬがススメもせぬ】

【五体満足で居たいでしょ】

俺達は手を組んで×印づくり、玄関先に現れた十代に見せて、同時に忠告をする。

「済みませんが、無理です」

【賢明な判断ね】

「くっ！第2班、第5班、第6班。突入！」

復活した奴らに新たに10人を加え、総勢15人で部屋に入ってくる。

ホント……ご苦労様だな。

「『ダブルトラツ』総員退避ー！！！」

1人の賢明な判断のお陰で、15人全員が鉄球ではなく、木で作られた球の餌食にならずに済んだ。

【クエ〜？】

あつ、クシルが起きた。

【クシル！直ぐに主を起こしてくれ！】

【クエ〜】

クシルがマイブラザーの布団に入って2秒程経つと島全体に響き渡るんじゃないのか？と思う程の悲鳴が揚がった。

結局、『強制脱出装置』や『ジャステイブレイク』、フルバースト『全弾発射』とか迄には辿り着かなかったか……

最後の最後には『自爆スイッチ』もあつたんだが……

ゴーズ Side End

クシルに強制的に起こされると何故か部屋のドアが無くなっていた。その事に戸惑っている、十代や翔と一緒に倫理委員会と名乗る傷だらけの奴等に、校長室に連行された。

校長室に入ると、校長とクロノスが居り、2人とも傷だらけの倫理委員会の人達を見て驚いた。

「それで？俺達が連行された理由は何なんですか？」

「それには私が答えよう」

此処に来る途中、俺達の質問や部下の呪言を無視し続け、一切喋らなかつた倫理委員会のリーダーらしき女性が前に出た。

「昨夜未明、遊城 十代、丸藤 翔、天道 貴志の3名は立ち入り禁止区域に指定してある廃寮に侵入し内部を荒らした為、退学させる事となった！」

女性の言葉に十代と翔が驚いている。

「ちょっと待ってくれよ！せめてチャンスをくれよ！」

「良いでしょう。では退学をかけて、シニョール十代と翔には制裁タッグデュエルをシニョール貴志には制裁デュエルを受けて貰う！」

「ちょっと待ってください。確かに禁止区域に侵入しましたが倫理委員会はどうかやってその事実を知ったのですか？」

「機密事項だ」

「でも、証拠の提示ぐらいはできますよね？証拠が無いのに退学問題にする筈は無いでしょうし」

「匿名の通報だ」

「それは証拠になるんですか？」

「だが！遊城 十代とお前が事実と認めた！」

「ほう？ならば、俺の部屋を爆破した時は、事実かどうかわからなかったと？それと爆破によって破損した物の弁償はしてくださいよ」

「ぐっ……」

俺の言葉に女性が黙る。部屋を爆破されたんだ……これぐらいは当然だ。

「失礼します（するんだな）」

「明日香と隼人！どうしたんだよ？」

明日香と隼人が校長室に入ってきた。

「どうかしましたかな？」



「私も昨日、禁止区域に侵入しました。彼等が制裁デュエルを受けるなら私も受けるべきです」

「俺も侵入したんだな。だから、俺も受けるべきなんだな」

2人の言葉に校長は考える素振りを見せた。

「ふむ。2人の言い分が本当なら、確かに2人にも制裁デュエルを受けてもらう必要がありますね」

校長は2人の意見を認めた。

「それでーは1週間後に、此方が用意したデュエリストとデュエルして貰うノーネ（しまったノーネ。シニョーラ天上院が来る事を計算に入れてなかったノーネ……）」

さて、1週間後に制裁デュエルが決まったがどうなる事やら……

第11話 制裁デュエルへの序曲（後書き）

貴志

「今日の最強カードはこれだ！」

『自爆スイッチ』

通常罠

自分なライフポイントが相手より7000以上少ない時に発動する事ができる。お互いのライフポイントは0になる。

貴志

「俺の部屋に仕掛けてある罠の最後の1つだな」

鷹

「発動したらどうなるんだ？」

貴志

「寮がゲフンゲフン！部屋がまるごと吹っ飛ぶ程度だ」

鷹

「セキュリティってレベルじゃねえ！しかも程度で……」

第12話 兄弟（前書き）

あれ？何故か主人公が熱血っぽくなってしまった……

## 第12話 兄弟

制裁デュエルをする事が決まった翌日、制裁デュエルについての説明が書面にて知らされた。

書面の内容を簡単に纏めると

- ・十代と翔のタッグはそのまま。
- ・デュエルを行う順番と相手は十代、翔ペアは決まっているが、俺、明日香、隼人はくじ引きで決まる。
- ・代役は認められない
- ・負けた場合は退学、勝った場合はレポートの提出

という感じだな。最後のを見た時に十代が「ええ〜」と言っていたが、しょうがない事だと思う。

幾つか引っ掛かる……というよりスルーできない事はあるが、俺達が立ち入り禁止区域に侵入した事実は変わらないからな。

そしてその後、十代と翔がお互いのデッキ内容を確認するという名目でデュエルをしたのだが、呆気なく終わった。

『パトロイド』の効果を使わなかったり、攻撃時は『スチームロイド』の方が攻撃力が高いのに『融合』を使って『スチームジャイロイド』を出して攻撃する等、翔のプレイングミスが目立っていた。

ついでに言うところ引いたカードで一喜一憂したり、攻撃を防がれて異常にテンションが落ちたりしてた。

デュエルが終わった後、翔はどこかに走り去り、戻ってきた十代が翔の手札に『パワー・ボンド』あったと言っていた。だが、翔が言うには『パワー・ボンド』は兄に封印されているらしい。

そして、明日香から翔にはカイザーと呼ばれる兄、丸藤亮が居る事を教えられた。

カイザー。優れた兄……か。

そして次の日……

「翔が行方不明になった……と」

「そうなんだよ！部屋に手紙が置いてあったんだ！」

俺の部屋に入ってきた十代から手紙を受け取る。

ちなみに罫はドアが吹き飛んだままだと、ついつつかり入る人が居るかもという理由で解除させられている。

十代から受け取った手紙には探さないでくださいと書かれていた。

「普通に考えて島から出る方法は定期船が来るまで無いから、島の中に居る筈だ。取り敢えず探すぞ」

翔の手紙の内容を聞いて、それって探してくれって言ってるようなもんだぞと思っただが口には出さなかった。

【ぜってー探してくれって言ってるよなこれ】

心を読むな心を……

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

十代が俺の部屋に来たのは昼前だったが、翔を海岸で発見した時は既に夕方になっていた。

「十代……お前は何がしたいんだ？」

「うっ、悪い」

翔を発見した時、翔は自作の筏で島から出ようとしていた。

それを阻止しようと十代が筏に飛び乗り、その衝撃で筏が壊れ、2人は海に落ちた。

幸い2人は普通に泳げたので、自力で陸に着いたが風邪を引いてはという事で今、焚き火をしている。

【その度胸は評価できるのだがのう】

【筏で海を渡る度胸をデュエルに活かさないよ…】

アレクヤカイエンの言う通りだな。

「さてと、翔。何故島を出ようとしたんだ？」

「それは……僕がパートナーじゃアニキの迷惑になるから」

「それで逃げたら、代役が認められてない以上、十代は1人でデュエルする事になる。そっちの方が迷惑にならないか？」

「でも、僕はアニキや貴志君みたいに強くないし、三沢君や明日香さんみたいに頭が良い訳でもない。僕なんかじゃ足を引っ張るだけ。僕なんか居ても居なくても……」

「ふざけてんのか？」

ボソツと口から零れた。いつもより声のトーンが低い。

「俺や十代が強い？始めから強かったと思ってるのか？三沢や明日香が頭が良い？始めから頭が良かったとでも？」

皆、それ相応の努力を積み重ねたから今があるんだ！

それに対してお前は何かやったのか！試験の時は神頼み！デュエルは途中で投げ出す！拳げ句の果てには現実から、俺達からすら逃げ出す！それで強くなると思ってるのか！」

途中で声が大きくなり、怒鳴る感じになったが、止まらなかった。

「負け犬と呼ばれていたが、必死に努力して認められた人を俺は知っている！

パーフェクトと呼ばれる兄が居る為に、その兄の劣化コピーと呼ばれ、その事がコンプレックスになって、1度道を踏み外した人も知っている！だが、その人は立ち直り、努力して兄を越えた！

俺自身だって1度も勝てなかった義兄を越える為に必死に努力した！

お前は……越える為の努力も、追い付く為の努力もせずに諦めてるだけじゃねえか！」

そこまで言って一息つく。

気付くといつの間にか、明日香と三沢と隼人、それと、見知らぬ白服？みたいな物を着ている人が居た。

無関係の人を連れてくるとは思えないから、おそらくあの人が翔の兄なのだろう。

翔から一旦離れる。

【……………】

「どつしたんだお前等？」

皆に聞こえないように小声で聞いた。

皆とは少し離れた所に移動したから、これぐらいなら聞こえない筈だ。

【マイブラザーはそんなに熱血だったのか？と思ってな】

「確かに俺らしくないな」

多分だが、城之内さんや夜行義兄さん。そして、俺自身と重ねて見たんだらうな。名前こそ出さなかったものの普通に例にあげてたし。

城之内さんは海馬さんに最初は負け犬と呼ばれていたと聞いたけど、海馬さんも今じゃ完全に城之内さんの実力を認めてる。



夜行義兄さんも『邪神』という力に縋ったけど、『アバター』が消えた後は努力して、月行義兄さんを越えた。

俺はミニオンになる前は神童と呼ばれていたが、月行義兄さんには1度も勝てなかった。越える為に初めて努力した。

きつとその時の事を思い出したんだろうな。

「まあ俺達的には熱血系の方が良いけどな（からかいがあるし）」

「冷静過ぎて我も時々だが、主が14歳か？と思う時があるからだろう」

マジでか。俺自身は熱血じゃなくて、アテム師匠や師匠みたいに落ち着き払った感じになりたいんだが……

ゴーズ達と話していたが、翔の方を見ると、カイザーが翔に歩み寄っていた。

「翔。逃げるのか？」

「お兄さん……」

俯く翔に言葉を投げ掛ける。翔は蹲った状態でそれに答えた。

「まあそれも良いだろうな」

カイザーの言葉を聞いた翔が立ち上がり、筏の残骸の方に歩み寄って、筏の残骸を集め始めた。

「行っちゃうぜ！アンタの弟！」

「仕方のない事だ……」

【止めなくて良いのか？】

「止めようが止めまいが最後に決めるのは翔だ」

ゴーズが【だがよ】と言ったのに対して、だがなと続ける。

「考えを変える事はできるかもな」

そう言つて十代の方を見ると

「じゃあさ、俺とアンタで翔に餞別を送ろうぜ。

デュエルという名の餞別をな！」

大体だが、十代の性格が分かってきたな。

やっぱり、城之内さんと結構似ている。

さて、カイザーは十代の挑戦を受けるのか受けないのか……まあ逃げるのか？と翔に聞いた手前、断れないと思うが。

「良いだろう。受けて立つ」

港に移動した後、十代とカイザーのデュエルが始まり、デュエルはカイザーの勝利に終わった。だが、『サイバー・ドラゴン』やその融合体に怯まず、諦めずに闘う十代の姿を見て翔も考え直したみた

いだ。

「次はお前か」

カイザーがデュエルディスクを構えたまま言った。ああ、次はお前が言った事を示せなものか……

まあ俺としても口だけと思われたくはない。

「ええ。そうですね」

デュエルディスクにデッキをセットして構える。

「クロノス教諭を敗った実力、見せてもらっぞ」

「ご期待に添えるかは分かりませんが、本気で行きますよ」

「デュエル！」

## 第12話 兄弟（後書き）

てな訳で、次回はカイザーとのデュエルです。

感想やアドバイス等、ありましたら、お願いします！

第13話 VSアカデミアの頂点のデュエリスト（前書き）

題名のエイベックスで、ぱつと頂点が浮かべば、貴方はMr.クロ  
ケッツファン……ですかね？

ちなみにこの小説のTGはTF5の効果でやっています。

### 第13話 VSアカデミアの頂点のデュエリスト

俺 LP4000

カイザー LP4000

「先攻は譲ろう」

「それではお言葉に甘えて」

カイザーの主力モンスターは『サイバー・ドラゴン』。明らかにカイザーは後攻型のデュエリスト……だが、3枚入れているとしても初っぱなから『サイバー・ドラゴン』が来るとも考えにくい。ここは先攻を取り、先に手を打つ！

「俺のターン！俺はモンスターをセット。更にカードを1枚伏せてターンエンド」

俺

LP4000 手札4枚

モンスター

伏せ 1

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン、ドロー！俺は『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚！更に『サイバー・フェニックス』を召喚！」

カイザーの場に一旦、龍にも蛇にも見える機械と鳥に見える機械が現れる。

『サイバー・ドラゴン』レベル5 光属性 効果  
機械族

攻撃力2100  
守備力1600

『サイバー・フェニックス』  
レベル4 炎属性 効果

機械族

攻撃力1200  
守備力1600

初っぱなから来るか……当てが外れたな。

それと『サイバー・ドラゴン』はともかく『サイバー・フェニックス』の効果に分からねえな。

デュエルディスクを操作して『サイバー・フェニックス』のカードをディスプレイに表示させる。面倒な効果だな……

「最初から飛ばして来ますね」

「悪いが全力で行かせてもらおう。バトル！『サイバー・ドラゴン』で守備モンスターに攻撃！エヴォリューション・バースト！」

『サイバー・ドラゴン』の口から放たれた光線が守備モンスターと出して出した『クリッター』を貫いた。

「墓地に送られた『クリッター』の効果により、『TGW-ウルフ』を手札に加えます」

「続けて『サイバー・フェニックス』でダイレクトアタック！」

「ぐう！」

『サイバー・フェニックス』が吐いた炎が直撃する。

俺

LP4000 2800

俺 「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

LP2800 手札5枚

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 1

カイザー

LP4000 手札3枚

モンスター

『サイバー・ドラゴン』

(攻撃力2100)



『サイバー・フェニックス』  
(攻撃力1200)

魔法・罾

伏せ 1

「俺のターン！ドロー！」

さて、『サイバー・フェニックス』の効果を考えて優先して除去するべきだが、取り敢えずは……

「俺は『TGストライカー』を守備表示で特殊召喚！」

「何だと!？」

「このモンスターは『サイバー・ドラゴン』と同じ特殊召喚効果を持っているんですよ。更にさっき手札に加えた『TGワーウルフ』は自分がレベル2以下のモンスターの特殊召喚に成功した時に特殊召喚できる！現れる！『TGワーウルフ』！」

俺の場に『TGストライカー』と獣が己自身の体の一部を機械化させたモンスターが現れる。

『TGストライカー』

レベル2 地属性 効果

戦士族・チューナー

攻撃力800

守備力0

『TGワーウルフ』

レベル3 闇属性 効果

獣戦士族

攻撃力1200

守備力0

「更に手札から『死者蘇生』を発動！『クリッター』を守備表示で特殊召喚！」

『クリッター』

レベル3 闇属性 効果

悪魔族

攻撃力1000

守備力600

「1ターンで3体並べるか……」

「まだまだ行きますよ。レベル3『クリッター』にレベル2『TGストライカー』をチューニング！

5つの絆の証が揃いし時、現れる魔術師よ

その身に宿す数多の知識を用いて、我が可能性を広げよ！シンクロ召喚！現れる『TGハイパー・ライブリアン』！！」

俺の場に白と黒の衣に身を包み、左手に本を持ち、マントを羽織っている魔術師が現れる。

『TGハイパー・ライブリアン』

レベル5 闇属性

機械族・シンクロ/効果

攻撃力2400

守備力1800

「墓地に送られた『クリッター』の効果によりデッキから『ゾンビキャリア』を手札に加えます。そして『ゾンビキャリア』を召喚！」

『ゾンビキャリア』

レベル2 闇属性

アンデット族・チューナー

攻撃力400

守備力200

「レベル3『TGワールフ』にレベル2『ゾンビキャリア』をチューニング！」

5つの絆の証が揃いし時、現れる正義を冠する物よ  
その力で他の者を滅せよ！シンクロ召喚！『A・O・J カタスト  
ル』！」

『A・O・J カタストル』

レベル5 闇属性

機械族・シンクロ/効果

攻撃力2200

守備力1200

「『TGハイパー・ライブラリアン』の効果発動！このカードが自分フィールド上に存在し、自分か相手がシンクロ召喚に成功した時、カードを1枚ドローする！」

これで手札は4枚。『THE トリック』が手札に有れば更に行けたんだが……まあ良い。

カイザーの伏せカードが気になるが……ここは

「バトル！『カタストル』で『サイバー・ドラゴン』に攻撃！『カタストル』は闇属性モンスター以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する！」

「何!?!」

『カタストル』が放った黒い光線を受けた『サイバー・ドラゴン』が膨張し破裂した。

「『TGハイパー・ライブラリアン』で『サイバー・フェニックス』に攻撃！」

『ライブラリアン』が放った光弾に貫かれた『サイバー・フェニックス』が爆発する。

カイザー

LP4000 2800

「『サイバー・フェニックス』の効果でカードを1枚ドロー」

「俺はカードを1枚伏せてターンエン「この瞬間、トラップ発動『砂塵の大竜巻』。今伏せたカードを破壊する」……ターンエンド」「くず鉄のかかし」が破壊されたか……」

俺

LP2800 手札3枚

モンスター

『TGハイパー・ライブラリアン』

(攻撃力2400)

『A・O・J カタストル』

(攻撃力2200)

魔法・罾

伏せ 1

カイザー

LP2800 手札4枚

モンスター・魔法・罾

無し

カイザー Side

1ターンでここまでやるとはな。明日香から聞いた実力は本物のよ  
うだな。正直に言つて『カタストル』は厄介だが、今引いたカード  
を使えば破壊できない訳では無い。

「俺のターン、ドロー！俺は2体目の『サイバー・ドラゴン』を特  
殊召喚！更に魔法カード『エヴォリユーション・バースト』を発動  
して『A・O・J カタストル』を破壊する！」

「なっ！ぐっ！」

『サイバー・ドラゴン』

レベル5 光属性

機械族・効果

攻撃力2100

守備力1600

『エヴォリユーション・バースト』の効果で『サイバー・ドラゴン』はこのターンは攻撃できないが、問題無い。

問題無いが、あのリバース・カードが気になるな。

さっきのターン、天道は『サイバー・フェニックス』の効果調べていた……だから、さっきの攻撃の時にトラップを使わなかった可能性はある。

だが！

「俺は『融合呪印生物-光』を召喚し、効果発動！このカードと『サイバー・ドラゴン』を生贄に捧げ『サイバー・ツイン・ドラゴン』を特殊召喚！」

『融合呪印生物-光』

レベル3 光属性

岩石族・効果

攻撃力1000

守備力1600

『サイバー・ツイン・ドラゴン』レベル8 光属性

機械族・融合/効果

攻撃力2800

守備力2100

俺は一步も退く気は全く無いぞ天道。

カイザー Side out

2体目か……マジかよ。そして『サイバー・ツイン・ドラゴン』か伏せカードの『フローラル・シールド』だけじゃあ『TGライブラリアン』を守り切れないか。

何より『カラストル』が破壊されたのが痛過ぎるな。さつき調べた『エヴォリユーション・バースト』のリスクも回避しているし。

「更に装備魔法『ブレイク・ドロ』を装備しバトル！『サイバー・ツイン・ドラゴン』で『TGライブラリアン』を攻撃！エヴォリユーション・ツイン・バースト！」

「トラップ発動！『フローラル・シールド』このカードの効果により、『サイバー・ツイン・ドラゴン』の攻撃を無効にしカードを1枚ドロします」

突如、無数の花びら、『サイバー・ツイン・ドラゴン』の攻撃は防がれた。

「成る程。『フローラル・シールド』だったのか」

「ええ。さつきは『サイバー・フェニックス』が居たので、使えませんでしたけど」

「だが、『サイバー・ツイン・ドラゴン』は1度のバトルフェイズ

で2回攻撃できる。『サイバー・ツイン・ドラゴン』で再度攻撃する！」

『サイバー・ツイン・ドラゴン』が2つの首から放った光線を『TGハイパー・ライブラリアン』が魔方陣を展開して防ぐが、『サイバー・ツイン・ドラゴン』が出力を上げたのか、放つ光線が太くなる。

徐々に押されて魔方陣が割れると光線が『TGハイパー・ライブラリアン』を貫いた。

『TGハイパー・ライブラリアン』が持っていた本が地に落ち程なくして燃えた。

「ぐっ、」

俺

LP2800 2400

「『ブレイク・ドロー』の効果により、カードを1枚ドロー、ターンエンドだ」

俺

LP2400 手札4枚

モンスター

無し



魔法・罫

伏せ 1

カイザー

LP2800 手札2枚

モンスター

『サイバー・ツイン・ドラゴン』

(攻撃力2800)

魔法・罫

『ブレイク・ドロー』

(装備魔法)

「俺のターン！ドロー！」『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロー！」

よし！いける。

「俺は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！このカードも『サイバー・ドラゴン』等と同じ効果を持っています。まあ自身の効果で特殊召喚このカードの元々の攻撃力・守備力は半分になりますけど」

俺の場に紫色の体の龍が現れるが、その瞬間、体が縮んだ。

『バイス・ドラゴン』レベル5 闇属性

ドラゴン族・効果

攻撃力2000(1000)

守備力2400(1200)

「更に手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動。手札の『スピード・ウォリアー』を墓地に送り、デッキから『ダークシー・レスキュー』を特殊召喚！そして、『ダーク・スプロケッター』を通常召喚！」

『ダークシー・レスキュー』

レベル1 闇属性

機械族・効果

攻撃力0

守備力0

『ダーク・スプロケッター』

レベル1 地属性

悪魔族・チューナー

攻撃力400

守備力0

「レベル5『バイス・ドラゴン』とレベル1『ダークシー・レスキュー』にレベル1『ダーク・スプロケッター』をチューニング！7つの絆の証が揃いし時、現れる悪魔よその名の如く、場に混沌をもたらせ！シンクロ召喚！現れよ『デーモン・カオス・キング』！」

俺の場に紅蓮の炎を腕に纏うまがまがしき、悪魔が現れる。

『デーモン・カオス・キング』

レベル7 闇属性

悪魔族・シンクロ/効果

攻撃力2600

守備力2600

「『ダーク・スプロケッター』が闇属性のシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地に送られた場合、表側表示で存在する魔法または罫カードを破壊できます。この効果で『ブレイク・ドロー』を破壊！」

地中から突き出された鎖が絡んだ『ブレイク・ドロー』が地中に持つていかれる。

「更に『ダークシー・レスキュー』がシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地に送られた場合、自分はデッキからカードを1枚ドローします」

引いたカードは……アレクか。

「バトル！『デーモン・カオス・キング』で『サイバー・ツイン・ドラゴン』に攻撃！『デーモン・カオス・キング』は攻撃時に相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力・守備力をバトルフェイズ終了時まで入れ替える事ができる。当然、効果を発動！」

『デーモン・カオス・キング』が『サイバー・ツイン・ドラゴン』めがけて黒い球のような物を打ち出し、『サイバー・ツイン・ドラゴン』がそれに包まれると、『サイバー・ツイン・ドラゴン』が若干、錆びた。

『サイバー・ツイン・ドラゴン』

攻撃力2800 2100  
守備力2100 2800

「くっ、『サイバー・ツイン・ドラゴン』迎撃だ！」

『デーモン・カオス・キング』が『サイバー・ツイン・ドラゴン』が放つ光線をいなしながら近づき、羽根？のような部分で切り裂いた。

「ぬう！」

カイザー

LP2800 2300

「カードを1枚伏せてターンエンド」

俺

LP2400 手札2枚

モンスター

『デーモン・カオス・キング』

(攻撃力2600)

魔法・罫

伏せ 1

カイザー

LP2300 手札2枚

モンスター・魔法・罫  
無し

十代 Side

「カードを1枚伏せてターンエンド」

貴志のターンが終わってカイザーのターンに移った。

でも2人共すげえ！貴志がシンクロモンスターを並べたと思ったら、カイザーがそれを全部倒す。カイザーが有利になったと思ったら返しのターンで貴志は新しいシンクロモンスターを出して、カイザーの『サイバー・ツイン・ドラゴン』を倒した。

どっちが勝つか全く分からねえ！この2人とまたデュエルしてえな

「俺のターン！ドロー！」

カイザーの場にはモンスターも魔法・罫も無いだが、気を抜く訳にはいかない。

さあカイザーはどう出る！？

「俺は『強欲な壺』を発動、カードを2枚ドロー！更に墓地の『エヴォリユーション・バースト』、『ブレイク・ドロー』、『強欲な

壺』をゲームから除外して『埋葬呪文の宝札』を発動！カードを2枚ドロ―！」

『埋葬呪文の宝札』

(アニメ)

通常魔法

自分の墓地に存在する魔法カード3枚をゲームから除外して発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドロ―する。

こ、ここで4枚ドロ―かよ……俺もドロ―運には自信があるけど、普通ここで引くかあ!?

「更に魔法カード『ジャンク・ディーラー』を発動！墓地の『サイバー・ドラゴン』2体選択してこの2体を元々の攻撃力を半分にして特殊召喚！」

『サイバー・ドラゴン』

×2

レベル5 光属性

機械族・効果

攻撃力2100 (1050)

守備力1600

ええ!?!何だあのカード……

『ジャンク・ディーラー』

(アニメ)

自分の墓地に存在する機械族または戦士族モンスターを2体まで選

択して発動する。

選択したモンスターの元々の攻撃力を半分にして特殊召喚する。

このカードを発動したターンのエンドフェイズまでこの効果で特殊召喚したモンスターは生贄にできず、攻撃宣言を行う事ができない。

「このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは発動ターンのエンドフェイズまで生贄にできず、攻撃もできないが、ここで『パワー・ボンド』を発動！手札の『サイバー・ドラゴン』と場の2体の『サイバー・ドラゴン』を融合！『サイバー・エンド・ドラゴン』を融合召喚！」

『サイバー・エンド・ドラゴン』

レベル10 光属性

機械族・融合/効果

攻撃力4000(8000)

守備力2800

俺の時にも出てきた『サイバー・エンド・ドラゴン』。貴志は一体どうやって対抗するんだ？

「『パワー・ボンド』によって融合召喚されたモンスターは、元々の攻撃力アップする！バトル『サイバー・エンド・ドラゴン』で『デーモン・カオス・キング』に攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

「トラップ発動！『ドレインシールド』！『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃を無効にし、攻撃力分ライフを回復する！」

「何!?!」

『デーモン・カオス・キング』に向かっていた攻撃が方向を変えて貴志に当たる。でも、その攻撃はデュエルディスクに吸収されて、ライフが回復した。

貴志

LP 2400 10400

「まだ俺は通常召喚できる『サイバー・ジラフ』を召喚！」

『サイバー・ジラフ』

レベル3 光属性

機械族・効果

攻撃力300

守備力800

『サイバー・ジラフ』？出して一体どうするつもりなんだ？

「『サイバー・ジラフ』を生贄に捧げ、このターンのエンドフェイズ時まで、俺への効果ダメージを無効にする。ターンエンドだ」

うめえ！『パワー・ボンド』のリスクを回避しやがった！

さあ貴志はどうするんだ！？

十代 Side End

「俺のターン！ドロー！」



よく1ターンで『サイバー・ドラゴン』が2体墓地に居るのに『サイバー・エンド・ドラゴン』なんて出せたな……だが！

「魔法カード『蜘蛛の糸』を発動！これでカイザーの墓地の『ジャンク・ディーラー』を手札に加えて発動！墓地の『AOJ カタストル』と『ダークシー・レスキュー』を特殊召喚！」

『蜘蛛の糸』

(アニメ)

1ターン前に相手の墓地に送られたカードを1枚選択して自分の手札に加える。

墓地に送られる場合は元々の持ち主の墓地へ送られる。

『AOJ カタストル』

レベル5 闇属性

機械族・シンクロ/効果

攻撃力2200(1100)

守備力1200

『ダークシー・レスキュー』

レベル1 闇属性

機械族・効果

攻撃力0

攻撃力0

「だが、『ジャンク・ディーラー』で特殊召喚されたモンスターは、このターン攻撃できない」

「分かってますよ。更に手札を1枚デッキの上に戻して墓地の『ゾ

ンビキヤリア』の効果発動！墓地から『ゾンビキヤリア』を特殊召喚！」

『ゾンビキヤリア』

レベル2 闇属性

アンデット族・チューナー

攻撃力400

守備力200

「レベル5『カタストル』とレベル1『ダークシー・レスキュー』

にレベル2『ゾンビキヤリア』をチューニング！

8つの絆の証が揃いし時、現れる暗黒の龍よ

その力で相手に闇による終焉を与えよ！シンクロ召喚！『ダークエ

ンド・ドラゴン』！」

俺の場に胴体にもう1つの顔を持っている黒いドラゴンが現れる。

『ダークエンド・ドラゴン』

レベル8 闇属性

ドラゴン族・シンクロノ効果

攻撃力2600

守備力2100

「『ダークシー・レスキュー』の効果でカードを1枚ドロ！更に

『ダークエンド・ドラゴン』は1ターンに1度このカードの攻撃力・

守備力を500ダウンし、相手モンスター1体を墓地へ送る事がで

きる！」

「何だと!?!」

「『ダークエンド・ドラゴン』の効果発動して『サイバー・エンド・ドラゴン』を墓地へ！闇に吞まれよ『サイバー・エンド・ドラゴン』！」

『ダークエンド・ドラゴン』の胴体にある口が開くとそこから闇のブレスが吐かれる。『サイバー・エンド・ドラゴン』は抵抗するものの、闇に吞み込まれた。

「バトル！『デーモン・カオス・キング』でダイレクトアタック！」

「この瞬間、『速攻のかかし』を手札から捨てる。その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する」

「カードを1枚伏せてターンエンド」

俺

LP10400 手札1枚

モンスター

『デーモン・カオス・キング』

(攻撃力2600)

『ダークエンド・ドラゴン』

(攻撃力2100)

魔法・罫

伏せ 1

カイザー

LP2300 手札0枚

モンスター・魔法・罫  
無し

「俺のターン！ドロー！」貪欲な壺』を発動！墓地の『サイバー・ドラゴン』3体と『サイバー・ジラフ』、『サイバー・フェニックス』をデッキに戻してシャッフル。そして、2枚ドロー！」

「天道。このデュエル、このデッキで『サイバー・エンド・ドラゴン』に並ぶ切り札で幕を降ろそう」

『サイバー・エンド・ドラゴン』に並ぶ！？何だ、何が来る！？

「永続魔法『未来融合 - フューチャー・フュージョン』を発動！選ぶのは『キメラテック・オーバー・ドラゴン』だ！」

カイザーのデッキが急速に減っていく。そんなに融合素材が必要なのか？でも、『未来融合 - フューチャー・フュージョン』でモンスターが呼び出されるのは2ターン後の筈……

「更に『オーバーロード・フュージョン』を発動！自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、閥属性・機械族の融合モンスター1体を融合召喚する！俺は墓地の『サイバー・ドラゴン』3体、『サイバー・ジラフ』2体、『サイバー・フェニックス』2体、『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』2体、『プロト・サイバー・ドラゴン』2体、『サイバー・ヴァリー』3体、『サイバー・レーザー・

ドラゴン』1体、『サイバー・バリア・ドラゴン』1体、『サイバー・ラーヴァ』2体、『サイバー・エスパー』1体、『サイバー・エルタニアン』1体、『サイバー・ツイン・ドラゴン』1体、『サイバー・エンド・ドラゴン』1体をゲームから除外し、『キメラテック・オーバー・ドラゴン』を融合召喚！」

カイザーの場に箱みたいなものから、え〜と首が20個あるモンスターが現れた。

『キメラテック・オーバー・ドラゴン』

レベル9 闇属性

機械族・融合/効果

攻撃力？

守備力？

「攻撃力と守備力が決まってるじゃない!？」

ディスプレイに表示されたカードの攻撃力を見て驚く。

「『キメラテック・オーバー・ドラゴン』の融合召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上のカードを全て墓地に送る。そして、このカードの元々の攻撃力・守備力は融合素材にしたモンスターの数×800ポイントの数値になる。融合素材としたモンスターは22体。よって『キメラテック・オーバー・ドラゴン』の攻撃力・守備力は17600!!！」

「『『『『『17600!!!!』』』』』」

カイザーを除く全員が驚く。

「バトル！『キメラテック・オーバー・ドラゴン』で『デーモン・カオス・キング』に攻撃！エヴォリユーション・レザルト・バースト！……！」

『キメラテック・オーバー・ドラゴン』の攻撃に『デーモン・カオス・キング』はなす術無く呑み込まれた。

その攻撃は無論、俺を呑み込もうとする。

「悪いが、諦めるつもりは全く無い！リバース・カードオープン！『ガード・ブロック』！戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロ……！」

『キメラテック・オーバー・ドラゴン』の攻撃力・守備力は融合素材モンスターの数で決まる。ならば次の俺のターンでアレクを出して効果を無効する。そして、アレクで攻撃すれば俺の勝ちだ！

「甘い！『キメラテック・オーバー・ドラゴン』は融合素材としたモンスターの数だけ、相手モンスターに攻撃できる！行くぞ！天道！『キメラテック・オーバー・ドラゴン』で『ダークエンド・ドラゴン』に攻撃！エヴォリユーション・レザルト・バースト！2連打ア……！」

「くっ！受けて立つ！行け！『ダークエンド・ドラゴン』！ダーク・フォック！」

『ダークエンド・ドラゴン』が放った攻撃と『キメラテック・オーバー・ドラゴン』の放った攻撃が2体の中間あたりでぶつかる。押し合ったのは一瞬で『ダークエンド・ドラゴン』は自身の攻撃と共に呑み込まれた。

そして、『ダークエンド・ドラゴン』を呑み込んだ攻撃は俺の所まで届き、俺を呑み込んだ。

「うわぁあああぁー!!」

俺

LP10400 - 5100

デュエルの終了を告げるブザーが鳴り響いた。

「『プライドの咆哮』か……」

『ガード・ブロック』の効果で最後にドロートしたカードを見て呟く。

そっぴゃ、デュエル中に負けが確定しているのにあそこまで叫んだのは、一体何時ぶりだ？

### 第13話 VSアカデミアの頂点のデュエリスト（後書き）

鷹

「今日の最強カードは『ジャンク・ディーラー』と悩んだけどやっぱりこれ！」

『キメラテック・オーバー・ドラゴン』

レベル9 闇属性

機械族・融合/効果

攻撃力？

守備力？

『サイバー・ドラゴン』+機械族モンスター1体以上このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの融合召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上のカードを全て墓地に送る。このカードの元々の攻撃力・守備力は融合素材にしたモンスターの数×800ポイントの数値になる。このカードは融合素材にしたモンスターの数だけ相手モンスターを攻撃する事ができる。

鷹

「融合素材がゆるゆるの融合モンスターだな。『サイバー・ドラゴン』だけじゃなく、『プロト』や『ツヴァイ』も居るし。」

そして、俺がTFシリーズで出して攻撃したら『魔法の筒』で逆にワンキンされたモンスターでもある……」

貴志

「お前、何やってんだよ……」

鷹



「現実で持っていないから出せてテンションがハイになってしまった……」

貴志

「馬鹿な奴だな。まあTF5で、『フォーミュラ・シンクロン』が無いという理由で、『呪縛牢』を使って、『シューティング・スター・ドラゴン』を出すお前にはぴったりかもな」

鷹

「失礼な！『スカーレット』や『ブレード・ガンナー』も呼び出すぞ！」

貴志

「お前はもう……色んな所に謝りに行ってこい」

第14話 迷と宮(前書き)

十代以外にも、チートドロの持ち主が！

## 第14話 迷と宮

カイザーとデュエルしてからには特に是といった事も……いや、4日前に隼人を連れ戻すとか言って、隼人の父親がアカデミアに来たり、3日前にまたドロップンの悲劇と更に、十代達の奇跡的な運を再確認した事以外は特に無く、制裁デュエルの日がきた。

くじ引きの結果、十代と翔ペアの後にデュエルする順番は隼人、明日香、俺という順番になった。

十代と翔はデュエルリングに向かい、俺達は観客席に向かった。

「クロノス教諭が用意したデュエリストって、一体誰かしら？」

「さあな。まあクロノス先生は俺と十代と翔を退学にしたいから、それなりのデュエリストだと思いが……」

『デンジャラスマシン TYPE-6』の様なマシンでくじ引きをしたが、一番最初に引いた俺の時だけ、3と4が出たら、また回りだし、5が出るまでそれが続くという不自然な物だった。

十代と翔と俺の相手はかなり手強いかもしれないな。

「さあそれでは、退学か在学かをかけた制裁デュエル第1回戦を開始します！」

司会進行役の生徒がデュエリストの紹介を始めた。

今更だが、わざわざ授業を潰して生徒に観戦させる辺りに悪意を感

じるな。

「まずはチームアカデミアから遊城 十代選手と丸藤 翔選手の2人だぁー！遊城 十代選手は知つての通り、ブルーの生徒を上回る実力を持っている！そして、丸藤 翔選手の力はまだ未知数。これは面白い組み合わせだぁー！」

司会進行役の言葉の後に十代と翔がデュエル場に入場して来た。

その瞬間、主にオシリス・レッドとラー・イエローを中心に歓声が起こる。

「何だこれ？」

「凄い歓声なんだな」

「十代達ってこんなに人気者だったの？」

「イエローの生徒の中にもブルーの生徒に痛い目に合わされた生徒が多い。だから、ブルーの生徒を倒した十代と貴志はかなり人気がある様だな」

「そうか……」

三沢の解説に疑問が解けるが、俺もなのかよ。

疑問が解けた所でデュエル場に目を向けると、十代はいつも通り振る舞っているが、翔は緊張してるみたいだ。

「それではクロノス教諭が用意した刺客の入場だぁー！」

十代と翔が入って来た入り口の反対の方からフードを被った2人組が入場して来た。

その2人組は入って来るなり、空中に跳んで、無駄にアクロバティックな動きをしたり、組み手をしたりといきなり何?と思う動きをした後、フードを取った。

その2人組の正体は……

「な、何とクロノス教諭からの刺客は伝説のデュエリスト迷宮兄弟だあー！」

迷宮兄弟……デュエリストキングダムで師匠を倒す為に雇われたデュエリスト。

そして、切り札はペガサス様があの2人の為に作ったカード『ゲート・ガーディアン』。その攻撃力は師匠の持つ『アルカナ ナイト ジョーカー』を除けば戦士族ではトップ。

「迷宮兄弟は伝説の決闘王武藤 遊戯と伝説のデュエリスト城之内 克也のタッグを追い詰めた程の猛者。果たしてこの2人に勝てるのかあー！」

「くうく 伝説のデュエリストとデュエルできるなんて、ワクワクしてきたぜ！  
頑張ろうな翔」

「う、うん」

「汝等2人。栄光という名の光に辿り着くか」

「絶望という名の闇に辿り着くかは」

「1」の」

「デュエルで」

「「決まる！」」

迷宮兄弟の前口上が入る。2人交互に話す辺りに息ピッタリだな。

「ルールはタッグフォールールで行います！LPは8000。フィールドや墓地、除外ゾーン等は共通。攻撃は2人目のプレイヤーから可能。カードの使用権はターンプレイヤーにのみあります！それではデュエル開始イー！！！！」

「「「デュエル！！！！」」」

迷・宮ペア

LP8000

十・翔ペア

LP8000

順番は迷宮兄 翔 迷宮弟 十代という順番になったみたいだ。

「私のターン、ドロー！私はライフを1500支払い手札から『スター・ブラスト』を発動！手札の『風魔神・ヒューガ』のレベルを

エンドフェイズまで、3つ下げる。そして、レベル4となった『風魔神・ヒューガ』を攻撃表示で召喚する！」

迷・宮

LP8000 6500

迷宮兄弟のライフが減った後、迷宮兄弟の場に顔？の部分に「風」と刻まれた魔神が現れる。

『雷魔神・ヒューガ』

レベル7（4） 風属性

魔法使い族・効果

攻撃力2400

守備力2200

ライフを犠牲にして、いきなり魔神の一体を召喚するか……早いな。

「更に魔法カード『アンティ勝負』を発動。それぞれのプレイヤーは手札からカードを1枚選択し、お互いにレベルを確認する。

レベルの高いモンスターを選択したプレイヤーのカードは手札に戻り、レベルの低いモンスターを選択したプレイヤーは1000ポイントのダメージを受け、選択したカードを墓地に送る。ちなみに、モンスター以外のカードを選択した場合はレベル0とする。私が選択したのはこのカードだ！」

この場合、効果を受けるのは十代か……

「俺が選ぶのはこのカードだ！」

十代と迷宮兄が選んだカードが表示される。

十代が選んだのはレベル5の『E・HERO ネクロダークマン』。  
そして、迷宮兄が選んだカードは……

「『ゲ、ゲート・ガーディアン』!!!!」

レベル11の『ゲート・ガーディアン』だった。

もう手札に来ていたのか……どんな引きしてんだよ。

「『アンティ勝負』の効果により、1000ポイントのダメージを受けて貰う！更に『ネクロダークマン』も墓地に送って貰うぞ！」

フィールド上にプレイされていた『アンティ勝負』から『ミスト・ウォーム』の様なものが出てきて、確認する為にフィールド上に出ていた『ネクロダークマン』を食い破り、十代達にダメージを与える。

「ぐっ！ぐっ……」

十代・翔ペア

LP8000 7000



「カードを2枚伏せてターンエンド」

『風魔神・ヒューガ』

レベル4 7

迷・宮ペア

LP6500

迷宮兄 手札1枚

迷宮弟 手札5枚

モンスター

『風魔神・ヒューガ』

(攻撃力2400)

魔法・罫

伏せ 2

1ターン目に魔神の1体を召喚し、尚且つダメージを与えるか……だが、墓地に『ネクロダークマン』が置かれた。悪い事ばかりじゃない。

あれ？迷宮兄の手札は『ゲート・ガーディアン』だけ……『スター・ブラスト』が無かったら終わってないか？

「僕のターン！ドロー！」

翔のターンから攻撃は可能だが、迷宮兄弟の場には自身への攻撃を

1度だけ無効にする攻撃力2400の『風魔神・ヒューガ』が居る。さて、どう動く？

「僕は永続魔法『マシン・デベロッパ』を発動！更に『スチームロイド』を召喚！『マシン・デベロッパ』の効果で攻撃力が200アップ！」

翔の場に人面機関車が現れて、整備士らしき人達に整備される。

『スチームロイド』

レベル4 地属性

機械族・効果

攻撃力1800（2000）

守備力1800

「『マシン・デベロッパ』……フィールド上の機械族モンスターの攻撃力を200アップし、フィールド上の機械族モンスターが破壊される度にカウンターを置き、後続を出しやすくするカードか……」

三沢の解説が入る。攻撃力200アップ……『スチームロイド』自身の効果と合わせれば、『ヒューガ』の攻撃力を上回るが……

「バトル！『スチームロイド』で『風魔神・ヒューガ』に攻撃！『スチームロイド』はこのカードが攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が500アップする！」

「くっ、ならば『風魔神・ヒューガ』の効果を発動！『スチームロイド』との戦闘で発生するダメージを0にする！ストーム・バリケード……！」

『スチームロイド』が突撃を試みるが『ヒューガ』が発生させた暴風によってそれで壁に激突した。

痛そうに顔を歪めているが、可愛くもなんともないな。

だが、1回限りの効果を使わせたのは大きいな。

「僕はカードを1枚伏せてターンエンド！」

迷・宮ペア

LP6500

迷宮兄 手札1枚

迷宮弟 手札5枚

モンスター

『風魔神・ヒューガ』

(攻撃力2400)

魔法・罫

伏せ 2

十代・翔ペア

十代 手札4枚

翔 手札3枚

モンスター

『スチームロイド』

(攻撃力2000)

魔法・罫

『マシン・デベロッパ』

(永続魔法)

伏せ 1

「私のターン！ドロー。私は兄者が伏せたトラップカード『レベル変換実験室』を発動！私が選択するのは『水魔神・スーガ』だ！」

若干薄くなった『水魔神・スーガ』が場に現れる。そして、『スーガ』の前にサイコロも現れる。

「『レベル変換実験室』……自分の手札のモンスター1枚を選択し、サイコロを振る。1が出た場合は選択したカードを墓地に送り、それ以外の数字の時は、選択したモンスターのレベルにするカードか」  
三沢の解説が再び入る。流石はラー・イエロー首席。知識が豊富だ。

「さあ行くぞ！ダイスロール！」

振られたサイコロの出た目は……

「5か……」

これなら、生け贄がいるが、どうするか……

「出た目は5か。ならば、もう1枚のリバース・カードオープン！『デビルズ・サンチュクアリ』！このカードの効果によって、『メ

タルデビル・トークン』を特殊召喚する！更に『メタルデビル・トークン』を生け贄にして、レベル5となった『水魔神・スーガ』を召喚！」

迷宮兄弟の場に今度は『水』という文字が刻まれた魔神が現れる。

『水魔神・スーガ』

レベル7（5） 水属性

水族・効果

攻撃力（2500）

守備力（2400）

2体目の魔神か……てか、魔神以外のモンスターは無いのか？

「バトル！『風魔神・ヒューガ』で『スチームロイド』に攻撃！魔風波！！」

「トラップ発動！『攻撃の無力化』！攻撃は無効だ！」

『ヒューガ』の口から吐き出された暴風が『スチームロイド』に迫るが、渦に吸い込まれる。

「ぬう！私はカードを2枚伏せてターンエンド」

『水魔神・スーガ』

レベル5 7

迷・宮ペア

LP6500

迷宮兄 手札1枚

迷宮弟 手札3枚

モンスター

『風魔神 - ヒューガ』

(攻撃力2400)

『水魔神 - スーガ』

(攻撃力2500)

魔法・罫

伏せ 2

十代・翔ペア

LP7000

十代 手札4枚

翔 手札3枚

モンスター

『スチームロイド』

(攻撃力2000)

魔法・罫

『マシン・デベロッパ』

(永続魔法)

「俺のターン！ドロー！」『強欲な壺』を発動！更に『サイクロン』

を発動！俺から見て右側のカードを破壊する！」

破壊したカードは……『魔法の筒』か。

「よっしゃ！行くぜ！墓地の『ネクロダークマン』の効果発動！このカードが墓地に存在する限り1度だけ、レベル5以上の『E・HERO』と名のついたモンスター1体を生け贄無しで召喚できる！」

『E・HERO エッジマン』を召喚！」

「なんと……」

「兄者の『アンティ勝負』を利用したのか！」

「更に『融合』を発動！手札の『フェザーマン』と『バーストレイディ』を手札融合！出でよ『E・HERO フレイム・ウィングマン』！」

『E・HERO エッジマン』

レベル7 地属性

戦士族・効果

攻撃力2600

守備力1800

『E・HERO フレイム・ウィングマン』

レベル6 風属性

戦士族・融合/効果

攻撃力2100

守備力1200

「ぬう！だが、『フレイム・ウィングマン』では『スーガ』や『ヒ

ユーガ』には適わぬ！」

「まだまだ！ヒーローには戦う舞台がある！フィールド魔法『摩天楼 - スカイスクレイパー - 』を発動！」

十代がフィールド魔法ゾーンにカードを置いた瞬間、十代達の周りに高層ビルが立ち並ぶ。

「『 - スカイスクレイパー - 』がある限り、『E・HERO』と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする！」

「何だと！？」

迷宮兄弟が驚いているが、俺は別の意味で驚いたな。

十代の奴、どんだけドロー運が良いんだ？

もしかするとあいつのドロー運は師匠達に匹敵するかもな。

「行くぜ！『スチームロイド』で『水魔神 - スーガ』に攻撃！」

「ぬう！『水魔神 - スーガ』の効果発動！戦闘によるダメージを0にする！魔水障壁！」

『スチームロイド』が今度は水に流されて壁に激突した。哀れだな。

「今度は『フレイム・ウィングマン』で『水魔神 - スーガ』に攻撃



！スカイスクレイパー・シュート！！」

「ぐう！『水魔神・スーガ』は既に効果を使ってしまったている！」

『フレイム・ウイングマン』が摩天楼の一番高い所に立ち、『スーガ』を見下ろす。

そして、『スーガ』目がけて飛び降りると、右腕から出した炎を身に纏った。

『スーガ』が迎撃しようと口から大量の水を出す、『フレイム・ウイングマン』の炎が衰える事は無い。

炎の矢となった『フレイム・ウイングマン』が『スーガ』を貫いた。

「「ぬわああああ！！」」

迷・宮ペア

LP6500 5900

「更に『フレイム・ウイングマン』の効果発動！戦闘で破壊し墓地へ送ったモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える」

『スーガ』を貫いた後、姿が見えなかった『フレイム・ウイングマン』が床から出て来て、迷宮兄弟を燃やす。

「「ぐわああああ！！」」

迷・宮ペア

LP5900 3400

「今度は『E・HERO エッジマン』で『風魔神・ヒューガ』に攻撃！パワー・エッジ・アタック！」

『エッジマン』が『ヒューガ』が起こした暴風ごと『ヒューガ』を貫いた。

「ぐう！馬鹿な魔神が倒されるなど」

迷・宮ペア

LP3400 3200

「ターンエンドだ」

十代がエンド宣言した瞬間、周りの生徒から歓声上がる。

まさかここまで圧倒的とはな……驚いたな。

迷・宮ペア

LP3200

迷宮兄 手札1枚

迷宮弟 手札3枚

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 1

十代・翔ペア

LP7000

十代 手札0

翔 手札3枚

モンスター

『E・HERO エッジマン』

(攻撃力2600)

『E・HERO フレイム・ウィングマン』

(攻撃力2100)

『スチームロイド』

(攻撃力2000)

魔法・罫

『マシン・デベロッパー』

(永続魔法)

『摩天楼 - スカイスクレイパー -』

(フィールド魔法)

「弟よ！気を引き締めて掛かるぞ！」

「おうとも！兄者！」

「私のターン！ドロー！私はカードを1枚伏せて、弟が伏せた『天よりの宝札』を発動する！」

タッグパートナーが伏せたカードをお互いに活かして戦う。流石に

戦い慣れてるな。だが……十代が手札を大量に補充した。十代のターンが来れば、迷宮兄弟の負けだな。

「私は伏せていた『死者蘇生』を発動！蘇れ『水魔神』よ！更に『早すぎた埋葬』を発動！ライフを800支払い再び舞い戻れ！『風魔神』よ！」

迷・宮ペア

LP 3200 2400

床を突き破り『スーガ』と『ヒューガ』が復活した。

『水魔神 - スーガ』

レベル7 水属性

水族・効果

攻撃力2500

守備力2400

『風魔神 - ヒューガ』

レベル7 風属性

魔法使い族・効果

攻撃力2400

守備力2200

「更に『地雷蜘蛛』を召喚して、魔法カード『生け贄人形』を発動！『地雷蜘蛛』を生け贄に手札から『雷魔神 - サンガ』を特殊召喚する！」

迷宮兄弟の場に顔に『雷』と刻まれた魔神が現れる。ってその引き

の良さどうなってるの!?

「『雷魔神』、『水魔神』、『風魔神』を生け贄に手札の『ゲート・ガーディアン』を特殊召喚!出でよ!『ゲート・ガーディアン』!」

3魔神が『スーガ』の上に『ヒューガ』が、『ヒューガ』の上に『サンガ』が乗っただけのモンスターになる。

『ゲート・ガーディアン』

レベル11 闇属性

戦士族・効果

攻撃力3750

守備力3400

今更だが、何故乗っただけで強くなるんだろうか?『竜騎士ガイア』  
しかり『マスター・オブ・ドラゴンナイト究極竜騎士』しかり。

そういえば、『暗黒騎士ガイア』って始めから馬に乗ってるな。馬から降りたらどうなるんだろうか?

……今はどうでも良いか。

「バトル!『ゲート・ガーディアン』で『スチームロイド』に攻撃!魔神衝撃波!」

「うわぁあああ!」

十代・翔ペア

『ゲート・ガーディアン』が放った衝撃波によって『スチームロイド』が破壊される。うーむ、雨にも負けず風にも負けなかったが、衝撃波には負けたか。

「でも『スチームロイド』が破壊された事により、『マシン・デベロッパ』にジャンクカウンターが2つ乗るぜ！」

『マシン・デベロッパ』

カウンター0 2

「フツ！構わぬ。ターンエンド……だが！私はエンドフェイズに速攻魔法『闇からの奇襲』を発動！再び我等のバトルフェイズとなる！」

「何だと!?!」

「更にこのターン戦闘を行ったモンスターはもう1度攻撃できる！『ゲート・ガーディアン』で『E・HERO フレイム・ウィングマン』に攻撃！魔神衝撃波！」

先程、『スチームロイド』を襲った衝撃波が今度は『フレイム・ウィングマン』を襲う。

「ぐわああああ!?!」

十代・翔ペア

LP4750 3100

「これで本当にターンエンドだ！」

『闇からの奇襲』（アニメ）

速攻魔法

効果

自分のターンのエンドフェイズ時に発動する事ができる。

エンドフェイズからバトルフェイズに戻る。

その後、このターン戦闘を行ったモンスターはもう1度攻撃を行える。

迷・宮ペア

LP2400

迷宮兄 手札0

迷宮弟 手札3枚

モンスター

『ゲート・ガーディアン』

（攻撃力3750）

魔法・罨

無し

十代・翔ペア

LP3100

十代 手札6枚

翔 手札3枚

モンスター

『E・HERO エッジマン』

(攻撃力2600)

魔法・罫

『マシン・デベロッパ』

(永続魔法) カウンター2

『摩天楼 - スカイスケレイパー -』

(フィールド魔法)

「僕のターン！ドロー！」

ドローしたカードを見た翔の様子が変わる。

「翔！お前の引いたそのカードで、このデュエルの決着を付けようぜ！」

「アニキ……分かったよ！僕は魔法カード『パワー・ボンド』を発動！アニキの『E・HERO エッジマン』と僕の手札に居る『ユーフォロイド』を手札融合！現れよ『ユーフォロイド・ファイター』！……」

十代達の場に『エッジマン』がユーフォーに乗っただけのモンスターが現れる。

「『ユーフォロイド・ファイター』の元々の攻撃力・守備力は、融合素材となったモンスターの元々の攻撃力と同じになる！」



『ユーフォロイド・ファイター』  
レベル10 光属性  
機械族・融合/効果  
攻撃力?(3800)  
守備力?(3800)

「攻撃力が……」

「『ゲート・ガーディアン』を上回っただと……」

「まだまだ!『パワー・ボンド』で特殊召喚されたモンスターの元々の攻撃力は倍になる!更に『ユーフォロイド・ファイター』は機械族!『マシン・デベロッパ』の効果で攻撃力200アップ!」

『ユーフォロイド・ファイター』  
攻撃力3800 7600 7800

「何だとおー!!!」

「バトル!『ユーフォロイド・ファイター』で『ゲート・ガーディアン』に攻撃!パワー・ロイド・アターク!!!」

『エッジマン』が攻撃する時よりも明らかに早くてモンスター……  
『ゲート・ガーディアン』に接近し、そのまま『ヒューガ』の部分を貫く。

バランスを失った『ゲート・ガーディアン』はバラバラになって迷宮兄弟を下敷きにした。

「ぐわああああ!!!」

辺りにデュエル終了を告げるブザーが鳴り響く。

「決まったあー！！遊城 十代選手と丸藤 翔選手がクロノス教諭が用意したデュエリスト迷宮兄弟を降したあー！！！」

観客席から、十代コールと翔コールが起こる。

今、思ったが迷宮弟以外凄いドロー運だな。

「次の前田 隼人選手対刺客その3のデュエルは30分後。それまで休憩を挟みます！」

-----

「2人とも凄かったわよ」

俺達が与えられた控え室に着いて5分くらいして、控え室に戻ってきた2人に明日香が言った。

「へへッ。まあな」

「そっいや、十代。最後の手札は何だったんだ？」

「ああ、え〜と確か『E・エマーゲンシーコール』、『H・ヒートハート』、『R・ライトジャスティス』、『O・オーバーソウル』

、『ヒーローフラッシュ!!』、『天よりの宝札』だったな」

「……………そうか」

どんなドロ―運だよホント…………

「次は隼人君だね」

「親父にも在学が認められたから、負ける訳にはいかないんだな」

「頑張れよ!」

さて、隼人の相手は一体誰になるのやら…………

## 第14話 迷と宮（後書き）

今更ですが後書きの世界は本編とは違う世界なのでトリップ、憑依してない主人公もTFの事等、平気で喋ります。

貴志

「迷宮弟を除いて、皆チートドローだったな」

鷹

「いや、迷宮弟も少しはチートドローだと思うよ。王国編では普通に兄に続いて魔神引いてたし」

貴志

「だが、十代や迷宮兄には遠く及ばないな」

鷹

「否定はしない。それでは今日の最強カードは」

鷹・貴志

「これだ！」

『ユーフォロイド・ファイター』

レベル10 光属性

機械族・融合/効果

『ユーフォロイド』+戦士族モンスター

このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行わない。このカードの元々の攻撃力・守備力は、融合素材にしたモンスター2体の元々の攻撃力を合計した数値になる。

貴志

「伝統の乗っただけ融合した奴だな」

鷹

「何故乗っただけで強くなるのか？それは誰にも分からない」

貴志

「冗談抜きで思ったが、 『暗黒騎士ガイア』 とかって落馬したらどうなるんだろうな」

鷹

「そんな事もあるのかと考えてみた。 疾風の方で」

『疾風の騎士ガイア』

レベル4 闇属性

戦士族・効果

攻撃力1800

守備力1500

効果

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

鷹

「『巨大戦艦 アサルト・コア』 総ステータスを一緒に『疾風の暗黒騎士ガイア』と同じく闇属性にしたんだけど、どうだろうか？」

貴志

「どうだろうか？と言われてもな。 正直に言って判断しづらい」

鷹 「まあ自分の作品に使うオリカを作るのは初めてで、自信は全く無い。オリカのマルスはステータスは決まってるけど、効果の一部はまだ決め切れてないし」

貴志

「優柔不断な奴め」

鷹

「名前は直ぐに決まったけどね。ゲームから取っただけだけど。あつ、そろそろ時間だ」

鷹・貴志

「「それでは感想やアドバイス、ミスの指摘等、お待ちしております!」」

鷹

「試しに作ったオリカ『疾風の騎士ガイア』についての感想もお願いします!」

## 第15話 海の男(前書き)

制裁デュエル第2戦目です。タイトルで相手バレバレですけど。

## 第15話 海の男

「さて、隼人の相手は誰になるんだろうな？」

控え室から、観客席に戻った所で疑問を口にした。

「十代達の相手が伝説のデュエリストだったからな。おそらく、残る三人も……」

「でも、こう言うのは何だけど学園側に呼べるような予算はあるのかしら？」

「確かに……」

明日香の疑問は尤もだ。迷宮兄弟も暇じゃない……ファイトマネーは多分出る。それは残る三人も同じ筈だ。

一体何処から金は出てるんだ？

----- 童実野町 K

C 本社ビル

「ハックションー!!」

「瀬人様。大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。心配するなキサラ」

-----



「そういえば、貴志や明日香はデッキの方は大丈夫なのかよ？」

「昨日少しカードを入れ替えたが、大丈夫だ」

「私はあのカードを使える用に改造したぐらいよ」

「あゝあのカードか」

3日前に皆でカードを買った時、十代は『ジャンク・ディーラー』と『天よりの宝札』を。明日香は新たな切り札を隼人や翔もかなり良いカードを手に入れたもんなく特に明日香や隼人は俺が持つてないカードを……結構羨ましいな。

「それでは！制裁デュエル第2戦を開始します！」

司会進行役の言葉に周りの生徒が騒ぎだす。

「チームアカデミアからは主力がコアラの獣使い、前田隼人選手！」

隼人がデュエル場に入場してくる。

意外にも緊張はしてないみたいだ。

「対するクロノス教諭の刺客はこの男だ！」

「おう！やっつとワシの番か！？」

隼人が入場してきた入り口の反対側から入場したのは、先がとんが

つてる髪型と日に焼けている肌が特徴的なデュエリスト梶木漁太さ  
んだった。

「な、なんと！3人目のクロノス教諭の刺客はかつてデュエリスト  
キングダムで武藤遊戯と闘い、バトルシティでは城之内克也とも闘  
った伝説のデュエリスト梶木漁太だぁー!!!」

そして元全日本第3位のデュエリストでもある……しかし、未だに  
あの人が羽蛾か竜崎さんに負けたのは、信じられないんだよな。

「よ、宜しくなんだな」

「こちらこそじゃ。ああ、それとそがいに緊張せぬようにの。緊張  
しよつたら出せる力も出せんからのう」

普通に対戦相手を気遣ってるよ……流石城之内さんに真のデュエリ  
ストと言われた人だな。

「それでは制裁デュエル第2戦開始イー!!!!」

「デュエルじゃ!」

「デュエルなんだな」

梶木

LP4000

隼人

LP4000

「先攻は貰う！ドローじゃ！ワシは手札からフィールド魔法『伝説の都 アトランティス』を発動じゃ！」

デュエル場が海底神殿と思わしき場所に変わった。

「このカードは『海』としても扱い、このカードが有る限り、手札とフィールド上の水属性モンスターはレベルが1つ少なくなるぜよ！更にフィールド上の水属性モンスターの攻撃力と守備力は200ポイントアップじゃ！そしてワシはレベル4となった『ジエノサイドキングサーモン』を攻撃表示で召喚！これでターンエンドじゃ！」

梶木さんの場に巨大なシャケが現れる。

『ジエノサイドキングサーモン』

レベル5（4） 水属性

魚族 通常

攻撃力2400（2600）

守備力1000（1200）

梶木

LP4000 手札4枚

モンスター

『ジエノサイドキングサーモン』

（攻撃力2600）

魔法・罾

『伝説の都 アトランティス』  
(フィールド魔法)

「お、俺のターン、ドロー！俺は魔法カード『天使の施し』を発動するんだな。効果でカードを3枚ドローして2枚捨てる。更に『巨大ネズミ』を守備表示で召喚。カードを1枚伏せてターンエンドなんだな」

隼人の場に名の通り、巨大なネズミが現れる。

『巨大ネズミ』

レベル4 地属性

獣族・効果

攻撃力1400

守備力1450

梶木

LP4000 手札4枚

モンスター

『ジエノサイドキングサーモン』

(攻撃力2600)

魔法・罫

『伝説の都 アトランティス』

(フィールド魔法)

隼人

LP4000 手札4枚

モンスター

『巨大ネズミ』

(守備力1450)

魔法・罾

伏せ 1

「『巨大ネズミ』で時間を稼いで、策を講じるつもりか」

「それもあるだろうが、隼人の手札にあのカードがあれば、反撃もできる」

そしておそらくあるな。『天使の施し』を使い、わざわざ攻撃を誘うかの様に『巨大ネズミ』をセットせずに、表側守備表示で出したんだから。

「ワシのターン！ドローじゃ！ワシは『ガガギゴ』を攻撃表示で召喚するぜよ！」

梶木さんの場に人型トカゲが現れた。

『ガガギゴ』

レベル4(3) 水属性

爬虫類族 通常

攻撃力1850(2050)

守備力1000(1200)

「バトルじゃ！」「ガガギゴ」で『巨大ネズミ』を攻撃するぜよ！」

『巨大ネズミ』が『ガガギゴ』によって蹴り倒される。

「自分の場に存在する獣族モンスターが戦闘によって破壊され、墓地に送られたこの瞬間、墓地の『不幸を告げる黒猫』と『ソウル・タイガー魂虎』を除外して手札の『森の狩人 イエロー・パブーン』を特殊召喚するんだな。更に『巨大ネズミ』の効果も発動。デッキから2体目の『巨大ネズミ』を特殊召喚するんだな」

隼人の場に再び『巨大ネズミ』が現れ、その後弓をつがえた黄色の獣が現れる。

『巨大ネズミ』

レベル4 地属性

獣族・効果

攻撃力1400

守備力1450

『森の狩人 イエロー・パブーン』

レベル7 地属性

獣族・効果

攻撃力2600

守備力1800

「馬鹿な！いつの間……さっきの『天使の施し』ん時か」

「そうなんだな」

「くっ、じゃが2体目の『巨大ネズミ』は攻撃表示じゃ！『ジエノサイドキングサーモン』で2体目の『巨大ネズミ』に攻撃するぜよ！」

『ジエノサイドキングサーモン』が『巨大ネズミ』に食らい付き、破壊した。

隼人

LP4000 2800

シャケがネズミを食べる……なんかシユールだ。

「ぐう！『巨大ネズミ』の効果を発動！デッキから『コアラッコ』を特殊召喚するんだな」

隼人の場に頭はコアラ、体はラッコのモンスターが現れる。

『コアラッコ』

レベル2 地属性

獣族・効果

攻撃力100

守備力1600

「カードを1枚伏せてターンエンドじゃ」

流石に『イエロー・パブーン』は予想外だったのか梶木さんの表情に焦りが見える。

梶木

LP4000 手札3枚

モンスター

『ジエノサイドキンググサーモン』

(攻撃力2600)

『ガガギゴ』

(攻撃力2050)

魔法・罫

『伝説の都 アトランティス』

(フィールド魔法)

伏せ 1

隼人

LP2800 手札3枚

モンスター

『森の狩人 イエロー・パプーン』

(攻撃力2600)

『コアラッコ』

(攻撃力100)

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン、ドロー！俺は『強欲な壺』を発動してカードを2枚



ドロー！そして、『ラッコアラ』を守備表示で召喚するんだな」

隼人の場に頭はラッコ、体はコアラのモンスターが現れた。

『ラッコアラ』

レベル2（1） 水属性

獣族・効果

攻撃力1200（1400）

守備力100（300）

「『ラッコアラ』の効果発動！このカード以外の獣族モンスターが自分フィールド上に表側表示で存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズ時まで1000ポイントアップさせるんだな。俺は『森の狩人 イエロー・パブーン』・パブーン』を選択するんだな」

『森の狩人 イエロー・パブーン』

攻撃力2600 3600

「攻撃力3600じゃと！」

「更に『コアラッコ』の効果も発動！こいつの効果の発動条件は『ラッコアラ』と同じなんだな。でもこいつは相手フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズ時まで0にできるんだな。俺は『ジエノサイドキングサーモン』を選択するんだな」

『ジエノサイドキングサーモン』

攻撃力2600 0

「すげえぜ隼人！」

「確かにこれなら大ダメージを与えられるな」

三沢がああ言ってるが、そううまく行くかな？

「バトル！『森の狩人 イエロー・パブーン』で『ジェノサイドキングサーモン』に攻撃するんだな！」

「ワシはこの瞬間、永続罫『トルネード・ウォール竜巻海流壁』を発動！『海』が表側表示で存在する限り、攻撃モンスターからのダメージは0になるぜよ！フィールド上には『海』として扱う『伝説の都 アトランティス』がある。よってワシのダメージは0じゃ！」

「イエロー・パブーン」が放った矢が『ジェノサイドキングサーモン』を貫き、そのまま梶木さんに刺さるかと思いきや、竜巻の壁に阻まれる。

「どつじゃ！ワシのダメージは0ぜよ！」

「でもモンスターは破壊できるんだな。リバース・カードオープン『キャトルミューティレーション』！自分フィールド上の獣族モンスター1体を手札に戻し、手札から同じレベルの獣族モンスターを特殊召喚するんだな。出でよ『ビッグ・コアラ』！」

隼人の場に居た『イエロー・パブーン』が姿を消して代わりに『コアラッコ』や『ラッコアラ』の数倍はあろうかという巨大なコアラが現れた。

『ビッグ・コアラ』

レベル7 地属性

獣族 通常

攻撃力2700

守備力2000

「うまい！『森の狩人 イエロー・パブーン』が手札にあるから、相手は迂闊にモンスターを攻撃できない」

「それにバトルフェイズ中の召喚だから、追撃もできるわ」

「てか、よくもまあそんなに上級モンスターをばんぽんと出せるな」

「それ、貴志君が言えるんスカ……」

「……………」

まさか、翔にツッコミされるとは。

「『ビッグ・コアラ』で『ガガギゴ』に攻撃！」

『ビッグ・コアラ』が振り下ろした拳をなんとか受けとめていた『ガガギゴ』だが、耐え切れずに押しつぶされた。

「『コアラッコ』を守備表示にしてターンエンド」

梶木

LP4000 手札3枚

モンスター

無し

魔法・罫

『伝説の都 アトランティス』

(『フィールド魔法』)

『竜巻海流壁』

(『永続罫』)

隼人

LP2800 手札4枚

モンスター

『ビッグ・コアラ』

(攻撃力2700)

『コアラッコ』

(守備力1600)

『ラッコアラ』

(守備力100)

魔法・罫

無し

「ワシのターンドロー！ワシは『二重召喚』を発動！これでワシはこのターン2回通常召喚できるぜよ！ワシは『コダロス』を攻撃表示で召喚！更に『コダロス』を生け贄にしてレベル6となっている<sup>リハイアドラゴン</sup>海竜-ダイダロス』を召喚するぜよ！」

いくらか小ぶりの竜が現れたと思ったら、直ぐに消えて代わりに3倍の大きさはあるであろう巨大な海竜が現れた。

『コダロス』

レベル4(3) 水属性

海竜族・効果

攻撃力1400(1600)

守備力1200(1400)

『海竜 - ダイダロス』

レベル7(6) 水属性

海竜族・効果

攻撃力2600(2800)

守備力1500(1700)

「ワシはワシの場にある『海』として扱う『伝説の都 アトランテイス』を墓地に送って、『海竜 - ダイダロス』の効果を発動するぜよ！自分フィールド上に存在する『海』を墓地に送る事で、このカード以外のフィールド上の全てのカードを破壊する！ダイダル・ウエーブ！」

『ダイダロス』が起こした津波によって、隼人の場に居た3体のコアラが流される。

「バトルじゃ！『海竜 - ダイダロス』でダイレクトアタックするぜよ！」

「うわぁぁぁぁ！」

先程、コアラ達を襲った津波が今度は隼人を襲い、ライフを削る。

隼人

LP2800 200

「ターンエンドじゃ」

梶木

LP4000 手札1枚

モンスター

『海竜・ダイダロス』

(攻撃力2600)

魔法・罾

無し

隼人

LP200 手札4枚

モンスター・魔法・罾

無し

隼人のライフは残り200。だが、梶木さんを守っていた『竜巻海流壁』は消えている。攻めるなら今がチャンスだな。

「俺のターン、ドローなんだな！俺は魔法カード『黙する死者』を発動して、墓地の『ビッグ・コアラ』を守備表示で特殊召喚！更に『融合』を発動！手札の『デス・カンガルー』と場の『ビッグ・コアラ』を融合！現れる『マスター・オブ・OZ』！！」

隼人の場の『ビッグ・コアラ』とボクシンググローブを装着したカ  
ンガルー……『デス・カンガルー』が融合してボクシンググローブ  
を装着したコアラが現れた。

『ビッグ・コアラ』

レベル7 地属性

獣族 通常

攻撃力2700

守備力2000

『マスター・オブ・OZ』

レベル9 地属性

獣族・融合

攻撃力4200

守備力3700

「こ、ここでそんなモンスターを出すんか」

梶木さんの表情が若干引きつっている。まあ場が0の状態からだも  
んな

「バトル！『マスター・オブ・OZ』で『海竜・ダイダロス』に攻  
撃！エアーズ・ロッキー！！」

『マスター・オブ・OZ』が『ダイダロス』の尾を掴み、地面に叩  
きつけて破壊した。

「グッ、ぬおおおー！！」

梶木

LP4000 2400

「ターンエンドなんだな」

梶木

LP2400 手札1枚

モンスター・魔法・罨

無し

隼人

LP200 手札2枚

モンスター

『マスター・オブ・OZ』

(攻撃力4200)

魔法・罨

無し

「ワシのターン！ドローじゃ！このカードが前のターンに来とったなら……ワシはこのままターンエンドじゃ」

梶木さんは何もせずにターンを終了した。出せるカードが無かったのか？

「俺のターン、ドロー！そして、バトル！『マスター・オブ・OZ』でダイレクトアタック！」



「ぐわああああー!!」

梶木

LP24000

「決まったあー!! 制裁デュエル第2戦もチームアカデミアの勝利に終わったあー!!!」

司会進行役の言葉に観客席の生徒が歓声を上げる。

「次のデュエルは30分後、アカデミアの女王。天上院明日香対クロノス教諭の刺客のデュエルだあー!!!」

「女王?」

「周りが勝手に言ってるだけよ! 私はもう行くわ」

十代と翔の疑問に明日香が顔を赤くして否定して控え室の方に向かっていく。

俺自身、カードプロフェッサー時代に色々、異名を付けられたから分かるが、正直恥ずかしいもんな。

さて、それはさておき4人目の刺客は誰なんだろうな?

## 第15話 海の男（後書き）

貴志

「今日の最強カードはこれだな」

『マスター・オブ・OZ』

レベル9 地属性

獣族・融合

攻撃力4200

守備力3700

『ビッグ・コアラ』 + 『デス・カンガル』

鷹

「『青眼の究極竜』を除けば、効果がないモンスターでは攻撃力トツプだな」

貴志

「まあそれは良いとして、最後のターン何故梶木さんは何もしなかつたんだ？」

鷹

「簡単に言えば、犠牲だな。いつもいつも起死回生のカードは引けねえぞという」

貴志

「お前なあ……」

鷹

「それはさておき、制裁デュエルも半分が終わりました。次の明日の相手ですが、おそらく殆どの人の意表を突けると思っているので是非お楽しみに」

鷹・貴志

「感想やアドバイス、ミスの指摘等、お待ちしております！」

第16話 M・HERO G-77(前書き)

多分、この人が出てくるのは予想外でしょう……ではどうぞ！

アニメとかのオリカを出し過ぎたせいかな、長さが過去最長に……

第16話 M・HERO G-77

「さあ制裁デュエルも後2試合を残すのみとなりました！次はどのようなデュエルが繰り広げられるのでしょうか！」

司会進行役の言葉に場内は歓声で溢れかえる。

「次の相手は一体誰なんだろうな」

「さっきの梶木さんから連想すると、手堅い所で明日香の相手がダインソー竜崎。俺の相手がインセクター羽蛾だろうな」

正直に言えば、インセクター羽蛾が相手なら、かなり楽なんだが。

「それでは、チームアカデミアからはこの人！アカデミアの女王。天上院 明日香選手だぁー！！！」

司会進行役がそう言って明日香がデュエル場に入場した瞬間、十代達が入場した時……いや、この制裁デュエル内で今まで起こった歓声とは比べ物にならない程の大歓声が起こった。

「何なんだ一体？」

「凄い歓声なんだな」

「天上院君はこのデュエルアカデミア内で1、2位を争う程の人気を誇っているからな」

「ああ、成る程」

三沢の答えに思わず納得する。確かにデュエルの実力が抜きん出ており、本人の人柄も良くて容姿もモデル並……人気が出ない方がおかしいか。

それでも入学してまだ日が浅いのに、これ程の人気が出るものなのか？

「皆さん。お静かに！」

司会進行役が声をあげる。流石にこのままでは、支障が出ると思っただろう。

「それでは、天上院 明日香選手とデュエルするデュエリストに入場してもらいましょう！どうぞ！」

司会進行役の言葉の後に入場してきたのは俺が予想したダイナソー竜崎でもインセクター羽蛾でも無く、頭に『6』と書かれたバンダナをして、目元と口元をマスクで隠しているデュエリストだった。

「ってちょっと待て！まさかこの人は……」

「な、なんと天上院 明日香選手の相手はKCグランプリに出場し、伝説のデュエリスト城之内 克也と互角のデュエルを繰り広げたデュエリスト。マスク・ザ・ロックだぁー！！！」

顔を隠してるけど、あれって双六さん……だよな。

双六さん……一体何やってんすか……

「そんなに凄いデュエリストなのか？」

「……さっき言われた通り、K Cグランプリ出場者で召喚条件が極めて難しい『古代竜・エンシェント・ドラゴン』というモンスターが切り札のデュエリストだ」

「へ〜貴志詳しいな」

「デュエルを見たからな」

「確かK Cグランプリのデュエル内容が収録されたDVD等はデュエリストキングダム之物よりも貴重な物だった筈……まさか持っているのか！」

三沢が身を乗り出して聞いてくる。ちょっと怖いんだが。

「……生で見ただけだ」

「……はあ……!」

十代、三沢、翔、隼人の声が見事に重なった。

「K Cグランプリはアメリカで開かれたんだぞ！」

「デュエルを見る為にアメリカまで行ったんスか!？」

「アメリカまで行った?……ああ、そーいや言っただけ。俺、産まれは日本だけど、育ちはアメリカなんだよ」

「……はあ……!」

再び4人の声が見事に重なる。ただ、さっきよりも声が大きい為、

周りの人に睨まれた。

「お前等少しは静かにしろって。おっ、そろそろ始まるみたいだな」  
デュエル場の方を見ると、明日香と双六さんがデュエルリングの中央で互いのデッキをシャッフルしていた。

今更だが、今までのデュエルでデッキをシャッフルしてたっけ？してたよな多分……

「さあそれでは制裁デュエル第3戦開始イー！！！」

「デュエル！！」

明日香

LP4000

双六

LP4000

「先攻はワシが貰う。ドロー！ワシはモンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンドじゃ」

双六

LP4000 手札4枚

モンスター



伏せ 1

魔法・畏

伏せ 1

「私のターン、ドロー！私は魔法カード『増援』を発動して、デッキから『聖騎士の槍持ち』を手札に加えるわ。更に『花騎士団の駿馬』を攻撃表示で召喚！」

明日香の場に色々な装飾がされた馬が現れる。

『花騎士団の駿馬』

レベル3 風属性

獣族・効果

攻撃力400

守備力800

「『花騎士団の駿馬』は召喚に成功した時、デッキから『聖騎士の槍持ち』か『融合』を1枚手札に加える事ができるわ。私は『融合』を手札に加えて発動！手札の『聖騎士の槍持ち』と場の『花騎士団の駿馬』を融合！来なさい『ケンタウルミナ』！」

明日香の場に馬と女性が一体となったモンスターが現れた。

『ケンタウルミナ』

レベル6 光属性

獣戦士族・融合/効果

攻撃力2200

守備力1600

3日前に明日香が当てたカードの一部か。出るの早いな。

「バトル！『ケンタウルミナ』で守備モンスターに攻撃！」

「ならば、この瞬間リバース・カードオープン『モンスターBOX』」  
「！」

「そうはさせないわ！『ケンタウルミナ』のモンスター効果発動！1ターンに1度、自分のターンに相手が畏カードを発動した時、その場合を無効にしそのカードをセットする事ができる！私は『モンスターBOX』の効果は無効にしセットさせるわ」

「なんじゃと!?!」

モグラ叩きゲームに使われそうな箱が現れたが、『ケンタウルミナ』に曳かれてまた伏せ状態になった。

そのまま、『ケンタウルミナ』が右手に持つ剣でセットされていたモンスターを切り捨てた。

破壊されたモンスターは『アステカの石像』か。危なかったな。

「私はカードを1枚伏せてターンエンドよ」

明日香

LP4000 手札2枚

モンスター  
『ケンタウルミナ』  
(攻撃力2200)

魔法・罫  
伏せ 1

双六  
LP4000 手札4枚

モンスター  
無し

魔法・罫  
伏せ 1

「ワシのターン、ドロ！ワシは永続魔法『悪夢の蜃気楼』を発動！そして、モンスターをセット、カードを2枚セットしてターンエンド！」

明日香  
LP4000 手札2枚

モンスター  
『ケンタウルミナ』  
(攻撃力2200)

魔法・罨  
伏せ 1

双六

LP4000 手札1枚

モンスター

伏せ 1

魔法・罨

『悪夢の蜃気楼』

(永続魔法)

伏せ 3

伏せカードが3枚……1枚は『モンスターBOX』そして、後2枚の内1枚は十中八九『悪夢の蜃気楼』のデメリットを打ち消す為のカードだろうな。

「私のターン、ドロー！」

「嬢ちゃんのスタンバイフェイズ時に『悪夢の蜃気楼』の効果発動！ワシは手札が4枚になるようドローさせてもらう。じゃが次のワシのターンのスタンバイフェイズ時に、このカードの効果でドロした枚数分だけカードを手札から捨てねばならん。そこでリバー・カードオープン！『ダブルサイクロン』！」

「っ！『ケンタウルミナ』の効果発動！『ダブルサイクロン』の効

果を無効にして、再びセットさせるわ」

「ほっほっほ。ならばもう1枚のリバース・カードオープン！『非常食』！ワシの場の『悪夢の屋気楼』と『ダブルサイクロン』、『モンスターBOX』を墓地に送って3000ライフポイント回復じや」

「何ですって！」

双六

LP4000 7000

両方とも『悪夢の屋気楼』を消すカードだったか……そして、ライフ差も付けられた。これは少しヤバいな。

「私は『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロー！そして、『エトワール・サイバー』を攻撃表示で召喚！」

明日香の場にプリマのような姿をしたモンスターが現れた。

『エトワール・サイバー』

レベル4 地属性

戦士族・効果

攻撃力1200

守備力1600

「バトル！『ケンタウルミナ』で守備モンスターに攻撃！」

『ケンタウルミナ』が守備モンスターを剣で両断する。

守備モンスターは玉座のような物に座ったミイラだった。

『『ポイズンマミー』のリバー効果発動！嬢ちゃんに500ポイントのダメージを与える』

「なっ！くう！」

地中から出てきた包帯が明日香に絡み付き、ダメージを与える。

LP

4000 3500

「でも壁モンスターはもう居ないわ！『エトワール・サイバー』でダイレクトアタック！『エトワール・サイバー』は相手プレイヤーにダイレクトアタックする場合、ダメージステップの間攻撃力が500アップするわ！」

『エトワール・サイバー』

攻撃力1200 1700

「なんじゃてぐわああ！」

『エトワール・サイバー』が驚く双六さんを意に介さずに蹴り飛ばす。

双六

LP7000 5300

『エトワール・サイバー』  
攻撃力1700 1200

「カードを1枚伏せてターンエンドよ」

明日香

LP3500 手札2枚

モンスター

『ケンタウルミナ』

(攻撃力2200)

『エトワール・サイバー』

(攻撃力1200)

魔法・罾

伏せ 2

双六

LP5300 手札4枚

モンスター・魔法・罾

無し

「ワシのターンじゃ。ドロー！ワシは嬢ちゃんの『ケンタウルミナ』を対象に魔法カード『クロス・ソウル』を発動！そして、嬢ちゃんの『ケンタウルミナ』を生け贄に『古の巨人』を召喚する！」

明日香の場に居た『ケンタウルミナ』が消え、双六さんの場に髪型

(?)がアフロの石でできた巨人が現れた。大きさは双六さんの3倍ぐらいだろうか。

『古の巨人』（アニメ）

レベル5 地属性

岩石族・効果

攻撃力2200

守備力1100

効果

このカードが表側表示で存在する時にこのターン攻撃を行っていない場合、このカードのコントローラーはエンドフェイズ時に300ポイントのダメージを受ける。

「更に永続魔法『古の鍵』を発動！このカードの効果により、『石の巨人トークン』2体を攻撃表示で特殊召喚！」

双六さんの場に『古の巨人』よりかはいくらか小さい石の巨人が2体現れた。

『古の鍵』（アニメ）

永続魔法

効果

このカードの発動時、『石の巨人トークン』岩石族・地属性・レベル3・攻撃力400/守備力2000

2体を攻撃表示で特殊召喚する。

このトークンは生け贄召喚のために生け贄にする事はできない。

『石の巨人トークン』がこのターン攻撃宣言を行っていない場合そのモンスターのコントローラーは500ポイントのダメージを受ける。

このカードが存在する時、『石の巨人トークン』が表示形式の変更



を2回行った場合、そのモンスター2体を生け贄にする事で発動する事ができる。

このカードを墓地へ送る事でデッキ・手札・墓地から『古の扉』1枚を発動する。

「『クロス・ソウル』を発動したターン、ワシはバトルフェイズを行えん。じゃが、ワシはカードを1枚伏せて、魔法カード『命削りの宝札』を発動！手札が5枚になるようにドロー！ふむ……更にカードを1枚伏せてターンエンドじゃ」

双六さんがエンド宣言した瞬間、『古の巨人』、『石の巨人トークン』が双六さんに襲い掛かる。

「アイタタタタ」

双六

LP5300 4000

明日香

LP3500 手札2枚

モンスター

『エトワール・サイバー』

(攻撃力1200)

魔法・罫

伏せ 2

双六

LP4000 手札4枚

モンスター

『古の巨人』

(攻撃力2200)

『石の巨人トークン』

(攻撃力400)

『石の巨人トークン』

(攻撃力400)

魔法・罫

『古の鍵』

(永続魔法)

伏せ 2

「あれ？何で今ライフが減ったんだ？」

「『古の巨人』と『石の巨人トークン』は攻撃を行わなかった場合、そのターンのエンドフェイズ時にコントローラーはダメージを受けるんだよ」

「何でそんなカードを使うんすか？」

「切り札を出すための布石だな」

これで双六さんは後3枚……いや、実質2枚のカードを揃えれば切り札を出せる。さて、明日香はどう闘う？

「私のターン、ドロー！魔法カード『天使の施し』を発動！カードを3枚ドローして2枚捨てる。（『古の巨人』に『古の鍵』。おそろくあのデッキのキーカードと見て間違いないわね。なら！）速攻魔法『サイクロン』を発動！私は『古の鍵』を破壊するわ」

「そうはさせん！カウンター罠『魔宮の賄賂』！『サイクロン』の発動を無効にし破壊じゃ！」

「でも私は『魔宮の賄賂』の効果でカードを1枚ドローするわ。更に『埋葬呪文の宝札』を発動！墓地の『強欲な壺』『天使の施し』『サイクロン』をゲームから除外して、カードを2枚ドロー！そして、『聖騎士ジャンヌ』を攻撃表示で召喚するわ」

明日香の場に白銀の鎧を纏った戦士が現れた。

『聖騎士ジャンヌ』

レベル4 光属性

戦士族・効果

攻撃力1900

守備力1300

「『聖騎士ジャンヌ』で『石の巨人トークン』に攻撃！」

「そうはいかん。リバース・カードオープン『重力解除』！フィールド場に表側表示で存在するモンスターの表示形式を変更じゃ」

フィールド場のモンスターが浮き上がり、皆守備態勢になった。

『古の巨人』

(守備力1100)

『石の巨人』

(守備力2000)

『石の巨人』

(守備力2000)

『エトワール・サイバー』

(守備力1600)

『聖騎士ジャンヌ』

(守備力1300)

「くつ、ターンエンドよ」

明日香

LP3500 手札3枚

モンスター

『エトワール・サイバー』

(守備力1600)

『聖騎士ジャンヌ』

(守備力1300)

魔法・罫

伏せ 2

双六

LP4000 手札4枚

モンスター

『古の巨人』

(攻撃力2200)

『石の巨人トークン』

(守備力2000)

『石の巨人トークン』

(守備力2000)

魔法・罫

『古の鍵』

(永続魔法)

「ワシのターン、ドロー！ワシは『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロー！そして、『石の巨人トークン』2体の表示形式を変更する！」

『石の巨人トークン』

(攻撃力400)

『石の巨人トークン』

(攻撃力400)

「表示形式の変更を2回行った『石の巨人トークン』2体を生け贄にして、『古の鍵』の効果が発動！このカードを墓地に送りデッキから『古の扉』を発動！そして、手札から永続魔法『古の書物』を発動！デッキの1番上のカードと手札のカードを入れ換える。更にフィールド魔法『古の都・エンシエント・シティー』と永続魔法『フィールドバリア』を発動する！」

デュエル場に古代遺跡のようなものが建つ。

『古の扉』（アニメ）

永続魔法

効果

このカードは『古の鍵』の効果でのみ発動する。

『古の書物』（アニメ）

永続魔法

効果

デッキからカードを1枚ドロース、手札からドロースしたカード以外のカード1枚をデッキの上に置く。

自分のスタンバイフェイズ時に手札を1枚墓地に捨てる。捨てなかった場合、このカードを破壊する。

『古の都・エンシエントシティー』（アニメ）

フィールド魔法

効果

自分フィールド場に存在する『古の扉』『古の巨人』『古の書物』を1枚ずつ墓地へ送る事で、デッキ・手札・墓地から『古代竜・エンシエント・ドラゴン』を1体選択して特殊召喚する。

このカードが自分フィールド上に存在する限り、『古代竜・エンシエント・ドラゴン』のコントローラーは『古代竜・エンシエント・ドラゴン』が破壊されたターンのエンドフェイズ時に『古の竜・エンシエント・ドラゴン』を特殊召喚する。

「『古の扉』『古の巨人』『古の書物』揃いし時、都に眠りし伝説の竜が蘇る！ワシは『古の都・エンシエントシティー』の効果を発動！『古の扉』『古の巨人』『古の書物』を1枚ずつ墓地へ送り、

デッキから『古代竜・エンシエント・ドラゴン』を特殊召喚する！  
双六さんの口上の後、双六さんの後ろに現われていた遺跡の扉が開きその扉から1体の竜が姿を現した。

『古代竜・エンシエント・ドラゴン』（アニメ）

レベル8 闇属性

ドラゴン族・効果

攻撃力2800

守備力2000

効果

このカードは通常召喚できない。

『古の都・エンシエント・シティー』の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手フィールド上の守備表示モンスターを全て破壊する。

「魔法カード『スタンプング・クラッシュ』を発動！ワシから見て嬢ちゃんの左側のカードを破壊じゃ」

「キャッ！」

明日香

LP3500 3000

竜の足によって明日香の伏せていた『ダブルパッセ』が破壊され、明日香にダメージを与えた。

「バトルじゃ！『古代竜・エンシエント・ドラゴン』で『聖騎士ジヤンヌ』に攻撃！」

「トランプ発動！『聖なるバリア・ミラーフォース』これで『エンシエント・ドラゴン』は破壊されるわ！」

『エンシエント・ドラゴン』が吐き出した火球が薄い膜のような物に跳ね返され、『エンシエント・ドラゴン』に直撃し、『エンシエント・ドラゴン』は破壊される。

「やったぜ明日香！」

「いや、これじゃあ完全に倒せない」

「どういう事なんだな？」

「見れば分かるさ」

「ほっほっほ。ワシはカードを2枚伏せてターンエンドじゃ」

双六さんがエンド宣言した瞬間、再び遺跡の扉が開き『エンシエント・ドラゴン』が現れる。

『古代竜・エンシエント・ドラゴン』

レベル8 闇属性

ドラゴン族・効果

攻撃力2800

守備力2000

「これは一体……」

「『古の都・エンシエント・シティー』がある限り『古代竜・エン



シレント・ドラゴン』は破壊されたターンのエンドフェイズ時にフィールド上に特殊召喚されるんじゃないよ」

「何てカードなの……」

明日香

LP3000 手札3枚

モンスター

『エトワール・サイバー』

(守備力1600)

『聖騎士ジャンヌ』

(守備力1300)

魔法・罫

無し

双六

LP4000 手札0

モンスター

『古代竜・エンシレント・ドラゴン』

(攻撃力2800)

魔法・罫

『古の都・エンシレント・シティー』

(フィールド魔法)

『フィールドバリア』

(永続魔法)

伏せ 2

「私のターン！ドロー！私は魔法カード『死者蘇生』を発動！『ケ  
ンタウルミナ』を特殊召喚！更に『融合回収』を発動！墓地の『聖  
騎士の槍持ち』と『融合』を手札に加えるわ」

『ケンタウルミナ』

レベル6 光属性

獣戦士族・融合/効果

攻撃力2200

守備力1600

「そして、チューナーモンスター『フルール・シンクロン』を召喚  
！」

明日香の場に花に手足が付いたモンスターが現れた。

『フルール・シンクロン』

レベル2 光属性

機械族・チューナー

攻撃力400

守備力200

「行くわよ！レベル6『ケンタウルミナ』にレベル2『フルール・  
シンクロン』をチューニング！

白百合の騎士よ

私に未来を切り開く力を！シンクロ召喚！現われなさい『フルール・  
ド・シュヴァリエ』！」

明日香の場に花びらを散らしながら1人の騎士が現れた。

『フルール・ド・シュヴァリエ』

レベル8 風属性

戦士族・シンクロ/効果

攻撃力2800

守備力2300

「更に『フルール・シンクロン』がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、手札からレベル2以下のモンスター1体を特殊召喚できる！私は手札から『聖騎士の槍持ち』を特殊召喚！」

明日香の場に槍を持った戦士が現れた。『フルール・ド・シュヴァリエ』の後ろに控えているその姿はまるで従者のようだ。

『聖騎士の槍持ち』

レベル2 光属性

戦士族・効果

攻撃力800

守備力400

「『聖騎士の槍持ち』の効果発動！このカードを生け贄にする事で、デッキから装備魔法カード1枚を手札に加える。私は『ミスト・ボデイ』を手札に加えて発動！『フルール・ド・シュヴァリエ』に装備するわ」

これで『フルール・ド・シュヴァリエ』は戦闘では破壊されない。一気に攻める気か。

「『エトワール・サイバー』と『聖騎士ジャンヌ』を攻撃表示に変更するわ」

『エトワール・サイバー』（攻撃力1200）

『聖騎士ジャンヌ』

（攻撃力1900）

「バトル！『フルール・ド・シュヴァリエ』で『古代竜・エンシエント・ドラゴン』に攻撃！フルール・ド・オラージュ！！」

「リバース・カードオープン！『くず鉄のかかし』これで『フルール・ド・シュヴァリエ』の攻撃は無効じゃ！」

「それはどうかしら？『フルール・ド・シュヴァリエ』の効果発動！相手が魔法・罠を発動した時にその発動を無効にし破壊するわ！ちなみにこの効果は自分のターンに1度だけ発動できるわ」

「なんじゃと！！？」

かかしが『フルール・ド・シュヴァリエ』の前に立ちふさがるが、あっさりと切り捨てられる。

そして、『フルール・ド・シュヴァリエ』を迎撃するべく『エンシエント・ドラゴン』が火球を放つが霧状になった『フルール・ド・シュヴァリエ』にはかすりもせず、一方的に切り捨てられた。

「『エトワール・サイバー』と『聖騎士ジャンヌ』でダイレクトアタック！『エトワール・サイバー』の効果はさっきした通りよ。」

『聖騎士ジャンヌ』は攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が300ポイントダウンするわ」

『エトワール・サイバー』

攻撃力1200 1700

『聖騎士ジャンヌ』

攻撃力1900 1600

『エトワール・サイバー』と『聖騎士ジャンヌ』が立て続けにマスク・ザ・ロックもとい双六さんに攻撃する。

「ぬわああああー!!」

双六

LP4000 2300 700

『エトワール・サイバー』

攻撃力1700 1200

『聖騎士ジャンヌ』

攻撃力1600 1900

「カードを1枚伏せてターンエンドよ」

「この瞬間、『古代竜・エンシェント・ドラゴン』は再び場に蘇る！」

『古代竜・エンシェント・ドラゴン』

レベル8 闇属性

ドラゴン族・効果  
攻撃力2800  
守備力2000

明日香

LP3000 手札1枚

モンスター

『エトワール・サイバー』

(攻撃力1200)

『聖騎士ジャンヌ』

(攻撃力1900)

『フルール・ド・シュヴァリエ』

(攻撃力2800)

(ミスト・ボディ装備)

魔法・罫

『ミスト・ボディ』

(装備魔法)

(『フルール・ド・シュヴァリエ』に装備)

伏せ 1

双六

LP700 手札0

モンスター

『古代竜・エンシェント・ドラゴン』

(攻撃力2800)

魔法・罾

『古の都・エンシエント・シティー』

(フィールド魔法)

『フィールドバリア』

(永続魔法)

伏せ 1

「ワシのターンドロロー！ワシは速攻魔法『エネミーコントローラー』  
して『フルール・ド・シュヴァリエ』を守備表示にするぞい」

『フルール・ド・シュヴァリエ』

(守備力2300)

「バトルじゃ！『古代竜・エンシエント・ドラゴン』で『聖騎士ジ  
ヤンヌ』に攻撃！」

『エンシエント・ドラゴン』が放った火球を『聖騎士ジヤンヌ』は  
避けたが、避けた所目がけて振るわれた尻尾が当たり、破壊された。

明日香

LP3000 2100

「嬢ちゃんに戦闘ダメージを与えたこの瞬間、リバース・カードオ  
ープン！『連撃』！『古代竜・エンシエント・ドラゴン』はもう1  
度だけ攻撃できる！」

「くっ、『聖騎士ジヤンヌ』の効果は発動しないわ」

「こちらは『古代竜・エンシエント・ドラゴン』の効果が発動じゃ。このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手フィールド上の守備表示モンスターを全て破壊する」

『エンシエント・ドラゴン』が地に向けて火球を放ち、そこから広まった炎は『フルール・ド・シュヴァリエ』を包み込んで破壊した。

「『連撃』の効果でもう1度だけ攻撃可能となった『古代竜・エンシエント・ドラゴン』で『エトワール・サイバー』に攻撃！」

『フルール・ド・シュヴァリエ』を葬った炎の残り火で逃げ場を失っていた『エトワール・サイバー』は『エンシエント・ドラゴン』が放った火球になす術無く、呑み込まれた。

「キャアアアアア!!」

明日香

LP2100 500

「明日香!!」

「明日香さん!!」

「このままだとやばいんだな」

隼人の言う通りかなりヤバい状況だな……逆転できるのか？

「ワシはこれでターンエンドじゃ」



明日香

LP500 手札1枚

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 1

双六

LP700 手札0

モンスター

『古代竜・エンシェント・ドラゴン』

(攻撃力2800)

魔法・罫

『古の都・エンシェント・シティー』

(フィールド魔法)

『フィールドバリア』

(永続魔法)

「私のターン、ドロー！私は『貪欲な壺』を発動！墓地の『フルール・ド・シュヴァリエ』『ケンタウルミナ』『フルール・シンクロン』『花騎士団の駿馬』『聖騎士の槍持ち』をデッキに戻してシャッフル。そして、2枚ドロー！」

「いよっし！これなら良いカードが引けるかもだぜ！」

十代の言う通りだが、はたして引けるかどうか……

「私は『聖騎士の盾持ち』を守備表示で召喚するわ」

明日香の場にでかい盾を持った戦士が現れる。

『聖騎士の盾持ち』

レベル4 光属性

戦士族・効果

攻撃力800

守備力1300

「『花騎士団の盾持ち』は召喚に成功した時、自分の墓地に存在する光属性・戦士族モンスターを1体ゲームから除外する事で、デッキからカードを1枚ドローする効果を持っているわ。私は『聖騎士ジャンヌ』をゲームから除外してカードを1枚ドロー！」

なんとかモンスターを出せたが、一体どうなる！？

「私は魔法カード『戦士の生還』を発動！墓地の『エトワール・サイバー』を手札に加えるわ。そして、『融合』を発動！手札の『エトワール・サイバー』と『ブレード・スケーター』を手札融合！出だよ『サイバー・ブレイダー』！！」

『サイバー・ブレイダー』

レベル7 地属性

戦士族・融合/効果

攻撃力2100

守備力800

「じゃが『サイバー・ブレイダー』の攻撃力じゃワシのモンスターには適わんぞい」

「ええ、だからこのカードを使わせて貰うわ！リバース・カードオープン！『ギブ&テイク』！このカードの効果で私の墓地に存在する『ブレード・スケーター』をあなたの場に守備表示で特殊召喚させて、『サイバー・ブレイダー』のレベルをエンドフェイズ時まで4つ上げるわ」

『ブレード・スケーター』

レベル4 地属性

戦士族 通常

攻撃力1400

守備力1500

「『サイバー・ブレイダー』のレベルを上げてどうするつもりなんスかね？」

「いや、レベルを上げた事より、相手の場のモンスターの数を増やした事の方に注目すべきだ」

「モンスターの数？ああ！？分かったっす！」

双六さんの場に攻撃を防ぐカードは無い。このデュエル、明日香の勝ちだ！

「『サイバー・ブレイダー』は相手の場のモンスターの数が2体のみの場合、攻撃力が倍になるわ！パ・ド・トロワ！！」

『サイバー・ブレイダー』  
攻撃力2100 4200

「バトル！『サイバー・ブレイダー』で『古代竜・エンシエント・ドラゴン』に攻撃！！グリッサード・スラッシュュ！！！」

『サイバー・ブレイダー』が『エンシエント・ドラゴン』が放った火球を跳んで避ける。

『エンシエント・ドラゴン』が空中の『サイバー・ブレイダー』目掛けて火球を連続で放つが、ある火球は絶妙な動きで避けられ、またある火球は蹴りで、己自身に返される。

そして、最後に『サイバー・ブレイダー』の踵落としが『エンシエント・ドラゴン』の脳天に決まり、『エンシエント・ドラゴン』は地に伏した。

「ぬわああああ！！！」

双六

LP700 - 700

「決まったあー！！！！制裁デュエル第3戦もチームアカデミアの勝利に終わったあー！！！！」

司会進行役の言葉が終わるやいなや凄まじい歓声がデュエル場を包み込んだ。

- 20分後 -

「それでは制裁デュエル最終戦は30分……えっ？」

長い歓声が漸く終わり、歓声を止めるために声を張り上げてお疲れの様子の司会進行役が次の予定を言おうとしたら、アカデミア倫理委員会の人が走って来て何か耳打ちをした。

「う、ううん！どうやら先方の予定が迫ってるらしく、次の制裁デュエル最終戦は今すぐ行います！天道 貴志選手は至急デュエル場に降りてきてください！」

「マジかよ……んじゃ行ってくるわ」

観客席の前列の方まで出て、手すりを掴む。

この程度の高さなら大丈夫だな。

「貴志、まさか……」

「そのまさかさ……イヤッツホオオオオオウ！！」

昔、友とスカイダイビングをした時に友が発した叫び声を真似て、手すりを乗り越える。

【マイブラザーって時々だが、はっちャけるよな】

ゴーズがなんか言ったが無視。

普通に着地に成功して、デュエルリングに上がる。

「お疲れさん」

「え、ええ。ありがとう」

観客席に戻る明日香と少し喋り、デッキを取り出す。

さて、双六さんが出て来た以上、レオンさんがレベッカさんあたりが出て来てもおかしくない。

俺の相手は一体誰になるのか……

入場口の方を見ると、相手のデュエリストがこっちに向かってきていた。

「なっ！あれは……」

そのデュエリストの左腕には俺が数カ月前まで、使っていたブラック・デュエルディスクが装着されていた。

第16話 M・HERO G-77（後書き）

鷹

「今日の最強カードは……まあ出番がこれきりって事なんでこのカードを」

『古代竜・エンシエント・ドラゴン』

レベル8 闇属性

ドラゴン族・効果

攻撃力2800

守備力2000

効果

このカードは通常召喚できない。

『古の都・エンシエント・シティー』の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手フィールド上の守備表示モンスターを全て破壊する。

貴志

「手間暇かけた割に攻撃力が低いモンスターだな。海馬さんの『青眼の白龍』に及ばない……」

鷹

「まあ、究極のロマンカード……だよな」

貴志

「名前だけ見ると、どっかの他力本願竜の親戚に見えるモンスターでもあるな」

鷹 「原作・アニメでは、アニメオリジナルストーリーのKCGランプ  
リ編城之内VSMask・ザ・ロック戦でMask・ザ・ロックが使用。  
『ゴブリン突撃部隊』を戦闘破壊して、『スケープ・ゴート』で呼  
び出されていた羊トークン数体を効果で破壊。返しのターンで『ギ  
ルフォード・ザ・ライトニング』の効果で破壊されるも、エンドフ  
エイズ時に『古の都・エンシエント・シティー』の効果で復活して、  
Mask・ザ・ロックのターンで『ギルフォード・ザ・ライトニング』  
と相打ちになり、エンドフェイズ時にまた復活するも……」

貴志

「途中で切るのかよ」

鷹

「全部言うのも野暮ってもんさ」

貴志

「てか、良いのか？KCGランプリ……実質世界大会に出たMask・  
ザ・ロックに勝たせて。羽蛾や竜崎あたりで良かったんじゃないの  
か？」

鷹

「最初は羽蛾や竜崎を出そうと思ったけど、あいつらもまがりなり  
に、KCGランプリに出たのを思い出して、どうせなら意外性を  
持たせようと思って、爺ちゃんにご足労をお願いした次第でござい  
ます」

貴志

「左様ですか」



鷹

「それではまた次回！まあ次回の相手は今回と違って予想がつきやすいと思いますが」

鷹・貴志

「それでは、感想やアドバイス、ミスの指摘等ありましたら、是非ともお願いします！」

## 第17話 真のNo.1カードプロフェッサー（前書き）

デュエルが長いので、途中で区切ってます。

2話構成にしようと考えていますが、下手すりゃ3話構成になるかもです。

## 第17話 真のNo.1カードプロフェッサー

十代 Side

「イヤッツホオオオオオウ!!」

そう言っただけで貴志が手摺りを乗り越えて、デュエル場に飛び降りた。

【マイブラザーって時々だが、はっちゃけるよな】

貴志の精霊のゴーストが言ってる事には、凄く同意できるぜ。

貴志が明日香と少し話して、デッキを取り出した。

貴志の相手は誰で、どんなデュエルを見せてくれるのか……くうー  
楽しみだぜ!

そう思っていたら、貴志が多分だけど、相手を見て驚いていた。

相手が入場してくる入場口は真正面にあるから、相手は見えるけど、さっきのマスク・ザ・ロックって人を除いて、相手は皆フードを被っていたんだよな。

貴志は何で見ただけで驚いてんだ?

十代 Side End

「何故だ……」

思わず、眩きが洩れる。ブラック・デュエルディスクは、確かにペガサス様に返還した。

なのに、何故俺の対戦相手になるであろう相手が、ブラック・デュエルディスクを持っているんだ!?

あれはNo.1カードプロフェッサーしか持っていないh……いや、ただ単純に俺の相手が現No.1カードプロフェッサーなだけか。

俺の後釜は正直、誰か分からない。

だが、相手が誰であろうとやる事は変わらない。

ただ、クロノスの野郎!どんだけ俺を退学にしたいんだよ!とだけは言わせて欲しい。

「さて、落下入場という私の出番を取る入場をしてきたのは、遊城十代選手と並ぶオシリス・レッドの双璧、天道 貴志選手だあー  
!!!」

司会進行役の言葉に十代達の時と同様、歓声が上がる。

居るのをすっかり忘れてたな……後、俺ってオシリス・レッドの双璧だったのか。

「さあ!天道 貴志選手とデュエルするデュエリストはこの人だあ  
!!!」

俺の対戦相手が入場してきた瞬間、観客が騒めきだす。

まあ、左腕のブラック・デュエルディスクを見れば、そうなるよな。

「へッ！とつとと闘ろつぜ！」

そう言つて、俺の対戦相手がフード取つた。いや、ちょっと待て！  
この声はまさか……

「な、なんと天道 貴志選手の対戦相手は伝説のデュエリスト城之内 克也だぁー！！！」

やっぱり、城之内さん！城之内さんが俺の相手つて……1度も勝つた事が無いんだが……

「このお方に関しては、解説は不要でしょう。何故、ブラック・デュエルディスクを付けているのは不明ですが、それは今置いといて、両者デッキを互いにシャッフルしてください！」

俺と城之内さんはデュエルリングの中央まで、歩み寄る。

「城之内さん。何故此処に居るんですか！？後、そのディスクは！？」

周りに聞こえない様に小声で城之内さんに聞いた。

「ん？ああ、え〜と……色々あつてな。ほいシャッフル終わったぜ」

「……ありがとうございます」

デッキを受け取り、こちらもデッキを返す。

指定位置に戻る途中に羨ましいという声が聞こえてきたが、冗談じゃない！負けたら退学のデュエルで、戦績53戦0勝53敗の相手と正直、闘いたくない。

だが、城之内さんに勝たないと退学になってしまう……たとえ勝ち目が薄くても、やるだけやるしかない。

「それでは、制裁デュエル最終戦。デュエル開始イー……！」

「行くぜ！」

「ええ……」

「デュエル……！」

俺

LP4000

城之内

LP4000

「先攻は貰うぜ。俺のターン、ドロー！俺は『切り込み隊長』を攻

撃表示で召喚！更に『切り込み隊長』が召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚できる。現れるチューナーモンスター『トラパート』！！」

城之内さんの場に、2つの剣を持った金髪の戦士とかかしにシルクハットをかぶり黒いローブ着ているモンスターが現れた。

『切り込み隊長』

レベル3 地属性

戦士族・効果

攻撃力1200

守備力400

『トラパート』

レベル2 闇属性

戦士族・チューナー

攻撃力600

守備力600

「レベル3『切り込み隊長』にレベル2『トラパート』をチューニング！」

シンクロ召喚！現れる『X-セイバー ウェイン』！そして、このカードがシンクロ召喚に成功した時、手札からレベル4以下の戦士族モンスター1体を特殊召喚する事ができる！現れる『コマンド・ナイト』！」

城之内さんの場の『トラパート』が光の輪となり、『切り込み隊長』を包み込み、白く光る。

光が晴れるといかにも西部劇に出てきそうなガンマン風の銃士が現

れた。

現れた『ウエイン』が手をかざすとどこからともなく赤い服と帽子、マントを身に付けた女戦士が現れた。

『X・セイバー ウエイン』

レベル5 地属性

戦士族・シンクロ/効果

攻撃力2100

守備力400

『コマンド・ナイト』

レベル4 炎属性

戦士族・効果

攻撃力1200

守備力1900

「『コマンド・ナイト』の効果で俺の場の戦士族モンスターの攻撃力は400ポイントアップ！」

『コマンド・ナイト』が剣を空高く掲げると『ウエイン』もそれに続けて、自身の武器である銃を掲げた。

それで士気が上がったのか、『コマンド・ナイト』と『ウエイン』の後ろに炎が立ち上った。

『X・セイバー ウエイン』

攻撃力2100 2500

『コマンド・ナイト』



攻撃力1200 1600

「更に手札から永続魔法『連合軍』を発動するぜ！このカードの効果で俺の場の戦士族モンスターの攻撃力は俺の場に表側表示で存在する戦士族または魔法使い族モンスター1体につき、200ポイントアップする。俺の場には戦士族モンスターが2体！よって攻撃力400ポイントアップ！」

『ウエイン』と『コマンド・ナイト』が自身の武器を交差させ、振り上げた。

更に士気が上がったみたいだ。

振り上げた瞬間、桃園の誓いに見えたのは多分、気のせいだ。1人足りないしな。

『X-セイバー ウエイン』

攻撃力2500 2900

『コマンド・ナイト』

攻撃力1600 2000

「カードを2枚伏せてターン終了だ」

城之内

LP4000 手札0

モンスター

『X-セイバー ウエイン』

(攻撃力2900)

『コマンド・ナイト』

(攻撃力2000)

魔法・罫

『連合軍』

(永続魔法)

伏せ 2

クソッ！城之内さんの引きがかなり良い方か。引きが悪かったら少しは付け込めたんだが……

「俺のターン！ドロー！」

だが、城之内さんの手札は0だ。ならば、場のカードを殲滅すれば優位に立てる。

「リバース・カードオープン！『ギャンブル』。こいつは相手の手札が6枚以上、俺の手札が2枚以下の時に発動できるトラップカード。こいつの効果で俺はコイントスをして裏表を当てる。当たった場合は俺は手札が5枚になるようにドローし、外した場合は次の俺のターンをスキップする」

城之内さんと俺の丁度中間辺りに、ソリットビジョンで投影されたコインが現れた。

『ギャンブル』か。これはかなりヤバいな。

「ちなみにこのコインの表には1、裏には0が描かれてるぜ。俺の予想は裏！行くぜ！コイントス！」

城之内さんの言葉と同時にコインが跳ね上がる。

空高く跳ね上がったコインは10秒程して落ちてきた。

そして、出ている面に描かれている数字は0だった。

「コイントスの結果は裏！よって、手札が5枚になるようにドロ―だ！」

あれーさっきまで手札0だったのに5枚になってるー（棒読み）：  
：むなしくなるから現実逃避はやめておこつ。城之内さんの運が良  
いのはいつもの事だし。

取り敢えず、俺の手札で出来る限りの事をしよう。幸い手札はそこまで悪くない。

「俺は『T G ストライカー』を特殊召喚！このカードは相手の場にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、特殊召喚できる！更に俺がレベル2以下のモンスターの特殊召喚に成功した時、このカードは特殊召喚できる！出でよ『T G ワ―ウルフ』！」

『T G ストライカー』

レベル2 地属性

戦士族・チューナー

攻撃力800

守備力0

『T Gワーウルフ』  
レベル3 闇属性  
獣戦士族・効果  
攻撃力1200  
守備力0

さて、これで『カタストル』がシンクロ召喚できるが、返しのターンで『サイコ・シヨッカー』を出されるとアウトだ。ならば！

「『T Gストライカー』と『T Gワーウルフ』を生け贄に捧げ、『墮天使アスモディウス』を召喚！」

【ふわ〜何？俺の順番？】

ここは破壊された時にトークンを特殊召喚するアスディに託す！

『墮天使アスモディウス』  
レベル8 闇属性  
天使族・効果  
攻撃力3000  
守備力2500

「バトル！『墮天使アスモディウス』で『X - セイバー ウェイン』に攻撃！黒翼の裁き！！」

【さ〜と、殺りますか〜】

何かを感じたのか『ウェイン』が銃を構えて、アスディに向けて発砲した。

【む〜楽に殺っちゃおうと思ってたのに〜】

アスデイが羽根を広げて飛び上がり、銃弾を避ける。銃弾が届かない所まで飛ばれたのか、無駄弾を撃ちたくないだけなのかは分からないが、『ウェイン』が銃を下ろした。

【冥府の扉開きし所に汝あり。我が雷を受けよ！】

掌を空に向ける。すると突如、雷雲が発生した。

【冥府を永久に彷徨うがいい！滅殺！！な〜んてね〜】

アスデイが掌を『ウェイン』に振り下ろすと雷が『ウェイン』を貫いた。

「くっ」

城之内

LP4000 3900

『コマンド・ナイト』

攻撃力2000 1800

「俺の場の戦士族モンスターが1体減った事により、『連合軍』の効果での上昇値が200に下がっちゃったか」

「……カードを1枚伏せてターンエンド」

俺

LP4000 手札2枚

モンスター

『墮天使アスモディウス』

(攻撃力3000)

魔法・罫

伏せ 1

城之内

LP3900 手札5枚

モンスター

『コマンド・ナイト』

(攻撃力1800)

魔法・罫

『連合軍』

(永続魔法)

伏せ 1

- - - -  
- - - -  
- - - -  
- 観客席 -

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「なんとか貴志が先手を取ったな」

「ああ、それに『墮天使アスモディウス』か。かなり良い手だな」

「どうゆう意味なんすか三沢君？」

翔が自分の後ろの席に座っていた三沢の言葉に疑問を感じた様で彼に聞く。

「伝説のデュエリスト城之内 克也さんのデッキには、単体で攻撃力3000を越えるモンスターは居ない。それに、『墮天使アスモディウス』は破壊されて墓地へ送られた時に、戦闘で破壊されないトークンとカード効果で破壊されないトークンを特殊召喚する効果を持っている。だからたとえ、『墮天使アスモディウス』が破壊されても、モンスターが2体残るのさ」

「でも何で貴志はあんなに険しい顔をしているのかしらね？」

「おそらく、緊張でもしているのだろう。相手はあの城之内 克也さんなんだからな」

明日香が疑問を口にしたが、それにも三沢が答える。

「でもさ、あんな険しい顔でデュエルして貴志は楽しいのかよ……」

「それは……どうだろうな」

しかし、十代の呟きには答える事はできなかった。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

-----

先手は取ったが、与えたダメージは100ポイント。楽観できる差じゃない。

城之内さんのターンで城之内さんの手札は6枚。

伏せた『砂塵の大竜巻』で『連合軍』を破壊できると言っても、城之内さんなら、この状況を打開するぐらい朝飯前だろう。

そもそも、城之内さん相手に楽観して闘える訳がないか。

「俺のターンだ！ドロー！俺は『蒼炎の剣士』を攻撃表示で召喚するぜ！」

城之内さんの場に蒼い火柱が立ち上ぼり、その火柱から蒼い兜や蒼い剣をはじめ、身に付けている物全てが蒼色の剣士が現れた。

『蒼炎の剣士』（アニメ）

レベル4 炎属性

戦士族・効果

攻撃力1800

守備力1600

効果

1ターンに1度、フィールド上のこのカード1体を選択して、このカードの攻撃力を100の倍数だけダウンする。  
選択したモンスターの攻撃力は、この効果でダウンした数値分アップする。

このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のエクストラデッキ



または墓地から『炎の剣士』1体を召喚条件を無視して特殊召喚する事ができる。

『蒼炎の剣士』も『ウェイン』と同じように『コマンド・ナイト』と共に武器を振り上げた後に武器を交差させて、振り上げた。

『コマンド・ナイト』

攻撃力1800 2000

『蒼炎の剣士』

攻撃力1800 2200 2600

「『蒼炎の剣士』の効果発動！『コマンド・ナイト』を選択して、『蒼炎の剣士』の攻撃力を1100ポイント下げて。代わりに『コマンド・ナイト』の攻撃力を1100ポイントあげるぜ！」

『蒼炎の剣士』

攻撃力2600 1500

『コマンド・ナイト』

攻撃力2000 3100

『蒼炎の剣士』が己自身が纏っていた蒼い炎を『コマンド・ナイト』に分け与えた。

『蒼炎の剣士』が膝をつく。その表情には疲労の色が見える。

【あれ？これってヤバくない？】

『砂塵の大竜巻』で『連合軍』を破壊できれば、返り討ちにできる

が……

「バトルだ！『コマンド・ナイト』で『墮天使アスモディウス』に攻撃！」

「トラップ発動！『砂塵の大竜巻』！このカードの効果で『連合軍』を破壊する！返り討ちにしろ！アスディー！」

「そう来るか！？なら俺は手札から速攻魔法『突進』を発動！これで『コマンド・ナイト』の攻撃力は700ポイントアップだ！」

「な……に……クソッ！」

竜巻が『連合軍』を破壊するが、竜巻が発生する前よりも『コマンド・ナイト』が己の剣に纏わせていた炎の勢いが増していた。

『コマンド・ナイト』

攻撃力 3100    2700    3400

『蒼炎の剣士』

攻撃力 1500    1100

『コマンド・ナイト』が己の剣に纏わせた炎を鞭のような形にして、空中のアスディーに向かって振るう。

【おっとっ〜】

アスディーがそれを声とは違い必死に避けているが、『コマンド・ナイト』が『蒼炎の剣士』から受け取った蒼い炎も鞭のように使いたすと、逃げ場を失った。

【あーもう！ただじゃやられないよーだ！】

アスデイが雷雲を発生させて、雷を『コマンド・ナイト』目掛けて放つが、『コマンド・ナイト』が発生させた炎の壁に阻まれる。

【あちゃー。んじゃ、後は任せたよー】

2つの鞭によって翼をもがれてアスデイが落下した。

俺

LP4000 3600

「アスデイ……『墮天使アスモデイウス』が破壊され墓地へ送られた事により、『アスモトークン』と『デイウストーン』を守備表示で特殊召喚！」

アスデイが落下した所が光だし、其処から右半身がアスデイと同じだが、左半身が白く染まっている墮天使と左半身がアスデイと同じだが、右半身が白く染まっている墮天使が現れる。

『アスモトークン』

レベル5 闇属性

天使族・トークン

攻撃力1800

守備力1300

『デイウストーン』

レベル3 闇属性

天使族・トークン

攻撃力1200  
守備力1200

「ちなみに『アスモトークン』はカードの効果では破壊されず、『  
デウストークン』は戦闘では破壊されません」

「だが、『墮天使アスモディウス』は破壊したぜ。カードを1枚伏  
せてターンエンドだ」

『コマンド・ナイト』  
攻撃力3400 2700

俺  
LP3600 手札2枚

モンスター  
『アスモトークン』  
(守備力1300)  
『デウストークン』  
(守備力1200)

魔法・罫  
無し

城之内  
LP3900 手札3枚

モンスター  
『コマンド・ナイト』

(攻撃力2700)

『蒼炎の剣士』

(攻撃力1100)

魔法・畏

伏せ 2

「くっ、俺のターン、ドロー！チューナーモンスター『ダーク・リゾネーター』を召喚！」

『ダーク・リゾネーター』

レベル3 闇属性

悪魔族・チューナー

攻撃力1300

守備力300

「レベル5『ディウストークン』にレベル3『ダーク・リゾネーター』をチューニング！」

8つの絆の証が揃いし時、現れる暗黒の龍よ

その力で相手に闇による終焉を与えよ！シンクロ召喚！『ダークエンド・ドラゴン』！！」

『ダークエンド・ドラゴン』

レベル8 闇属性

ドラゴン族・シンクロノ効果

攻撃力2600

守備力2100

「『ダークエンド・ドラゴン』の効果発動！『ダークエンド・ドラ

ゴン』の攻撃力・守備力を500ポイント下げて『コマンド・ナイト』を墓地へ送る！闇に沈め、『コマンド・ナイト』！」

『ダークエンド・ドラゴン』の胴体にあった口から、闇の光線が放たれ、その闇は『コマンド・ナイト』を呑み込んだ。

『ダークエンド・ドラゴン』

攻撃力2600 2100 守備力2100 1600

『蒼炎の剣士』

攻撃力1100 700

『蒼炎の剣士』から生気が消えた。そういえばずっと、膝をついたままだな。

「だあー！普通このタイミングで出るか！？そんなカード」

それを言うなら、城之内さん……あなたのギャンブル系カードが、ほぼ全て良いタイミングで出た上、9割以上の確率で成功するのは気のせいですか！？

「バトルフェイズに入ります。『ダークエンド・ドラゴン』で『蒼炎の剣士』に攻撃！闇を抱いて眠れ！ダーク・フォッグ！」

『ダークエンド・ドラゴン』が2つの口から闇を吐き出す。

その2つの闇は『蒼炎の剣士』が迎撃しようとして、放った蒼い炎ごと、『蒼炎の剣士』を呑み込んだ。

城之内

LP3900 2500

「ぐっ！だが、『蒼炎の剣士』の効果発動！現れる！『炎の剣士』  
！！」

『蒼炎の剣士』が居た所に刺さっていた剣から火柱が上がり、今度は身に付けている装備全ての色が赤になっている剣士が現れた。

『炎の剣士』

レベル5 炎属性

戦士族・融合

攻撃力1800

守備力1600

城之内さんが最も信頼するモンスター……今の手札じゃ、これ以上何もできないが、ブラフだけでもセットしておくか。

「カードを1枚伏せてターンエンド」

俺

LP3600 手札1枚

モンスター

『ダークエンド・ドラゴン』

(攻撃力2100)

『ディウストーン』

(守備力1200)

魔法・罫

伏せ 1

城之内

LP2500 手札3枚

モンスター

『炎の剣士』

(攻撃力1800)

魔法・罫

伏せ 2

「俺のターン！ドローだ！俺は『鉄の騎士 ギア・フリード』を攻撃表示で召喚！」

城之内さんの場に黒く塗装された鉄の戦士が現れた。

『鉄の騎士 ギア・フリード』

レベル4 地属性

戦士族・効果

攻撃力1800

守備力1600

「手札から装備魔法『味方殺しの魔剣・バーニング・ソウル』を発動！『炎の剣士』に装備！」

『味方殺しの魔剣・バーニング・ソウル』 (アニメ)

装備魔法

効果



1ターンの1度、自分フィールド上のモンスター1体を生け贄にする。

装備モンスターの攻撃力は、このターンのエンドフェイズ時まで生け贄にしたモンスターの元々の攻撃力の数値分アップする。

「俺は『鉄の騎士 ギア・フリード』を生け贄に捧げ、『炎の剣士』の攻撃力を1800ポイントアップさせるぜ」

『ギア・フリード』と『炎の剣士』が左手を組んで、少し話す様な仕草をした後、『ギア・フリード』が光となって『炎の剣士』が持つ魔剣がその光を取り込んだ。

多分、「後は任せた。俺の分も頑張れよ」「ああ、任せる！」という感じの会話内容だと思う。

『炎の剣士』

攻撃力1800 3600

『炎の剣士』の攻撃力が上がった瞬間、『炎の剣士』が金色に光だした。

つて、光を取り込んだのは剣だけじゃないのか!?

「バトル! 『炎の剣士』で『ダークエンド・ドラゴン』に攻撃! くらえ! バーニング・ソウル!」

「ぐっ、やれ! 『ダークエンド・ドラゴン』!」

『炎の剣士』が剣から放った炎の竜巻と『ダークエンド・ドラゴン』が吐いた黒いブレスがぶつかり合う。

互角だったが、『炎の剣士』が【ハア！】と気の入った声を出した同時に炎までも金色になった瞬間、押されだし、『ダークエンド・ドラゴン』は金色の竜巻に巻き込まれて、『ダークエンド・ドラゴン』は金色の粉になった。

「ぐう！」

俺

LP 3600 2100

「ターンエンドだ」

『炎の剣士』

攻撃力 3600 1800

城之内さんのエンド宣言と共に『炎の剣士』が普通の色に戻る。

正直、炎が金色になった時に『炎の剣士』じゃねえだろ！と思ったんだけどな。

俺

LP 2100 手札1枚

モンスター

『ディウストーン』

(守備力1200)

魔法・罾

伏せ 1

城之内

LP2500 手札2枚

モンスター

『炎の剣士』

(攻撃力1800)

(『味方殺しの魔剣・バーニング・ソウル』を装備中)

魔法・罫

『味方殺しの魔剣・バーニング・ソウル』

(『炎の剣士』に装備中)

伏せ 2

「俺のターン、ドロー！」

よし！良いカードだ。

「魔法カード『貪欲な壺』発動！墓地の『TGストライカー』、『TGワーウルフ』、『堕天使アスモディウス』、『ダーク・リゾネーター』、『ダークエンド・ドラゴン』をデッキに戻し、2枚ドロ  
ー！」

くっ、『炎の剣士』を破壊できるモンスターを引けなかったか。

「俺は『ラーニング・エルフ』を守備表示で召喚。カードを1枚伏せてターンエンド」

『ラーニング・エルフ』  
レベル3 風属性

天使族・効果

攻撃力1400

守備力1500

俺

LP2100 手札1枚

モンスター

『ディウストーン』

(守備力1200)

『ラーニング・エルフ』

(守備力1500)

魔法・罟

伏せ 2

城之内

LP2500 手札2枚

モンスター

『炎の剣士』

(攻撃力1800)

(『味方殺しの魔剣・バーニング・ソウル』を装備中)

魔法・罟

『味方殺しの魔剣・バーニング・ソウル』

(『炎の剣士』に装備中)

伏せ 2

「俺のターン！ドロー！」

ドローしたカードを見た城之内さんの表情が変わる。まるで待っていたカードが来た様な感じに。

「俺はチューナーモンスター『共闘するランドスターの剣士』を召喚！」

「っ！」

城之内さんの場に触角みたいな物が生えている帽子を被り、小さな剣と自身の顔が描かれている盾を持っている戦士が現れた。

『共闘するランドスターの剣士』

レベル3 地属性

戦士族・チューナー

攻撃力500

守備力1200

『共闘するランドスターの剣士』が剣を頭上に振り上げる。あのカードも『コマンド・ナイト』と同じく、戦士族モンスターの攻撃力を上げる効果を持っているが、問題はそこじゃない！レベル5のモンスターとレベル3のチューナーが揃った。これの意味する事は

「レベル5『炎の剣士』に」

来る……

「レベル3『共闘するランドスターの剣士』をチューニング！」

城之内さんのデツキ最強のモンスターで

「不屈の闘志を持つ戦士 今此処に現る」

シンクロモンスターの中で最も、城之内さんの闘志を体現している  
モンスター

「その闘志で我が道を切り開け！シンクロ召喚！  
出でこい！『ギガンテック・ファイター』！！！」

『ギガンテック・ファイター』が……

## 第17話 真のNo.1カードプロフェッサー（後書き）

貴志

「今日の最強カードはこれかな」

『味方殺しの魔剣・バーニング・ソウル』（アニメ）  
装備魔法

効果

1ターンの1度、自分フィールド上のモンスター1体を生け贄にする。

装備モンスターの攻撃力は、このターンのエンドフェイズ時まで生け贄にしたモンスターの元々の攻撃力の数値分アップする。

鷹

「原作・アニメではアニメオリジナルストーリー乃亜編の城之内VSビッグ3（ジャッジ・マン）戦で城之内が使用。乃亜編オリジナルのデッキマスター能力を乱用し、攻撃力が下がっていた『炎の剣士』に装備され『ゴブリン突撃部隊』を生け贄にして、『炎の剣士』の攻撃力を上げて、フィニッシャーにした」

貴志

「モンスターを生け贄にして攻撃した瞬間に『魔法の筒』とか使われたら、目もあてられないカードだな」

## 第18話 闘志（前書き）

内容が若干、ぐだぐだに……次で決着です。

今更ですが、今の状態の主人公のメンタル面は豆腐まではいかないにしても、弱い部類に入ります。

そついや、遊戯王シリーズで誰が1番メンタル面が強いんでしょうね？



## 第18話 闘志

「出だよ『ギガンテック・ファイター』!!!」

城之内さんの言葉に呼応するかのように現れた巨大な戦士……城之内さんのデッキ最強モンスター『ギガンテック・ファイター』が咆哮を上げる。

『ギガンテック・ファイター』

レベル8 闇属性

戦士族・シンクロ/効果

攻撃力2800

守備力1000

「『ギガンテック・ファイター』は墓地に存在するモンスター1体につき、攻撃力が100ポイントアップする効果を持っている。お前の墓地にモンスターは居ねえが、俺の墓地には戦士族モンスターが8体存在している。よって、攻撃力800ポイントアップするぜ！」

『ギガンテック・ファイター』

攻撃力2800 3600

俺のデッキに単体であるの攻撃力に太刀打ちできるモンスターは居ない。

いや、戦闘で破壊できたとしても、あのモンスターは自身の蘇る事ができる。

カード効果で場から取り除こうにも、今の手札じゃ無理だ。

俺は『氷結界の龍 ブリユーナク』を持っていない。ブラフで伏せた『蜘蛛の糸』を使って『共闘するランドスターの剣士』を手札加えたとしても意味が無い。

戦闘耐性がある『ディウストークン』が居てもこのままでは……

「バトル！ 『ギガンテック・ファイター』で『ラーニング・エルフ』に攻撃！ ギガントナツクル！」

動きだした『ギガンテック・ファイター』が拳を『ラーニング・エルフ』目掛けて振り下ろす。

「ぐっ、『ラーニング・エルフ』が墓地に送られた事により、カードを1枚ドロ！」

クシルか……クシルじゃ『ギガンテック・ファイター』には勝てない。

「俺はターンを終了するぜ」

俺

LP2100 手札2枚

モンスター

『ディウストークン』

(守備力1200)

魔法・罨  
伏せ 2

城之内

LP2500 手札2枚

モンスター

『ギガンテック・ファイター』  
(攻撃力3600)

魔法・罨  
伏せ 2

「俺の……ターン！ドロー！……カードを1枚伏せてターンエンド」

378

俺

LP2100 手札2枚

モンスター

『デイクストーン』  
(守備力1200)

魔法・罨  
伏せ 3

城之内

LP2500 手札2枚

モンスター

『ギガンテック・ファイター』

(攻撃力3600)

魔法・罨

伏せ 2

「俺のターン！ドロー！魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを2ドローする」

引いたカードを見た城之内さんがニシシと笑った。

「俺は更に永続魔法『デンジャラスマシン TYPD-6』を発動するぜ！」

「っ！リバーズ・カードオープン！速攻魔法『サイクロン』！『デンジャラスマシン TYPD-6』を破壊する！」

竜巻が城之内さんの場に現れたスロットマシンを破壊する。

さっきのターンで『サイクロン』を引き当てて良かった。

毎ターンカードをドローされるか、俺のモンスターが破壊または、俺の手札が墓地に行くところだった。

「なら、俺は『ランドスターの銃士』を攻撃表示で召喚するぜ！」

「なっ！」

城之内さんの場にド クエに出てくるスラムの様な形の顔をして  
いる銃を持った小人が現れる。

『ランドスターの銃士』

(アニメ)

レベル3 地属性

戦士族・効果

攻撃力900

守備力1200

効果

このカードが装備カードを装備している時、相手プレイヤーに直接  
攻撃する事ができる。

しまった！あのモンスターの効果はたしか……

「俺は『神剣・フェニックスブレイド』発動。『ランドスターの銃  
士』に装備！これにより、『ランドスターの銃士』の攻撃力が30  
0ポイントアップするぜ！」

『ランドスターの銃士』が銃を地に置いて代わりに剣を構える。

『ランドスターの銃士』

攻撃力900 1200

「バトル！『ランドスターの銃士』は装備カードを装備している時、  
ダイレクトアタックできる！やれ！『ランドスターの銃士』！プレ  
イヤーにダイレクトアタックだ！」

剣を構えた『ランドスターの銃士』が走りよって来る。

「ぐっ、トラップ発動！『ガード・ブロック』戦闘ダメージを0にしてカードを1枚ドロォ！」

『ランドスターの銃士』が剣で斬り掛かってきたが、バリアに阻まれる。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

俺

LP2100 手札3枚

モンスター

『ディウストーン』

(守備力1200)

魔法・罫

伏せ 1

城之内

LP2500 手札0

モンスター

『ギガンテック・ファイター』

(攻撃力3600)

『ランドスターの銃士』

(攻撃力1200)

(『神剣・フェニックスブレード』を装備中)

魔法・罨

『神剣・フェニックスブレード』

(『ランドスターの銃士』に装備中)

伏せ 3枚

クソツ！『デンジャラスマシン TYPE - 6』を恐れるあまり『サイクロン』を早く使ってしまった。

早くなんとかしないと……このままでは負ける！

「俺のターン、ドロー！」

俺の手札は『ジャンク・シンクロン』、『ダーク・シムルグ』、『連撃』そして今引いた『バトルフェーダー』の4枚。取り敢えず、伏せている『蜘蛛の糸』を使って、手札を増やすか。

「伏せていた『蜘蛛の糸』を発動！城之内さんの『強欲な壺』を俺の手札に加える」

カードから出た蜘蛛の糸が城之内さんのデュエルディスクに張り付き、1枚のカードを奪ってくる。

「なっ！ちよっ、待て！」

「手札に加えた『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロー！」

よし！これなら！

「俺はモンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンド」

「なら、この瞬間。トラップを発動させてもらっぜ。『第六感』！」  
「マジですか……」

俺と城之内さんの中間辺りに今度はサイコロが現れる。

「このカードの効果で俺は1から6までの数字の内2つを宣言してサイコロを振る。宣言した数字が出たら、その数だけデッキからカードをドロし、外した場合は出た目の枚数分デッキの上からカードを墓地へ送る。俺が宣言するのは5と6！行くぜ！ダイスロール！」

サイコロが跳ねるが結果は分かる。

おそらく……いや、絶対

「サイコロの出た目は5！よってカードを5枚ドロ！」

やっぱり……

俺

LP2100 手札4枚

モンスター

『ディウストーン』

(守備力1200)

伏せ 1



魔法・罨  
伏せ 1

城之内  
LP2500 手札5枚

モンスター

『ギガンテック・ファイター』

(攻撃力3600)

『ランドスターの銃士』

(攻撃力1200)

(『神剣・フェニックスブレード』を装備中)

魔法・罨

『神剣・フェニックスブレード』

(『ランドスターの銃士』に装備中)

伏せ 2枚

「俺のターン！ドローだ！」

城之内の手札が0枚になっても次の城之内さんのドローフェイズには手札が6枚になるのは何でなんだろうか……

はあ………考えてもしょうがないか………

「俺は手札の『ランドスターの剣士』と『ランドスターの格闘士』を選択して魔法カード『集結！ランドスター戦隊』を発動！『ランドスター剣士』と『ランドスターの格闘士』を特殊召喚！」

城之内さんの場に剣を持った小人と何も持っていない小人が現れる。

『集結！ランドスター戦隊』（アニメ）  
通常魔法

効果

自分の手札から『ランドスター』と名の付いたモンスターを任意の枚数分選択して発動する。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

『ランドスターの格闘士』

（アニメ）

レベル3 地属性

戦士族・効果

攻撃力1000

守備力500

効果

1ターンに1度、自分のメインフェイズ1の時に発動する事ができる。

手札のモンスターカード1枚を捨てる事で、このカードの攻撃力は800ポイントアップする。

『ランドスターの剣士』

レベル3 地属性

戦士族 通常

攻撃力500

守備力1200

3人のランドスターが揃うと何やら話し始めた。

【我こそは、ランドスター1の狙撃手。ランドスター・ブラスト！】

【我こそは、ランドスター1の力持ち。ランドスター・ストロング！】

【我こそは、サイコロコンボを使わせたらランドスター1。ランドスター・ノーマル！】

【【【さあ、我らランドスターの力。その目に焼き付けるがいい！】】】

「俺は『ランドスターの剣士』、『ランドスターの銃士』、『ランドスターの格闘士』を生け贄に捧げ、『ギルフォード・ザ・ライティング』を召喚するぜ！」

【【【な、ななな何だつてー！！！】】】

そいつって消えていくランドスター達。何なんだ今の茶番劇は……  
つて、俺がヤバイじゃん！！

『ギルフォード・ザ・ライティング』

レベル8 光属性

戦士族・効果

攻撃力2800

守備力1400

「『ギルフォード・ザ・ライティング』が3体の生け贄を捧げて召喚された時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

『ギルフォード・ザ・ライティング』が剣を抜き、振り下ろすと2つの雷が俺の場のモンスターを貫いた。

「更に墓地の戦士族モンスターが増えた事により、『ギガンテック・ファイター』の攻撃力が更にアップ！」

『ギガンテック・ファイター』  
攻撃力3600 3900

「バトル！『ギガンテック・ファイター』でダイレクトアタック！」

「手札の『バトルフェーダー』の効果発動！このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる！」

俺の場に『バトルフェーダー』が現れてベルを鳴らし、『ギガンテック・ファイター』を退かせる。

『バトルフェーダー』

レベル1 闇属性

悪魔族・効果

攻撃力0

守備力0

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

俺

LP2100 手札3枚

モンスター

『バトルフェーダー』

(守備力0)

伏せ 1

城之内

LP2500 手札1枚

モンスター

『ギガンテック・ファイター』

(攻撃力3900)

『ギルフォード・ザ・ライトニング』

(攻撃力2800)

魔法・罫

伏せ 3枚

だんだん、しんどくなってきたな……

「俺のターン、ドロー！魔法カード『強欲な壺』発動！カードを2枚ドロー！」

これなら！

「俺はチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！更に『ジャンク・シンクロン』の効果で墓地の『闇の仮面』を特殊召喚！」

『ジャンク・シンクロン』

レベル3 闇属性

戦士族・チューナー

攻撃力1300  
守備力500

『闇の仮面』

レベル2 闇属性

悪魔族・効果

攻撃力900

守備力400

「『闇の仮面』！んなカードいつの間にも！」

「さっきの雷に打たれたセットモンスターですよ。更に俺は魔法カード『レベル・アワード』を発動！『ジャンク・シンクロン』のレベルを5に変更！」

『ジャンク・シンクロン』

レベル3 5

「レベル1『バトルフェーダー』とレベル2『闇の仮面』にレベル5となった『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

8つの絆の証が揃いし時、現れる魔神よ

その力でその名の如く破壊者となれ！シンクロ召喚！現れる！『ジャンク・デストロイヤー』！」

『ジャンク・デストロイヤー』

レベル8 地属性

戦士族・シンクロノ効果

攻撃力2600

守備力2500

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊できる！俺は『ギガンテック・ファイター』と『ギルフォード・ザ・ライトニング』を破壊する！」

『ジャンク・デストロイヤー』が起こした衝撃波で『ギガンテック・ファイター』と『ギルフォード・ザ・ライトニング』が破壊される。

「ぐつ、やるじゃねえか」

城之内さんのライフは2500『ジャンク・デストロイヤー』の攻撃が通れば、俺の勝ち。

あの3枚伏せカードの内2枚は多分、攻撃に反応するカードじゃない。

城之内さんなら、既に使っている筈だ。

後1枚が分からないが、経験上『悪魔のサイコロ』の可能性が1番高い。ならば！

「墓地の『ラーニング・エルフ』と『闇の仮面』をゲームから除外して、『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！来い！クシル！」

【クエー！！】

『ダーク・シムルグ』

レベル7 闇属性

鳥獣族・効果

攻撃力2700  
守備力1000

「バトル！『ジャンク・デストロイヤー』でダイレクトアタック！」

「リバーズカードオープン！『悪魔のサイコロ』！」

黒装束に身を包んだ小さい生き物……悪魔が赤いサイコロを持って現れた。

よし！完全に読み通り！

「こいつは相手モンスター1体の攻撃力を出た目で割るトラップカード。行くぜ！ダイスロール！」

悪魔がサイコロが振り、サイコロが転がる。

「出た目は4！よって『ジャンク・デストロイヤー』の攻撃力は2600÷4の650になるぜ。ぐう！」

悪魔の力で小さくなった『ジャンク・デストロイヤー』が城之内さんに殴りかかる。

『ジャンク・デストロイヤー』  
攻撃力2600 650

城之内

LP2500 1850



「ならば『ダーク・シムルグ』でダイレクトアタック！」

「リバース・カードオープン！」

城之内さんが何かを発動したが、クシルの炎がそれごと城之内さんを喫み込んだ。

「よし！……なんだ……と……」

炎がはれると其処には赤と白を基調とした鎧を着た城之内さんが立っていた。

「俺が発動したのはトラップカード『オーラアーマー』このカードは相手モンスターのダイレクトアタック時にライフを半分支払って半分できるトラップカード。その攻撃を無効にして、俺の場にアーマーモンスターを1体特殊召喚する」

「アーマーモンスター！？」

ヴァロンさんがアーマーモンスターを使う事は知ってたけど、城之内さんもアーマーモンスターを使うのか……完全に計算が狂った。

「そして、このカードで特殊召喚されたアーマーモンスターの攻撃力・守備力は俺のライフと同じになる！」

『オーラアーマー』

(アニメ)

通常罫

効果

相手モンスターが直接攻撃した時、自分ライフを半分支払って発動する。

そのモンスターの攻撃を無効にする。

その後、このカードはモンスターカード（戦士族・アーマー・地・星1・攻/守備?）となり、自分フィールド上に特殊召喚する。

自分フィールド上に表側表示で存在するアーマーモンスターは自分のターンに1体のみでしか攻撃できない。

このカードの攻撃力・守備力は自分のライフと同じになる。

城之内

LP 1850 925

『城之内』

レベル1 地属性

戦士族・アーマー

攻撃力925

守備力925

「ぐつ、カードを2枚伏せてターンエンド!」

俺

LP 2100 手札0

モンスター

『ジャンク・デストロイヤー』

（攻撃力650）

『ダーク・シムルグ』

（攻撃力2700）

魔法・畏  
伏せ 3

城之内  
LP925 手札2枚

モンスター  
『城之内』  
(攻撃力925)

魔法・畏  
伏せ 1

意外な事もあったけど、このまま行けば、あるいは……

「俺のターン！ドロー！俺は『時の魔術師』を守備表示で召喚！」

「うげ！」

城之内さんの場に時計の様な物を内蔵したモンスターが現れた。

『時の魔術師』  
レベル2 光属性  
魔法使い族・効果  
攻撃力500  
守備力400

「『時の魔術師』の効果発動！タイム・ルーレット！」

城之内さんの掛け声と共に、ルーレットの針が回りだす。

頼むから外れてくれ！

やがて、針の勢いが衰えてきて、止まった。

針が止まった所は髑髏の所だった。

「勝つ「リバーズ・カードオープン！『確率変動』！」えっ……」

そう言つて城之内さんが発動させたのは1ターン目から、ずっと伏せていたカードだった。

「『確率変動』こいつの効果は、コイントスやダイスロール、ルーレット、スロットをもう1度やり直す。ただし、同じ結果にはならねえ。つまりはだ『時の魔術師』のルーレットで、もう外れは出ない」

「っ！」

『確率変動』（漫画）

通常罫

効果

コイントス・ダイスロール・ルーレット・スロットなどもう1度やり直す。

1度止まった目は出ない。

ルーレットの針が再び回りだす。だが、今回ばかりは完全にどこで止まるかは分かっている。

針が止まった所は当の所だった。

【タイム・マジック】

『時の魔術師』がそう言った瞬間、クシル達が苦しみだして砂になった。

やっぱり、何度見てもキツイ……

「更に俺は魔法カード『運命の宝札』を発動！こいつはサイコロを振り、出た目の数だけデッキからカードをドロ―し、その後、同じ枚数分デッキのカードを除外する。行くぜ！ダイスロール！」

サイコロがまた現れて転がる。

出た数字は

「サイコロの目は5！よって、カードを5枚ドロ―！」

「ははは……」

もう渴いた笑いしか出ねえや。

『運命の宝札』（アニメ）  
通常魔法

効果

サイコロを1回振る。出た目の数だけデッキからカードをドロ―する。

その後、同じ数だけデッキの上からカードをゲームから除外する。

「俺は儀式魔法『黒竜降臨』を発動！手札の『真紅眼の飛竜』を生け贄に『闇竜の黒騎士』を儀式召喚！」

城之内さんの場に黒竜に乗った騎士が現れた。

『黒竜降臨』（アニメ）

儀式魔法

効果

『闇竜の黒騎士』の降臨に必要。

自分の手札・フィールド上からレベル4になるようにモンスターを生け贄にしなければならない。

『闇竜の黒騎士』（アニメ）

レベル4 闇属性

ドラゴン族・儀式

攻撃力1900

守備力1200

効果

『黒竜降臨』により降臨。

このカードが裏側守備表示のモンスターを攻撃した場合、ダメージ計算を行わず裏側守備表示のままそのモンスターを破壊する。

また、このモンスターを生け贄にする事で手札またはデッキから『真紅眼の黒竜』1体を特殊召喚することができる。この効果によって『真紅眼の黒竜』が特殊召喚されたターン、『真紅眼の黒竜』は攻撃する事ができない。

「バトル！『闇竜の黒騎士』でダイレクトアタック！」

「トラップ発動！『くず鉄のかかし』！相手モンスター1体の攻撃

を無効にする！」

『闇竜の黒騎士』が放った黒炎をかかしが防ぐ。

「ならば！俺でダイレクトアタック！城之内ナツクル！」

アーマーを装着している城之内さんが駆け寄って来て、拳を繰り出してくる。

「えっ、ちょ」

「お前は失ったものがある。それを取り戻さない限り、お前は俺達に勝つ事は一生ないぜ」

「どづいう意味ゴフッ！」

城之内さんの言葉の意味を聞こうとしたら、ボディブローを決められた。

俺

LP2100 1175

倒れた俺に背を向けて、城之内さんは自分の場に戻って行った。

「俺は『闇竜の黒騎士』の効果を発動して、『真紅眼の黒竜』を特殊召喚！更に魔法カード『命の水』を発動！墓地から『真紅眼の飛竜』を特殊召喚！更にカードを2枚伏せてターンエンド！」

城之内さんの場に2体の紅い眼の竜が現れたみたいだ。

『真紅眼の黒竜』

レベル7 闇属性

ドラゴン族 通常

攻撃力2400

守備力2000

『真紅眼の飛竜』

レベル4 風属性

ドラゴン族・効果

攻撃力1800

守備力1600

『命の水』（アニメ）

通常魔法

効果

自分の墓地に存在する攻撃力2000以下のモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

俺

LP1175 手札0

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 3

城之内



LP925 手札0

モンスター

『城之内』

(攻撃力925)

『真紅眼の黒竜』

(攻撃力2400)

『真紅眼の飛竜』

(攻撃力1800)

『時の魔術師』

(守備力400)

魔法・罫

伏せ 2

「うっ、ぐう」

なんとか起き上がるが、同時に勝ち目が無い事を悟る。

城之内さんの場には相棒の『真紅眼』を加えて4体のモンスターと2枚の伏せカード。

対する俺の手札は0でモンスターも居らず、伏せカードも『くず鉄のかかし』を除けば、ブラフ同然のカード……はは、やるだけやっだが、所詮俺はこの程度か。

翔に偉そうな口を聞いたが、人の事を言えないな。

「おい「諦めるんじゃないやねえ！」な、なんだあ！」

城之内さんが何かを言おうとしたが、十代の言葉が遮る形となった。

観客席の方を見ると、十代が身を乗り出して叫んでいた。「デュエルを途中で投げ出すんじゃねえ！デッキにカードが有る限り、デュエルを諦めねえのがデュエリストじゃねえのかよ！」

「デッキにカードが有る限り……」

「……………」  
「なんで？なんで諦めずに闘えるの？」

「デュエリストたる者。デッキにカードが有る限り、諦める訳にはいかないんだ！」

「……………」

「……」

「それにさ、何でそんなつまらなさそうな顔してやってんだよ！  
？デュエルってのは楽しむもんだろ？」

「つまらなさそう？楽しむ？」

「……………」

ドラゴン『の攻撃！』

「くっ！」

「や、やったー月行義兄さんに勝ったー！！」

「やったじゃねえか！」

.....

「うう！」

「もっとがむしゃらにやれば良いじゃねえか。カイザーとデュエルした時みたいにか」

「がむしゃらに……」「カイザーとデュエルした時……」

.....「エヴォリユ

ーション・レザルト・バースト！第2打ア！」

「くっ！受けて立つ！行け！『ダークエンド・ドラゴン』！ダーク・フォッグ！」

.....

「……そうか、そういう事が」

カードプロフェッサーの特性上、汚ない裏の事をたくさん見てきた……そのせいかいつの間にかデュエリストとしての闘志やデュエルを楽しむ事を忘れていたな。

「へっ！あいつの方がデュエルについて、よく分かってんじゃねえか」

だが、今なら城之内さんがさっき言った事はつきりと分かる。

「おっ！どつやら、思い出したみてえだな」

昔の俺なら、この程度では諦めなかった……むしろ燃えてたな。

「ええ。では行きますよ。俺のターン！」

正真正銘のラストターン……この引きに全てが掛かっている。

「ドロォー！」

## 第18話 闘志（後書き）

貴志

「今日の最強カードはこれだな」

『運命の宝札』（アニメ）

通常魔法

効果

サイコロを1回振る。

出た目の数だけデッキからカードをドロウする。

その後、同じ枚数だけデッキの上からカードをゲームから除外する。

鷹

「『天よりの宝札』、『命削りの宝札』に続く宝札と名のついたチートカード。初出はアニメオリジナルの城之内VSヴァロン戦で城之内が使用（だった筈）。手札を増強して、反撃の狼煙となった。その後もマスク・ザ・ロック戦などで使用。同様に反撃の狼煙となった」

貴志

「しかし、ひどい効果だな」

鷹

「まあ、山札が湯水の如く減るけどな」

## 第19話 決着（前書き）

題名通りです。ちょっと、以外な感じですが。

後ちょっとオマケ？付きです。

## 第19話 決着

俺

LP 1175 手札 0

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 3

城之内

LP 925 手札 0

モンスター

『城之内』

(攻撃力 925)

『真紅眼の黒竜』

(攻撃力 2400)

『真紅眼の飛竜』

(攻撃力 1800)

『時の魔術師』

(守備力 400)

魔法・罫

伏せ 2

「ドロー！」

これは……最高のタイミングじゃないか。

「魔法カード『命削りの宝札』発動！手札が5枚になるようにドロ―する。俺の手札は0！よって、5枚ドロ―！」

手札に今すぐ出せて攻撃力1850以上のモンスターは来なかったか……だが！

「手札の『冥府の使者ゴーズ』と『神禽王アレクトール』をゲームから除外して、墓地の『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！蘇れクル！」

【クエー！！】

黒い火柱が立ち上がり、クシルが蘇る。

『ダーク・シムルグ』

レベル7 闇属性

鳥獣族・効果

攻撃力2700

守備力1000

「更に魔法カード『ダブルアタック』を発動！手札からレベル8の『墮天使アスモディウス』を墓地に捨てる事によってこのターン『ダーク・シムルグ』は2回攻撃をする事ができる！」

これで俺の残りの手札は『カンパブル・レベル』のみ……



だがたとえ、クシルで城之内さんに攻撃して、『1ドル銀貨』を使われたとしても、2回目の攻撃で城之内さんを倒す事ができる。

伏せカードの1枚が『天使のサイコロ』だとしても、城之内さんの攻撃力じゃ、効果の対象外。

攻撃力を上げてダメージを軽減されても、伏せている『連撃』と合わせれば、合計3回の攻撃ができる。

よし！

「バトル！『ダーク・シムルグ』でアーマー城之内さんに攻撃！ダーク・フレア！」

「へっ！なかなかやるじゃねえか……だがな、俺は負ける気はこれっぽっちもねえんだ。リバース・カードオープン！『シフトチェンジ』！更にチェーンして、『レッドアイズ・バーン』発動！」

「『シフトチェンジ』！？それにもう1枚のカードは一体……」

「『レッドアイズ・バーン』は俺の場の『レッドアイズ』と名の付くモンスターが破壊された時、互いのプレイヤーに『レッドアイズ』と名の付くモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けさせるトラップカードだ」

『レッドアイズ・バーン』（アニメ）

通常罠

効果

自分フィールド上の『レッドアイズ』と名の付くモンスターが破壊された時、お互いのプレイヤーは『レッドアイズ』と名の付くモン

スターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

俺の疑問に城之内さんが答える。

『レッドアイズ』と名の付くモンスターが破壊された時……まさか！？

「更に『シフトチェンジ』の効果によって、『ダーク・シムルグ』の攻撃対象はアーマーの俺から『真紅眼の黒竜』に変更！頼むぜ……」  
『レッドアイズ』！！黒炎弾！！」

城之内さんとクシルが吐いた炎の間に『真紅眼の黒竜』が割り込み、黒炎弾を放った。

クシルの炎と『真紅眼の黒竜』の炎がぶつかる。

「ぐっ、押し込め！クシル！」

【クエー！！！！】

クシルが更に力を込めて、炎を大きくして、『真紅眼の黒竜』の炎を押し込んで行き、クシルの炎が『真紅眼の黒竜』を包み込んだ。

「ぐっ！」

城之内

LP 925 625

『城之内』

攻撃力 625

守備力 625

「『レッドアイズ』と名の付くモンスターが破壊された事により、俺達は『レッドアイズ』と名の付くモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける」

城之内さんの『真紅眼の黒竜』が蘇り、辺り一面に炎を吐いた。

「ぐあああああ！」

「熱っ！」

俺

LP 1175 0

城之内

LP 625 0

炎が収まった瞬間、俺と城之内さんのデュエルディスクから、同時にデュエル終了を告げるブザーがなった。

「な、なんと！ 制裁デュエル最終戦は引き分けです！ 引き分けで終わりました！」

デュエルが終わった瞬間、観客席から歓声が上がった。

だが、そんな事は今はどうでもよく、俺は

「引き分け？俺と城之内さんが？」

城之内さんとのデュエルで、初めて負けなかった事実がいまいち信じられず、固まっていた。

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

城之内 Side

「ふう〜終わった終わった」

「お疲れじゃったの城之内」

デュエル上を後にして、双六の爺さんと合流する。

「まつ、これで遊戯とペガサスからの頼み事は終わりだな」

つい先日、旅に出た遊戯とアメリカに居るペガサスから、貴志の制裁デュエルの相手をして欲しいって言われたから俺は此処に来た。

その時にあいつが自分の失った物に気付かないままなら、容赦せず倒す様言われてたが、心配する事は無かったみてえだな。

むしろ、いざという時の為に引き分けを狙う為に入れていたカードに助けられるという間抜けな形になっちまった……俺もまだまだだな。

「あ、あのー済みません」

「ん？どうしたんだ？」

俺達の控え室にデュエルアカデミアの教員が申し訳なさそうに入ってきた。

「じ、実は……」

城之内 Side out

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「なんで、城之内さんが此処に居るんですか？」

制裁デュエルが終わった後に俺達の処分が言い渡された後に部屋に戻ると、何故か城之内さんが居た。

「いやあー実はよ。本土の天候の問題で船が出せなくなって、俺達は一泊する事になったんだが、突然の事で部屋が用意しきれないらしくてな。それで、俺は今日だけ此処にお世話になる事になったんだ」

「そついう事ですか……でも、後少してこの部屋は騒がしくなりますよ」

「ん？なんでだ？」

「この部屋で祝勝会とレポートを合同でやる事になったんですよ」

「うげっ！レポートかよ」

レポートという言葉聞いた城之内さんが嫌な事を思い出したぜと  
呟いた。

確か後少して卒業できるかどうかの瀬戸際に立たされたんだよな。

あの時、何故か9歳の俺も師匠達同様にレポート作成に駆り出され  
たんだよな……

俺は制裁デュエルの結果が勝ちでも負けでもないから、退学になら  
ない上、レポート無しという事になったんだが、十代達のレポート  
作成を手伝う事になったんだよな……

俺はレポートに妙な縁でもあるのか？

「お邪魔するぜって、ええー！！じよ、城之内さん！？」

部屋に入ってきた十代が叫ぶ。

「アニキ何言ってるんすかってじよ、城之内さんだー！！」

続いて部屋に入ってきた翔が同じく叫ぶ。

「十代に翔何やっ……………」

隼人は固まった。

それから明日香は三沢も来たが、2人共十代達と似たような反応をしたが、カイザーが来た時にカイザーがうわらばあ！！と言って驚いた事は此処に明記しておく。

そして、祝勝会の後にレポート作成に取り掛かったのだが……

「おっシャー！！また揃ったぜ！ディメンション・ダイス！レベル4『真紅眼の黒竜』を召喚！」

「ぬわー！またレベル4っすかー！！」

何故か俺達は俺が持ち込んでいた小型版のダンジョン・ダイス・モンスターズをやっていた。

許可を取ってまで、夜出歩ける様にしても、意味無い気がするがまあ、良いか。

因みに城之内さんが俺達全員に連戦連勝中。

ダンジョン・ダイス・モンスターズで1番出しにくい筈のレベル4モンスターをばんばん出す上、アイコンも必要な物は直ぐに出るといふ脅威の運を披露している。

十代とカイザーのドロー運最強組すらも、レベル4モンスターは3回に1回出せるかどうかだというのに……

まあ、十代やカイザーの運も十分凄すぎなんだけど……

俺も1回やったけど、何故かレベル1モンスターすらも出せずにぼ

る負けした。

運は……そういや、悪い方だったな俺。

そんなこんなで夜が更けていった。

十代達も自分の部屋に戻って、後は寝るだけだ。

「そういや、今更だが何でドアが無いんだ？」

「1週間前に爆破テロに巻き込まれて吹き飛ばされました」

三段ベットの1番上を陣取った城之内さんの疑問に答える。

因みに俺は1番下だ。

「そう言えば」

「どうした？」

「何でブラック・デュエルディスクを持ってるんですか？」

「ペガサスに渡されてな。簡単に言えば、俺もカードプロフェッサ  
ーになったって事だ。まあ、定職に就ける上、デュエルの事だしな」

「そういう事ですか」

本来なら、ブラック・デュエルディスクは城之内さんが持って然るべき物だしな。



落ち着く所に落ち着いたって事だな。

【ん？そう言えば、遊戯さんは定職に就かずに旅をしてブラブラしてんだよな。それって、まさか二【それ以上は言ってはならぬ！】  
ぐが！？】

ゴーズが何かを口走ろうとしたが、アレクが全力で阻止した。

まあ、後2文字続いてたら……爆発してる所だけだな。

「ふわぁ〜もう寝ますか」

目を瞑ると直ぐに睡魔が襲って来た。

## 第19話 決着（後書き）

今回は今日の最強カードはお休みです。

デュエルの最後がちょっとぐだぐだでしたね……もっと精進せねば。

第20話 日常（前書き）

デュエル無しです。

やっとアレクスの一人称が安定した。

## 第20話 日常

制裁デュエルが終わって早、1週間弱が経った。

今は英語の授業中だが、例によって隣の十代は寝ている。

昨日やっとレポートが終わったのだから眠いのは分かるが、後少しでテストがある……大丈夫なのか？まあ、5科目のテスト内容よりも、デュエルのテスト内容の方が優先されるから、心配する必要は無いか。

因みにレポートが長引いた理由は、レポート作成中に、ことごとく脱線して他の事……主に遊びになったからだ。

ダンジョン・ダイス・モンスターズや三国 双やマ オートのレビゲーム等、色々やった気がする。

俺自身、同年代とあまり遊んだ事が無いせいか、止めるどころかノリノリだったし……

ペガサスミニオン内では俺と年が同じぐらいの人は居なかったもんなあ〜

月行義兄さん達は俺より7つ以上は年が上。弟妹達ともかなり年が離れていて確か、俺より6つ以上は年が下。

師匠達もかなり年が上だし、モクバさんやレベッカさん、レオンさんとは年が近いけど会う機会なんて殆ど無い。エドやヨハンもまた然り。

今思うとペガサス様はそういう所を心配してくださったのかも  
ない。

「む、時間か。それでは授業を終了する」

いつの間にか授業が終わってたな。チャイムがなってるし。

「アニキ、起きてくださいっス！次は体育っスよ！」

「ん？おっ、国語の授業終わったのか！」

「ああ。次は体育で確か、野球をやるんだっただな」

「おしっ！じゃあ早く行こっぜ」

- - -  
- - -  
- - -

「仕方ない。例によってじゃんけんで決めるか」

「そうだな。でも、今度は負けないぜ！」

体育の授業はレッドとイエローが合同で野球。ブルーは自由という  
内容だったのだが、少し問題が起こった。

俺と十代……どっちがエースで4番をやるかだ。

覗き騒動の日のサッカーやその次の体育の授業で分かったのだが、

俺と十代の運動能力はレッド内……いや、学園内ですば抜けている上、ほぼ拮抗している。

だから、体育の時間で寮対抗で試合をする時はこういうポジションの取り合いになる。

剣道や柔道で言うなら、大将とかだ。

翔がどつちかが4番でもう片方がエースで良いんじゃない……と言ったが、速攻で俺と十代に却下された。

どつちかの清と桑じゃ無いんだ……それに片方だけだとなんか負けた気になる。

十代も多分、同じ考えだと思う。

まあ、そのせいでオーダーを決めるのに結構時間が掛かって、先生に早く決めろ！と言われたんだけど。

「じゃあ行くぞ」

「ああ」

「最初はグー！じゃんけんぽん！あいこで……しよー！」

「よっしゃ！俺の勝ちー！」

「負けか……」

くっ！初手でパーを出していれば。

十代が4番 投手に決まると他もスラスラと決まり、俺は1番 ライトになった。

プロ野球の球場と比べても遜色のない室内運動場でイエローの選手が守備につく。

「んじゃ、行ってくるわ」

ヘルメットを被ってバットを持ち、バッターボックスに立つ。

「さてと、挨拶代わりにボールをスタンドに叩き込みますかね」

軽く挑発をするも、相手は気にする様子は無い。

いくらかサインに首を振った後に投げられたボール目がけてバットをフルスイングする。

結果は見るまでも

「アウトー!!」

あるれえーキャッチャーフライだ。

【マイブラザー……ちょっとダサ過ぎるぜ……】

【ゴーズの言う通りね】

【1球目は様子を見るべきでしたな】

【打ち上げるなんてね〜】

【クツ、クエ〜】

【クシルはなんて言ってるんだ？】

【情けない。それでも僕の相棒かよ………と】

うう、返す言葉もございません。

- - -  
- - -  
- - -

「ちょっと待ってくれ」

試合も9回の表に突入し、レッド寮の攻撃で先頭の8番、9番が連続でアウトになった後、ヒットと連続フォアボールでツーアウト満塁になった上、十代の5回目の打席が回って来た頃、三沢が遅れてやってきた。

オーダーを見た時に居なかったから、どうしたんだろうかと思っていたんだが、この場面で来るか。

三沢はイエロー内で唯一、俺と十代に対抗できる人物だからな……こりゃ交代だな。

案の定、三沢がピッチャーマウンドに立った。



「行くぞ！十代！」

「おう！俺のバットでこの試合を決めてやる！」

確かに今は7 - 4で俺達がリードしている。

更に十代の今までの成績は4打数4安打4打点4本塁打と絶好調だ。

ついでに言うつと失点は全てエラー絡みで自責点は0だ。

因みに俺の成績は5打数4打数3打点3本塁打。

最初のキャッチャーフライがなあ……はあ。

「そして、お前と貴志と翔は俺の言いなりになるのだ！」

今なんかとんでもない言葉を聞いたぞ！三沢の奴、何言いだしてんだ！？

「ああ、いいぜ！俺のバットでお前のボールをスタンドに叩きこんでやるぜ！」

そう言いながらホームラン予告をする十代の後ろ……というより背景？が燃え上がり、更に龍の姿が見える。

対する三沢の背景？も燃え上がり、虎の姿が見える。って、ちょっと待て！スポコンみたいな流れだが、十代！お前、以前剣道の時に太刀筋を見切られて負けた事あるだろうがあああ！！

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

-----

【クリクリクリ、クリ〜】

【ハネクリボーはなんて言ってるんだ？ハニー】

【情けない。それでも僕の相棒かよ……って、言ってるわ】

あの後、十代は3球3振という俺のホームラン予告しといて、結果がキャッチャーフライに並ぶ醜態を晒した上、借りを返そうとわざと3連続でフォアボールを出して同じ状況を作った拳句、三沢に逆転サヨナラ満塁ホームランを打たれた。

さっきのはそれを見たハネクリボーの感想だ。

十代はそれに返す言葉もねえと零した。

「さあ、十代、貴志、翔。約束通り、俺の言いなりとなってもらうぞ」

「うう、分かったけど、一体何すんだ？言っとくけど、俺達金無いぜ」

「安心しろ。少し手伝って貰いたい事があるだけだ。それじゃあ放課後にな」

手伝いねえ……一体なんなんだろうな。

【ん？わざわざ違う寮のマイブラザーや十代に頼むって事は三沢の

奴は、イエロー寮内に友達が居【それ以上は言わぬ方が良かるう。主達の方が頼みやすいからという理由かもしれぬ】………そうだな【

最近、ゴーズの失言が多い気がするな………

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「邪魔するよー」

「おう、待っていたぞ」

そこは邪魔するなら、帰ってーじゃないのか………言われたら言われ  
たらで即、帰ったのに。

壁に色々、書いてんな。えーと、デュエル理論か………フム、中々興  
味深い内容だな。

「それで？俺達は何をすれば良いんだ？」

「お前達にはこの白のペンキで壁を塗り潰すビック・バンを手伝っ  
て貰いたい」

「そう言う事か………なら、場所を分担してやるか」

「ああ、頼む」

4つのエリアにわかれて作業を始める。

「しかし、かなりよくできた理論だな……!」

【どうしたマイb!】

【何かあつて!】

【主よ。真面m!】

【何かあつたの】

【クウ〜エ〜?】

見なかった事……いや、忘れよう。

他のデュエル理論の字よりも大きく大きい字で端っこにピケルサイコ  
ー＼(＾O＾)ノと書いてあった事は……

【これで三沢にロリコン疑惑が浮上したな】

あー聞こえない。聞こえない。

.....  
.....  
.....

その後、ペンキ塗り立ての為に部屋で眠る事ができなくなった三沢（十代により、財布に大打撃を受けた）を連れて俺達はレッド寮に帰って来た。

三沢は部屋の人数の事もあるので、俺の部屋に泊まる事になった。

デュエル理論について話せるのは十代達じゃ正直、無理だから、語り合うのに絶好の機会な。

知識はいくら得ても損は無いからな。

「あーちょっと待ってくれ」

先日新たに取り付けられたドアを3回ノックする。

中から、カカカ、ガシャン！キューーン、ボシユー！という効果音と射出！という二動ゆっりの声の後、畏が解除されるデデーンという効果音がした。

「よし」

「いや、待て！一体何がよしなんだ！？」

「色々」

「十代達は何とも思わないのか？」

「もう慣れたな」

「そうっすね」

「そ、そうか」

2人の反応に三沢が驚く。まあ、普通はそうだよな。

【常識人 しかし残念 ロリコンだ ゴーズ心の川柳】

【流石ねゴーズ。的を得ているわ】

【でも、文字数的に常識人は変えたいんだよね】

【なら、早く私達の家に戻って考えましょ】

突っ込みは一切しないぞ突っ込みは……これは完全にスルーさせてもらう。

- - -  
- - -  
- - -

「むっ……」

三沢と寝るまでデュエル理論について語り合った後、眠りについたが、携帯の着信音で目が覚める。

「まだ3時半だぞ。一体誰だ……って、月行義兄さんか。ここで出るのはまずいな」

多分、闇のプレイヤーキラーの事だから、三沢に聞かれるのはまずい。

部屋から一旦出ないとな。

部屋を出た後、少し待ってくださいと義兄さんに言って足早に寮から離れる。

「義兄さん。お久しぶりです」

港の近くまで来た所で義兄さんに言った。

「こんな時間に済まない。以前言われた闇のプレイヤーキラーについて分かった事があったから、電話させて貰ったよ」

「義兄さんもお忙しい身なのですから、時間についてはお気になさらず。それで、何が分かったのですか？」

「分かった事と言っても、3つだけだけど、タイタンと闇のプレイヤーキラー彼等2人は、裏のデュエル界ではそれなりに有名なデュエリストという事。その人の給料6ヶ月分で雇われ、偽物の千年アイテムを使って、闇のデュエルを行っていたという事。そして」

義兄さんは若干、言うのを躊躇う様に言葉を切った。

「そして、どうしたんですか？」

「2人共、現在は行方不明になっている事が分かった事だね」

「そうですか……情報ありがとうございました」

「気にする事は無い。私達ペガサスミニオン全員に関係のある事だからね。ああ、それはそうと貴志」

「何です？」

「学園生活は楽しいかい？」

「ええ、とても楽しいですよ」

「それは良かった。じゃあな貴志」

義兄さんはそう言っただけで電話を切った。

「2人共、行方不明か……潰す機会が無くなったな」

タイタンは闇に呑まれた。なら、闇のプレイヤーキラーも闇に呑まれたと考えるのが普通か……

てか、あいつ等を雇ったのは一体誰だ？給料6ヶ月分だろ……

確か、クロノスが金欠になっているという噂を聞いたな。今度、揺さぶりをかけてみるか……

そこまで考えて顔を上げると万丈目が辺りを窺う様にして港の方に向っているのが見えた。

「何やってんだあいつ？」

【さあ？分かりませぬが、何やらデッキを持っているようですな】



アレクがそう言った瞬間、俺達は顔を見合わせる。

「【まさか】」

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

「こんな所で何やってんだ？万丈目？」

俺の言葉に万丈目がビクツと震える。

まさかと思ったが、そのまさかとはな。

三沢は今日、万丈目と寮入れ替えデュエルをすると言っていた。

それで、万丈目が人目の無い時間に辺りをキョロキョロと見渡しなからデツキを持って港に来た。

そして、デツキを海に捨てようとした。

完全に黒だな。

「て、天道 貴志！な、何でお前が此处に居る！」

万丈目がしどろもどろになりながらも、言い返して来る。

「まあ、色々あってな。万丈目の方こそどうしたんだ？デツキを持って港に来たりして。ハッ！まさかお前には夜な夜な女子寮に侵入

して明日香のカードを盗み、此処でそれを眺めるといふ変態チックな趣味でもあったのか!？」

「そんな趣味あるわけなからう!それに、このカードは天上院君のではなく、三沢の……」

そこまで言っただけで万丈目がしまったと言わんばかりの顔をして喋るのを止めた。

いくらなんでもチョロ過ぎるぞお前……肯定したらしたで問題だけだ。

さて、三沢のデッキを取り戻さないといけないけど今の万丈目じゃデュエルで取り戻すより、エリート意識を攻めた方が良さな。

「三沢のデッキを捨てようとしたお前に忠告をしよう」

「忠告だと?」

「ああ、カードを捨てる。そんな事をした時点でお前はデュエリストとしても、人としても終わる。そして、真の負け犬となるだろうな」

「俺が負け犬だと!？」

万丈目が俺を睨み付けて来るが、構わず続ける。

「だってそんな手を使っている時点で実力で勝てないと言ってる様なもんじゃないか。正直言っただけで、イカサマを行ったグールズにすら劣るんじゃないのか?フツ、哀れなもんだな」

「黙れ！黙れ！デュエルだ……今すぐ俺とデュエルしろ！その言葉を撤回させてやる！」

「お互いデュエルディスクはおろか、デッキすら無いのにか？」

「ぐっ……」

俺の突っ込みに万丈目が黙り込む。

「……………」

「……………」

「なら、今日の午後9時に此処でデュエルって事で良いか？」

若干、変な空気になった中で口を開く。

「……………分かった」

「ああ、そうそう。デュエルはデュエリストが行うもの。三沢のデッキは返して貰おうぞ」

「チッ！受け取れ」

万丈目から三沢のデッキを受け取る。

さてと、取り返したのは良いがどうやって元の位置に戻そうか忍び込む訳にはいかないし………そうだ。

「アレク濟まんが頼む」

【やはり某の出番ですか】

万丈目が去った後に、アレクを呼ぶ。

「三沢のデッキを部屋に戻してやってくれ」

【承知ですが、1つよろしいですか？】

「何だ？」

【何故あのような挑発するような手を？主なら、力づくで取り返せたのでは？】

「ペガサスミニオンに成り立ての頃の俺を見てるみたいだからかな」

【ほう。主にもそのような頃があったのですか】

「すぐに義兄さん達に叩き直されたけどね。ペガサス様はそれを見越した上で俺をペガサスミニオンにしたみたいだけど」

あれはきつかった……徹底的に負かされたからな。

たった10日で300回は負けたと思う。

あれは地獄だな。

その後、三沢が別に6つのデッキを持っている事が判明し、デッキを取り戻した苦勞が水の泡になった事はここに明記しておく。

苦勞して

取り戻したが

水の泡

貴志心の川柳

【そのまんまだな。マイブラザー】

それぐらい分かってるぞ……

第20話 日常（後書き）

鷹

「今日の最強カードはお休みです」

貴志

「またかよ……」

鷹

「今回デュエル無かったし……」

貴志

「まあ、良いか。それでは感想やアドバイス等、お待ちしております」

第21話 VS万丈目（前書き）

何とか書けました。

次はSALか……何時になったら冬休みや考えてる過去編に入れるのやら……飛ばすのもなあ……

## 第21話 VS 万丈目

- 港 -

「さてと、そろそろ時間か……」

時間を確認し、腰のデックケースからデッキを取出し、シャッフルしてからディスクにセットする。

【で？来んのかあいつは？】

【確かに。昼の様子からするともしもという事があるやも……】

三沢とのデュエルに負けた後、あいつはどこかに走り去って行った。

ゴーズ達はそこを心配しているんだろうな。だが

「来るさ。絶対にな」

あいつ程プライドが高い奴があれば、侮辱されれば、挽回したがる筈だ。

負けた後なら尚更な……

「……………」

「おっ、来たか」

万丈目が来たので、ゴーズ達との会話を打ち切り、万丈目の方を向



く。

「……………」

「格下と侮っていた相手に負け続ける気分はどうだ？万丈目？」

気が沈んでいる万丈目を挑発する。

「っ！黙れ！ここでお前を倒した後は遊城十代と三沢大地を必ず倒す！」

淡々とデッキをセットしていた万丈目が憤慨してディスクを構える。

これで良い。やる気が無い状態じゃ意味が無いからな。でも

「エリート意識に捕われている今のままだと、俺や十代達には絶対に勝てないぜ」

「ほざけ！俺は絶対に勝つ！」

「デュエル！」

俺 LP4000

万丈目 LP4000

「先攻は貰う。ドロー！俺は魔法カード『打ち出の小槌』（アニメ版）を発動！このカードと手札のカード2枚をデッキに戻してシャッフル。その後、カードを3枚ドロー！」

初手から手札交換か……それにしても『打ち出の小槌』の効果ってひでえな。

「俺は永続魔法『前線基地』を発動！『前線基地』の効果により、俺は1ターンに1度、手札からレベル4以下のユニオンモンスター1体を特殊召喚できる！俺は『Z-メタル・キャタピラー』を特殊召喚！」

万丈目の場に黄色に塗装された戦車もどきが現れた。

『Z-メタル・キャタピラー』

レベル4 光属性

機械族・ユニオン

攻撃力1500

守備力1300

「更に『X-ヘッド・キャノン』を召喚し、『Z-メタル・キャタピラー』の効果発動！『Z-メタル・キャタピラー』を『X-ヘッド・キャノン』に装備して『X-ヘッド・キャノン』の攻撃力と守備力を600ポイントアップ！」

万丈目の場に両肩に砲台を装備したモンスターが現れ、『Z-メタル・キャタピラー』の上に乗った。

『X-ヘッド・キャノン』

レベル4 光属性

機械族 通常

攻撃力1800

守備力1500

『X・ヘッド・キャノン』  
攻撃力1800 2400  
守備力1500 2100

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

万丈目

LP4000 手札2枚

モンスター

『X・ヘッド・キャノン』

(攻撃力2400)

(『Z・メタル・キャタピラー』を装備中)

魔法・罫

『前線基地』

(永続魔法)

『Z・メタル・キャタピラー』

伏せ 1

最初から飛ばすな。だが

「万丈目。1つ宣言しよう」

「宣言？一体何をだ？」

「このデュエル。お前からダメージを受けずに俺は勝つ」

「俺を馬鹿にしているのか？そんな事させる筈なかるう！」

「それはどうか？エリート意識に拘っている今のお前に対してなら、そんな事は難しい事じゃないと思うがな」

こいつの考え方を変えるには、プライドを徹底的に叩き潰すのが手っ取り早い。

宣言された上での完封負けするのが一番こいつに堪えるだろう。

「さてと、俺のターンになったんだっとな。ドロー！俺は『天使の施し』を発動。デッキからカードを3枚ドローし、手札からカードを2枚捨てる」

フム。

「俺は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！このモンスターはレベル5のモンスターだが、相手フィールド上のみモンスターが存在する場合、特殊召喚できる！まあ、この効果で特殊召喚した場合、このモンスターの攻撃力と守備力は半分になるけどな」

『バイス・ドラゴン』

レベル5 闇属性

ドラゴン族・効果

攻撃力1000

守備力1200

「ふん！そんなモンスターで何ができる！」

小さい『バイス・ドラゴン』を見て万丈目が吠える。

「何がって言われてもねえ……色々しか言い様がない」

シンクロ素材にするとか、上級モンスターの生け贄にするとかぐら  
いか？まあ、良い。

「俺は更に魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！手札からモ  
ンスター1体を墓地へ送り、デッキからレベル1のモンスター1体  
を特殊召喚する。俺は手札から『ゾンビ・キャリア』を墓地へ送り、  
デッキから『ダークシー・レスキュー』を特殊召喚！そして、墓地  
の『ゾンビ・キャリア』の効果発動！手札のカード1枚をデッキの  
1番上に置き、このモンスターを特殊召喚！」

『ダークシー・レスキュー』

レベル1 闇属性

機械族・効果

攻撃力0

守備力0

『ゾンビ・キャリア』

レベル2 闇属性

アンデット族・効果

攻撃力400

守備力200

「『ゾンビ・キャリア』だと！？まさか……」

「そのまさかさ。レベル5『バイス・ドラゴン』とレベル1『ダー  
クシー・レスキュー』にレベル2『ゾンビ・キャリア』をチューニ

ング！

8つの絆の証が揃いし時、現れる暗黒の龍よ

その力で相手に闇による終焉を与えよ！シンクロ召喚！出でよ！  
「ダークエンド・ドラゴン」！」

『ダークエンド・ドラゴン』

レベル8 闇属性

ドラゴン族・シンクロノ効果

攻撃力2600

守備力2100

「シンクロ召喚に使用され墓地へ送られた『ダークシー・レスキュー』の効果により、デッキからカードを1枚ドロロー！更に『ダークエンド・ドラゴン』の効果発動！攻撃力と守備力を500ポイント下げて、相手フィールド上のモンスター1体を墓地へ送る。闇に沈め、『X-ヘッド・キャノン』！」

『ダークエンド・ドラゴン』の胴体にある口から放たれた黒いブレスにより、『X-ヘッド・キャノン』のみならず、『Z-メタル・キャタピラー』も呑み込まれて姿を消す。

『ダークエンド・ドラゴン』

攻撃力2600 2100

守備力2100 1600

「ユニオンによって破壊耐性ができたと言っても、こんなもの……  
呆気ないな」

「くそっ！」

「さて、がらあきの本陣突破と行きますか！『ダークエンド・ドラゴン』でダイレクトアタック！ダーク・フォッグ！」

『ダークエンド・ドラゴン』の顔の方にある口から放たれた黒いブレスが万丈目に直撃する。

「ぐわああああー！！！」

万丈目

LP4000 1900

「モンスターとカードを1枚ずつ伏せてターンエンド」

俺

LP4000 手札1枚

モンスター

『ダークエンド・ドラゴン』  
(攻撃力2100)

伏せ 1

魔法・罫

伏せ 1

万丈目

LP1900 手札2枚

モンスター  
無し

魔法・罫

『前線基地』

(永続魔法)

伏せ 1

「ぐつ、俺のターン！ドロー！俺は『前線基地』の効果で『Y・ドラゴン・ヘッド』を守備表示で特殊召喚！」

万丈目の場に『オシリスの天空竜』を小さくし、機械化したようなモンスターが現れた。

『Y・ドラゴン・ヘッド』

レベル4 光属性

機械族・効果

攻撃力1500

守備力1600

「俺はカードを1枚伏せて、魔法カード『命削りの宝札』を発動！手札が5枚になるようにカードをドロー！そして、伏せた『打ち出の小槌』を発動！このカードと手札のカード3枚をデッキに戻し、カードを4枚ドロー！」

怒涛の手札交換だな。さて、どうなるか……

「リバース・カードオープン！『ゲットライド！』このカードの効果により、俺は墓地のユニオンモンスター『Z-メタル・キャタピ



ラー』を『Y-ドラゴン・ヘッド』に装備！更に魔法カード『死者蘇生』を発動！『X-ヘッド・キャノン』を特殊召喚！」

『Y-ドラゴン・ヘッド』

攻撃力1500 2100

守備力1600 2200

『X-ヘッド・キャノン』レベル4 光属性

機械族 通常

攻撃力1800

守備力1600

「そして、『X-ヘッド・キャノン』、『Y-ドラゴン・ヘッド』、『Z-メタル・キャタピラー』をゲームから除外して、『XYZ-ドラゴン・キャノン』を特殊召喚する！」

『Z-メタル・キャタピラー』の上に『Y-ドラゴン・ヘッド』が乗り、更にその上に『X-ヘッド・キャノン』が乗って1台の戦車が現れた。

『XYZ-ドラゴン・キャノン』

レベル8 光属性

機械族・融合/効果

攻撃力2800

守備力2600

「『XYZ-ドラゴン・キャノン』か……」

「『XYZ-ドラゴン・キャノン』は手札を1枚捨てる事で相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊できる。俺は手札を3捨て

て、貴様の場のカード全てを破壊する！」

「チエーンしてトラップ発動『和睦の使者』。このターン俺に発生する戦闘ダメージは0になる」

「チツ！面倒なカードを」

『X-ヘッド・キャノン』の肩の砲台、『Y-ドラゴン・ヘッド』の口、『Z-メタル・キャタピラー』のキャタピラ部分から放たれた光線が俺の場のカードを貫く。

「破壊され、墓地に送られた『クリッター』の効果発動。デッキから、『ジャンク・シンクロン』を手札に加える」

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

俺

LP4000 手札2枚

モンスター・魔法・罫

無し

万丈目

LP1900 手札1枚

モンスター

『XYZ-ドラゴン・キャノン』

(攻撃力2800)

魔法・罨

『前線基地』

(永続魔法)

伏せ 1

「俺のターン！ドロー！俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚！更に『ジャンク・シンクロン』の効果で墓地から『ドツペル・ウォリアー』を特殊召喚！」

俺の場に現れた『ジャンク・シンクロン』が地の底から黒服の男性を引っ張り出す。

『ジャンク・シンクロン』

レベル3 闇属性

戦士族・チューナー

攻撃力1300

守備力500

『ドツペル・ウォリアー』

レベル2 闇属性

戦士族・効果

攻撃力800

守備力800

「ぐつ、またシンクロナ召喚か！？」

「ああ。それもお前のモンスターを倒せる力を持つモンスターをな。行くぞ！レベル2『ドツペル・ウォリアー』にレベル3『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

5つの絆の証が揃いし時、現れる戦士よ  
戦友の力を結集し、己の力とせよ！シンクロ召喚！叩き潰せ！『ジ  
ヤンク・ウォリアー』！！」

『ジヤンク・ウォリアー』

レベル5 闇属性

戦士族・シンクロノ効果

攻撃力2300

守備力1300

「更に『ドツペル・ウォリアー』シンクロ召喚の素材として墓地に  
送られた場合、『ドツペル・トークン』2体を特殊召喚できる！現  
れる『ドツペル・トークン』！」

『ドツペル・ウォリアー』が居た場所に『ドツペル・ウォリアー』  
を小さくしたモンスターが2体現れる。

『ドツペル・トークン』？

レベル1 闇属性

戦士族 トークン

攻撃力400

守備力400

『ドツペル・トークン』？

レベル1 闇属性

戦士族 トークン

攻撃力400

守備力400

「ふん！そんな雑魚で一体何ができる！」

「……さっき言った事を少し訂正しよう。その態度も直さない限り、お前は俺達には決して勝てない！」

「何!？」

「『ジャンク・シンクロン』はシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計値分攻撃力がアップする効果を持っている。つまり、『ジャンク・ウオリアー』の攻撃力は800ポイントアップする！」

『ジャンク・ウオリアー』

攻撃力2300 3100

「攻撃力3100だと!？」

さて、仕上げに入るか。

「魔法カード『左腕の代償』を発動!手札を全て捨て、デッキから『蜘蛛の糸』を手札に加え、発動!お前の墓地の『命削りの宝札』を手札に加え、当然発動。手札が5枚になるように、カードドロ―  
!」

ジャストで行けるけど、最後が締まらないぞこれ……まあ、しょうがないか。

「手札から『サイクロン』を発動!伏せカードを破壊する!」

セットカードは『リビングデッドの呼び声』か……

「更に手札の『グローアツプ・バルブ』を墓地へ送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！更に『グローアツプ・バルブ』の効果発動！デッキの1番上のカードを墓地へ送り、特殊召喚！」

『クイック・シンクロン』

レベル5 風属性

機械族・チューナー

攻撃力700

守備力1400

『グローアツプ・バルブ』レベル1 地属性

植物族・チューナー

攻撃力100

守備力100

モンスターゾーンが全部埋まったけど何だこれ？これが『ターボ・ウォリアー』や『ジャンク・アーチャー』とかを持ってない奴の末路か！？こんだけ居て実質シンクロ召喚できないって一体……

「バトル！『ジャンク・ウォリアー』で『XYZ・ドラゴン・キャノン』に攻撃！スクラップ・フィスト！」

『ジャンク・ウォリアー』が『XYZ・ドラゴン・キャノン』が放つ砲弾を腕に纏わせた『ドツペル・トークン』の力で防ぎながら、接近する。

そして、『XYZ・ドラゴン・キャノン』の横に回り込むと『XYZ・ドラゴン・キャノン』の『Y・ドラゴン・ヘッド』の部分を右腕で貫いた。

バランスを崩した『XYZ・ドラゴン・キャノン』に左腕を叩き込み、止めを刺した。

「ぐう！」

万丈目

LP1900 1600

「終わりだ！『ドッペル・トークン』2体と『クイック・シンクロン』、『グローアップ・バルブ』でダイレクトアタック！」

『ドッペル・トークン』が左右から、『クイック・シンクロン』が正面から、『グローアップ・バルブ』が背後から万丈目に襲い掛かる。

「う、うわああああ！……！」

万丈目

LP1600 1200 800 1000 0

「俺の勝ちだな」

デッキをケースに戻し、万丈目に近づく。

「クソッ！クソクソクソ！何故だ！？何故俺は勝てないんだ……！」

「万丈目……いくつか聞く事がある。まず、お前は何の為にデュエルしてるんだ？」

「どつという意味だ！？」

「2人の兄」

「!」

俺がそう言つと万丈目は目を見開き、驚いた。

「1人は財界、もう1人は政界で成功を治めている。当然、その2人の弟であるお前はデュエルの世界で頂点を取るように言われて来た……違つか？」

「何故それを……」

「俺はそれなりに情報通でね。金持ちの事は大体分かる」

少しMr・クロケッツの力を借りたけどな。

「そして、お前のエリート意識もそこに起因しているんじゃないのか？幼い頃から周りにちやほやされて天狗になり、周りには自分を叩き潰せる人が居なかった……違つか？」

「……………っ!」

思い当たる事があるのか、万丈目は黙り込んだ後、顔を歪めた。

「これを機に自分を見直すんだな。何の為にデュエルをしているかという事も含めてな」

そしてはい上がれとまでは言わずに背を向ける。

こいつなら、言う必要もなく、はい上がって来るといふ予感のよう



なものがある。

まあ、実際はい上がるかどうかはこいつ次第だけだな。

「待て！1つ聞かせろ」

「何だ？」

「お前は何の為にデュエルをしてるんだ？」

「俺か？」

まさか、俺の理由を聞いてくるとはな。

だが、答えは単純明快ただ1つ。

つい最近まで目が曇っていて見失っていた事だが……

「俺はある人を越える為だ。俺が最も尊敬する人であり、俺に強さを教えてくれた人。まだ見えぬ遙か先の頂いたなきに居るその人を俺の信じ  
る相棒達と共に越える。それが今の俺がデュエルをする理由だ」

まあ、その頂は本当に果てしなく遠いけどな……

だが、いつか絶対に……越えてみせる！こいつらと共にな。

【じゃあ、俺達をデュエルに出せよ】

【【同感／ね／だな／だね】】

【クツクエ、クツクエー

（全く、その通りだよ）】

聞こえない

聞こえないいたら

聞こえない

【下手な川柳だな】

【【同感／ね／だな／だね】】

【クツクエ、クツクエー

（全く、その通りだよ）】

最後までい決めさせてくれよ……

第21話 VS万丈目（後書き）

ゴーズ

【冥府の剣 斬撃剣！！】

カイエン

【冥府の舞 斬滅剣！！】

鷹

「うわっと！？何すんのいきなり」

ゴーズ

【俺達にも出番を寄越せ！！】

カイエン

【そうね。ゴーズと2人つきりっていうのも良いけれど、出番が無いのは嫌ね】

鷹

「アレクの方が出番無いだろ！それに、ゴーズお前に関しては何回か視点があつたらうが！」

ゴーズ

【シャラップ！！あいつはあいつで俺達精霊の中でも、長老的な存在で冷静じゃなくなった主を冷静にさせたり、他の小説の感想にお邪魔してんじゃねえか！！それに、前も言ったけどデュエル中の俺達の扱い酷すぎだろが！？】

アスディ

【そんな事言ったら、今まで名前しか出てないマルスはどうなんの？】

鷹・ゴーズ・カイエン

「【あっ……………】」

鷹

「（よし！よくぞ言ってくれた！）」

アスディ

「まあ、でも僕も扱いには不満があるんだよね〜羽根をもがれたし」

鷹

「ギクツ！！」

アスディ

【てな訳で皆でこの作者を殺アホっちゃおう〜】

ゴーズ・カイエン・クシル

【【おー！！ノクエ〜（殺っちゃうデ〜ス！）】】

鷹

「ちよっ！クシルお前は優遇して…………ギャー！！！」

貴志

「あいつら何やってんだ？」

アレク

「大方、自分達の扱いが気に入らぬのでしょう。作者殿も大変なのですから、某は不満はありませぬが……（こつ言つてれば、出番が増える事間違いない！）」

貴志

「何かアレクから黒いオーラが出てんな……まあ、それはさて置き、今日の最強カードは……これで良いのか？」

『XYZ・ドラゴン・キャノン』

レベル8 光属性

機械族・融合/効果

攻撃力2800

守備力2600

『X・ヘッド・キャノン』+『Y・ドラゴン・ヘッド』+『Z・メタル・キャタピラー』

自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、エクストラデッキから特殊召喚する事ができる（『融合』魔法カードは必要としない）。このカードは墓地から特殊召喚できない。自分のメインフェイズ時に手札を1枚捨てる事で、相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

貴志

「『X・ヘッド・キャノン』、『Y・ドラゴン・ヘッド』、『Z・メタル・キャタピラー』の3体が自分フィールド上に存在している時にそれらを除外してはじめて出せるモンスターだな。正規召喚さえすれば、蘇生はできないが帰還はできる。全く関係無いが作者がDSソフトのスピリット・サモナーで何故か切り札にしていたモンスターだな。アムナエル戦の時に『次元融合』を使って無理矢理召喚したりと、やりたい放題だったな」

本当は最強カードは『VWXYZ』にしようと思ったけど、長くなりそうだから出さなかったという裏話があったり無かったり……

第22話 SLA(前書き)

短めデュエル無しです。

## 第22話 SLA

「おい。万丈目どこだ」

万丈目の名前を呼ぶ十代の声を皆から少し離れた所で聞く。

万丈目とのデュエルから数日、万丈目が突如行方不明になり、心配した十代に召集された俺達は今、万丈目を探している。

探しているのだが……

【言わずにおいて大丈夫なので？】

「男の門出をあまり無闇に語るべきじゃ無いだろ」

俺は万丈目がこの島に居ない事を知っている。何故なら

- - -  
- - -  
- - -

「いきなり呼び出して何の用だ万丈目。またデュエルしたいのか？」

夜遅くに万丈目に港に呼び出された俺は欠伸を堪えながら、万丈目に話し掛ける。

「天道。俺は旅に出ようと思つ」



「旅？」

「ああ、お前に言われて気付いたんだ。俺は兄さん達にデュエル界のトップを取れと言われ続けていた。だが、そこに俺の意思は無かったという事に……だから、俺は旅に出る。俺の……俺だけの目標を見つける為に。そして、いずれお前や遊城 十代、三沢 大地にリベンジする為に此処に戻って来る！」

「そうか……頑張れよ。万丈目」

よく見れば、すぐ近くに見慣れない船があった。

おそらく、あれで島から出るつもりなのだろう。

「天道、礼を言う。お前のおかげで俺は自分を見直す事ができる」

「礼はいい。まあ、せいぜい気を付けてな」

そう言っつて万丈目に背を向けて帰ろうとしたが、目の前に現れた3体のドラゴンを見て足を止める。

「『ライトエンド・ドラゴン』に『ダークエンド・ドラゴン』、  
『光と闇の竜』だと……」

目の前に現れた3体のドラゴンを確かに俺は持っている。

しかし、この3体に精霊は宿って居なかった筈……まさか、目覚めたと言っつのか！？

【【【……………】】】

3体のドラゴンは万丈目の方をずっと見ている。

そういう事か……

「万丈目！餓別だ受け取れ」

「何だこれは？」

「ただの餓別だ。旅に出るお前へのな」

ドラゴン達が万丈目の所に行きたがっているんだ……渡さない訳にはいかないだろう。

今の万丈目なら、渡してもこいつらが酷い扱いを受ける事は無いだろうしな。

【【【……………】】】

【主よ。『ダークエンド・ドラゴン』だけ渡してないようですが……】

「いや、だって『ダークエンド・ドラゴン』は1枚しか持ってない上、デッキに入って【【……………】】分かりましたよ。畜生……」

小声で愚痴りながら、万丈目に『ダークエンド・ドラゴン』のカードを渡す。

「良いのか？」

「そいつらがお前の元に行きたがってるからな。まあ、使うかどうかはお前次第だな」

- - -  
- - -  
- - -

というやりとりが3日前にあったからだ。

今思い返すと俺が痛い目にあっただけだな。

【そういえば、主が赤の他人にカードをあげたのは初めてでしたな】

「俺はそういう事が嫌いだからな」

弟妹達等の1部を除き、俺は人にカードをあげた事は1度も無い。

どうも、そういう事は金持ちの子供が友達を作る為に、周りに物をばらまく様に思えてしまう。

世の中十代の様な人ばかりじゃ無いからな。

ブルーの生徒……以前の万丈目の様な人も居る。

まあ、親しい人の誕生日とか、カードが望んで行きたがった万丈目の場合は例外だけだな。

【主よ。十代達に忠告をしないので？】

ああそついや、十代達に如何に万丈目が旅に出た事を悟らせずに万丈目の搜索を諦めさせるかを考えてたんだつたな。

十代達はともかく問題は明日香だよなあ……どう誤魔化すか……

「キヤーー!!」

「何事？」

悲鳴が聞こえたので、少し先に居る十代達の方を見るとジユンコが猿？に抱えられ連れ去られて行った。

「何故に猿？」

「取り敢えず追い掛けましょう！」

「ああ！」

猿の走り去って行った方向に向かった十代達を見て、2年程前に本田さんが俺は猿にされた事があると言っていたのを思い出した。

確か、あの時本田さんは猿にされたが、美味しい思いをしたとも言つてたな。

そう言えば、あれは何だったんだろつか？それを聞いた本田さんの彼女である静香さんは顔を赤らめながら、本田さんを軽く叩き、城之内さんは髪を逆立て目を黄緑色にしながら本田さんに殴り掛かり、周りは笑うというカオスな状況になったんだよな。

【おーい、マイブラザー。思い出に浸るのも良いが、十代達を追い

掛けなくて良いのか】

「あっ………」

-.  
-.  
-.  
-.  
-.  
-.  
-.  
-.  
-.  
-.  
-.  
-

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ」

十代達追い付いた頃には、十代と猿のデュエルが終わっていた。

その後、変な老人と数人の黒服という怪しい連中が現れたが、いつの間にか周りに居た猿の群れに追われてどこかに走り去って行った。

そして、日が暮れて寮に戻ると大徳寺先生が先日、船で島を出る万丈目を見たと言い、更に俺が港に居たと皆に言って、俺が皆に散々搾られる事になった事を此処に明記しておく。

【そついや何で猿とデュエルしてたんだろつな？】

「そあ？」

## 第22話 SLA（後書き）

今日の最強カードはお休みです。

SALは飛ばそうかと思いましたが、万丈目にカードを渡す所を書きたかった為書きました。

## 第23話 テスト（前書き）

デュエル無しです。

十代達が冬休みにアカデミアに居た理由を作ってみました。

## 第23話 テスト

「連絡事項は今回の期末テストについてなのによ。詳細は今から配るプリントに表記されてるのによ」

HR中、大徳寺先生から、今回のテストについてのプリントが配られる。

連絡事項？明日テストなのか？ん？これは……十代達がヤバイだろうな。

「連絡事項はこれぐらいなのによ。それじゃ、解散なのによ」

大徳寺先生の言葉を聞いて、教室の中に居る生徒は、来たるテストを嘆く者。早く帰って勉強する者。連絡事項を見て絶望感に打ちひしがれる者等に別れる。

因みに十代と翔の反応はと言うと

「ふわぁ〜やっとな終わったみたいだな」

「……………」

十代は寝ていた為、話を聞いておらず、暢気そうにしており、翔は真っ白になっていた。

「ん？翔はどうしたんだ？」

「明日5教科のテストだからな」



「テストつつても、デュエルの内容がよければなんとかなるだろ」

「そんな十代に耳よりな情報が」

そう言つて十代に大徳寺先生が配つたプリントを見せる。

「え〜と、国語、数学、英語、理科、社会の5教科のテストの平均点が40点に満たぬ者は冬休みに居残りで追試……って何じゃこりゃー!!!」

状態を理解した十代が騒ぎだす。

まあ、最近休憩時間と体育の授業以外は寝るといふ特技を身に付けて發揮している十代にとっては大問題だよな。

ちゃんと授業を受けてれば、平均40点取るだけなら、楽勝な筈なんだが……

「テストは明日だが、どうするんだ？」

「頼む！貴志、勉強教えてくれ！」

「僕も頼むっス！」

「あー分かった。分かったから、落ち着け。目がヤバイぞ」

【これで十代達は冬休み居残り決定だな】

ゴーズ……それは一体どういう意味だ？

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

- 午後8時30分 -

「てな訳でこれから、勉強会を始めます」

「「お」」

夕食後、俺の部屋に集まり勉強会を始める。

因みに隼人は嫌な予感がするからやめとくんだなと言い、三沢達はそれぞれの寮で頼りにされているらしく、此処には居ない。

クシルを除く俺の精霊達は勉強の邪魔になるからと言って、それぞれ精霊世界に帰った。

「それじゃあ、言った物は持って来たか？」

「ああ、持って来たぜ」

「僕も持って来たっス」

2人から最近出された小テストを受け取る。

これを参考に苦手な所を直せば、平均40は楽勝な筈だった。

そう……筈だったのだ。

「何これえ？」

これが見終わった俺の感想だ。

「翔！お前は基礎が無茶苦茶過ぎるぞ！てか、何故、南瓜をなんこ  
と読んだ！」

「あ、カボチャって言うんすか」

「……………次に十代！名前と選択問題しか埋めてないってどうい  
う事なんだ！」

「ははは……………」

「ははは……………じゃねえー！何で50点満点のテストで最高16点と  
17点何だよ！」

「おっ、俺翔に勝ってんじゃん！」

「そこで勝ってんじゃんとか言ってるじゃねえー！こんなの五十歩百  
歩じゃー！てか、こんなの絶対に追試じゃねーか！！」

【クウーエー？】

クシルが不思議そうに俺の方を見る。

確かに俺はあまり声を荒げないが、これは酷過ぎる。

こんなのどうやって教えれば良いんだ……

「もう追試で良いんじゃないのか？」

「それだけは嫌／＼だ／＼ス！！」

「ですよー」

仕方ない。こうなったら、出来る限りの基礎を叩きこもう。

- - -  
- - -  
- - -

- 午後11時40分 -

「フム、少しは出来る様になってきたな」

採点をして言葉が出る。

「よっしゃ〜」

「やったっス〜」

「さて、次は」

2人が問題を解いている間に作ったプリントを出そうとしたが、不意にくう〜という音がした。

「うう〜。普段使わない所使ったから、腹減ったぜ」

「僕もお腹すいたっス」

「お前等な……はぁ〜うどんが良いか？」

「ああ、頼むぜ」

「貴志君、料理できるんっスね」

「このぐらいできて当然だろう。俺が戻るまでこのプリントをやっ  
てるよ」

そう言つて、部屋を出て食堂に向かう。

以前大徳寺先生に食堂を使う許可は貰つてるから、大丈夫だろう。

飯を食つたら、眠くなるというオチが脳裏をよぎつたが、その時は  
クシルに頭をクチバシで突かせて起こせば良いしな。

対策は万全だと思う。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

- 数十分後 -

「「あつ!」「」

「お前等何してんだ？」

うどんを作って部屋に戻ってくると十代達は漫画……ファニーラビッツを読んでおり、勉強をしていなかった。

因みにさつき部屋を出る前に渡した英語のプリントはほぼ、白紙だった。

「フフフ……取り敢えず、その本を置いてお話ししようか」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！この巻だけ！これ読んだら、スゲーマジメにやるから！」

「それって勉強しねえ奴の典型的な例じゃねえか！」

「読み始めたら、面白くてつい」

「確かにそうかもしれないが」

「特にファニーラビッツが警官のブルドッグをからかう姿が面白えよな」

「むっ、よく分かってるな。でも、次の巻で……っと言つ訳にはいかないな」

「ええー！！気になるじゃんかよ。一体どうなんだよ」

「あっ！うどん冷めちゃうっすよ！」

「むっ、しょうがない。30分休憩にするか」

「「やったー！」」

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

- 午前1時20分 -

「よっしゃー！目的地にまた着いたぜ！」

「貧 神憑くのまた俺かよ……」

「貴志君、弱過ぎるっス」

「うるせー！」

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

- 午前2時05分

「ぎゃあー貧 神がキングポ ビーになったあー！！つて、ちよ、  
キングデルとか呼ばないでー！！」

「貴志……運無さすぎだろ」

「流石に同情するっス」

「何故だ、何故俺に貧 神が憑くとキングポ ビーになるんだ……」

十代に憑いた時はボ ビーモ キーになるのに……」

- - -  
- - -  
- - -  
- - -

- 午前2時48分 -

「ちよっ！信長さん！やめて！カードを割らないで」

「特 周遊カードを引いた直後にこれかよ……」

「ダイ モンドカードも割れたっすよ」

「信長エ……」

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

- 午前3時 -

「ナマ ーゲン！てめえコノヤロー！！」

「またカードが無くなったな」

「ある意味凄いつス」

「心が折れそうだ……」



- - -  
- - -  
- - -

- 午前4時30分 -

「……………」

「……………」

「やっちまったな……………」

「ああ」

「もうお終いつス〜!!」

俺が桃 でマイナス300億円でビリになったとかはどうでも良い。

いや、精神的なダメージはでかいけど……俺がナ スカード駅で急  
カードぐらいしか引かないのに、十代達は普通のカード駅で銀河  
道カードとか引いたりしたのは精神的にかなりキツイけど、そん  
な事は本当にどうでも良い。

それより、何故だ？何故、俺達は桃 をやってたんだ？いや待て、  
原因究明よりも今は今できる事をしなければ！

「よし！後、3時間でできるだけ勉強するぞ！」

「「お、お〜」「」

- - -  
- - -  
- 数日後 -

5教科のテスト及び、デュエルに関するテストのが終わって数日、5教科のテスト結果とデュエルに関するテストの結果が貼り出された。

結果は……問題無いな。

「貴志か……流石だな。だが、次は負けないぞ」

「流石は学年トップね」

「まあね」

【なあ、あつちに『岩石の巨兵』が2体居るぞ】

【顔だけ見たら『はにわ』じゃないかしら？】

【ゴーズもカイエンも違うよ。あれは、『ウォー・アース』だよ】

【いや、あれは、『泣き神の石像』でしょう】

【クツ、クエクエ〜】

【フム、クシルは『鋼鉄の巨神像』と申すか】

皆、何を言っただ？

あっ！そっいや、十代達は……

「……………」

十代達はテスト結果が貼りだされたボードの前で『王家の守護者』の様な顔をして固まっていた。

「十代？翔？」

「貴志？お前はどっだったんだ？」

「そっつス！貴志君もあの時勉強ができてないから、結果はスタスタな筈っス！」

「見てこようぜ！」

「いや、2人には済まないが……って、行っちゃったよ」

数分後、再び石化した2人を見る事になった。

・オマケ・

桃 の結果 (CPU無し)

1位

遊城 十代

総資産

75億8750万円

2位

丸藤 翔

総資産

25億6470万円

ビリ

天道 貴志

- 300億2630万円

テスト結果

天道 貴志

500 / 500 (学年1位)

三沢 大地

498 / 500 (学年2位)

天上院 明日香

495 / 500 (学年3位)

遊城 十代

88 / 500 (圏外)

丸藤 翔

83 / 500 (圏外)

遊城 十代 丸藤 翔

冬休みに追試

決定!

「り、理不尽だあゝ!!」

【俺の予想、大当たりだったな】

【流石ゴーズね。相変わらず、格好いいわ】

【と言うより普段から、勉強してればこんな事にはならないよね】

【確かに……それは否定できぬな】

【クウゝクル（大変だねゝハネっちも）】

【クリ！クリクリ、クリクリクリ、クリゝ（全くだよ！十代の頭の中は基本的にカラッポなんだ……僕がなんとかしないと）】

第23話 テスト（後書き）

鷹

「さて、今日の最強カードはこの坊主丸」

貴志

「それは桃のカードじゃあああ！…！」

鷹

「ぐげふ！」

貴志

「桃を出そうとするな！あっちのもカードだけどさ！てか、俺の運無さ過ぎだろ！」

鷹

「何か面白い欠点付けようと思ったら、ああなった。後悔も反省もしない！」

貴志

「いや、そこはしろよ！いくら何でも理不尽過ぎるだろ！」

鷹

「（>皿>）」

貴志

「「これはじげえー！…！…！じげえー！…！」

第24話 冬休みその？（前書き）

またまたデュエル無しです。

貴志

「いい加減デュエルさせるよ……」

済まん。

## 第24話 冬休みその？

十代Side

「あゝもう！分かんないっスよ〜！」

「うう。俺も全く分からないぜ」

俺達は追試の為に冬休みでも、島に残ってる。

今俺達の部屋で追試の前にオマケで大徳寺先生に渡された課題をやってるんだけどさっぱり分からねえ。

このまま翔と一緒に悩んでてもしょうがねえし……

「うう〜あつ！そう言えば」

「どうしたんだ翔？」

「貴志君が確か、追試対策プリントを作ってくれてたような」

「あつ！」

翔の言葉を聞いて貴志が実家に帰る前に『お前達が追試を受ける羽目になった原因は俺にもあるから、先生の性格や出す問題の傾向から考えて作ったテスト対策プリントを俺の部屋の机の上に置いとくから、良かったら使ってくれ』って、言っただのを思い出す。

先生に出された課題があまりにも多かったから、忘れてたぜ……



よし！そうなれば

「翔！早く取りに行こうぜ！」

貴志の教え方は確かなものだったから、なんとかなるかもしれない。  
俺と翔は貴志の部屋に向かった。

十代 Side End

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

「ふわあ〜。眠い………」

昨日、こっちの方に戻ってきたが、時差ボケとかで帰って早々、寝たんだがまだ眠い。

「あ〜でも、荷物の整理はしとかないと」

【クエ〜】

「どうしたクシル？」  
ポストンバックに近づく俺の肩にクシルが乗ってきて加えている紙の束を突き出してくる。

「何だこれ？」

紙束を手に取り読む。

「伊吹先生は教科書の問題をそのまま出す事が多く、変えているとしても微々たるものなので、最悪教科書の内容を覚えておく事……って、これ十代達の為に作った対策プリントじゃん！」

部屋に置いて帰った筈なのに何で……まさか。

【ク、クエー】

クシルの方を見ると其処には、まるで『忘れ物があつたから、僕が回収して来たよ』とでも主張するかのように翼を広げたクシルが居た。

「はははークシル偉いぞーでも、忘れ物じゃないんだよねー」

言いながら、クシルの頭を撫でる。

冬休みが終わったら、十代達に何か奢るか。

十代に翔、本当に済まない……

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

ゴーズSide

はい！どーもーやられ役でお馴染みのゴーズです。

……つて、俺は誰に対して自己紹介してるんだ？しかも、やけに自虐的な……

「ふうやっとな終わったか」

ん？マイブラザーが荷物の整理を終えたみたいだな。

その時を見計らった様にマイブラザーの部屋の扉が開け放たれた。

「貴志兄ちゃん！」

其処から入ってきた5、6歳ぐらいの子供5人（全員ペガサスミニオン）にマイブラザーが取り囲まれる。

「サム、龍、ギン、ジュディー、明かどうしたんだ？」

「遊んでよー」

1人の子供が言った瞬間、他の子供達も口々に遊んでと言い始める。てか、マイブラザー……よく、200人近くは居るペガサスミニオンの名前を覚えてるな。

「分かった分かった。でも、お前達勉強は終わったのか？」

「……」

マイブラザーの言葉を聞いた5人全員が明後日の方向を向く。

中には口笛を吹いているのも居るな。

【分かりやすすぎんだろ】

【ええ……これは分かりやすいわね】

「お前達なあ……分からない所は兄ちゃんが教えてやるから、早く終わらせよう。遊ぶのはその後な」

「ハハイ」「ハハイ」

マイブラザーの言葉に息ぴったりに答える子供達。

【これって、勉強しないフラグだよな】

【【確かに／そうね／な／ねえ／】】

.....  
.....  
.....

「はい。これでお終い」

「やっと終わったー！」

勉強を始めて30分程で、子供達の課題は終わった。

十代や翔がこれを見たら、「解せぬ」って、言いそうだな。

あゝでも、脱線するのはだいたいあの2人の集中が途切れた時なんだよな。

そういう意味では自業自得と言えない事もないか……

「さて、一体何をして遊ぶんだ？」

「これ〜」

「なっ……………」

【プツ、ククク】

子供の1人……確か、龍だけが出した物を見て思わず笑ってしまった。

「むっ」

【そんな怖い顔すんなって。子供達が怖がるぜ？】

マイブラザーが俺を睨んだが、俺の言葉を聞いて表情を戻す。

【ゴーズ、笑う事はなからう】

【いや、しょうがねえだろ】

龍が出したのは人生ゲーム。マイブラザーが苦手とする多大に運が絡むゲームだ。

これを狙ってやったんなら、龍は大した男だぜ。

-----

.....

「.....」

「兄ちゃん、弱い」

その言葉に他の4人も同調する。

まあ、最初で就職できなかった上、給料のルーレットは全て1。そして、金が取られるマスに止まりまくって約束 形がえくと32枚でぶっちぎりの逆1位……もといビリ。

遊んでいる姿は良い父親を彷彿とさせるものだったけどな。

そういや、何でマイブラザーはこんなに運がねえんだ？まあ、デュエルに反映されてないだけかもしれませんが……

「天道様。ペガサス様がお呼びです」

また折り良いタイミングでマイブラザーの部屋の扉がノックされた。

「分かった。じゃあなお前達」

マイブラザーの言葉に子供達は「ハイ」や「お兄ちゃん、何か悪い事したの？」等言って部屋から出て行った。

ゴーズSide End

.....

- - - - -  
- - - - -

クロケッツさんに案内されて会長室に向かう。

今更会長室になんて案内されなくても行けるんだけどな。

それに、俺達ペガサスミニオンやペガサス様はインダストリアルイリュージョン社の社内に部屋がある。

その為、案内はいらないがクロケッツさんの仕事を奪つ訳にもいかない。

「天道様。それでは私はこれで」

「ご苦労様」

クロケッツさんがお辞儀をして、部屋から離れる。

大抵、ペガサス様と共に居るクロケッツさんが離れる……何か重要な事でもあるのか？

「まあ、良いか。入ればわかる事だ」

会長室の扉を前にする。一瞬、あの夜の事を思い出して体が震える。

【大丈夫か？】

「あ、ああ」

心配するゴーズに返事を返す。

大丈夫……あんな事は2度と起こらない。

深呼吸をして、自分を落ち着かせる。

「失礼します」

ノックをした後、会長室に入った。



**番外編 遊戯王R 邪神を使う少年その？（前書き）**

過去編です。また、この小説内の邪神等は原作効果です。

また、主人公の口調が若干、安定してません。

番外編 遊戯王R 邪神を使う少年その？

世界的大企業海馬コーポレーション本社ビルのモニタールームには今1人の少年が居た。

その少年の顔には幼さがかなり残っており、体も小さめ。少年の年齢はおそらく9、10歳ぐらいだろう。どう見ても其処に居るのは場違いと思える。

尤も、海馬コーポレーションの社長は高校生、副社長は小学生なのだから、子供が海馬コーポレーションに居るのは別段珍しい光景では無いのかもしれないが……

その少年がモニタールームにあるマルチモニターにとある人物を確認して呟く様に言った。

「武藤遊戯……パパを倒した人……倒す……この邪神で……」

少年から発せられた声はとても低く、とても年相応の声とは思えなかった。

「行かないや……」

少年は振り返り、モニタールームを後にする。無人となったモニタールームには無機質な音がただ響いていた。

.....  
.....  
.....

今海馬コーポレーションの屋上には2人の青年が向かっている。

その内1人はヒトデを連想させる髪型が特徴的な青年……武藤遊戯。

もう1人は水色の髪に端整な顔の作りが特徴的な青年……天馬月行。

武藤遊戯は攫われた仲間真崎杏子を助ける為、天馬月行は弟達を邪神の呪縛から解き放つ為、この事件の元凶であり、月行の双子の弟の天馬夜行の居る屋上に向かっている。

「まさか敗者がこの階<sup>フロア</sup>にまでやってくるとはな……」

「……………」

その2人の前に謎の2人組が立ちふさがった。

「カード・プロフェッサー!？」

1人はインダストリアルイリュージョン社に雇われたカード・プロフェッサー シーダー・ミール。

「貴志!」

もう1人は天馬兄弟と同じくペガサスミニオンの天道貴志。

「何故だ!? 貴志、お前は私と共に夜行を止める為に動いて……まさか!」

月行は貴志を見るなり驚きの声を上げる。

何故なら、貴志は月行と共に夜行の愚行を止めようと動いていたからだ。

だが、月行はそこで1つの結論に至る。

自分は先程まで、邪神を通して夜行に操られていた。

邪神は全部で3体。夜行の持つ『邪神アバター』、自分が使った『邪神ドレッド・ルート』、そして後1体を貴志が持ち、その邪神を通して夜行に操られているという可能性がある。

しかし、その月行の考えは貴志の言葉により、打ち碎かれる事になる。

「兄さん、僕は月行兄さんと違って操られてないよ……ただ、考えが変わっただけ……僕がこの邪神で武藤遊戯に神罰を与える！」

その言葉にカード・プロフェッサーのシーダー・ミールが顔色を変えて言った。

「おいおい、それじゃあ俺の立場が無いだろ。俺が武藤遊戯の相手をするぜ」

シーダー・ミールの言う事は一理ある。

彼等13人のカード・プロフェッサーは武藤遊戯を倒す為に集められたからだ。

まあ、武藤遊戯と闘わずに散ったカード・プロフェッサーも6人程

居るのが……

自分の此処に居る理由を言ったシーダー・ミールを貴志は睨み付けた。

「うつ……」

ただ、睨み付けたただだが、その姿から放たれる気配は普通のものではなく、だいの大人のシーダー・ミールを怯ませた。

そんなシーダー・ミールから、武藤遊戯に視線を移した貴志が呟く様に言った。

「武藤遊戯を倒す事で得られる手柄も栄光も貴方にあげます。その代わり、貴方は月行兄さんと闘ってください」

文だけ見れば、お願いしている様に見えるが、実際には命令している様にしか捉えられない言い方だった。

「わ、分かった」

だが、シーダー・ミールは頷く事しかできなかった。

「さあ、デュエルです。僕達を倒さないと先に進めません。無視した場合は屋上に向かうエレベーターを破壊します」

その言葉と共に貴志とシーダー・ミールの後ろに黒服が現れる。

「待つん「悪いがあんたは俺と闘って貰う!」「くっ!」

月行が止めようとするが、シーダー・ミールが間に入って遮る。

【相棒！此処はオレが】

「（うん）もう一人のボクはこの後に控える闘いの為に体を休めていて。此処はボクが闘うよ」

【……分かった。頑張れよ相棒】

「（うん）さあ、デュエルだ！」

「デプレ兄さんを倒したそっちの遊戯ですか……ならば、貴方ももう一人の遊戯も倒す！」

「デュエル！！」

天道貴志

LP4000

武藤遊戯

LP4000

「先攻は貰います。ドロー！」

貴志は手札を見て少し考える素振りをした後、カードを手を取った。

「カードを2枚伏せてターンエンド」

天道貴志

LP4000 手札4枚

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 2

「ボクのターン！ドロー！（1ターン目からモンスターを出さない！？手札事故？それとも罫？でも、彼のデッキにはまだ見ぬ邪神がある。たとえ罫だとしてもここは！）ボクは『サイレント・マジシャン L V 4』を召喚して、バトル！『サイレント・マジシャン L V 4』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

遊戯の場に赤と黒を基調とした服を着ている魔術師が現れる。

『サイレント・マジシャン L V 4』

レベル4 光属性

魔法使い族・効果

攻撃力1000

守備力1000

『サイレント・マジシャン L V 4』が自分の手に持つ杖に魔力を溜め、その魔力を貴志に向けて解き放つ。

解き放たれた魔力は遮られる事なく、貴志に直撃して煙が立ち上る。

やがて煙が晴れると其処には、シールドの様な物に守られた貴志が先程と変わらず立っていた。

貴志

LP4000

「ライフが減ってない!？」

「トラップカード『ガード・ブロック』の効果で僕が受ける戦闘ダメージは0。更に僕はカードを1枚ドロ―!」

「くつ、相手がカードをドロ―した事により、『サイレント・マジシャン LV4』に魔力カウンターが1つ乗る。更に『サイレント・マジシャン LV4』は自身に乗っている魔力カウンター1つにつき、攻撃力が500ポイントアップ!」

『サイレント・マジシャン LV4』

魔力カウンター 1

攻撃力1000 1500

「カードを2枚伏せてターンエン」その瞬間、今伏せられたカード2枚を対象に、トラップカード『心鎮壺』を発動!このカードがフィールド上に存在する限り、選択された魔法・罠カードは発動できません」……ターンエンド」

天道貴志

LP4000 手札5枚



モンスター

無し

魔法・罫

『心鎮壺』

(永続罫。遊戯の伏せカード2枚を対象)

武藤遊戯

LP4000 3枚

モンスター

『サイレント・マジシャン LV4』

(攻撃力1500)

(魔力カウンター1)

魔法・罫

伏せ 2

(『心鎮壺』の効果により、発動不可)

「僕のターン、ドロー！」

「相手がカードをドローした事により、『サイレント・マジシャン LV4』に更に魔力カウンターが乗せられる」

『サイレント・マジシャン LV4』

魔力カウンター 1 2

攻撃力1500 2000

「僕は『キラー・トマト』 守備表示で召喚。カードを2枚伏せてターンエンド」

貴志の場に人面トマトが現れる。

『キラー・トマト』

レベル4 闇属性

植物族・効果

攻撃力1400

守備力1100

天道貴志

LP4000 手札3枚

モンスター

『キラー・トマト』

(守備力1100)

魔法・罨

魔法・罨

『心鎮壺』

(永続罨。遊戯の伏せカード2枚を対象)  
伏せ 2

武藤遊戯

LP4000 3枚

モンスター

『サイレント・マジシャン LV4』

(攻撃力2000)

(魔力カウンター2)

魔法・罨

伏せ 2

(『心鎮壺』の効果により、発動不可)

「ボクのターン！ドロー！ボクは手札から魔法カード『大嵐』を発動！フィールド上の魔法・罨カードを全て破壊する！」

「『サイクロン』が来ると思ってたんだけどなあ……カウンター罨発動！『神の宣告』！ライフを半分支払って『大嵐』の効果は無効にして破壊する！」

大きな竜巻がカードを吹き飛ばすべく現われたが、どこからともなく出てきた初老の男性が片手をかざすと竜巻は消えた。

天道貴志

LP4000 2000

貴志が『神の宣告』を使ったのを見て、遊戯は考える素振りを見せる。

「(ライフを半分支払ってでも、あの伏せカードは守りたいカード？いや、違う……彼は『サイクロン』が来るかと思っていたと言っ

ていた。さっきの状況で『サイクロン』を使ったとしても、破壊するのは『心鎮壺』の方だ。でも、彼の目的が『心鎮壺』を使った口ツクなら、さっきの『大嵐』をライフを支払ってまで防ぐ必要はない筈……もしかして、彼の目的はボクの場にカードを残す事？だとしたら、何の為に？まさか！？）

考えが纏まったのか、遊戯は意を決した様に手札のカードを手に取り、高らかにこれから使うカード名を宣言した。

「ボクは魔法『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロ―！」

ドロ―したカードを見て遊戯は僅かに表情を歪める。

「（違う。このカードじゃない！こうなったら、少しでもライフを削るしかない）ボクは『グリーン・ガジェット』を召喚！」

遊戯の場に手足と目が付いた緑色の歯車が現れる。

『グリーン・ガジェット』

レベル4 地属性

機械族・効果

攻撃力1400

守備力600

「更に『グリーン・ガジェット』が召喚に成功した事により、デッキから『レッド・ガジェット』1枚を手札に加える。そして、バトル！『グリーン・ガジェット』で『キラー・トマト』に攻撃！」

『グリーン・ガジェット』が右腕で『キラー・トマト』を殴り飛ばし、更にヘタの部分を掴んで持ち上げた後、地面に叩きつける。

『キラー・トマト』はぐちゃぐちゃに潰れて光となって消える。

「『キラー・トマト』の効果発動！戦闘で破壊され墓地へ送られた時、デッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚できる。僕は2体目の『キラー・トマト』を特殊召喚！」

ぐちゃぐちゃになった『キラー・トマト』を見た貴志が顔を顰めたが、新たなモンスターを出すべく、デッキから1枚のカードを取り出し、ディスクに置いた。

『キラー・トマト』

レベル4 闇属性

植物族・効果

攻撃力1400

守備力1100

貴志の場に2体目の『キラー・トマト』が現れるが表情は暗い。

その様子はまるで死刑執行を待つ死刑囚のようだ。

「『サイレント・マジシャン L V 4』で2体目の『キラー・トマト』に攻撃！サイレント・バーニング！」

遊戯の攻撃宣言の後、『キラー・トマト』はこうなりや自棄じゃあーと言わんばかりの形相で特効していき、当然の様に『サイレント・マジシャン L V 4』に破壊された。

天道貴志

LP2000 1400

「……『キラー・トマト』の効果でデッキから『クリッター』を特殊召喚」

特効した『キラー・トマト』を見た貴志は一瞬だけ表情を曇らせたが、直ぐに機を取り直して新たなモンスターを召喚した。

『クリッター』

レベル3 闇属性

悪魔族・効果

攻撃力1000

守備力600

「（もし、邪神の効果が想像通りなら、『心鎮壺』を破壊できるカードを引くまでは、これ以上カードを伏せない方が良い）ボクはそのままターンエンド」

天道貴志

LP1400 手札3枚

モンスター

『クリッター』

（攻撃力1000）

魔法・罫

『心鎮壺』

（永続罫。遊戯の伏せカード2枚を対象）

伏せ 1

武藤遊戯

LP4000 4枚

モンスター

『サイレント・マジシャン LV4』

(攻撃力2000)

(魔力カウンター2)

『グリーン・ガジェット』

(攻撃力1400)

魔法・罫

伏せ 2

(『心鎮壺』の効果により、発動不可)

「僕のターン、ドロー！」

「この瞬間、『サイレント・マジシャン LV4』に更に魔力カウンターが1つ追加される」

『サイレント・マジシャン LV4』

魔力カウンター 2 3

攻撃力2000 2500

「それがどうした！！僕は伏せていた永続罫『アポピスの化神』を発動！このカードは発動後、モンスターカードとなり、自分フィールド上に特殊召喚される。更に手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！墓地から『キラー・トマト』を特殊召喚！」

貴志の場に剣と盾を持った蛇の様モンスターと先程ぐちゃぐちゃに潰された『キラー・トマト』が元の人面トマトの姿に戻って現れた。

『アポピスの化神』

レベル4 地属性

爬虫類族 通常

攻撃力1600

守備力1800

『キラー・トマト』

レベル4 闇属性

植物族・効果

攻撃力1400

守備力1100

「3体のモンスター……まさか!!」

「そのまさかさ……3体のモンスターを生け贄に捧げ出でよ『邪神イレイザー』!!」

『クリッター』、『アポピスの化神』、『キラー・トマト』が背中合わせに立つと、3体が黒い竜巻に呑み込まれる。

黒い竜巻は徐々に大きくなり、やがて黒い竜の形になっていった。

フィールドに降臨した黒い竜は刺々しい羽根を広げて咆哮を上げる。

その咆哮は凄まじく、まるで海馬コーポレーション全体が揺れていると錯覚してしまう程だ。



咆哮が治まった後、貴志は高らかに宣言した。  
この邪神が貴方に神罰を与えると……

番外編 遊戯王R 邪神を使う少年その？（後書き）

邪神の種族はWikiを参考にした捏造です。

一応、三幻神の幻神獣族の対になるようにしました。

貴志

「てか、なんで俺の相方があれなんだ？」

鷹

「あまりにも彼が出オチの神に愛されてて可哀想だったからつい…」

貴志

「まあ、登場して2ページ後に俊殺されてるもんな」

鷹

「ちなみに流れとしては

シーダー・ミール登場

そのページの最後のコマでAIBOからATMに人格交代

次のページの半分くらいを使ってATMの『どけ!!』のコマ

次のコマで約1ページ半を使って『オシリスの天空竜』の攻撃を受けているシーダー・ミール。

その後、エピソードにすら出ないシーダー・ミール。

登場して6コマ後に倒されるカード・プロフェッサー（笑）+エピソードにすら出ない（泣）」

貴志

「ある意味最強だな（噛ませ犬として）」

番外編 遊戯王R 邪神を使う少年その？（前書き）

デュエルがぐだぐだに……なんとかして構成力を上げないと……

途中であれ？これっておかしくね？と思う所があると思いますが、原作（遊戯王R）通りの処理にただけなのでスルーしてください。

番外編 遊戯王R 邪神を使う少年その？

月行の表情には焦りの色が浮かんでいた。

早く貴志に真実を伝えてこの闘いを終わらせなければならない。

だが、伝えようと口を開くと目の前のカード・プロフェッサー、シ  
ーダー・ミールが悉く邪魔をする。

真実を伝える為には、何としてもこの男を倒さなければならない。

しかし、カード・プロフェッサーであるこの男は思いの外手強い。

今すぐには倒せない。

手間取っている内に貴志が邪神を出した。

咆哮を上げる邪神を見て月行は更に焦りの色を濃くした。

- - -  
- - -  
- - -

『邪神イレイザー』

レベル10 闇属性

邪神獣族・効果

攻撃力？

守備力？

「これが3体目の邪神……『邪神イレイザー』」

目の前に降臨した邪神を目の当たりにして遊戯が呟く様に言った。

「『邪神イレイザー』の本来の攻撃力と守備力は決まっていない。

『邪神イレイザー』の攻撃力と守備力は相手フィールド上に存在するカードの枚数×1000ポイントの数値となる」

『邪神イレイザー』

攻撃力0 4000

守備力0 4000

「攻撃力4000!?!」

遊戯はその事実を聞いて驚くが、同時に自分の仮説が半分だけ当たっている事に安堵した。

範囲や上昇するポイントが少々予想外だったが、先の『邪神アバター』や『邪神ドレッド・ルート』よりは対象しやすいと遊戯は思った。

「ああ、忘れる所だった。『クリッター』の効果でデッキから、『瞬着ボマー』を手札に加える」

カードを加えた貴志は遊戯の場のモンスターを見る。

「どつちにしようかな……決めた。『邪神イレイザー』で『サイレント・マジシャン LV4』に攻撃!ダイジェスティブ・プレス!」

攻撃力2500……かの有名な『ブラック・マジシャン』と同じ攻撃力を誇る『サイレント・マジシャン LV4』だが、攻撃力4000の神の前には抵抗すら許されずに破壊される。

そして、『サイレント・マジシャン LV4』が受けきれなかった攻撃の余波が遊戯を襲う。

「うわああああ!!!!」

武藤遊戯

LP4000 2500

【あ、相棒!!】

「はあ、はあ……ボクは大丈夫だよ。もう一人のボク」

このデュエル、遊戯は初めてライフを削られたが、通常のデュエルで受ける衝撃とは明らかに違う衝撃を受けた。

先程、遊戯はカード・プロフェッサーのデブレ・スコットとのデュエルで攻撃力3600の『グリッド・クエーサー』のダイレクトアタックを受けたが、その衝撃よりも遥かに大きいダメージを受けた。

神。いや、邪神の攻撃……ただそれだけで遊戯はライフだけでなく体力をも容赦なく削られる。

「相手のフィールド上のカードの数が変わった事により、『邪神イレイザー』の攻撃力も変わる」

『邪神イレイザー』

攻撃力4000 3000

「手札から魔法カード『天使の施し』を発動。デッキから、カードを3枚ドロワーして手札から、カードを2枚捨てる。カードを2枚伏せてターンエンド」

天道貴志

LP1400 手札1

モンスター

『邪神イレイザー』

攻撃力3000

魔法・罫

永続罫『心鎮壺』

(遊戯の伏せカード2枚を対象)

伏せ 2枚

武藤遊戯

LP2500 手札4枚

モンスター

『グリーン・ガジェット』

(攻撃力1400)

魔法・罫

伏せ 2枚

(『心鎮壺』の効果で発動不可)



「はあ、はあ……ボクのターン、ドロー！」

先程のターンで邪神の攻撃でダメージを受けた遊戯だが、痛む体に鞭打ちカードをドローする。

「ボクは『グリーン・ガジェット』を守備表示に変更」

『グリーン・ガジェット』

守備力600

「そして、カードを1枚伏せる」

「相手のフィールド上に存在するカードが増えた為、邪神の攻撃力は更に上がる！」

『邪神イレイザー』

攻撃力3000 4000

「ターン「今度は僕の伏せカードとそつちが今伏せたカードを対象に永続トラップ『心鎮壺』を発動！」2枚目の『心鎮壺』！？……くっ、ターンエンド」

天道貴志

LP1400 手札1

モンスター

『邪神イレイザー』

攻撃力4000

魔法・罫

永続罫『心鎮壺』？

（遊戯の伏せカード2枚を対象）

永続罫『心鎮壺』？

（遊戯と貴志の伏せカード1枚ずつを対象）

伏せ 1

（『心鎮壺』の効果で発動不可）

武藤遊戯

LP2500 手札4枚

モンスター

『グリーン・ガジェット』

守備力600

魔法・罫

伏せ 3

（『心鎮壺』2枚の効果で3枚とも発動不可）

「僕のターン、ドロー！僕は『瞬着ボマー』を攻撃表示で召喚！」

貴志の場に鉤爪の様な物を付けている球体の爆弾モンスターが現れる。

『瞬着ボマー』

レベル3 風属性

機械族・効果

攻撃力1000

守備力1000

「武藤遊戯……貴方が先程伏せたカードは十中八九、1枚目の『心鎮壺』を破壊するカードだった筈。それを封じた今、僕の勝利を遮るカードは無い！バトル！『瞬着ボマー』で『グリーン・ガジェット』に攻撃！」

螺旋回転した『瞬着ボマー』が『グリーン・ガジェット』を貫く。

『邪神イレイザー』

攻撃力4000 3000

「『邪神イレイザー』の攻撃力が下がったけど、ライフを削りきるには十分。バトル！『邪神イレイザー』でダイレクトアタック！ダイエスティブ・プレス！！」

邪神が放った漆黒のプレスは遊戯を包み込んだ。

「ペガサス様……やりました。武藤遊戯を打ち倒す事ができました」

「それは……どうかな？」

「えっ？」

武藤遊戯

LP2500

邪神の攻撃でできた煙が晴れると其処には遊戯が変わらずに立っていた。

そして、そのまわりには沢山の茶色の毛玉のようなモンスターが居た。

「ボクは手札の『クリボー』を墓地へ捨てて、効果発動！ボクへの戦闘ダメージ0にする！」

「ぐう……カードを1枚伏せてターンエンド」

貴志は一瞬表情を歪めたが、この現状で邪神を越えられる訳が無いと思ひ直し、ターンを終了した。

しかし、念には念を入れる事は忘れずに……

天道貴志

LP1400 手札0

モンスター

『邪神イレイザー』

攻撃力3000

『瞬着ボマー』

攻撃力1000

魔法・畏

永続畏『心鎮壺』？

（遊戯の伏せカード2枚を対象）

永続畏『心鎮壺』？

（遊戯と貴志の伏せカード1枚ずつを対象）

伏せ 2

（内1枚は『心鎮壺』の効果で発動不可）

武藤遊戯

LP2500 手札3枚

モンスター

無し

魔法・畏

伏せ 3

（『心鎮壺』2枚の効果で3枚とも発動不可）

「ボクのターン！ドロー！ボクは魔法カード『天使の施し』を発動！3枚ドローして、2枚捨てる。そして、魔法カード『ハリケーン』を発動！フィールド上の魔法・畏カードを全て手札に戻す！」

「読み通り……カウンタートラップ『魔宮の賄賂』発動！『ハリケーン』の発動は無効になり、破壊される！」

「くっ……でも、ボクは『魔宮の賄賂』の効果でカードを1枚ドロ！……魔法カード『光の護封剣』を発動！」

貴志の場に天から光の剣が降り注ぐ。

「『光の護封剣』……僕のフィールド全体に影響のある魔法……邪神でも攻撃できないか。でも、邪神の攻撃力は上がる」

『邪神イレイザー』

攻撃力3000 4000

「モンスターをセットしてターンエンド！」

「邪神の攻撃力は更に上がる」

『邪神イレイザー』

攻撃力4000 6000

天道貴志

LP1400 手札0

モンスター

『邪神イレイザー』

攻撃力6000

『瞬着ボマー』

攻撃力1000

魔法・罫

永続罫『心鎮壺』？

（遊戯の伏せカード2枚を対象）

永続罫『心鎮壺』？

（遊戯と貴志の伏せカード1枚ずつを対象）

伏せ 1

（『心鎮壺』の効果で発動不可）

武藤遊戯

LP2500 手札0

モンスター

伏せ 1

魔法・罫

『光の護封剣』

伏せ 3

(2枚の『心鎮壺』の効果で発動不可)

「僕のターン、ドロー！」

貴志はドローしたカードを見て、ニヤリと笑った。

「武藤遊戯……『光の護封剣』を使って時間稼ぎも許されないみたいだね。僕は『邪神イレイザー』を生け贄に捧げる！」

「邪神を……生け贄に？」

『邪神イレイザー』が風を纏うと徐々に地に沈んで行く。

それと同時に『光の護封剣』や『瞬着ボマー』等のフィールド上のカードも共に沈んで行く。

「これは……一体？」

「『邪神イレイザー』が墓地へ送られる時、フィールド上のカードは全て道連れになる！」

「なんだって!?!」

フィールド上のカード全てが邪神と共に消えた後、1体のモンスターが天から舞い降りた。

『神禽王アレクトール』

レベル6 風属性

鳥獣族・効果

攻撃力2400

守備力2000

「バトル! 『神禽王アレクトール』でダイレクトアタック!」

『神禽王アレクトール』の両拳が遊戯を襲つ。

「くっ、うわぁぁああ!?!」

武藤遊戯

LP2500 100

「ターンエンド」

天道貴志

LP1400 手札0



モンスター

『神禽王アレクツール』

攻撃力2400

魔法・罾

無し

武藤遊戯

LP100 手札1

モンスター・魔法・罾

無し

「ボクのターン……カードを1伏せてターンエンド」

天道貴志

LP1400 手札0

モンスター

『神禽王アレクツール』

攻撃力2400

魔法・罾

無し

武藤遊戯

LP100 手札1

モンスター

無し

魔法・罫

無し

「ボクのターン！ドロー！バトル！これで終わりだ！『神禽王アレクトール』でダイレクトアタック！」

「トラップ発動！『攻撃の無力化』！」

『神禽王アレクトール』の攻撃は渦によって阻まれた。

「何で？」

攻撃を防いで一息付いた遊戯に対して貴志が呟く様に言った。

「何で？なんで諦めずに向かって来れるの？」

この疑問はさつきから、貴志の中で沸き上がっていたもの。

貴志は邪神が出たにも拘らず、諦めずに戦う遊戯の姿を見てそう思い初めていた。

「デュエリストたる者。デッキにカードが有る限り、諦める訳にはいかないんだ！」

遊戯の気迫に貴志は気圧される様に引く。

「それにボク達は大切な人を助けだす為に闘っている！ボク達はそ  
の人を助けだすまで、立ち止まって居られないんだ！」

「僕達だって……僕達だって大切な人、ペガサス様の為に闘ってい  
る！」

「でも、それは他の人を犠牲にした上での事。そんな事は間違ってい  
る！」

「っ！うるさい！うるさい！うるさい！」

遊戯に指摘されると、だだっ子の様に貴志は反論した。

「たとえ間違っても僕達はペガサス様を蘇らせる！その前にペガ  
サス様の負の遺産は精算する！僕は墓地の『キラー・トマト』と『  
瞬着ボマー』をゲームから除外して、手札の『ダーク・シムルグ』  
を特殊召喚！」

貴志の場に彼が最も信頼する闇の力を纏った神鳥が現れる。

『ダーク・シムルグ』

レベル7 闇属性

鳥獣族・効果

攻撃力2700

守備力1000

「ターンエンド！」

「ボクのターン……」

遊戯は静かにカードをドロウした。

番外編 遊戯王R 邪神を使う少年その？（後書き）

貴志

「なあ作者。俺の性格が無茶苦茶過ぎる気がするんだが？」

鷹

「……邪神を使った影響だ。そのせいで、若干情緒不安定になっているんだ」

貴志

「お前なあ、適当過ぎるだろ」

鷹

「うるさい。キースみたいにかいつシンナーでも、吸ってんのか？  
みたいにしないでくださいだろ」

貴志

「確かにあんな顔芸みたいにはなりたくないが……いまいち釈然としないな」

鷹

「……さて、前書きで書いた原作通りの処理についてですが、イレイザーの生け贄についてです。」

原作ではイレイザーを生け贄にした場合、先に墓地に送られたイレイザーの効果発動後、モンスターの召喚が行われていたので、そういう処理にしました。

因みに原作版のイレイザーは、場から墓地に行くと効果が発動した

み  
た  
い  
で  
す。

番外編 遊戯王R 邪神を使う少年その？（前書き）

制裁デュエルの時と同様、デュエルが短め、その後オマケという名のメインに……

デュエルが短くなるのは分かっていたから、前の話に入れれば良かったと後悔中（――）

番外編 遊戯王R 邪神を使う少年その？

天道貴志

LP1400 手札0

モンスター

『神禽王アレクツール』

攻撃力2400

『ダーク・シムルグ』

攻撃力2700

魔法・罾

無し

武藤遊戯

LP100 手札1

モンスター・魔法・罾

無し

おそらく次の遊戯のターンは回ってこない。

『ダーク・シムルグ』が居る限り遊戯はカードをセットできない。

たとえ遊戯が『聖なるバリア・ミラーフォース』を引いたとしても、伏せる事すらできない。



戦闘で破壊されない効果を持つ『マシユマロン』を引いて守備表示で出しても、『神禽王アレクトール』の効果で『マシユマロン』の効果が無効にされた後、2体の攻撃で遊戯のライフは尽きる。

そして、遊戯の最後の手札は『融合』……この状況では全く意味がないカードだ。

「ボクのターン……ドロー！」

そんな状況下でも遊戯は諦めずにデッキからカードをドローする。

引いたカードを見た遊戯は、口元に笑みを浮かべた。そして、そのカードのカード名を言いながら、ディスクにプレイした。

「魔法カード『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードをドローする！」

「そんな……この土壇場で……『天よりの宝札』を引くなんて」

貴志は明らかに驚き、狼狽えている。

だが、貴志の反応は当然の事なのかもしれない。

遊戯のデッキはまだ20枚以上はある。

そんな中、『天よりの宝札』がデッキの1番上にある確率はかなり低い。

デッキを心の奥底から信頼し、尚且つ絶対絶命の状況でも諦めなかった遊戯が起こした奇跡とも言っていい事だ。

「ボクの手札は1枚。よってカードを5枚ドロ―！」

「ぼ、僕の手札は0枚。だから、カードを6枚ドロ―！」

これで貴志と遊戯の手札はお互いに6枚。

フィールド上では貴志が圧倒的に有利だが、流れは完全に遊戯の方に傾いている。

「ボクは魔法カード『死者蘇生』を発動！蘇れ『サイレント・マジシャン L V 4』！！！」

遊戯の場に描かれた魔方陣から、小さな魔術師が再び姿を現す。

『サイレント・マジシャン L V 4』

レベル4 光属性

魔法使い族・効果

攻撃力1000

守備力1000

「更に魔法カード『レベルアップ！』を発動！このカードの効果で

『サイレント・マジシャン L V 4』はL V 8へと進化する！」

『サイレント・マジシャン L V 4』をまばゆい光が包み込み、辺り一面も光だけとなる。

そして、光が晴れると先程まで『サイレント・マジシャン L V 4』が居た所には、一人前に成長した1人の魔術師が居た。

『サイレント・マジシャン』 L V 8  
レベル 8 光属性  
魔法使い族・効果  
攻撃力 3500  
守備力 1000

「攻撃力 3500!! クシルと『神禽王アレクトール』を上回った!?」

遊戯はクスルという呼び名に一瞬首を傾げたが、直ぐにあの『ダーク・シムルグ』の事だろうとあたりをつける。

そして、このデュエルを終わらせる為にバトルを開始する。

「バトル! 『サイレント・マジシャン』 L V 8 で『神禽王アレクトール』に攻撃! サイレント・バーニング!」

『神禽王アレクトール』が貴志と『サイレント・マジシャン』 L V 8 の間に立ちふさがり、『サイレント・マジシャン』 L V 8 の攻撃を受ける。

その姿は主を守る為の行いに見えない事もなかった。

「くっ、っ」

天道貴志

LP 1400 300

「はぁはぁ……まだライフは残ってる!」

「いや……このデュエルはこのターンで終わらせる！速攻魔法発動！『デイメンション・マジック』！『サイレント・マジシャン LV8』を生け贄に手札から『闇紅の魔導師』を特殊召喚！」

『サイレント・マジシャン LV8』が棺桶の様な物の中に消え、入れ替わるように赤黒いローブを身に纏っている魔導師が現れる。

『闇紅の魔導師』

レベル6 闇属性

魔法使い族・効果

攻撃力1700

守備力2200

『デイメンション・マジック』を使われた時、貴志は自分が負ける事が分かった。

いや、『天よりの宝札』を使われたあの時に、デュエリストとしての本能が伝えていたのかもしれない。

「『デイメンション・マジック』の効果には続きがある。それはモンスターを特殊召喚した後に、フィールド存在するモンスター1体を破壊できる。ボクは『ダーク・シムルグ』を破壊する！」

『闇紅の魔導師』が杖に魔力を蓄める。

それを見た『ダーク・シムルグ』は遊戯の方に背を向けながら、己の翼で貴志をやさしく包み込んだ。

やがて、魔力を蓄め終わった『闇紅の魔導師』が魔力を解き放ち、『ダーク・シムルグ』を破壊する。

「…………バトル！『闇紅の魔導師』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「クシル…………ごめん」

天道貴志

LP3000

- - -  
- - -  
- - -

・インダストリアルイリユージョン社のある場所・

「……………」

3枚のカードがピラミッド形に安置されているショーケースの前で、  
師匠と初めてデュエルした時の事を思い出す。

思い出せば出す程、自分が無礼な事ばかりしていたと分かる。

邪神の力で負の感情が増長していたとはいえ、あれは酷かった。

今更だが、そんな俺をよく弟子にしてくれたなと思う。

あの時、何故かは分からないが、城之内さんや本田が師匠を後押し  
してくれたから、俺は師匠の弟子になれた。

何故、2人が師匠を後押ししたのかは謎のままだ。

それと、クシル達と触れ合える様になったのも、初めて師匠とデュエルした後からだった。

5年前のあの時、夜行義兄さんや月行義兄さん、俺、キースが纏っていた邪神の力の殆どは俺の中に宿った。

ペガサス様が生きていたという事で負の感情が消えていたから、感情のコントロールができなくなるという事も無かった。

それよりも、ペガサス様が生きていた事や邪神の力で実体化できる様になったクシル、新たに精霊となったアレクと触れ合える様になって嬉しかった。

邪神の力は日に日に大きくなっていったが、アテム師匠の記憶の世界でマルスと会って、無理矢理弟子にされた後は、完全に邪神の力をコントロールできる様になった。(それで、マルスに預けている力も合わせれば本意極まりない事ができる様になっただけ……)

その時にマルスから受けた説明で、何で俺に邪神の力が宿ったのかという疑問も氷解した。

つと、思い出に浸るのも悪くはないけど、此処に来た目的を果たさない。

ショーケースの端の方にあるカードキーを差し込む場所に、専用のカードキーを差し込み、15桁のパスワードを打つ。

その後の様々なロックを解除して、やっとショーケースの中のカー

ドが取り出せる様になる。

ピラミッド形の頂点に安置されている『ラーの翼神竜』のコピーカード以外の2枚……『邪神ドレッド・ルート』と『邪神イレイザー』のカードを手に取る。

「三幻魔か……できたら、復活して欲しくはないな」

ペガサス様に呼び出された俺は、俺が通うデュエルアカデミア本校の地下に封印されているカードについて聞かされた。

三幻魔……三幻神には及ばないものの、下手をすればデュエルモンスターズそのものが滅びかねないカード。

そのまま封印されたままなら良いが、つい先日、三幻魔を付け狙う輩が居るといふ情報が入った。

もし三幻魔が復活した場合、再び三幻魔を封印する為には、三幻魔を越える圧倒的な力で三幻魔を倒さなければならぬ。

だが、三幻魔を越える力を持っているのは、三幻神と海馬さんが持っている『青眼の光龍』、それに三幻神を越える三邪神（正確には二邪神だが……）のみ。

越える力を持っている可能性があるのが、エドが捜し求めている究極のDのカードとヨハンが捜し求めている究極宝玉神のカードだけ……

そして、三幻神はもうこの世に存在せず、海馬さんとエドには精霊に関する力は無いと言っている。

海馬さんとエドは何か特別な事が無い限り、カードが持つ精霊の力は引き出せない。

つまり、現状では幻魔を倒し封印できるのは邪神のみ。

その上、邪神のカードを神の力を持つカードとして扱えるのは、この世では邪神の力を取り込んだ俺だけ……

ペガサス様は三幻魔を復活させる輩との闘いは十中八九、闇のゲームになり、その事を俺に託す事になるのを悔やんでおられた。

だが、三幻魔を付け狙う輩が居る限り、ペガサス様の心労になるのは確実。

それなら、俺は三幻魔を付け狙う輩を倒すだけ……

それが、俺の居場所を作ってくれたペガサス様への恩返しになる。

それに三幻魔が復活し、野放しにした結果、クシル達と離れる事になるのも絶対に嫌だ。

十代達という友の為にというも少しだけ、ほんの少しだけはあるけど。

……さてと、後はゴーズ達の帰り待つだけか。

ゴーズ達は冥界で修行中のマルス呼びに行かせた。

マルスに預けている力を返して貰わないといけない……それに、性



格がちよつとアレだけど、マルスが居るととても心強い。  
尤も、またデッキを組み直さないといけなくなるけど……

墓地にカードを送るのと除外されているカードを再利用するカード  
を探しださないとな。

久しぶりに近くのカードショップに行くかな。

確か、新しいパックが出てた筈だし……

第25話 冬休みその？（前書き）

冬休みその？です。

デュエル内容を書いている途中に方針転換したら、こんな結果に……  
どうしてこうなった。

## 第25話 冬休みその？

「むむむ」

【何がむむむだ！】

「いや、デッキを改造してんだから、悩むのはしょうがないだろ」

【今のマイブラザーは、あーでもないこーでもないやっぱりこつちを外すか、だけどそっちのカードもなあーと独り言を呟く危ない人に見えんだよ】

「一晩中？何を言っ……あれ？」

またバルンを焚くからという理由で、此処に居たゴースの言葉を聞いて時計を見ると既に朝の7時になっていた。

デッキの改造を始めたのって確か、昨日の夜9時くらいからだったと思うんだが……

「外は……もう明るいや……」

カーテンを開いて外を見るとやはり明るい。

マルスが戻ってきた事や昨日手に入ったカードの中に、見えそうなカードがそれなりにあったから、つつい没頭してたな。

まあ、ある程度デッキのカードは固まってきたが、まだまだだな。

【マスター。無理をなさらずに、お休みになられた方が宜しいのでは？】

「マルスカ、俺は大丈夫だ。それと、前から言ってるが、俺に敬語を使うな。そして、マスターも止めてくれ。背中がむず痒くなる」

闇の力についてはマルスに教えて貰った事が多い。

つまり、マルスも師の様なものだからな……もう一つここ最近でハッキリと確信した別の理由もあるけど……

さてと、デツキの改造を再開するか……

「えーと、墓地落としのカードは……」

【この箱の中でしょうよ】

【これは、私やクシルの様に墓地のカードを除外するものと除外されたカードに関係のあるカードが入ったカードで……だ】

「ん、ありがとう」

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「だいたいこんな感じかな。時間は……もう昼か」

この後はどうしようかな？

眠気は全く無いし、せつかくデッキができたんだから、早く試したいんだけど……

月行義兄さんや夜行義兄さんの時間が開いてれば、昨日のリベンジをしたけど、2人は忙しいだろうし……

リッチー義兄さんやデブレ義兄さんが帰って来てるから、2人を探そうかな。

今日の行動方針を決めて、実行に移そうとしたら、ドアがノックされた。

「誰だろ？」

またチビ達が遊びに来たのかと思いながら、ドアを開けると月行義兄さんが居た。

「義兄さん、どうかしたんですか？」

「ちょっと手伝って欲しい事があってね。時間は空いてるかい？」

この時期に月行義兄さんが頼み事をするって事は、多分、新しいカードのテストだな。

「丁度空いた所ですよ」

テストデュエルじゃ、いくつかある決められたデッキを使うから、自分のデッキは使えないけど、こういう時はリッチー義兄さん達も新しいカードのテストをしてるから、時間を潰す意味でも、カードの知識を蓄える意味でも、良い事だろう。



「デュエル!!」

俺 LP4000

月行 LP4000

「先攻は私が貰う!私のターン、ドロー!私は『E・HERO レ  
デイ・オブ・ファイア』を守備表示で召喚!」

月行義兄さんの場に赤と白の衣装に身を包んだ女性のヒーローが現  
れる。

『E・HERO レデイ・オブ・ファイア』

レベル4 炎属性

炎族・効果

攻撃力1300

守備力1000

E・HEROって事は新しいカードはE・HERO中心か……融合  
モンスターもあるのかな?シンクロや低いけど儀式モンスターって  
可能性もあるかもだけど。

「カードを1枚伏せてターンエンド!そして、『E・HERO レ  
デイ・オブ・ファイア』の効果発動!自分ターンのエンドフェイズ  
時に、自分フィールド上の『E・HERO』と名のつくモンスター  
の数×200ポイントのダメージを相手に与える!」

『レデイ・オブ・ファイア』が両手に炎を集め、集まった炎の塊を  
俺に向かって放つ。

「ぐっ！」

見かけ倒しの炎だが、しっかりと俺のライフは削られる。

俺

LP 4000 3800

月行

LP 4000 手札 4枚

モンスター

『E・HERO レディ・オブ・ファイア』

守備力 1000

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン！ドロー！俺は『クルセイダー・オブ・エンディミオン』を攻撃表示で召喚！」

俺の場に青い手甲を両腕に付け、青い服を身につけている魔術師が現れる。

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』

レベル 4 光

魔法使い族・デュアル

攻撃力 1900



守備力1200

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』……デュアルモンスターである為、効果は使えないが、レベル4以下の魔法使い族モンスターの中では高い攻撃力を持つモンスター。

このモンスターなら、容易にあのモンスターを破壊できるけど、あの伏せカードが気になるな。

攻撃反応型かそれとも……気にしてもしようがないか。

あの伏せカードが『ミラーフォース』や『攻撃の無力化』だったとしたら、貴重なトラップを序盤で使わせたとさえ思えば良い。

消されても、この2枚で攻撃を防ぎ、この1枚で次のターンに反撃できる。

まあ、なんにせよこれを使うのは変わらないな。

「更に永続魔法『魔法族の結界』を発動！そして、バトル！『クルセイダー・オブ・エンディミオン』で『E・HERO レディ・オブ・ファイア』に攻撃！」

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』が右腕で『E・HERO レディ・オブ・ファイア』を殴り倒す。

お前……魔法使い族なのに、殴って攻撃すんのかよ！と思ってしま  
うな。

「私はこの瞬間、トラップカードを発動。『ヒーロー・シグナル』

！効果により、私はデッキから『E・HERO フォレストマン』  
を守備表示で召喚！」

『E・HERO フォレストマン』

レベル4 地属性

戦士族・効果

攻撃力1000

守備力2000

空に上がったHのシグナルに反応するかの様に、体の一部が木で  
きているヒーローが現れた。

「『E・HERO フォレストマン』って事は義兄さん……まさか  
とは思うけど、『ジ・アース』は入って無いよね？」

「……………」

目を背けたって事はあるんだ。

宇宙をモチーフにした世界に1枚ずつしか無いシリーズごと、プラ  
ネットシリーズ。

あのシリーズは、カード・プロフェッサーの上位ランカーが持つて  
いるカードなんだけど、『ジ・アース』は誰もHEROデッキを使  
わないから、省られたんだよね……

まあ、こんな形だけど、使われる時が来たのは良い事だ……多分。

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

月行義兄さんは色々なデッキを使いこなせる。

昨日、月行義兄さんの息抜きでデュエルしたら、『タイム・イーター』、『端末世界』や『フエンリル』、『覇者の一括』、『ドレイン・タイム』等が中心のデッキを使って、俺は見事に術中にはまり、エンドフェイズしかできなかつたし……あれは本当に心が折れかけた。

……脱線してしまったな。まあ、とにかく油断できないな。

俺

LP3800 手札3枚

モンスター

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』

攻撃力1900

魔法・罫

『魔法使い族の結界』

永続魔法

伏せ 1

月行

LP4000 手札4枚

モンスター

『E・HERO フォレストマン』

守備力2000

魔法・畏  
無し

「私のターン、ドロー！スタンバイフェイズに『E・HERO フ  
オレストマン』の効果発動！デッキまたは墓地から『融合』を手札  
に加える。当然、私はデッキから、『融合』を加える。そして、『  
E・HERO エアーマン』を召喚！」

- - -  
- - -  
- - -

「むっ、何故か今、呼ばれた気がする」

- - -  
- - -  
- - -

月行義兄さんの場に両翼にプロペラの様なものを付けたヒーローが  
現れる。

『E・HERO エアーマン』  
レベル4 風属性  
戦士族・効果  
攻撃力1800  
守備力300

「『E・HERO エアーマン』の効果発動！このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、このカードは2つの効果の内、1つを発動できる！1つ目の効果は、自分フィールド上に存在するこのカード以外の『HERO』と名のついたモンスターの数まで、フィールド上に存在する魔法またはトラップカードを破壊する。2つ目の効果はデッキから、『HERO』と名のついたモンスター1体を手札に加える。私は1つ目の効果を発動し、デッキから、2枚目の『フォレストマン』を手札に加える」

『E・HERO エアーマン』か……サーチと破壊効果を持つてるって面倒なカードだな。

「私は魔法カード『R-ライトジャスティス』を発動！貴志の場の『魔法使い族の結界』と伏せカードをを破壊する！」

2つのRのシグナルに俺の場の『魔法使い族の結界』と伏せていた『聖なるバリア-ミラーフォース-』が破壊される。

ちよつと、ヤバイな。

「良いカードを破壊できたね。更に私は魔法カード『融合』を発動！場の『E・HERO エアーマン』と手札の『E・HERO クノスぺ』を融合！融合召喚『E・HERO ガイア』！」

月行義兄さんの場に大地から、巨大なヒーローが現れる。

『E・HERO ガイア』レベル6 地属性

戦士族・融合/効果

攻撃力2200

守備力2600

「『E・HERO ガイア』は『E・HERO』と名のついたモンスターと地属性モンスターを融合素材とする大地を司るヒーローだ。そして、このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力を半分にし、その数値分攻撃力をアップする！」

『E・HERO ガイア』がその豪腕を地面に叩きつけると、地面から出てきた地の柱が『クルセイダー・オブ・エンディミオン』を襲った。

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』  
攻撃力1900 950

『E・HERO ガイア』  
攻撃力2200 3150

あれ？これ、もう終わりだと思われるが、そうは問屋が下ろさない！

テスト用デッキには何故このカードが？と思ってしまうカードが入っている。

このデッキは魔法使い族を中心に構築されたデッキだが、『クリボー』が2枚入っている。

そして、俺の手札には『クリボー』が1枚。そして、『カオス・ソーサラー』も来ている。

『E・HERO ガイア』の攻撃の時に『クリボー』の効果を使って、戦闘ダメージを防ぐ。次のターンで『クルセイダー・オブ・エ

ンディミオン』と『クリボー』を除外して『カオス・ソーサラー』を特殊召喚。そして、『カオス・ソーサラー』の効果で『E・HERO ガイア』を除外すれば、このデュエルの勝敗はまだまだ分からない。

【マイブラザー……それはフラグってやつだぜ】

【私もそう思う】

何だと？

「私は魔法カード『融合回収』を発動！墓地から『融合』と『E・HERO エアーマン』を手札に加える。更に手札に加えた『融合』を発動！場の『E・HERO フォレストマン』と手札の『E・HERO エアーマン』を融合！『E・HERO Great TORNADO』を融合召喚！」

吹き荒れる暴風と共に、漆黒のマントを身に纏っているヒーローが現れる。

『E・HERO Great TORNADO』

レベル8 風属性

戦士族・融合/効果

攻撃力2800

守備力2200

「『E・HERO Great TORNADO』は『E・HERO』と名のついたモンスターと風属性モンスターを融合素材とする風を司るヒーロー。そして、『E・HERO Great TORNADO』が融合召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示

で存在するモンスター全ての攻撃力・守備力を半分にする！ダウン・バースト！」

『E・HERO Great TORNADO』が巻き起こす暴風が容赦なく『クルセイダー・オブ・エンディミオン』を襲つ。

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』

攻撃力 950 425

守備力 1200 600

【【フラグ回収乙】】

うるさい！

「貴志、確か、そのデッキには『クリボー』が2枚入っていたね。此処は念には念を入れさせて貰うよ！魔法カード『ミラクル・フュージョン』発動！墓地の『E・HERO エアーマン』と『E・HERO レディ・オブ・ファイア』をゲームから除外して、『E・HERO ノヴァマスター』を融合召喚！」

月行義兄さんの場に今度は炎を纏うヒーローが現れる。

『E・HERO ノヴァマスター』

レベル 8 炎属性

戦士族・融合/効果



攻撃力2600  
守備力2100

義兄さん、深読みし過ぎだよ……………

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』が可哀想過ぎる。

「バトル！『E・HERO ノヴァマスター』で『クルセイダー・オブ・エンディミオン』に攻撃！」

様々な自然災害？にあった『クルセイダー・オブ・エンディミオン』には既に抵抗する力が無く、無抵抗のまま破壊される。

「ぬおおおおお！！！」

俺

LP3800 1625

「『E・HERO ノヴァマスター』の効果発動！戦闘で相手モンスターを破壊した場合、カードを1枚ドローする！そして、『E・HERO Great TORNADO』と『E・HERO ガイア』でダイレクトアタック！」

月行義兄さんの号令と共に俺目がけて襲い掛かってくる竜巻と柱……こうなったら、自棄だ！

「手札の『クリボー』を墓地へ捨てて、効果発動！戦闘ダメージを1度だけ、0にする！」

俺の前に現れた無数の『クリボー』が先に俺に襲い掛かって来た竜巻を防ぐが、柱は防げずに、柱は俺に直撃する。

「うわぁああああ!!」

俺

LP1625 - 1525

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

俺がフルボッコになった後、何度かデュエルしたが、分かった事がある。

『Zero』が酷過ぎる事と、『Zero』と『ジ・アース』は並べるなという事が。

後、どうでも良いが、『The シャイニング』と『シャイニング・フレア・ウイングマン』と『シャイニング・フェニックス・ガイ』の3体は並べちゃ駄目だ。

眩しくてフィールドが見えなくなる。

という感じでテストデュエルを重ねていると、デプレ義兄さんが慌てた様にやってきた。

無口、無表情のデプレ義兄さんが慌てるとは珍しい。

「大変だ……夜行が変になった」

「夜行義兄さんが変になった？」

「ああ、取り敢えず……ついて来てくれ」

デプレ義兄さんについて行って、第2デュエル場に着くと、其処には……

「ぐっ……クソッ！」

デュエルに敗れたであろうリッチー義兄さんと

「こんなんじゃないやあ満足できねえ！この俺を満足させてくれる奴は居ねえのか！ヒャーハハハハハ！」

デプレ義兄さんの言葉通り、変になった夜行義兄さんが居た。

第25話 冬休みその？（後書き）

貴志

「デュエル内容は置いとくが、最後のあれは何だ？」

鷹

「あれは、この小説を書くにあたり、特に書きたい事の1つだ」

貴志

「使うデッキの予想がつくが、回せるのかお前？」

鷹

「OCGから離れて久しいから、絶対に無理。だから、TF6とかでデッキを作ったり、CPUのデッキを見たりして研究してくる」

貴志

「これが、あれを書きただけで進んだ者の末路か……」

鷹

「しるわさー」

## 第26話 冬休みその？前編（前書き）

TF6でインフェルニティデッキを作ったけど、結構戦いやすいですね……メインにしようかな。

最後に少し妙なアンケートを実施するので、良かったら、投票してください。

## 第26話 冬休みその？前編

「デブレ義兄さん、何故夜行義兄さんは、あんな厨二病患者みたいになったんですか？」

「よくは分からない……だが、デツキを持った瞬間、何かに取り憑かれた様に夜行が豹変した」

「デツキを持った瞬間に豹変したなら、デツキを取り上げたら良いんじゃないのか？」

「やったが……あの通りだ」

月行義兄さんの提案にデブレ義兄さんは首を横に振ってある所を指差した。

指差した先には……

「……………ぐふっ」

「うう……………」

「……………」

「きゅっ」

インダストリアルイリュージョン社が誇るSPの皆様が倒れていた。

「まさか全員夜行義兄さんが？」

「そうだ」

「ふむ。取り敢えず、全員減給だな」

月行義兄さん……あなた鬼ですか？

まあ、今はSPの皆様の事は置いて、夜行義兄さんをどうするかだ。

マルスが何も言わないという事は、闇の力は関係していない筈。

俺自身、夜行義兄さんから闇の力を感じない。

尤も、俺の場合、感知に関してはアテにならないが……

デプレ義兄さんが言った様にデッキを持ってから、ああなったのなら、あのデッキを取り上げたら、元に戻りそうだが、少々、骨が折れそうだ。

【はっ！そうか、そういう事か！】

考え事をしているといきなりゴーズが何かを閃いた様に声を上げた。

「（ゴーズ、何か分かったのか？）」

闇の力が増えれば、テレパシーの様なものでマルス達と話せるので、そちらでゴーズに聞く。

【おそらく今、夜行の奴にはデュエルに満足できずに散って行ったデュエリストの霊が取り憑いているに違いない！】

「(そんな訳あるか!!とも言えない事もない……な)」

現に、マルスやゴーズの様な存在がこの世に居るわけだし……しかも、マルスに至っては真正銘の霊みたいなものだ。

肉体を持たない霊の1つや2つが現世に留まり、誰かに取り憑いてもおかしくない。

【今、何か失礼な事を考えませんでしたか?】

「(き、気のせいだよ気のせい)」

何で分かるんだよ!思うだけで止めたのに!

「さあ!次の相手はどいつだ!?こんなんじゃあ俺は満足できねえぜ」

さて、仮に霊が取り憑いているとして、成仏させるならこの場合はデュエルで勝てば良いのか?

リッチー義兄さんが負けても、変化は無かったみたいだし。

「月行義兄さん、デプレ義兄さん。俺が夜行義兄さんとデュエルをするので、お二人は病院の手配とリッチー義兄さん達を離れた所に連れて行ってください」

「分かった」

「頼んだ……」



二人がいつの間にか気絶していたリッチー義兄さんとSP達を連れていったのを確認して、夜行義兄さんの方を向く。

「お前が次の相手か？」

「そつだ」

「良いだろう。今度はこの俺を満足させてくれよ」

「「デュエル！」」

俺 LP4000

夜行 LP4000

「先攻は貰う。ドロー！」

最初は……様子見だな。

「モンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンド」

俺

LP4000 手札4枚

モンスター

伏せ 1

魔法・罾  
伏せ 1

夜行義兄さんが使っているデッキも、シリーズ物と見て間違いない筈。

どんなカードが飛び出して来るのやら……

「俺のターン！ドロー！俺は『インフェルニティ・ビースト』を攻撃表示で召喚！」

夜行義兄さんの場に現われたのは1体の獣。

ただ、その獣が醸し出す雰囲気は不気味の一言に尽きる。

『インフェルニティ・ビースト』

レベル3 闇属性

獣族・効果

攻撃力1600

守備力1200

「バトルだ！『インフェルニティ・ビースト』で守備モンスターに攻撃！」

『インフェルニティ・ビースト』が食い千切らんばかりの勢いで守備モンスターに襲い掛かる。

『インフェルニティ・ビースト』の攻撃力は1600。セットモン

スター『ラーニング・エルフ』の守備力1500では太刀打ちできずに破壊される。

「『ラーニング・エルフ』の効果発動！このカードが墓地へ送られた時、カードを1枚ドロウする」

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

俺

LP4000 手札5枚

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 1

夜行

LP4000 手札3枚

モンスター

『インフェルニティ・ビースト』

攻撃力1800

魔法・罫

伏せ 2

さて、今の内に『インフェルニティ・ビースト』のテキストを読ん

で……テキストが表示されない……だと!?

ああ、そうか。制作途中で効果が完全に決まって無いんだったな。

ステータスやイラストは決まってるから、前もってKC社に申請した通りにソリットビジョンに投影されるが、確定していない効果は表示されないのか。

チツ、少し不利だな。

「俺のターン、ドロー!」

取り敢えず、探りを入れるつもりで攻めるか。

「リバース・カードオープン! 永続トラップ『強化蘇生』発動! このカードの効果で俺は墓地の『ラーニング・エルフ』を守備表示で特殊召喚!」

『ラーニング・エルフ』

レベル3 風属性

天使族・効果

攻撃力1400

守備力1500

「『強化蘇生』は自分の墓地のレベル4以下のモンスター1体を効果を無効にし、尚且つレベルを1つ上げて蘇生させる永続トラップ。因みにこのカードがフィールド上に存在しなくなった時、対象のモンスターは破壊され、対象モンスターがフィールドから離れた時、このカードは破壊される」

『ラーニング・エルフ』  
レベル3 4

後、自分のスタンバイフェイズに1000ポイントのダメージを受けるデメリットがあるが、直ぐに処理するから問題は無い。

「魔法カード『調律』発動！このカードの効果でデッキから『シンクロン』と名のついたチューナーを手札に加え、デッキをシャッフル。その後、デッキの1番上のカードを墓地へ送る。俺はデッキから、『マツハ・シンクロン』を手札に加える」

落ちたのは『蜘蛛の糸』か……悲しい様な嬉しい様な……微妙だな。

「俺はチューナーモンスター『マツハ・シンクロン』を召喚！」

俺の場に手足の生えた戦闘機のようなモンスターが現れる。

『マツハ・シンクロン』

レベル1 風属性

機械族・チューナー

攻撃力0

攻撃力0

レベルも攻守も低いが、俺がデッキを作り直す際に入れた蘇生系カード3種類に対応しているのに加え、効果も手札を維持するのになんか役立つ。

何より、クシルの特殊召喚条件の片方を満たす風属性の良いカードだ。

さて、レベル5のシンクロモンスターを呼ぶ準備はできたが、何を呼ぼうか……こっちな。

「レベル4『ラーニング・エルフ』にレベル1『マツハ・シンクロン』をチューニング！」

数多の知識を蓄えし魔術師よ。その知識を我に授けよシンクロ召喚！いでよ！『TG ハイパー・ライブラリアン』！」

『TG ハイパー・ライブラリアン』

レベル5 闇属性

魔法使い族・シンクロノ効果

攻撃力2400

守備力1800

「『ラーニング・エルフ』の効果でカードを1枚ドロー！そして、バトル！『TG ハイパー・ライブラリアン』で『インフェルニティ・ビースト』に攻撃！」

『TG ハイパー・ライブラリアン』が呪文を唱えて『インフェルニティ・ビースト』を中心に据えて魔方陣を展開させる。

『インフェルニティ・ビースト』が魔方陣から出ようと動くも、見えない壁に阻まれて出る事は適わない。

『TG ハイパー・ライブラリアン』がカードを1枚取り出して、魔方陣に投げ込むと魔方陣の内部が爆発した。

夜行

LP4000 3200

「ぐっ、この瞬間、俺は手札を全て捨ててトラップ発動『インフェルニティ・リフレクター』！このカードの効果でたった今、戦闘で破壊されたモンスターを墓地から特殊召喚し、相手ライフに1000ポイントのダメージを与える！」

倒した筈の『インフェルニティ・ビースト』が蘇り、俺にキバを突き立てんと向かって来る。

「何！？ぐう！」

俺

LP4000 3000

手札を全て捨てて迄、俺にダメージを与えたかったのか？

それとも、蘇生させた『インフェルニティ・ビースト』には何か恐ろしい効果でもあるのか？

それか『インフェルニティ』というシリーズは墓地で強力な効果を発揮するのか？

まだ判断仕切れないな……取り敢えず、次に備えるか。

「カードを2枚伏せてターンエンド。この時、墓地の『マツハ・シンクロン』の効果の効果により、このターン、このカードと共にシンクロ召喚の素材として、墓地へ送られたモンスター1体を選択して手札に加える事ができる。俺は効果を発動して『ラーニング・エルフ』を手札に加える」

俺

LP3000 手札5枚

モンスター

『TG ハイパー・ライブラリアン』

攻撃力2400

魔法・罫

伏せ 2

夜行

LP3200 手札0

モンスター

『インフェルニティ・ビースト』

攻撃力1600

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン、ドロー！俺は伏せていた『ダーク・バースト』を発動して、墓地から『インフェルニティ・ミラージュ』を手札に加え、『インフェルニティ・ミラージュ』を召喚！」

夜行義兄さんの場にインディアンの様な姿をしたモンスターが現れる。

『インフェルニティ・ミラージュ』



レベル1 闇属性

悪魔族・効果

攻撃力0

守備力0

「更にカードを1伏せる。そして、自分の手札が0のこの時、『インフェルニティ・ミラージユ』の効果発動！『インフェルニティ・ミラージユ』を生け贄に墓地から現れる！『インフェルニティ・ビートル』！『インフェルニティ・デストロイヤー』！」

『インフェルニティ・ミラージユ』が消えたと思ったら、夜行義兄さんの場に新たに、クワガタの様なモンスターとその出で立ちから、正しく悪魔と呼ぶに相応しいモンスターが現れる。

『インフェルニティ・ビートル』

レベル2 闇属性

昆虫族・チューナー

攻撃力1200

守備力0

『インフェルニティ・デストロイヤー』

レベル6 闇属性

悪魔族・効果

攻撃力2300

守備力1000

「『インフェルニティ・ビートル』の効果発動！手札が0枚の時、自身を生け贄に捧げる事でデッキから、『インフェルニティ・ビートル』を2体まで特殊召喚する！俺はデッキから、『インフェルニ

ティ・ビートル』を2体特殊召喚する！」

『インフェルニティ・ビートル』  
レベル2 闇属性  
昆虫族・チューナー  
攻撃力1200  
守備力0

『インフェルニティ・ビートル』  
レベル2 闇属性  
昆虫族・チューナー  
攻撃力1200  
守備力0

手札が0の時……だと!? だから、わざわざ手札を全て捨てたのか。

という事は『インフェルニティ・ビースト』も『インフェルニティ・デストロイヤー』も何らかの効果が発動できるのか。

「行くぜ！レベル6『インフェルニティ・デストロイヤー』にレベル2『インフェルニティ・ビートル』をチューニング！  
死者と生者、ゼロにと交わりしとき、永劫の檻より魔の竜ははなたれる。シンクロ召喚！いでよ！『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！」

『インフェルニティ・ビートル』が2つの星となり、『インフェルニティ・デストロイヤー』に力を与えて、姿を変えさせる。

その後、光に包まれたと思ったら、其処には1体の黒竜が居た。

頭頂のあたりは脳みそが出ており、その黒竜を不気味に見せていた。

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』

レベル8 闇属性

ドラゴン族・シンクロノ効果

攻撃力3000

守備力2400

「くつ、『TG ハイパー・ライブラリアン』の効果発動！シンクロモンスターのシンクロ召喚が成功した時、カードを1枚ドロースる。ドロロー！」

「はん！それがどうした！俺はこのターン、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の攻撃を封じる代わりに、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の効果発動！フィールド上のモンスター1体を破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える！『TG ハイパー・ライブラリアン』を破壊！くらえ！インフェルニティ・デス・ブレス！」

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が吐き出した黒い煙幕の様な物が俺と『TG ハイパー・ライブラリアン』を取り囲む。

煙幕の様な物に取り囲まれた瞬間、『TG ハイパー・ライブラリアン』が胸元を抑えながら苦しみ出し、膝を折る。

やがて、俯せに倒れるとそのまま動かなくなった。

すると煙幕の様な物は『TG ハイパー・ライブラリアン』の形になり、俺に襲い掛かる。

「ぬっ、ぐわあああ！」

俺

LP3000 1800

「バトルだ！『インフェルニティ・ビースト』でダイレクトアタック！」

「くっ、トラップ発動…できない!?!」

「無駄だ！自分の手札が0の時、『インフェルニティ・ビースト』が攻撃する場合、相手はダメージステッブ終了時まで魔法・トラップは発動できねえぜ！」

「なっ!?!うわあああ！」

「ヒャーハハハハ!!踊れ!死のダンスを！」

俺

LP1800 200

「さあ、行くぜ!?!…とりたい所だが、わざわざ罠に掛かってやる必要はねえ……ターンエンドだ」

「この瞬間、トラップ発動『エンジェル・リフト』!蘇れ『マツハ・シンクロン』！」

『マツハ・シンクロン』

レベル1 風属性

機械族・効果

攻撃力 0

守備力 0

さて、なんとか俺の場にモンスターが残ったが、ヤバイ状況には変わり無い。

だが、若干、厨二患者みたいになった夜行義兄さんを元に戻すため、このデュエル……負ける訳にはいかない！

## 第26話 冬休みその？前編（後書き）

中途半端で切ってますいません。

1話辺りを5、6ページにしようとしたら、こんな感じに。

以下がアンケートの内容です。

『オジャマ・イエロー』に特殊効果が付くとしたら？

？1ターンに1度、自分フィールド上に『オジャマ・ブラック』、『オジャマ・グリーン』が表側表示で存在する時にライフを半分支払って発動できる。相手フィールド上のモンスター又は魔法・罫を全て破壊する。

？自分フィールド上に存在する『オジャマ』と名のつくモンスターを任意の数だけ、生け贄に捧げる事で発動できる。生け贄に捧げた『オジャマ』と名のつくモンスターの数だけ、使用されていない相手フィールド上のモンスターカードゾーン又は、魔法・罫ゾーンを指定する。指定された箇所を相手ターンで数えて2ターンの間、使用不可にする。

？自分フィールド上に存在する『オジャマ』と名のつくモンスターを任意の数だけ、生け贄に捧げる事で発動できる。生け贄に捧げた『オジャマ』と名のつくモンスターの数だけ、相手の手札をランダムに選択し、選択したカードをデッキに戻す。

この3つです。

これは一年目終了時～二年目開始の間に入れるオリジナルのストーリーでおおと思うているものです。

このアンケートは別にオリカ等とは関係ありません。

期限はまだ先は長いですが、一年目終了時までです。

第27話 冬休みその？後編

俺

LP200 手札6枚

モンスター

『マツハ・シンクロン』

攻撃力0

魔法・罨

『エンジェル・リフト』

永続罨

伏せ 1

夜行

LP3200 手札0枚

モンスター

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』

攻撃力3000

『インフェルニティ・ビースト』

攻撃力1600

『インフェルニティ・ビートル』

攻撃力1200

魔法・罨

伏せ 1



「俺のターン！ドロー！」

これで手札は7枚……これなら行ける！

「手札1枚をコストに魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動！相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する！」

「そうはいくかよ！カウンタートラップ『インフェルニティ・バリア』発動！こいつは自分の場に、『インフェルニティ』と名のつくモンスターが攻撃表示で存在し、自分の手札が0枚の時に発動できるカウンタートラップ。こいつの効果でお前が発動した『ライトニング・ボルテックス』の効果は無効になり、破壊される！」

「なっ！？くっ……」

雷鳴が轟き、雷が夜行義兄さんの場のモンスターに襲い掛かるが、夜行義兄さんの場のモンスターの前にシールドが現れ、雷は防がれる。

失敗したか……だが、これで伏せカードは無くなった。

最善の手は打てなくなったが、そうならば次善の手を打つだけだ！

「手札を1枚墓地へ捨てて、『THE トリック』を特殊召喚！」

『THE トリック』

レベル5 風属性

魔法使い族・効果

攻撃力2000  
守備力1200

「そして、『マツハ・シンクロン』と『THE トリックイ』を生け贄に捧げ、『墮天使アスモディウス』を召喚！」

【よいしょと〜さて、行きますか！】

『墮天使アスモディウス』

レベル8 闇属性

天使族・効果

攻撃力3000

守備力2500

「バトル！『墮天使アスモディウス』で『インフェルニティ・デス・ドラゴン』に攻撃！黒翼の裁き！」

「チツ！向かい打て『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！デス・ファイア・ブラスト！」

アスデイが生み出した雷と『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が吐き出したブレスがぶつかり爆発が起こる。

【ウォリヤアアアー！】

爆煙に紛れて『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の背後に回り込んだアスデイが『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の翼をへし折る。

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が苦痛の雄叫びを上げて倒れるが、最後の力を振り絞ってしっばをアスディに叩きつける。

【痛たたた……ちえ、後は任せたよ】

「『墮天使アスモディウス』の効果発動！このカードが破壊され墓地へ送られた時、カード効果で破壊されない『アスモトークン』と戦闘で破壊されない『ディウストークン』を特殊召喚する！俺は『アスモトークン』を攻撃表示、『ディウストークン』を守備表示で特殊召喚！」

アスディが光となって消えた所から、2つの光が俺の場に来て、2人の天使となる。

『アスモトークン』  
レベル5 闇属性  
天使族・トークン  
攻撃力1800  
守備力1300

『ディウストークン』  
レベル3 闇属性  
天使族・トークン  
攻撃力1200  
守備力1200

礼を言うぞアスディ。お前のおかげで、デュエルを優位に進められる。

「バトルフェイズ中に攻撃表示で特殊召喚された『アスモトークン』

には、まだ攻撃が残されている！『アスモトークン』で『インフェルニティ・ビースト』に攻撃！」

『インフェルニティ・ビースト』が『アスモトークン』を食い千切るうとして、『アスモトークン』に襲い掛かるが、『アスモトークン』は襲い掛かって来た『インフェルニティ・ビースト』を蹴りあげる。

翼を使い先回りして、今度は宙に浮いた『インフェルニティ・ビースト』を地面に叩きつける様に叩き落とす。

「ぐっ、チィッ！」

夜行

LP3200 3000

「カードを1枚伏せてターンエンド」

夜行義兄さんの場合は『インフェルニティ・ビートル』だけ。

『ライトニング・ボルテックス』で全滅させて、『マジック・テンペスター』で殴って後、効果で決着は決まらなかったが、場は殆ど制圧できた。

このまま押し切れれば良いんだが……

俺

LP200 手札2枚

モンスター

『アスモトークン』

攻撃力1800

『ディウストークン』

守備力1200

魔法・罫

伏せ 2

夜行

LP3000 手札0枚

モンスター

『インフェルニティ・ビートル』

攻撃力1200

魔法・罫

無し

「俺のターン、ドロー！フツ、魔法カード『天使の施し』発動！」

普通、そういうカードをここで引くか！？

何が来るか予想つかない分、怖いんだが……

「カードを3枚ドローしてカードを2枚捨てる。『インフェルニティ・ビートル』を守備表示に変更して、『インフェルニティ・ガードイアン』を守備表示で召喚！ターンエンドだ」

夜行義兄さんの場に中心に髑髏を据えている盾の様なモンスターが現れた。

『インフェルニティ・ガーディアン』

レベル4 闇属性

悪魔族・効果

攻撃力1200

守備力1700

俺

LP200 手札2枚

モンスター

『アスモトークン』

攻撃力1800

『ディウストークン』

守備力1200

魔法・罫

伏せ 2

夜行

LP3000 手札0枚

モンスター

『インフェルニティ・ビートル』

守備力0

『インフェルニティ・ガーディアン』  
守備力1700

魔法・畏

無し

また新たなインフェルニティモンスターか……効果が分からないのが厄介だが、『ジャイアントウィルス』みたいな戦闘で破壊された時にダメージを与える効果では無さそうだ。

ただ、『インターセプト・デーモン』の様な効果だったら、攻撃したら終わる。

それか、『ガーディアン』って名が付いているくらいだから、攻撃されたら守備力が上がる効果かもしれない。

せめて、アレクが手札にければ悩まずに済むんだが……

「俺のターン！ドロー」

『魔導戦士ブレイカー』か……このカードじゃ駄目だ。

それなら、次に打つ手はこれだ！

「リバース・カードオープン！永続トラップ『リミット・リバース』！このカードの効果で墓地から、攻撃力1000以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！蘇れ！『クイック・シンクロン』」

『クイック・シンクロン』  
レベル5 風属性

機械族・効果  
攻撃力700  
守備力1400

「チツ！さっきの手札コストか……」

舌打ちか……本当に冗談抜きでキャラ変わり過ぎだな……

「俺は更に『ラーニング・エルフ』を召喚！」

『ラーニング・エルフ』

レベル3 風属性

天使族・効果

攻撃力1400

守備力1500

疲労の色を濃くして現れる『ラーニング・エルフ』。そう言えば、このデュエル、同じ『ラーニング・エルフ』を使い回してるな。

もう1枚デッキにあると思うんだが……来ないな。

まあ、今来られても困るが……

さて、『ラーニング・エルフ』には悪いが、墓地へ行ってもらおうか。

「レベル3『ラーニング・エルフ』にレベル5『クイック・シンクロン』をチューニング！破壊を司る魔神よ、我が前に出でて彼の者



を粉砕せよ！シンクロ召喚！現れる『ジャンク・デストロイヤー』  
！」

『ジャンク・デストロイヤー』

レベル8 地属性

戦士族・シンクロノ効果

攻撃力2600

守備力2500

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材となったチューナー以外のモンスターの数だけフィールド上のカードを破壊できる！俺は『インフェルニティ・ガーディアン』を破壊する！」

『ジャンク・デストロイヤー』が腕を地面に叩きつけて、辺りを揺らす。

揺れた衝撃で落石が起こり、『インフェルニティ・ガーディアン』を潰す。

立ち上った砂塵に視界を遮られるが、程なくして砂塵がはれる。

砂塵がはれると何事も無かったかのように『インフェルニティ・ガーディアン』が先程と変わらぬ場所に居た。

「無駄だ！自分の手札が0枚の場合、『インフェルニティ・ガーディアン』は戦闘及びカード効果では破壊されねえ！」

「なっ！……『ラーニング・エルフ』の効果でカードを1枚ドロップ！」

くそっ！面倒な効果を持ちやがって。

「『アスモトークン』を守備表示に変更してバトル！『ジャンク・デストロイヤー』で『インフェルニティ・ビートル』に攻撃！」

『ジャンク・デストロイヤー』が『インフェルニティ・ビートル』を腕で握り潰して破壊する。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

俺

LP200 手札2枚

モンスター

『ジャンク・デストロイヤー』

攻撃力

2600

『アスモトークン』

守備力1300

『デiwーストークン』

守備力1200

魔法・罫

『リミット・リバース』

永續罫

伏せ 2

夜行

LP3000 手札0枚

モンスター

『インフェルニティ・ガーディアン』

守備力1700

魔法・罫

無し

「俺のターン！ドロー！ヒャーハハハ！」

ドローしたカードを見た瞬間、笑いだす夜行義兄さん。

早く正気に戻さないと……いつもの夜行義兄さんとのギャップがあり過ぎる。

「俺はカードをセットして、即オープン！魔法カード『ZERO-MAX』！こいつは自分の手札が0の場合に、自分の墓地の『インフェルニティ』と名のついたモンスター1体を選択して、発動できる魔法カード。その効果は、選択したモンスターを墓地から特殊召喚し、特殊召喚したモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ、表側表示モンスターを全て破壊する！」

「ぐっ！それじゃあ蘇らせるのは……！」

「当然、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』だ！蘇りやがれ！『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！」

アスデイがその身を犠牲にして討ち取った『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が地を割りながら、現れる。

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』

レベル8 闇属性

ドラゴン族・シンクロ/効果

攻撃力3000

守備力2400

蘇った『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が黒いブレスを吐き出し、辺りを包む。

その黒いブレスに包まれた『ジャンク・デストロイヤー』と『ディウストークン』が苦しみ出して、『TG ハイパー・ライブラリアン』と同じく倒れる。

「『ZERO-MAX』を使ったターン、バトルフェイズは行えねえ。どの道、罠には掛かってやらねえがな。ターンエンドだ」

俺

LP200 手札2枚

モンスター

『アスマトークン』

守備力1300

魔法・罠

『リミット・リバーズ』

永続罨  
伏せ 2

夜行  
LP3000 手札0

モンスター  
『インフェルニティ・デス・ドラゴン』  
攻撃力3000  
『インフェルニティ・ガーディアン』  
守備力1700

魔法・罨  
無し

「俺のターン、ドロー！」

アレク……今更来るのかよ……今は出せねえぞ。

俺の今の手札なら、レベル6かレベル8のシンクロモンスターが出るが、どちらにも『インフェルニティ・デス・ドラゴン』は倒せない。

あっちが攻撃してくるなら、一気に行けるが、伏せカードの1枚が攻撃反応型のトラップと分かっている以上、攻撃はおそらく無い。

だが、あっちは何らかのカードを待っている。

その時が勝負だ！

「俺はこのままターンエンド」

俺

LP200 手札3枚

モンスター

『アスモトークン』

守備力1300

魔法・罫

『リミット・リバーズ』

永続罫

伏せ 2

夜行

LP3000 手札0

モンスター

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』

攻撃力3000

『インフェルニティ・ガーディアン』

守備力1700

魔法・罫

無し

「俺のターン！ドロー！ヒャーハハハ！このターンでお前はお終いだ！永續魔法『インフェルニティ・ガン』発動！そして、『インフェルニティ・ガン』の効果発動！手札が0枚の場合、フィールド上のこのカードを墓地へ送る事で、自分の墓地から、『インフェルニティ』と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚できる！現れる！『インフェルニティ・ビースト』！『インフェルニティ・ドワーフ』！」

夜行義兄さんの場に威嚇しながら『インフェルニティ・ビースト』が、斧を持った小さいオツサンが屈んだ状態で現れた。

『インフェルニティ・ビースト』

レベル3 闇属性

獣族・効果

攻撃力1600

守備力1200

『インフェルニティ・ドワーフ』

レベル2 闇属性

戦士族・効果

攻撃力800

守備力500

「自分の手札が0枚の場合に『インフェルニティ・ドワーフ』が自分フィールド上に存在する限り、自分フィールド上のモンスターは全て貫通効果を得る！これで終わりだ！『インフェルニティ・ビースト』で『アスモトクン』に攻撃い！」

夜行義兄さんの手札が0枚の今、『インフェルニティ・ビースト』の攻撃時に魔法・トラップは発動できない。

だが、既に手は打ってある！

「墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！墓地のこのカードをゲームから除外する事で、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！」

「チツ！そいつも手札コストで送ってやがったのか。ターンエンドだ」

俺

LP200 手札2枚

モンスター

『アスモトークン』

守備力1300

魔法・罫

『リミット・リバーズ』

永続罫

伏せ 2

夜行

LP3000 手札0

モンスター



『インフェルニティ・デス・ドラゴン』  
攻撃力3000  
『インフェルニティ・ガーディアン』  
守備力1700  
『インフェルニティ・ビースト』  
攻撃力1600  
『インフェルニティ・ドワーフ』  
守備力500

魔法・罨  
無し

「俺のターン！ドロー！」

下準備は全て整った！一気に行かせて貰う！

「相手フィールド上に同じ属性のモンスターがいる時、こいつは特殊召喚できる！現れる！『神禽王アレクトール』！」

【主の求めに答えて、某、ただ今、推参！】

『神禽王アレクトール』  
レベル6 風属性  
鳥獣族・効果  
攻撃力2400  
守備力2000

「更に『ジャンク・シンクロン』を召喚！『ジャンク・シンクロン』を召喚に成功した時、自分の墓地から、レベル2以下のモンスターを

守備表示で特殊召喚できる！『マツハ・シンクロン』を特殊召喚！」

『ジャンク・シンクロン』

レベル3 闇属性

戦士族・チューナー

攻撃力1300

守備力500

『マツハ・シンクロン』

レベル1 風属性

機械族・チューナー

攻撃力0

守備力0

「そして、永続罨『閻次元の開放』発動！除外されている闇属性モンスター1体を特殊召喚する！来い！」ネクロ・ガードナー！」

『ネクロ・ガードナー』

レベル3 闇属性

戦士族・効果

攻撃力600

守備力1300

「まだまだ行くぞ！レベル3『ネクロ・ガードナー』にレベル1『マツハ・シンクロン』をチューニング！戦友に力を与えるものよ、今こそ彼の者を打ち破る為に我が前へ！シンクロ召喚！来たれ！」  
アームズ・エイド！」

『マツハ・シンクロン』が作りし、星の輪を『ネクロ・ガードナー』が通過して辺りが光に包まれる。

そうして現われたのは1つの腕。

『アームズ・エイド』

レベル4 光属性

機械族・シンクロ/効果

攻撃力1800

守備力1200

「そんなモンスター達に何ができる！ただ、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』にやられる奴が増えただけじゃねえか！」

「今に分かるさ！『アームズ・エイド』の効果発動！1ターンに1度フィールド上のモンスター1体にこのカードを装備できる！俺は『神禽王アレクトール』に『アームズ・エイド』を装備！」

『アームズ・エイド』が広がり、空洞を作るとアレクの右腕に装着された。

「『アームズ・エイド』が自身の効果でモンスターに装備されている時、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする！」

『神禽王アレクトール』

攻撃力2400 3400

「『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の攻撃力を上回っただど！？」

「バトル！『神禽王アレクトール』で『インフェルニティ・デス・ドラゴン』に攻撃！神風・剛力礼賛！」

【覚悟なされい！ふん！】

アレクが『インフェルニティ・デス・ドラゴン』に突っ込む。

「クソが！やれ！『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！・デス・ファイア・ブラスト！」

アレクを迎撃しようと、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』がこちらのモンスターを葬ったブレスを吐く。

アレクはブレスを悉く避けて、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の懐に入る。

【当らぬよ。さて、まずは『TG ハイパー・ライブラリアン』の分！】

アレクが『アームズ・エイド』を装着している右腕で『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の腹部を殴る。

【これがアスディの分！『ディウストークン』の分！『ジャンク・デストロイヤー』の分！】

その後、アッパー、裏拳と続き、更に『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の尻尾を掴み、上空に放り投げる。

【そして、これが

出番が無い某のストレス発散の分だーーーー！！！！】

最後それ！？そこは主の分だーーーー！とかじゃないのか！？

【最後にアレクがどこかの戦争男という名の超人の必殺技みたいに回転しながら、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』を貫いた。byゴーズ】

夜行

LP3000 2600

「ぐっ、だが、ライフはまだ残っている！」

「……………『アームズ・エイド』の効果発動。このカードを装備しているモンスターが、戦闘で相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える」

「何だってぐわああああ！」

夜行

LP2600 0

【アレクが倒した『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の残骸が、夜行を押しつぶすかの様に降り、夜行は倒れた。それと同時に、デュエルディスクからデュエルの終了を告げるが鳴った。byマルス】

何故だ………何故デュエルに勝ってテンションが下がるんだろっ………

第28話 冬休みその？（前書き）

日常パートで、短めです。

## 第28話 冬休みその？

夜行義兄さんが検査入院し、俺が精霊との信頼関係について本気で考えだす様になってから数日が経ったある日、俺はある事について考え事をしていた。

「さて、どうするか……」

【今度はなんの事で悩んでんだ？】

「ん？ああ、十代と翔に対する詫びの品について考えててな」

追試対策プリントを作ったって言ったのに、それをクシルが持って帰ってきてたからな。

多分、あいつらはそれなりに困ったと思う。

精霊の不始末は主の責任でもあるし、何より俺も荷物の確認を疎かにしていたしな。

それで詫びの品について考えていたのだが、何が良いのやら……

【……………】

「どうしたんだゴーズ？」

ゴーズが俺を……そう、まるで哀れむ様に見ていたので、嫌な予感がしながらも疑問に思って聞いてみる。



【いや……普通クリスマスにそんな事を考えるか？】

【あっ！ゴーズそれは……】

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

ゴーズSide

【あっ！ゴーズそれは……】

マルスに言われて、マイブラザーにその手の話は禁句だったのを思い出して、マイブラザーの方を見る。

「クリスマス？ああ、確か今日はなにかしらの特別な日の名前を借りて、客の財布の紐を緩くさせて、商品を大量に買わせるという店側の策略が炸裂する日だったな」

やべえ手遅れだ……へそ曲げやがった。

こりゃあ、冗談抜きでやべえぞ。

マルスも慌てだして。

【ゴーズ、どうする気だ！？】

【悪い、宥めるの手伝ってくれ！】

【ふざけるな！この状態のマスターを宥めるのに、どれだけの時間がかかると思っているんだ！？】

【い、一日？】

【本当にその程度で済むと思っているのか？】

【……………いや、済まんと思う】

アレクのおっサンが居れば、時間はあんまし掛からねえと思うが、数日前から、精霊世界に帰ってるし……………今日中には絶対に無理だ。

【よし！ゴーズ、土下座だ。土下座をするんだ！もう、それで許しを請うしかない！】

【くっ！それしか無いか……………】

俺はマイブラザーの方を向いて、両膝をつく。

【済まないマ「別に良いぞ」へっ？】

両膝について許しを請おうとしたら、何故かあっさりと許された。

【えっ？マスター……………良いのですか？】

隣で土下座してくれているマルスも驚いている。

「ああ

【本当にですか？】

「ああ」

マルスが繰り返して聞いているが、しょうがない事だと思う。

前は確か、クリスマスやバレンタインデーがいかに店側の策略なのかを延々と聞かされた上、レポート提出まで義務付けられたからな……何も無いという訳が無い。

というより、無かったら、無かったで気味が悪い。

【本当に本当に本当ですか？】

マルスも俺と同じ気持ちだったらしく、マイブラザーに何度も聞いている。

「くどいぞ、マルス。それとも、前みたいにレポートを書きたいのか？」

【そういう訳では……】

マルスが引き下がるが、釈然としない様子だ。

これはいよいよ何かあるぞ。

「あ、そうだ」

マイブラザーが椅子から立ち上がると共に、俺とマルスは身構える。

くっ！せめて、アスディかハニーが居れば……クシルは直ぐ近くに

居るが、寝てるし……

【『波動キャノン』とか使って来たら、頼むぜマルス】

【ああ、任せろ】

「あつた、あつた。ほらよ」

俺とマルスの緊張感が漂う中、マイブラザーは何かを取り出して、俺に投げてきた。

【うわぁああぁぁ！……あれ？】

咄嗟に避けるが、いつまで経っても変化は起こらなかった。

【爆発……しない？】

【待て、ゴーズ。時間差で爆発するかもしれん】

俺達の言葉にマイブラザーは深い溜め息をついた。

「お前等は俺を一体何だと思っているんだ？それは、どっからどう見ても、ただの財布だろ？」

【【えっ？】】

マイブラザーに言われて、投げられた物を見ると、確かにどう見てもただの財布だった。

【マイブラザー……これは一体？】

「今日はクリスマスだからな。今日ぐらいは、お前達にはゆっくりしてもらおうと思ってるな。ほら、ゴーズはカイエンと街とかでデートすれば良いし、マルスは行かないといけない所があるんだろ？」

【マスター……】

【マイブラザー、本当に良いのか？】

おそろおそろマイブラザーに聞いてみる。

「ああ、お前等にはいつも助けてもらってるからな。たまには労わないとな」

【マスター、申し訳ございません！】

【ああ！疑ったりして悪かった！】

今回ばかりは俺達が完全に悪いな……冗談抜きで反省しねえといけねえな。

「んな事、いちいち気にすんな。ほら、早く行かないと、時間はどんどん過ぎていくぞ。あつ、服は用意してあるから、ちゃんと着替えて行けよ？」

【マスター、本当にありがとうございます！】

【それじゃあ行ってくるぜ】

.....

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

マルス達を見送った後、椅子に座り直して机に向かう。

別に今日、マルス達を送り出した事は思いつきではなく、少し前から考えていた事だ。

アレクとアスデイ、カイエンには、昨日の内に言っておいた。

ただ、マルスとゴーズは悪読みするのが目に見えていたから、中々言いだせなかったただけだしな。

俺が急に優しくなったら、十中八九、あの2人は疑心暗鬼に陥る。

そうなったら、カイエンがゴーズに言っても無駄だ。

確かに以前、俺が否リア充という事を弄ったマルスとゴーズに『サイクロンレーザー』をぶっ放したり、『六芒星の呪縛』を使って、動きを止めた後に『稲妻の剣』で斬り掛かったりしたけどさ……少しは信用して欲しいものだ。

まあ、俺が急にこんな事を考えだしたのには理由がある。

これから先、幻魔を狙う輩と戦う事になったら、休む暇は無くなる。

その時が来るまでは、休める時に休んで貰いたいと思ったからだ。

さて、そろそろ十代達に渡す物を考えますかね……

しかし、クリスマスの日に野郎に渡す物を考えるのは、本当に虚しいな。

なんだろう……急に爆弾系カードのみで構成されたデッキを作りたくなってきた……

## 第29話 冬休みその？（前書き）

冬休み編は次で終わりの予定です。

やっぱり、遊戯、城之内とデュエルしたならこの人も……

因みに、とあるモンスターが出てきますが、原作・アニメオリカを  
書く際に参考に行っているWikiから、引っ張ってききましたので、  
自作オリカでは決してありません。



## 第29話 冬休みその？

1月2日、冬休みが残り僅かとなった今日。

俺と月行義兄さんと検査入院が終わり、退院した夜行義兄さんの3人は、日本の海馬コーポレーション本社ビルに来ていた。

別に、新年の挨拶の為に来た訳ではない。

義兄さん達は海馬コーポレーションと合同で開く大会DMDMGPの打ち合わせの為、俺は海馬コーポレーションが新たに作った新型デュエルディスクのテストの為、つまりは仕事で此処に来た。

因みにペガサス様が居られないのは、無駄に話がこじれるかららしい。

まあ、インダストリアルイリユニオン社の現社長は月行義兄さんだから、打ち合わせに支障をきたす事は無いんだろうけど……

それにしても、スケジュールの都合とはいえ、新年早々仕事って、海馬さん達も義兄さん達も大変だな。

受付の所で義兄さん達と別れてデュエル場に向かう。

義兄さん達が打ち合わせするDMDMGPの内容が正直気になるな……

最初のDMはおそらくデュエルモンスターズ、GPはグランプリ、  
だとしたら、2つ目のDMは一体何なんだ？

そんな事を考えていると、いつの間にかデュエル場に着いていたので、思考を切り替える。

デュエル場に入ると、よく見知った人が2人居たので、取り敢えずその2人の下に向かい、挨拶をする。

「お久しぶりです。レベッカさんにキサラさん」

「久しぶりね天道」

「お久しぶりですね、貴志さん」

「何故お2人が此処に？もしかして、俺の相手はレベッカさんなのですか？」

「いいえ。私は技術者として、自分が考案した機能の調子を見たいだけよ」

「私は、あの、その。瀬人様の勇姿を見るためにです」

「成る程、そういう事ですか」

レベッカさんは数年前から、海馬コーポレーションの社員になっている。

レベッカさんの頭なら、新しいシステムの1つや2つが思い浮かんでも、おかしくない。

因みに、レベッカさんが海馬コーポレーションに入社した理由は、

師匠の側に居たいからという理由だ。

それを聞いて師匠がもの凄く驚き、杏子さんが炎のオーラを纏い出したのを今でも覚えている。

それが、確か……アテム師匠と師匠の戦いの儀から少し後の事だから、もう5年前の事が……

そして、その1年後、今から4年前に、エジプトのとある遺跡の前で倒れていたキサラさんをインダストリアルイリジヨン社が保護したんだっとな。

まあ、その後色々あって、今キサラさんは海馬さんの所に居るんだけど。

キサラさんが近くに居るようになってから、海馬さんの性格が多少なりとも丸くなったのには、俺も含めて皆驚いた。

さて、さっきのキサラさんの言葉から考えるに俺の相手はどつやら、海馬さんらしい。

しかし、海馬さんは打ち合わせの真っ最中だ。

それまで、2人と雑談でもして待つ事になったのだが、正直言って、直ぐに後悔する事となった。

レベツカさんはいくらアピールしても師匠が振り向いてくれないという愚痴を言い、キサラさんは海馬さんのここがとても優しいとか、今度一緒に出掛ける事になったと若干、ノロケ話をしたりと……

師匠と海馬さん……ついでにムークさん、北森さん、舞さんという3人の女性に想われている城之内さんは爆発してくれないかなーと一瞬、思ってしまった。

雑談……というより、愚痴とノロケ話を数時間聞かされ続け、いい加減帰りたくなってきた頃、やっと海馬さんが来た。

言いたい事はそれなりにあるが、言ったとしても意味が無い事は解っているので、無言でデュエルディスクを受け取り、デッキをセツトして指定の位置に立つ。

「おおっ！」

指定の位置にたった瞬間、デッキが自動でシャッフルされ、思わず声が出る。

「その程度で驚いてたら、この先、やっていけないわよ。新しい機能はまだまだあるんだからね」

レベツカさん、一体どれだけ考えたんですか……

「天道。城……凡骨から、少しはやるようになったと聞いている。その力を俺に見せてみる」

海馬さん……わざわざ言い直さなくても良いでしょうに……ホントにキサラさんと会って、良い意味で変わったな。

「ええ、前の様に簡単にはいきませんよ！」

「ふん、行くぞ」

「デュエル！」

俺

LP 4000

海馬

LP 4000

新型デュエルディスクには先攻、後攻を決める機能もあるらしく、先攻は俺になった。

「俺のターン！ドロー！」

この手札は……このモンスター、ほぼ過労死決定だな。

「モンスターをセット、カードを2枚伏せて、ターンエンド」

俺

LP 4000 手札3枚

モンスター

伏せ 1

魔法・罫

伏せ 2

「俺のターン、ドロ！。俺は『デュオス』を召喚する」

『デュオス』

レベル4 地属性

戦士族・効果

攻撃力1600

守備力1000

効果

1ターンに1度、自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを任意の数だけ生け贄に捧げる事で、生け贄に捧げたモンスター1体につき、このカードの攻撃力を300ポイントアップする。

海馬さんがカードをモンスターゾーンに置くと、海馬さんの場に現われたのは、白い戦士。

アテム師匠の記憶の世界で海馬さんによく似た人、セトさん？が使っていた精霊でもあり、マルスと同じく、キサラさんが倒れていた遺跡の中にあつた石版に描かれていたモンスターの1体。

そういえば、遺跡の中にはマルスや『デュオス』以外にも石版はあつたが、幾つかの石版は意図的に粉々にされていたとペガサス様から聞いた事があつたな。

「行くぞ！『デュオス』で守備モンスターに攻撃！デュオスソード」

海馬さんの『デュオス』が右手の剣で俺の場の守備モンスターを真っ二つにする。

「『クリッター』の効果発動！デッキから、『T.G ストライカー』を手札に加える」

「2枚の伏せカードを場に出し、ターンエンドだ！」

俺

LP4000 手札4枚

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 2

海馬

LP4000 手札3枚

モンスター

『デュオス』

攻撃力1600

魔法・罫

伏せ 2

「俺のターン、ドロー！手札から速攻魔法『サイクロン』発動！俺から見て、右側のカードを破壊する！」

破壊したのは『完全破壊ジェノサイドウィルス』……だと！？なんつー物騒なカードを……まあ、気を取り直して。

「自分フィールド上にモンスターが存在せず、相手フィールド上にモンスターが存在する時、このモンスターは特殊召喚できる。現れる！『T G ストライカー』！そして、自分がレベル4以下のモンスターの特殊召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる！現れる『T G ワーウルフ』！」

『T G ストライカー』

レベル2 地属性

戦士族・効果

攻撃力800

守備力0

『T G ワーウルフ』

レベル3 闇属性

獣戦士族・効果

攻撃力1200

守備力0

「更に『霧の谷のファルコン』を攻撃表示で召喚！」

俺の場に右手に剣を左腕に盾を装着し、民族衣装に身を包んだ人が現れる。

『霧の谷のファルコン』

レベル4 風属性

鳥獣族・効果

攻撃力2000



守備力1200

「永続罨『リミット・リバーズ』発動！墓地から『クリッター』を特殊召喚」

『クリッター』

レベル3 闇属性

悪魔族・効果

攻撃力1000

守備力600

「レベル3『クリッター』にレベル2『TG ストライカー』をチユーニング！数多の知識を蓄えし魔術士よ、その知識を我に授けよ！シンクロ召喚！出でよ『TG ハイパー・ライブラリアン』」

『TG ハイパー・ライブラリアン』

レベル5 闇属性

魔法使い族・シンクロノ効果

攻撃力2400

守備力1800

「墓地へ送られた『クリッター』の効果で、デッキから、『クイック・シンクロン』を手札に、そして、手札の『冥府の使者ゴーズ』を墓地へ送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

『クイック・シンクロン』

レベル5 風属性

機械族・効果

攻撃力700

守備力1400

「レベル3『TG ワーウルフ』にレベル5『クイック・シンクロン』をチューニング！破壊を司る魔神よ、我が前に出でて、彼のを粉碎せよ！シンクロ召喚！出でよ『ジャンク・デストロイヤー』！」

『ジャンク・デストロイヤー』

レベル8 地属性

戦士族・シンクロ/効果

攻撃力2600

守備力2500

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスター1体につき、フィールド上のカードを1枚破壊できる！俺は海馬さんの伏せカードを破壊する！」

「ならば、リバーズ・カードオープン！『収縮』！そのデカブツの攻撃力を半分にする！」

『ジャンク・デストロイヤー』

攻撃力2600 1300

「『TG ハイパー・ライブラリアン』の効果でカードを1枚ドロ！」

『収縮』か……攻撃前に破壊できて良かった。

「バトル！『TG ハイパー・ライブラリアン』で『デュオス』に

攻撃！」

『T G ハイパー・ライブラリアン』が『デュオス』にカードを飛ばす。

『デュオス』がカードを剣で切り裂くが、切り裂かれたカードが背後から『デュオス』を襲う。

「ぬう！」

海馬

LP 4000 3200

「『リミット・リバーズ』を手札に戻して、『霧の谷のファルコン』で攻撃！」

「手札の『バトルフェーダー』の効果発動！このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを強制終了させる！」

『バトルフェーダー』

レベル1 闇属性

悪魔族・効果

攻撃力0

守備力0

「やっぱり、そう簡単にはいきませんか。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「ふん！当然だ！俺のターン！」

わて、いねからどうなるか……

第29話 冬休みその？（後書き）

冒頭に書いたDMDMPが一年目と二年目の間に書こうとしているストーリーです。

無印のアニメを見た人なら、2つ目のDMが何の略かは分かると思いますがどね。

第30話 冬休みその？（前書き）

冬休みラストです。

海馬も主人公も……少々、はっちゃけます。

第30話 冬休みその？

俺

LP4000 手札1枚

モンスター

『ジャンク・デストロイヤー』

攻撃力2600

『TG ハイパー・ライブラリアン』

攻撃力2400

『霧の谷のファルコン』

攻撃力2000

魔法・罫

伏せ 2

海馬

LP3200 手札2枚

モンスター

『バトルフェーダー』

守備力0

魔法・罫

無し

「俺のターン、ドロー、俺は手札から魔法カード『強欲な壺』を発

動し、カードを2枚ドロウする。更に手札の『ラビードドラゴン』を墓地へ送り、『ハードアームドラゴン』を特殊召喚！」

『ハードアームドラゴン』

レベル4 地属性

ドラゴン族・効果

攻撃力1500

守備力800

『バトルフェーダー』と『ハードアームドラゴン』の2体のモンスター……確実に来る！それも少々面倒な形で……

「行くぞ！『バトルフェーダー』、『ハードアームドラゴン』の2体を生け贄に捧げ、出でよ『青眼の白龍』……！」

海馬さんの場に現われたのは、海馬さんのデッキの中で最高の龍、

『青眼の白龍』。

師匠のマハードさんの物静かさや城之内さんのレッドアイズの荒々しいさとも違い、『青眼の白龍』は気高いという言葉が相応しい。

『青眼の白龍』

レベル8 光属性

ドラゴン族 通常

攻撃力3000

守備力2500

「『青眼の白龍』で『TG ハイパー・ライブラリアン』に攻撃！」



滅びのバーストストリーム!!」

海馬さんの指示と共に、『青眼の白龍』の開かれた口にエネルギーが溜まっていく。

そして、エネルギーが溜まりきった後に放たれたブレスは『TG ハイパー・ライブラリアン』が展開した魔方陣をもともせず、『TG ハイパー・ライブラリアン』を跡形もなく破壊する。

「ぐわっ」

俺

LP4000 3400

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

俺

LP3400 手札1枚

モンスター

『ジャンク・デストロイヤー』

攻撃力2600

『霧の谷のファルコン』

攻撃力2000

魔法・罫

伏せ 2

海馬

LP3200 手札0

モンスター

『青眼の白龍』

攻撃力3000

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン！ドロー！」

『ハードアームドラゴン』を生け贄に捧げて召喚されたレベル7以上のモンスターは、カード効果で破壊されない。

伏せてある『リミット・リバーズ』を使い、『TG ストライカー』を蘇生、『霧の谷のファルコン』とあのモンスターをシンクロ召喚すれば、『青眼の白龍』は倒せる上、大ダメージを与えられる。

だが、そうした場合、海馬さんは次のターンで絶対に『死者蘇生』を引き当てる。

少し警戒しすぎかもしれないが、師匠達のドロー力は常識を超越している……これぐらいが丁度良い。

ここは我慢して、1度のチャンスに全てを掛ける。

「『ジャンク・デストロイヤー』と『霧の谷のファルコン』を守備表示に変更。更にモンスターをセットしてターンエンド」

俺

LP3400 手札1枚

モンスター

『ジャンク・デストロイヤー』

守備力2500

『霧の谷のファルコン』

守備力1200

伏せ 1

魔法・罫

伏せ 2

海馬

LP3200 手札0

モンスター

『青眼の白龍』

攻撃力3000

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン、ドロ！。ふん、俺とブルーアイズの前に立ち塞がる壁は全て粉碎するまでだ。魔法カード発動『滅びの爆裂疾風弾』！」

これでお前の場のモンスター全てを破壊する！」

「なっ！マジですか……」

『青眼の白龍』が翼を広げて飛び上がり、俺とモンスターを見下ろす。

見下ろしながら、先程『TG ハイパー・ライブラリアン』を破壊した時と同様に、口にエネルギーを溜める。

そして、エネルギーが溜まりきってから、今度は俺の場のモンスター全てに降り注ぐように放たれたプレスが俺のモンスターを破壊していく。

「『滅びの爆裂疾風弾』を発動したターン、『青眼の白龍』は攻撃できません。ターンエンドだ」

俺

LP3400 手札1枚

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 2

海馬

LP3200 手札0

モンスター

『青眼の白龍』

攻撃力3000

魔法・罨

伏せ 1

「俺のターン、ドロー！」

場のモンスター0、手札も出せるモンスター0……待った結果がこれかよ！

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

俺

LP3400 手札1枚

モンスター

無し

魔法・罨

伏せ 3

海馬

LP3200 手札0

モンスター

『青眼の白龍』  
攻撃力3000

魔法・罨  
伏せ 1

「俺のターン、ドロー！」『スピア・ドラゴン』召喚！」

海馬さんの場に口が異様に尖ったドラゴンが現れる。

『スピア・ドラゴン』

レベル4 風属性

ドラゴン族・効果

攻撃力1900

守備力0

「行くぞ！」『スピア・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

「うわああ！」

俺

LP3400 1500

「『スピア・ドラゴン』は攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になるがこれで終わりだ！」『青眼の白龍』でダイレクトアタック！滅びのバーストストリーム！！」

やっぱり、ブラフで1枚伏せカードを追加しても無駄か……だが！

「リバース・カードオープン！『ガード・ブロック』！戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロー！」

「ほう、耐えたか。俺はターンエンドだ」

俺

LP1500 手札2枚

モンスター

無し

魔法・罫

伏せ 2

海馬

LP3200 手札0

モンスター

『青眼の白龍』

攻撃力3000

『スピア・ドラゴン』

守備力0

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン、ドロー！」

やっぱり、海馬さん相手に機を待つのが間違이었다。

攻めて機を掴みに行くべきだったな。

幸いモンスターも引いたし、攻撃も1度は防げる。

攻めるか……

「『ツイン・ブレイカー』を攻撃表示で召喚！」

俺の場に3本の剣を1つに纏め、腕に装着している戦士が現れる。

『ツイン・ブレイカー』

レベル4 闇属性

戦士族・効果

攻撃力1600

守備力1000

「バトル！『ツイン・ブレイカー』で『スピア・ドラゴン』に攻撃！『ツイン・ブレイカー』は貫通効果持ちのモンスター。貫通ダメージを受けて貰いますよ！」

「何！？ぐうつ、小癩なマネを……」

海馬

LP3200 1600



「ターンエンド」

俺

LP1500 手札2枚

モンスター

『ツイン・ブレイカー』

攻撃力1600

魔法・罫

伏せ 2

海馬

LP1600 手札0

モンスター

『青眼の白龍』

攻撃力3000

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン！俺は『命削りの宝札』を発動！手札が5枚になるよ  
うにカードをドローする」

ここでそれを引きますか……でもこれを防げば好機だ！

「更に魔法カード発動『融合』！手札の『青眼の白龍』2体と場の『青眼の白龍』を融合！出でよ！『青眼の究極竜』！！」

『青眼の究極竜』

レベル12 光属性

ドラゴン族・融合

攻撃力4500

守備力3800

海馬さんの場に現われたのは、文字通り究極の竜。

『青眼の究極竜』のステータスを上回るモンスターは居る。

だが、それらのモンスターからは全く感じられない圧倒的な威圧感を『青眼の究極竜』は持っている。

「『青眼の究極竜』で『ツイン・ブレイカー』に攻撃！アルティメット・バースト！」

「ぐっ、墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

『青眼の白龍』が溜めたエネルギーの数倍はあろうかと思える程、エネルギーを溜めた後に、『青眼の究極竜』が放ったプレスは半透明になった『ネクロ・ガードナー』に阻まれ、『ツイン・ブレイカー』に届かなかった。

「先程のセットモンスターか」

「ええ、墓地に居て助かりましたよ」

「ふん、伏せカードを1枚場に出し、ターンエンドだ」

俺

LP1500 手札2枚

モンスター

『ツイン・ブレイカー』

攻撃力1600

魔法・罫

伏せ 2

海馬

LP1600 手札1枚

モンスター

『青眼の究極竜』

攻撃力4500

魔法・罫

伏せ 2

「俺のターン！ドロー！カードを1枚伏せて、リバース・カードオープン！『蜘蛛の糸』！相手プレイヤーが前のターン、墓地へ送ったカード1枚を手札に加える。海馬さんの墓地の『命削りの宝札』」

を俺の手札へ！」

「おのれえ……」

『命削りの宝札』を奪われた海馬さんが睨み付けて来る。

冗談抜きで怖いんだが、気にせず生かさせてもらう！

「『命削りの宝札』発動！手札が5枚になる様にカードをドロー！  
ってマジかよ……先にあつたアレク、アスデイ、に続いてクシルも  
来たか……だが、この手札なら、一気に行ける！」

「永続罫『リミット・リバーズ』発動！墓地の『TG ストライカ  
ー』を特殊召喚！」

『TG ストライカー』

レベル2 地属性

戦士族・効果

攻撃力800

守備力0

「レベル4『ツイン・ブレイカー』にレベル2『TG ストライカ  
ー』をチューニング！天駆ける狼よ、その身朽ちし時、彼の者を呪  
え！シンクロ召喚！現れる！『天狼王 ブルー・セイリオス』！」

俺の場に両腕が狼の頭になっている青い狼男が現れる。

『天狼王 ブルー・セイリオス』

レベル6 闇属性

獣戦士族・シンクロ/効果  
攻撃力2400  
守備力1500

「更にカードを1枚伏せて、装備魔法『魔導師の力』を発動！」「天狼王 ブルー・セイリオス』に装備！」

『天狼王 ブルー・セイリオス』  
攻撃力2400 3900  
守備力1500 3000

魔法カード『死者蘇生』発動！墓地から蘇れ『冥府の使者ゴーズ』  
！！」

【よっしゃー！俺、参上！】

『冥府の使者ゴーズ』  
レベル7 闇属性  
悪魔族・効果  
攻撃力2700  
守備力2500

「墓地の『霧の谷のファルコン』と『ツイン・ブレイカー』をゲムから除外して、『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！」

【クウエー！】

『ダーク・シムルグ』  
レベル7 闇属性  
鳥獣族・効果

攻撃力2700  
守備力1000

俺の場に並ぶ相棒達。

3体共が何時でも攻撃に移れる様に準備している。

「バトル!」天狼王 ブルー・セイリオス』で『青眼の究極竜』に  
攻撃!」

「馬鹿な!攻撃力の劣るモンスターで俺のアルティメットに攻撃するだと!?!」

「理由は直ぐに分かりますよ!」

『青眼の究極竜』が自身に向って来る『天狼王 ブルー・セイリオス』にアルティメット・バーストを放つ。

それに対抗するかの様に『天狼王 ブルー・セイリオス』が自身を回転させて、アルティメット・バーストに向っていく。

アルティメット・バーストを断ち割りながら、『青眼の究極竜』に向っていく『天狼王 ブルー・セイリオス』だが、『青眼の究極竜』に届く寸前で力尽き、破壊される。

「ぐっ」

俺

LP1500 900

『天狼王 ブルー・セイリオス』を破壊し、咆哮をあげる『青眼の究極竜』だが、半透明になった『天狼王 ブルー・セイリオス』が体に取り憑かれた瞬間、『青眼の究極竜』が苦しみだす。

『青眼の究極竜』

攻撃力4500 2100

「何だと！まさか」

「『天狼王 ブルー・セイリオス』は自身が破壊され、墓地へ送られた時、相手モンスター1体を選択して、選択したモンスターの攻撃力を2400ポイントダウンさせる効果を持つ。それを発動させて貰いました」

「おのれえ……！！」

「続いてバトル！『冥府の使者ゴーズ』で『青眼の究極竜』に攻撃！冥府の剣・斬撃剣！」

【よし！行くぜえー！！】

ゴーズが『青眼の究極竜』を斬り捨てようと向っていく。

『青眼の究極竜』が迎撃のアルティメット・バーストを撃とうとエネルギーを溜めようとするが、半透明になった『天狼王 ブルー・セイリオス』が首を絞めて妨害する。

それでも必死にエネルギーを溜めて、ゴーズに向けて放つが先程の  
と比べ明らかに威力の弱い。

【甘いぜー！】

ゴーズはそれを剣で受け流し更に、『青眼の究極竜』との距離を縮める。

【冥府への片道キップだ受け取りな】

そして、『青眼の究極竜』を斬り捨てた。

「ぐわああああ！ぐっ」

海馬

LP1600 1000

「瀬戸様！？」

見守っていたキサラさんが声を上げる。

アルティメットは破壊できた！キサラさんには悪いけど、このまま行くぞ！

「『ダーク・シムルグ』でダイレクトアタック！ダーク・フレア！」

「成る程、少しはやるようになった……と言いたいが、まだまだ甘



いぞ天道！リバーズ・カードオープン！『機械仕掛けのマジック・ミラー』！」

「なっ、しまった！」

クシルの放った黒い炎と海馬さんとの間に鏡が現れる。

そして、その鏡は1枚のカードを写し出す。

写し出されたカードは『死者蘇生』。

「『機械仕掛けのマジック・ミラー』このカードは相手モンスターの攻撃時に発動でき、相手の墓地に存在する魔法カードを瞬時に発動できるトラップカード。お前の墓地の『死者蘇生』を使わせてもらうぞ、蘇れ！『青眼の究極竜』！」

『青眼の究極竜』

レベル12 光属性

ドラゴン族・融合

攻撃力4500

守備力3800

「ぐっ、攻撃は中止。そして、ターンエンド」

俺

LP900 手札2枚

モンスター

『ダーク・シムルグ』

攻撃力2700

『冥府の使者ゴーズ』  
攻撃力2700

魔法・罫

『リミット・リバーズ』

永続罫

伏せ 1

海馬

LP1000 手札1枚

モンスター

『青眼の究極竜』

攻撃力4500

魔法・罫

伏せ 1

俺の伏せたカードは『フローラル・シールド』。

これでなんとか防げるか……

「俺のターン、ドロー！魔法カード『埋葬呪文の宝札』を発動。墓地の『融合』、『強欲な壺』、『命削りの宝札』をゲームから除外してカードを2枚ドローする」

ぐっ、ここで更に手札が増えるのか。

「天道、俺のデッキ最強のモンスターの姿を拝むがいい！俺は『青眼の究極竜』を生け贄に捧げ、『青眼の光龍』を特殊召喚する！」

『青眼の究極竜』が光に包まれて新たに現われたのはブルーアイズの最終形態である『青眼の光龍』。

最終形態だけあって、放たれる威圧感、輝きは『青眼の白龍』や『青眼の究極竜』よりも、ずっと凄まじく、神を連想させる。

『青眼の光龍』

レベル10 光属性

ドラゴン族・効果

攻撃力3000

守備力2500

「『青眼の光龍』は俺の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体につき、攻撃力が300ポイントアップする。俺の墓地に存在するドラゴン族モンスターは6体！よって攻撃力1800ポイントアップ！」

『青眼の光龍』

攻撃力3000 4800

「更に『沼地の魔神王』を召喚し、魔法カード『龍の鏡』を発動！場の『沼地の魔神王』と墓地の『青眼の究極竜』を融合！出でよ『究極竜騎士』！」

海馬さんの場に『カオス・ソルジャー』が上に乗った『青眼の究極竜』が現れる。

『青眼の光龍』

攻撃力4800 4500

『究極竜騎士』

レベル12 光属性

ドラゴン族・融合/効果

攻撃力5000

守備力5000

「えっ？ちよつ、海馬さん？」

「そして、リバース・カードオープン！『異次元からの帰還』！ライフを半分支払いゲームから除外されている自分のモンスターを可能な限り、特殊召喚する！」

『青眼の究極竜』

レベル12 光属性

ドラゴン族・融合

攻撃力4500

守備力3800

『沼地の魔神王』

レベル3 水属性

水族・効果

攻撃力500

守備力1100

「『究極竜騎士』は自分の場の他のドラゴン族モンスター1体につき、攻撃力が500ポイントアップする。俺の場にドラゴン族モンスターは2体！よって、攻撃力1000ポイントアップ」

『究極竜騎士』

攻撃力5000 6000

……………俺もデュエリストだ。

自重しろ！とかは言わない。

だが、一言だけ言わせてくれ。

なにこれえ

「行くぞ！『青眼の光龍』、『青眼の究極竜』、『究極竜騎士』で  
攻撃！シャイニング・アルティメット・クラッシュャー！！！」

「何そのカオスな技名！！つて、ギャー！！！」

俺

LP900 - 900 - 1800 - 6300

【じよ、上手に焼けましたー】

負けた俺に言う言葉がそれか！？

「俺だ。モクバか、どうした……何？」

デュエルの後、デュエルディスクに問題が無いか調べている所、海馬さんにモクバさんかなにやら、連絡があった様だ。

どうやら、何か問題があった様だが、海馬さんは俺の方を見ると、直ぐに代わりの者を行かせると行って、通信を切った。

なんだろう……何故か逃げないと不幸になるけど、頑張っても逃げ切れない。

そんな状態に自分が置かれている気がする。

- - -  
- - -  
- - -

【プツ、ククク】

【ゴーズ、あまりマスターを笑うな】

【いや、だってしょうがないだろマルス。ハニーやオッサンやアスディだって笑ってんだぜ】

【しかし……】

【大体、お前だって、笑ってんだろ？】

【うっ……】

「おまえらな……」

マルス達に文句を言おうとしたら、控え室のドアがノックされた。

「貴志、準備はできたか？」

「モクバさんですか。ええ、準備万端ですよ」

「そうか、じゃあ合図が出るまで、舞台裏で待機していてくれ」

「分かりました」

気分を切り替えないと……ちょっとやっていけないな。

ヒーローショーなんて。

「キヤーー!!」

舞台裏に待機して、10分程。

舞台の方から女性の悲鳴が聞こえる。

後少しで出番だな。

「おっーと!? 悪の科学者Dr.ゴザツキーにより、生み出された悪の戦士ビッグ5が、悪事を働いてるぜ! こうなったら、あの男を呼ぶしかないぜい! さあ、一緒に!」

モクバさんの煽りで、観客から合図が出る。

よし、出番だ!

「そこまでだ! ビッグ5!!!」

「何奴!」

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ、悪を倒せと我の名を!」正義の味方 カイバーマン』只今、参上!」

カイバーマンに扮した俺が名乗ると同時に俺の後ろが爆発する演出がなされる。

「おのれ、カイバーマン! またしても、私達の邪魔をするのですか!」

「ふん! キサマ達が悪事を働く限り、私は何処へでも駆け付け、キサマ達の野望を挫くまでだ!」

「くう〜生意気な! 今日こそ貴方を倒して差し上げますよ! 行きますよ皆さん!」



ビッグ1もとい『深海の戦士』がそう言うと、『深海の戦士』に続き、ビッグ2『ペンギン・ナイトメア』、ビッグ3『ジャッジ・マン』、ビッグ4『機械軍曹』、ビッグ5『人造人間・サイコ・シヨッカー』の5人？が向ってくる。

「ふん！キサマ達が束になって掛かって来ても、この俺を倒す事などできぬわ！」

『深海の戦士』が繰り出した蹴りを左腕で受け止め、腰を低く落とす。

手加減と自重はすると言われていたので、本気で殺るぞ……

「くらうがいい！ジャステイス・パンチ！」

「ぐわらばあ！」

ぶつちやけたただのパンチだが、『深海の戦士』は舞台袖まで吹っ飛ばす。

ヘルメットが凹んでいた気がするが、気にしない。

「な、なん「遅い！ジャステイス・シュート！」ぶぎゃあ！」

動揺した『ペンギン・ナイトメア』を蹴り飛ばし、『機械軍曹』ごと吹っ飛ばす。

『ペンギン・ナイトメア』を蹴った時に、体の中心部の下辺りから、何かが潰れる音がしたが、気にしない。

「ひ、ひい〜」

『人造人間 - サイコ・シヨツカー』が背を向けて、舞台袖に向かう。おいおい、台本にねえぞそれ。

『ジャツジ・マン』以外は最初に殺られて舞台袖に吹っ飛ぶんだろ？

「逃がすか！ジャステイス・ジャンピング・キーク！！」

「ぼがばあ！？」

どっかのバツタがモチーフのライダーの必殺技を『人造人間 - サイコ・シヨツカー』の後頭部に決める。

『人造人間 - サイコ・シヨツカー』は空中で2回転半して、舞台袖に消えた。

蹴りを入れた時に、ゴキッ！という音がしたが、気にしない。

「そ、そこまでだ！カイバーマン！これを見るオ！」

舞台上段で観客から選んだ人質……つて、あれ？静香さん？何故此処に？まあ、良いか。

『ジャツジ・マン』が静香さんに武器を向けている。

「おのれ、卑怯な！彼女を解放するんだ！」

「そう言われて解放する……訳無いでしょう！ここで貴方は終わり

です！（何故だ？何故さつきから、妙な寒気がするんだ！？）

「おのれえー！」

「おっーと！カイバーマンがピンチだ！皆、カイバーマンに力を分けてやってくれえー！」

モクバさんの言葉に会場の観客から、カイバーマンコールが起こる。

そして、徐々にカイバーマンの頭部に光が集まっていく。

「な、何だと！？」

「『ジャツジ・マン』よ、くらうがいい！ジャステイス・フラッシュ  
ユー！！」

頭部に溜まった光を『ジャツジ・マン』に向けて、放つ。

「ぐわあああああー！！！」

『ジャツジ・マン』が舞台裏に消え、程なくして爆発する。

やっぱり、海馬コーポレーションのソリットビジョンシステムは凄いな。

つと、さつさと話を進めないとな。

「お嬢さん、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

静香さんの手を取り、立たせる。

な、何だ……凄い殺気を感じる。

それも、2つも……

「はーはっはっはっ！まだ、私達はやられてませんよカイバーマン  
！」

「何！？」

取り敢えず、殺気の事は今は置いておこう。

舞台の中心部が開き、そこから、フラフラな『深海の戦士』、『ペンギン・ナイトメア』、『機械軍曹』、『人造人間・サイコ・シヨッカー』と無傷で落下した筈なのに、ボコボコの『ジャッジ・マン』が現れる。

「さあ、これが最後の戦いです！行きますよ！」

「『『『『『最終奥義！邪竜合体！！』』』』』」

『深海の戦士』、『ペンギン・ナイトメア』、『ジャッジ・マン』、『機械軍曹』、『人造人間・サイコ・シヨッカー』の5体が闇に包まれて、舞台裏に密かに消える。

そして、現われたのは『F・G・D』。

「おっーと！ビッグ5は最終形態『F・G・D』へと姿を変えたぞ

！我らが『正義の味方 カイバーマン』はどうやってこいつと戦うんだあー！！」

「ビッグ5よ！キサマ達が力を結集し、この俺を倒そうと言っならば、俺も本気で答えよう。出でよ！我が僕、『青眼の究極竜』、『カオス・ソルジャー』！」

俺の目の前に『青眼の究極竜』と『カオス・ソルジャー』が現れる。

「……………グワハハハハハ！その程度で私達を倒せると思っているのですか！？」「……………」

「フハハハハハ！甘い、甘過ぎるぞビッグ5！行くぞ『青眼の究極竜』、『カオス・ソルジャー』！究極融合！！現われるがいい『究極竜騎士』！！！！」

「……………何だと！？」「……………」

『青眼の究極竜』と『カオス・ソルジャー』が1つになって現れるのは、勿論『究極竜騎士』

「これで終わりだビッグ5！くらえ！ギャクシー・クラーシユ！！」

「ぐわあああああ！！！！」

「粉碎！玉砕！大喝采！！我が前で悪が栄えた試し無し！フハハハハハハハハ！ワハハハハハハハハハ！！」

……………



第30話 冬休みその？（後書き）

鷹

「さーて、久しぶりに後書きを」

貴志

「ジャステイス・パンチ!!」

鷹

「出オチ!？」

第31話 帰還(前書き)

デュエル無しの短めです。



### 第31話 帰還

「アカデミアよ、私は帰って来たー！」

【はいはい】

始業式が明日に迫った今日、船に数時間揺られて俺はデュエルアカデミアに帰って来た。

一部の荷物を除いて、先に送っておいたから、身軽なものだ。

今ある荷物はカバンの中のデッキとサイドデッキとそして、炊飯器とかだ。

さて、荷物を整理しないといけないし、さっさとレッド寮に向かいますかね。

【マスター、本当にそれで宜しいのですか？】

「ああ、これで大丈夫だろう」

【それでも、隠し場所が炊飯器の中ってのはどーなのよ】

「虚を突く人には、こういう物の方がうってつけだろう？」

部屋に着いて、ある程度荷物を整理し終え、部屋に細工がされてないか調べた後、封と書いたお札が貼ってある炊飯器を前にして、マ

ルス達と話し合う。

この炊飯器の中には何を隠そう『邪神イレイザー』と『邪神ドレック・ルート』の2枚が入っている。

幻魔と幻魔を狙う輩との戦いで使う予定のカードだが、その戦いの日が来るまで、邪神のカードは人目を見ない方がよい。

【でも、炊飯器の中ってのはどうなんだ？どこかの大魔王じゃあるまいし】

「殆ど無いと思うが、この部屋に盗人が入った時の事を考えてだな。ダンボールやデッキケースに入れていたら、十中八九、漁られる。引き出しの中もしかりだ」

【それで、炊飯器の中なのですか】

「ああ、封と書いてあるお札を貼り、壊れていると思わせれば、わざわざ中を漁る事はしないだろ」

まあ、漁る前に部屋に仕掛けてある罠と最低、誰か1人は部屋に残っているマルス達に撃退されるんだろうけどな。

「さて、明日も早いしもう寝るぞ」

「〜であるからして」

今俺は、始業式にて、終業式と内容がさして変わらない校長先生の

長く、とても長いありがたい話を聞き流しながら、朝に十代達が言っていた事について考えている。

朝、十代と翔から、クロス・ボンバーを仕掛けられ（無論避けた）、マルスの事を聞いてきた十代を誤魔化した後、十代達から、冬休みに此処、デュエルアカデミアで十代が『人造人間・サイコ・シヨッカー』の精霊と闇のデュエルした事を聞いた。

そのサイコ・シヨッカーは、オカルト部が呼び出した不完全な精霊で、人を生け贄として、欲していたらしい。

だが、昔、マルスに聞いたのだが、精霊は存在、又は、実体化するにいたって、人等の生け贄として欲する事は決してない。

人から精霊になる際は自分の命を捨てなければならぬとも聞いたが、これは今回のケースには当て嵌まらない。

これはマルスだけでは無く、マハードさんやマナさんにも聞いた事だ。

ただ、物事には例外があるもので、サイコ・シヨッカーの様な普通のモンスターでは無く、神に匹敵しうるモンスターの復活ならば、人を生け贄に使う場合もある。

あまり考えたくは無いが、幻魔を狙う輩が幻魔を復活させる為に、サイコ・シヨッカーの精霊を送り込んだと考えられる。

これは、調査した方が良いかもな。

始業式が終わり、その後、特に授業も無く、解散した後、十代と翔に詫びの品を渡したのだが、翔の喜び様に驚いた。

以前、翔が欲しいと言っていた『ブラック・マジシャン・ガール』や『雷電娘々』のフィギュアを渡したただけなんだが、俺達の身の丈を飛び越える程、喜ばれるとはな。

買う際に、マルスとリアルファイトまでして、買いに行った甲斐があるものだ。

十代には十代が持っていなかった『E・HERO フェニックス・ガイ』、『E・HERO シャイニング・フェニックス・ガイ』、『E・HERO キャプテン・ゴールド』、『平行世界融合』等を渡した。

十代の方が数が多いが、安売りしていたカードや俺が持っていたカードなので、安上がりですんでいる。

しかし、翔にいらなと言われた『白魔導師ピケル』と『黒魔導師クラン』のフィギュアはどうしようかな……まあ、今は良いか。

さて、夜に発電所に行くまで暇だから、今の内に睡眠を取っておくか。

「マルス、どうだ？何か感じるか？」

【ほんの、ほんの僅かな闇……ただ、それだけです。詳しく調べるには日が経ちすぎています】

今は午後8時。

こっそりと寮から抜け出して、発電所前に来たのだが、特に手掛かりらしい手掛かりは無かった。

「仕方ない。明日辺りにでも、オカルト部にサイコ・シヨッカーを呼び出した時の事を聞くとするか」

「そこで何をしているのにや」

「!」

後ろから、声が出たので、咄嗟に其処から動いて、声の主の方を向く。

「一体どうしたんだにや」

「大徳寺先生ですか。何って、俺は肝試しをしていただけですよ」

「一人でかにや」

「ええ、今、日本文化を学ぶ事にはまっています。日本では、夜な夜な家を抜け出して、度胸試しをする習慣があるとこれで見ました。流石に十代達を誘うのは忍び無く、一人で来ました」

そう言いながら、懐から『実録！日本文化！』というインチキくさ

い本を取り出して大徳寺先生に見せる。

それを見た大徳寺先生は何か申し訳なさそうな表情をした。

「あー天道君、肝試しは夏場にやる事なのにや。だから、思い切り季節外れだにや」

「えっ！そんなんですか？十代達と怪談話と肝試しをしたのが冬だったので、てつきり冬にやる物と思っていました」

「そうでしたかにや。取り敢えず、夜に出歩いていた事は見逃してあげますから、他の先生に見つからない内に、早く寮に戻るのにや」

「分かりました」

大徳寺先生にお辞儀をしてから、寮へ帰った。

「これは一体何があったんだ？」

部屋に帰って早々、そんな声が出る。

だが、しょうがないと思う。

何故なら、発電所に向かう前にはちゃんと、机の上に置いておいた『白魔導師ピケル』と『黒魔導師クラン』のフィギュアが諭吉20枚に変わっていたのだから。

「ゴーズ、何があつたんだ？」

邪神の安全を確認した後、部屋で留守番をしていた筈のゴーズに訳を聞く。

【分からねえ。何か黄色い物体……そう、黄色い彗星が罫を薙ぎ倒しながら、目の前を通り過ぎたかと思つたら、机上のフィギュアが金に変わっていた】

なん…だと!?

馬鹿な仕掛けた罫には人1人の意識ぐらい、軽く刈り取れる物もあつたんだぞ!

それを薙ぎ倒しただと!?

……ん?黄色い物体でピケルとクランってまさか……

- - -  
- - -  
- - -

「ふっ、ミッションコンプリート。ピケルとクランを手に入れたぜ。しかし、同士《天道》よまだまだ甘いな。俺の理論にかかればあの程度の罫等、どうという事は無い」

- - -  
- - -  
- - -

まさかな……まあ、ピケルとクランが諭吉20枚に変わったんだから、得したと言えれば得したし、まあ、良いか。

【マスター、1つ良いですか？】

「どうした」

諭吉を財布に入れ、念の為、炊飯器を他のところに移して早々、マルスが曇った表情で話掛けて来た。

【あの大徳寺という方は一体？】

「一体と言われてもな。錬金術の先生で、この寮の寮長だよ」

【そうですか】

「大徳寺先生に何かあるのか？」

俺がそう聞くと、マルスは少し言うのを悩む様になっていたが、やがて口を開いた。

【あの大徳寺という方から、人間としての生気が感じられません】

「ちよっ、ちよっと待て！？それだと大徳寺先生は……」



【死人……そう言えます】

【じゃあ、何故死人が動いてんだ？】

ゴーズの言う事は尤もだ。

死人を蘇らせるなんて……まさか！？

【私も疑問に思っていました。が、錬金術に詳しいという事で合点が  
行きました】

マルスはそこで、1つ間を置いて続きを話した。

【ファラオや師匠、私達が生きていた時代の知識ですが、錬金術に  
よって物を生み出すという事ができました。おそらく、大徳寺とい  
う方は不完全ながらも錬金術によって、死後も生者として、生き長  
らえている。そういう事だと思います】

それからマルスはただ、と更に続ける

【生き長らえていると言っても、錬金術はやはり、不完全な物。大  
徳寺という方はもう長くはないでしょう】

「そうか……」

思わぬところで、とんでもない事を知ってしまったな……

取り敢えず、今はこの事は俺の胸の内に秘めよう。

### 第31話 帰還（後書き）

鷹

「ふうやつとまともな後書きがやれるよ」

貴志

「今までまともな事なんて無かったしな。と言うより、何だあの三沢みたいな奴は！」

鷹

「ああ、あれは三沢です。うちの小説の三沢はああいうのを前にしたら、戦闘力が5000倍になります」

貴志

「それどこの超サイヤ人だよ……っ！つか、タニヤ戦はどうする気だよ」

鷹

「まだまだ先だけど、一応、原作通りの予定だな。その前に暑苦しい人やドローの人、レイの話に学園対抗戦編。書くことはいっぱいあるな」

貴志

「書けるのか？」

鷹

「努力するよ」

貴志

「努力ねえ……まあ、良いや。それではまた次回まで」

オマケ集 主人公の異名、能力等をテイルズシリーズの称号にしてみた。(前書)  
題名通りです。

衝動的に書きたくなったので書いてみました。

話が進めば、追加していきます。

オマケ集 主人公の異名、能力等をテイルズシリーズの称号にしてみた。

・ペガサスミニオン  
インダストリアルイリユージョン社の会長ペガサスの養子、その才  
比肩できる者なし。

・遊戯の弟子  
伝説の決闘王の弟子。越えるべき壁ははてしなく遠い……

・精霊を認知できし者  
デュエルモンスターズの精霊が見え、話しができる者。しかし、話  
す場所を考えないと、変人扱いされるかも？

・精霊扱いし者  
デュエルモンスターズの精霊を相棒に持つ者。やっぱり、話す場所  
を考えないと、変人扱いされるかも……

・六精霊使い  
六人の精霊を相棒に持つ者に与えられる称号。六精霊だからって、  
どこかの霊使いではありません。

・邪神を扱いし者  
神を越える邪悪なる神、その名は邪神。その邪神を扱った者に与え  
られる称号。その力は人の精神にも影響を及ぼす。

・正義の味方？  
強靱・無敵・最強！粉碎・玉砕・大喝采！の言葉と特徴的な笑いが  
トレードマークな彼に扮した者に与えられる称号。決して厨二病で  
はありません。

第32話 青春デュエルテニス（前書き）

部長登場回。

ぶっちゃけとある一文を書きたいが為に書いたと言える回。

### 第32話 青春デュエルテニス

「踊れ！死のダンスを！」

「うわあああ！」

「はい、俺の勝ちっつと」

大徳寺先生に疑念を抱き出してから数日。

特にこれと言った事は無く、比較的平和に過ごしている。

今は体育の授業で男女合同でのテニスをしており、たった今、俺と翔の試合が終わったところだ。

「うう〜。貴志君強過ぎるっス〜」

「まっ、以前やってた事があるからな」

「マジっすか……」

「かじる程度だけだな」

まあ、ペガサスミニオン必修科目みたいなもので、プロに指導してもらったものだったけどな。

テニスの他には野球や弓道等のスポーツに、茶道や華道、はてにはダンス等教わった。

今更だが、ホント、色々教わってんだな。

「あつ、なんだか、あっちの方が騒がしくなってるみたいっすよ」

「ん？本当だ」

翔に言われた所には、どういう訳か人だかりができていた。

授業も中断になっているみたいだし、行ってみるか。

「三沢、何かあったのか？」

「天道《同志》か。いや、実はな」

人だかりの直ぐ近くに居た三沢に事情を聞いてみる。

何故か凄い勢いで何かを否定しなければいけないと思ったが、黙って三沢の話を聞く。

三沢から聞いた話はこうだ。

十代が試合中に誤って明日香の方にボールが飛び、それをテニス部部長の綾小路先輩が打ち返した。

そして、その打ち返されたボールが審判をしていたクロノス先生の顔面にヒット！今に至るとの事。



「あれ？今回のテニスって、男女合同とは聞いたが、何故学年が違う綾小路先輩が此処に居るんだ？」

「恐らく、審判役の先生方に変わって、指導をする為じゃないか？」

「……そういうのって、普通、先生がするものじゃないのか？まあ、気にしたら負けか。」

その後、痛みが引き、激昂したクロノス先生が十代にテニス部へ体験入部するように言って、授業が再開された。

話を聞いた限りでは、十代だけに罪は無いが、まあ、レッド寮はクロノス先生に目の敵にされているからな。

ここぞとばかりに来たな。

しょうがない……骨ぐらいは拾ってやるか。

「さあ！青春は待ってくれないぞ！という訳で腕立て伏せ500回！初め！」

「どうしてこうなった……」

「まだあんのかよ〜」

「もう、へトへトっスよ〜」

放課後、俺と十代と翔はテニス部に体験入部させられ、指導(?)を受けていた。

二度目だが、敢えて言おう。

どうしてこうなった……

いや、まあ、説明すると、あの騒動の後に授業が再開されたんだが、また同じ様な事があったからなただけだな。

因みにその内容はこうだ。

十代が打ったボールが再び誤って人の方に飛んだ(今度は三沢の方)。

飛んで来たボールを三沢が打ち返し、今度はボールが明日香の方に飛んだ。

それを明日香が打ち返し、今度は翔の方にボールが飛んだ。

更にそれを翔が打ち返し、今度は俺の方にボールが飛んで来た。

それで、飛んで来たボールを打ち返すと、ボールは綾小路先輩の方に飛んだ。

最後に綾小路先輩がクロノス先生の顔面めがけてスマッシュを決め、今に至る。

以上の事があり、俺と十代と翔は放課後、テニス部に体験入部する

羽目となった。

テニス部部長の綾小路先輩はともかく、三沢と明日香はテニス部への体験入部は無しだ。

誠に遺憾である。

「498、499、500！終わりだな」

「むっ、流石に早いね。なら、君は他の部員と試合をしていてくれないか？」

腕立て伏せが終わったのを見た綾小路先輩が次の指示を出す。

「ええ、分かりました」

「ガハッ！」

「何だ……参で終わりか。俺の波動球は百八式まであるんだがな」

「おお！天上院君！僕に会いに来てくれたのかな！？」

俺が取り敢えず、綾小路先輩以外のテニス部員をストレートで負かし、十代と翔の腕立て伏せが終わった頃、明日香と確か……ジュンコとももえだっけか……まあ、その3人がテニスコートに来た。

俺は少し離れた所に居るので、聞き取れないが、何やら揉めている様だ。

「何を言い合っているんだあいつらは……」

【何かフィアンセとか綾小路モーターズとか聞こえるぜ】

綾小路モーターズ？……つい事は綾小路先輩は綾小路モーターズの御曹司だったのか。

何故か見覚えあるなと思ったら、以前、パーティーか何かで見た事があつたからか。

俺が1人納得していると、十代と綾小路先輩が突然、デュエルディスクを構えた。

一体何がどうして、そうなるんだ？

「……という訳よ」

「成る程ね」

聞いた話を纏めるところだ。

明日香が十代に話し掛ける。

綾小路先輩が明日香と親しげに話している十代に嫉妬する。

嫉妬の塊となつた綾小路先輩が十代にデュエルを挑み、そこで何故か勝つた方が明日香のフィアンセになるという事になったらしい。

何か話が飛躍し過ぎな気がするな。

しかし、綾小路先輩のデュエルの腕がカイザーに迫る程という事には驚いたな。

チツ、フィアンセはともかく、それなら俺が闘りたかった……

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「くっ、僕の負けか」

デュエルが終わり、十代がいつもの決めポーズを決める。

しかし、綾小路先輩のデッキはバーンデッキか……デュエルする事があったら、気を付けないとな。

「あれ？アニキが勝つたって事は」

「明日香さんのフィアンセは遊城って事に」

ああ、確かそんな事を言ってたな。

「十代……」

「明日香……」

見つめあう十代と明日香。

それを見て騒ぐジュンコとももえ。

そして、絶望の顔の綾小路先輩と翔。

「明日香……1つ良いか？」

「え、ええ。何かしら？」

いつもは勝ち気の明日香も流石に挙動不審になっている。

そして、十代が口を開く。

今更……本当に今更だが、俺も含めて皆、此処から退散した方が良くないか？

「なあ、フィアンセって何なんだ？」

十代がそう言った瞬間、その場に居た者全員がずっこけた。

「アニキ……」

「十代、お前なあ……まあ、十代らしいか」

「知ってるなら教えてくれよ。フィアンセって何なんだ！」

そういう風なオチに落ち

「待ちたまえ！」

着く事は無く、帰ろうとする俺達を綾小路先輩が呼び止めた。

「どうかしたんですか？先輩？」

「天道君、僕は君にもデュエルを申し込む！ただし、今度はフィアンセの話は無しでだ」

「な「ペガ」さあ、デュエルを始めましょう！十代、デュエルディスクを貸してくれ」

「あ、ああ」

十代からデュエルディスクを受け取り、綾小路先輩を睨む。

大方、ペガサスミニオンの俺を倒して、名を上げるってところだろ

う。

こういう面倒事を避けたいから、ペガサスミニオンという事は隠しているのに、一部の御曹司相手には意味ないか。

あつちも俺に見覚えがあると考えるべきだったな……

「さあ、始めようか」

「ええ」

「デュエル！」

俺

LP4000

綾小路

LP4000

この初期手札は……まあ、綾小路先輩相手には結構良いか……

「先攻はお譲りしますよ」

「そうかい。ならば、僕のターン、ドロ―！僕は魔法カード『サービスエース』を発動！僕が手札から選んだカードの種類を予想してもらおうよ」

そう言いながら、右手に1枚のカードを持ち、裏向きのまま差し出



す綾小路先輩。

十代の時も初手から来てたなそれ……確か俺が当てた場合は選んだカードは破壊、ハズレの場合は選んだカードを除外し、俺に1500ポイントのダメージを与えるんだったな。

十代の時に綾小路先輩が選んだのはモンスターカードだった。

手札と場の都合上外したいんだが、どうするか……よし！

「俺が選ぶのは魔法カードです」

「本当にそれで良いのかい？」

「ええ」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

俺と綾小路先輩の間に一種の緊張感が生まれる。

「残念ハズレだ。僕が選んだカードはモンスターカードの『神聖なる球体』。よって、『神聖なる球体』を除外、そして、1500ポイントのダメージを受けてもらうよ！」

フィールド上で、プレイされていた『サービスエース』から、巨大なテニスボールが俺めがけて放たれる。

「ぐっ、うう」

俺

LP4000 2500

「ふっ、どうだ「手札の『冥府の使者ゴーズ』の効果発動！」何だって!？」

「自分フィールド上にカードが存在しない場合に、ダメージを受けた時に、このカードを手札から特殊召喚できる!現れる『冥府の使者ゴーズ』!」

【いよっしゃ。俺、参上!】

『冥府の使者ゴーズ』

レベル7 闇属性

悪魔族・効果

攻撃力2700

守備力2500

「更にこの方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により、追加で効果が発動する!俺が受けたのはカード効果によるダメージ。よって、俺が受けたダメージと同じ分のダメージを受けてもらいます」

【え〜と、あったあった。それじゃあ、スマッシュ!】

ゴーズが何処からかは知らないが、ラケットとテニスボールを取出

て、テニスボールを綾小路先輩めがけて打ち出す。

「うわぁ！」

綾小路

LP4000 2500

「くつ、モンスターをセット、カードを1枚セットしてターンエンドだよ」

綾小路

LP2500 手札2枚

モンスター

伏せ 1

魔法・罫

伏せ 1

「俺のターン！ドロー！」

チツ、出せるモンスターはこれだけか……ゴーズが居なかったら、負けてたかもな。

「俺は速攻魔法『サイクロン』を発動！」

「むっ」

竜巻が綾小路先輩の魔法・トラップゾーンに伏せてあるカードを襲う。

破壊したのはトラップカードの『レシープエース』か。

あれはダイレクトアタックを無効にして、相手に1500ポイントのダメージを与えるカードだった筈。

破壊できて良かったな。

「更にチューナーモンスター『マツハ・シンクロン』を召喚！」

『マツハ・シンクロン』

レベル1 風属性

機械族・チューナー

攻撃力0

守備力0

「レベル7『冥府の使者ゴーズ』にレベル1『マツハ・シンクロン』をチューニング！彼の者の精神を蝕みし悪魔よ、我が前に出でて、その力を振るうがいい！シンクロ召喚！出でよ『ブラッド・メフィスト』！」

ゴーズと『マツハ・シンクロン』が姿を消し、新たに魔法使いの様な姿のモンスターが現れる。

『ブラッド・メフィスト』

レベル8 闇属性

悪魔族・シンクロ/効果

攻撃力2800

守備力1300

「バトル! 『ブラッド・メフィスト』で守備モンスターに攻撃!」

攻撃対象になつた事により、守備モンスターが顕になる。

守備モンスターは『メガ・サンダーボール』。

守備力は600なので、当然『ブラッド・メフィスト』に破壊された。

「カードを1枚伏せてターンエンド。そして、この時墓地の『マツハ・シンクロン』の効果発動!このカードと共にシンクロ素材として、墓地へ送られたモンスター1体を手札に加える。『冥府の使者ゴーズ』を手札に加える」

俺

LP2500 手札4枚

モンスター

『ブラッド・メフィスト』

攻撃力2800

魔法・罫

伏せ 1

綾小路

LP2500 手札2枚

モンスター・魔法・罫  
無し

「僕のターン、ドロー！魔法カード『スマッシュエース』を発動！デッキの一番上をめくる。それがモンスターカードの場合、1000ポイントのダメージを受けてもらうよ」

「ならば、チェインして、リバース・トラップ発動！『亜空間物質転送装置』。このカードの効果で『ブラッド・メフィスト』をエンドフェイズ時まで、ゲームから除外」

突如、現れた怪しげな機械から放たれた光線を浴びた『ブラッド・メフィスト』は、その姿を消した。

それを見た綾小路先輩は苦々しげに表情を歪めた。

「ぐっ、フィールドにカードが存在しないという事は」

「俺がダメージを受けたら、再びゴーズの出番になりますね。さあ、早くカードをめくってください」

「くっ、デッキの一番上のカードは……魔法カードの『デューズ』だ。よって、ダメージは発生しない。そして、『スマッシュエース』の効果でめくられたカードは、墓地へ送られる」

ダメージは無しか……ちょっと残念だ。

「僕は更に『伝説のビッグ・サーバー』を守備表示で召喚。更に『デカラケ』を装備してターンエンド」

『伝説のビッグ・サーバー』

レベル3 地属性

戦士族・効果

攻撃力300

守備力1000

「……この瞬間、『ブラッド・メフィスト』はフィールドに戻ってくる」

俺

LP2500 手札4枚

モンスター

『ブラッド・メフィスト』

攻撃力2800

魔法・罫

無し

綾小路

LP2500 手札0枚

モンスター

『伝説のビッグ・サーバー』

守備力1000

(『デカラケ』を装備)

魔法・罫

『デカラケ』

装備魔法

(『伝説のビッグ・サーバー』に装備)

前言撤回、もし、さっきの『スマッシュエース』が決まったら、下手をすれば負けていた。

もし、ダメージを受けてたら、最悪、『伝説のビッグ・サーバー』の攻撃の後、『伝説のビッグ・サーバー』の効果で『サービスエース』をサーチして発動、それで追撃を受けてライフ0になっていたかもしれん。

やっぱり、このカードを伏せておくべきだったか。

「俺のターン、ドロー」

さて、手札のゴーズを覗けばモンスターカードは無い。

そして、『デカラケ』の効果により、『伝説のビッグ・サーバー』に対する攻撃は1度だけ無効になる。

こうして見ると『デカラケ』は三魔神が『伝説のビッグ・サーバー』専用の装備魔法になった様なものだな。

まあ、取り敢えず……



「バトル！『ブラッド・メフィスト』で『伝説のビッグ・サーバー』に攻撃！」

「『デカラケ』の効果発動！『伝説のビッグ・サーバー』に対する攻撃を1度だけ無効にする！」

「カードを1枚伏せてターンエンド」

俺

LP2500 手札4枚

モンスター

『ブラッド・メフィスト』

攻撃力2800

魔法・罫

伏せ 1

綾小路

LP2500 手札0枚

モンスター

『伝説のビッグ・サーバー』

守備力1000

（『デカラケ』を装備）

魔法・罫

『デカラケ』

装備魔法

(『伝説のビッグ・サーバー』に装備)

「僕のターン、ドロー！」

「スタンバイフェイズ時に『ブラッド・メフィスト』の効果発動。  
相手フィールド上に存在するカード1枚につき、300ポイントの  
ダメージを与える！」

「なっ、うっ」

綾小路

LP2500 1900

「ぐっ、僕は魔法カード『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロ  
ー！よし！更に僕は2枚目の『スマッシュエース』を発動！一番上の  
カードは……『プラズマ・ボール』！よって、1000ポイントの  
ダメージを受けてもらっよう！」

「ぐっ、くう！」

俺

LP2500 1500

「『伝説のビッグ・サーバー』を攻撃表示に変更！そして、バトル

！『伝説のビッグ・サーバー』は相手プレイヤーにダイレクトアタックできる！『伝説のビッグ・サーバー』でダイレクトアタック！  
『伝説のビッグ・サーバー』がボールを打とうと構えるが、そうはさせない！

「リバース・カードオープン！永続トラップ『幻想の呪縛』！」

「なっ！そ、そのカードは」

「『幻想の呪縛』。このカードは相手モンスター1体の効果は無効にし、更に攻撃力を500ポイントダウンさせる永続トラップ」

そして、1ターンだけだが、神にも効くカードでもある。

『伝説のビッグ・サーバー』  
攻撃力3000

「ターンエンドだ」

「俺のターン、バトル！『ブラッド・メフィスト』で『伝説のビッグ・サーバー』に攻撃！」

「ぬわああああー！」

綾小路

LP19000

あー危なかった。

最後の最後までゴーズ、『マツハ・シンクロン』以外のモンスターが来ないって一体……

まあ、何はともあれこれで終

「まだまだ！今度はテニスで勝負だ！」

わらなかった。

その後、綾小路先輩と数時間に及ぶラリーを続けてぶっ倒れ、テニス部の顧問の先生と鮎川先生に叱られるのは別の話である。

### 第32話 青春デュエルテニス（後書き）

鷹

「今日の最強カードは」

貴志

「おっ、久々に復活か？」

鷹

「まあね。てな訳で今日の最強カードはこれ『幻想の呪縛』だな」

貴志

「前みたいに効果の記載は無いのか？」

鷹

「参考になっている所に記載が無かったんだよ。因みに遊戯王Rではこんな感じだ」

『幻想の呪縛』

罨カード

効果

このカードに呪われたモンスターの特殊能力は無効となる。

攻撃力が500ポイント下がる

貴志

「永続じゃねーじゃねーか！」

鷹

「そこは『六芒星の呪縛』に合わせたからな。てな訳で『幻想の呪

縛』の説明。遊戯王Rに出たカードで使用者はアテム。初出は一巻のカーク・デイクソン戦で漫画版の『督戦官コヴィントン』に対して使われ、効果を無効にし、漫画版『マシンナース・フォース』の合体を解除させた。他にも天馬夜行戦に使われた際には神である『邪神ドレッド・ルート』に対して使われ、効果を無効にした。『邪神ドレッド・ルート』に有効だった為、他の邪神や三幻神にも有効と思われる。最終決戦時に『邪神アバター』に対して使ったら、どうなったんだろうか……」

貴志

「間違いなくあっさり終わるな。これ一枚で1ターンだけとは言え、オシリス、ラー、イレイザー、アバターが正真正銘の紙のカード（笑）になるな」

鷹

「まあ、それでも俺は原作・アニメのカードなら、原作効果の『墓荒らし』が最強と思ってるけどな」

第33話 不運日和（前書き）

主人公の運再確認の回ですかね。

### 第33話 不運日和

俺達がテニス部に1日限りの体験入部をしてから、数日が経った。

特にこれと言った事も起こらず……いや、事件と言えば事件と言える事が1つ起こっているが、大して気にする程の事でも無く、概ね平和に過ごしている。

「むっ、もう時間か……それでは授業を終わりにする」

ん？授業が終わったか。

さてと、昼休みになったし、さっさと飯を買いに行くか。

「よし！今日こそ当ててやるぜ！」

「アニキ！ファイトっスよ！」

十代が張り切ってドローパンの山の中に手を突っ込み、1つのドローパンを取る。

トメさんに50DPを支払ってから、ドローパンの封を切って、パンを食べる。



「うげっ、梅干しパンかよ」

パンを食べた十代が顔を顰めながら言った。

「また外れのパンか、これで1週間だな。黄金の卵パンを外すのは」

「ちつくしよー！なら、もう1回だ！」

そう言っつて、再び十代がドローパーンの山に手を突っ込む。

そして、さっきと同じ様にパンを食べた瞬間、顔を顰めた。

「十代がこれだけ外している中で、ドローパーンを買うのはある意味冒険だな……」

「えっ？貴志君、いつものにしないんスか？」

「競争に負けた」

俺の言葉に翔はああと合点がいった様だ。

俺は制裁デュエルの少し前から、ドローパーンを一切買わず、昼はもっぱら焼そばパンとホットドック、時々ハンバーガーだ。

しかし、それぞれそれなりに競争率が高いらしく、いつも競争になる。

今までどれか1つは取れたのだが、今日は全て負けてしまった。

今日は授業が終わるのが、少し遅かったからだと思うが、なんかつ

いて無いな。

「止めといた方が良いんじゃないっすか？他の物を買ったか」

「流石にあの大軍の中には突っ込みたくない」

そう言いながら、おにぎりや弁当売り場を見る。

そこには、赤、黄、青の制服が犇めきあっていた。

イエローやブルーの生徒は殆どが、寮の方へ食べに帰るといつのに珍しい。

あれだけ居る中に突撃するのは気が引ける。

ねじ伏せる事もできない事は無いが、そうすると明日からの競争時に狙われて不利になるしな。

「でも、ドローパンは止めといた方が良いんじゃない……」

「あの様子だと、ドローパン以外の食べ物売り切れになるから、ドローパンしか無いんだよ」

「でも、あの中で買いに行けるんだな？」

隼人がある所を見ながら言った。

その視線の先には、「また外れかよー！」と言いながら、4つ目のドローパンを取ろうとしている十代が居た。

「……朝飯を抜いてるから、昼飯も抜くのは流石にツライ」

因みに朝飯抜きになったのは、二動を夜遅く迄見ていて寝坊したという自業自得の結果だ。

しかし、朝飯に続いて昼飯も抜きで午後の授業をこなすのはツライ。

それに……それに……いくら何でも、いつもいつも、とんでもないゲテモノパンを引く筈が無い！

「いただきますっス」

「……今更だが、どうやってそんな人気な物を取ってんだ？」

翔と隼人の手元には、大人気の幕の内弁当とハンバーグ弁当がある。

この2人、いつもこういう人気の弁当をいつの間にか、ちゃっかり抑えている。

一体どうなっているんだ？

「まあ、それは秘密っス」

「秘密なんだな」

「ふむ、そうか」

全くもって謎だ……アカデミア七不思議にしたいくらいに……

「くっそー！またか……。もういつちょよ！」

十代は7つ目のドローパーンに挑戦している。

黄金の卵パンを外していると言っても、ステーキパンや海の幸満載の海鮮パン、世界三大珍味全てが入った世界三大珍味パンという当たりパンを当てているんだから、満足すれば良いだろうに……

「まだだ……黄金の卵パンを当てる迄、俺は満足できねえぜ……」

十代がまた新たなドローパーンの封を切った。

さてと、そろそろ昼休み終わるし、俺もドローパーンを食べるか。

- 十代 Side -

「不つつつつつつ味うううううううううううういいいいいい……

……」



さで過去4年で、これを食べた生徒全員を病院送りにした伝説のパ  
ンだ」

「伝説の……パン……」

貴志の奴、とうとうそこまで行ったのか……

「の、飲み…物オ」

「「「うわぁ!」「」「」

貴志がはい上がって自分が買っていた飲み物を手に取った。

正直、怨霊か何かかと思っただぜ……

「ギヤアアア——!」

「今度は何だ!??」

貴志の方を見ると、さっきと同じ様に不味い不味いと言いながら、  
床を転がっていた。

「これを飲んだみたいなんだな」

隼人が1つのペットボトルを指差しながら言った。

「こ、これは!??」

それを見た三沢がまた顔を青くした。







それをパンで中和しようとしたら、また同じパンだったしさあ！

取り敢えず、今は部屋にある一昨日買ってから、開けずじまいだったファンタを飲もう！それで、ひとまず落ち着こう！

【ん？ああ、マイブラザーか。冷蔵庫にあったファンタ頂いたぜ】

部屋に戻ると、罨が解除されていた部屋で待機していたゴーズが実体化し、ファンタを飲んでくつろいでいた。

「し」

【し？】

「死にさらせえー！」

【えっ、ちよっ、ぐわあああああ！！！】

キョトンとしているゴーズに飛び膝蹴りを決めた後、ハイキックを2発、回し蹴りを1発決める。

ゴーズは窓を突き破り、海へと落ちていった。

「こうなったら、水だ！」

部屋を出て、柵を飛び越えて一気に降りる。

「水水水水水水水水水水水みいいずうううう！！」

「あつ！天道K」

途中で前に出てきた大徳寺先生をデビ バット ーストで避けて食堂に入り、水道の蛇口を捻る。

「天道君、昼から断水だから水は……って、どうかしたのにかにゃ？」

「ふ」

「ふ？」

「ふ・ざ・け・る・なあー！！！！」

「にゃー！！」

後で聞いた話だが、この叫びは島中に響いたらしい。

第33話 不運日和（後書き）

鷹

「さて」

貴志

「死にさらせえー!!」

鷹

「うわわっと！何すんのいきなり！」

貴志

「ふざけんな！何だよあれは!？」

鷹

「ドローパンでクサヤジャムパンを引く。これって日常だねー」

貴志

「やかましいわ！だいたいな！更新ペースは落ちてるし、更新したと思ったら、あんな感じだし！さっさと進めろよ！マルスはどういう感じに出番を待ち続ければ良いんだよ！」

マルス

【そうですね！私はいつになったら、デュエルに出られるんですか!??】

鷹

「後、二回か三回後だな。それは確定している」

貴志

「本当なのだろうか……果てしなく不安だ」

### 第34話 暴走（前書き）

はじめに言いましょう。

どうしてデュエルが無くなった……

頭がスッキリしていない時に書くべきではありませんね……大山の話がおもいつきりネタ回になってしまいましたし……

### 第34話 暴走

- 十代 Side -

「で？俺は何時そいつをレクイエムで蒸発させれば良いんだ？」

最近、黄金の卵パンだけが盗まれているという事をトメさんから聞き、それを戻ってきた貴志に話したら、貴志の答えがこれだった。

正直に言っつて、貴志の目がマジで全く冗談に聞こえねえ……

それと、後ろでボロボロな状態のゴーズが恨み言を言っているが、それを気にしたら、負けなんだろうつか……

「いやいや！いくら何でも、それはやり過ぎっスよ！」

呆気に取られていた翔が我に帰ったのか、貴志に突っ込みを入れる。

すると貴志は思い直したのか、少し考える素振りをした後に何か考えが浮かんだのか、手をポンと叩いて口を開いた。

良かった、自重してくれ

「ふむ、ならレクイエムは止めて、48の殺人技と52の関節技を決めた後、俺が出せる超人の必殺技を全て仕掛ける程度にするか」

る事は無かった。

というか、それを仕掛けられた奴は絶対に死ぬだろ！

「まあ、レクイエムに比べたら……」

翔！それで、良いのか！？

いや、まあ、今の貴志にこれ以上何か言ったら、何されるか分からねえけどさ……

【なあ、今のマイブラザーは凄く気が立ってるんだが、何があったんだ？】

【クリクリ、クリクリ〜】

相棒がカイエンを通して、ゴーズに状況を説明している。

やっぱり、クサヤジャムパンが原因……だよな。

あそこまで人をキレさせるクサヤジャムパンって一体……

その後、何とか貴志を宥めながら、黄金の卵パンを盗みだしている犯人を俺達で捕まえる事になった。

黄金の卵パンだけ盗みだす犯人も気になったし、何よりトメさん達にはいつもお世話になってるしな！

- 十代 Side End -

時刻は午後11時、俺達は購買部の隣にある休憩所に待機し、犯人を待っているが、未だに犯人は現れない。

まあ、現れたら現れたらで犯人をぶちのめすだけだけど……

正直、八つ当たりという事はよく分かっている。

分かっているが、内に沸き上がるこの怒りを誰かにぶつけなければ、気が済まないのも確かだ。

幸い犯人を捕縛するという大義名分もある。

さあ犯人よ……さつさと来い……死なない程度にボッコボコにしてやるからさ……

「皆、こんな時間までご苦労様だねえ。差し入れとして、夜食を持ってきたよ」

休憩所の扉が開き、其処から大量のおにぎりを載せたトレーを持ったトメさんが入って来た。

「おお！丁度、お腹が空いてきてたんだ。ありがとうございますトメさん」

「ありがとうございますトメさん」



十代が真つ先にトメさんにお礼を言い、それに続いて俺も含めて皆、トメさんにお礼を言う。

その後、翔がおにぎりに手を伸ばした所で十代がドロおにぎりとか言つて、くじ引きの様な感じになった。

その様子に隣に居た明日香が呆れた様に溜め池を吐いた。

そついや何で明日香が此処に居るんだ？

昼に犯人を処K……捕まえるという話になった時には確かに居たが……俺が寮に戻っていた内に何かあったのだろうか？

……まあ、今はそんな事はどうでもいいか。

俺も少し小腹が空いたし、おにぎりを食べようかな。

トメさん達を作ったなら、酷い具は無い筈だしな。

「え〜と、どれにしようかなつと……これかな」

「何だか、嫌な予感がするんだな」

其処！不吉な事を言うな！大事な事だから2度言うが、トメさん達  
が作つたんだから、酷い具は無い筈だ。

無いよね？絶対に無いよね？

……

「トメさん、1つ聞きますが、具は何が入っているんですか？」

「おかかに鮭に梅干しに明太子だよ。全く、貴志ちゃん心配性だねえ」

よし！なら、大丈夫だ！十代同様、ちゃん付けされてるのは、この際スルーしよう。

「じゃあ、いただきますーす」

「あのー、すみません！いくつか、塩と砂糖を間違えたおにぎりがありました！」

「た、貴志？」

「ま、まさか……」

焦った表情で休憩所に入ってきたセイコさんと俺を心配そうに見る皆に対して俺は、頷く事しかできなかった。

トメさんから差し入れを貰ってから、結構時間が経ったけど、まだ犯人は現われねえ。

少し前から、シャツ、シャツと何かを研ぐような音もしてるし、犯人が現れない事にこした事はねえよな。

そう思っていると、購買部の方から、シャッターが開く音がした。

トメさんとセイコさんもこっちに居るって事はまさか!?

休憩所の扉を少しだけ、開けて様子を見ると、誰かがワゴンの上のドロパンの山から1つのドロパンを取って出ていった。

「クツクツクツ、ようやくこの手で犯人を捕まえられる（殺れる）時が来た様だな」

ちよつと待て！今、声が2重に聞こえだぞ！殺れるって言葉が聞こえだぞ！

それと、突っ込まなかったけど、何でさっきから貴志は髪が膝ぐらゐまで伸びて、金髪になった上、眉毛が無くなってんだよ！目の色も黄緑に変わってるし……

それじゃあまるで超サイヤ人3みたいじゃねえか！今なら、龍拳も出せるんじゃないのか？

「流石に龍拳は無理だ」

心読まれた！

「口に出てたぞ。それより、さっさと犯人を追うぞ（殺るぞ）」  
また声が2重に……って、もう良いか、流石に突っ込みに疲れてきた。

今、俺と貴志はドロパンを盗んだ犯人を追っている。

翔達も追ってる筈だけど、既に遙か後方まで離れている。

犯人は木から木へと飛び移って行ってるから、捕まえるのは少し面倒だな。

「その程度で逃げられると思っているのか？」

前を走っている貴志がそう言うと、走るスピードを上げて犯人を追い越した。

でも、それだと犯人を捕まえられねえぜ。

「くらえ！スグル版マッスル・スパーク！」

「なっ！？ぎゃあああああ！……！」

と思っていたら、貴志が跳躍して犯人に急接近して、両手で犯人の両腕を封じ、右足を犯人の首に、左足を犯人の左足に掛けた。

すげえ……本当にマッスル・スパークを決めやがった。

「次はビッグベン・エッジだ！」

「えっ？あつ、ちょっと待って……ぐわあああああ！！！」

落下中、貴志が犯人の側面に回り込んで左手で犯人の左腕を右手で犯人の両足をロック、更に両足で頭の動きも封じて、そのまま犯人の脳天を地面に叩きつけた。

犯人……死んでねえよな？

「さあ、お次は」

【いい加減にしろ！】

「ぐはっ！」

貴志が更に追い討ちをかけようとしたら、貴志の精霊のマルスが杖で貴志の頭を殴って気絶させた。

貴志が気絶した後に、追い付いてきたトメさんにより、犯人の正体は、1年前から行方不明になっていた大山って生徒という事が分かった。

大山はドロ運が無く、ドロパンでも外ればかり引いていたらしく、山籠もりをして鍛えたドロ力確かめる為にドロパンを盗

んでいたらしい。

その後、俺と大山がデュエルし、この件は幕を閉じた。

因みに、殴られた際に記憶が飛んだらしく、貴志はクサヤジャムパンを食べた事から、気絶するまでの事を忘れていた。

- 十代 Side End -

「なあ、ゴーズ。何故か記憶が一部、曖昧になっているんだが、何があったんだ？それに、なんでお前はボロボロになってんだ？」

【……………（殴りたい　そして斬りたい　この馬鹿を）】

### 第35話 展示会（前書き）

今更ですが、1年目がかなり長くなってますね。

それなのに対抗デュエルの時も複数のデュエルを計画してたり……  
何時になったら、セブンスターズ編に入れるのやら。

### 第35話 展示会

「『スチームジャイロイド』で『古代の機械獣』に攻撃！そして、『ジェット・ロイド』でダイレクトアタック！」

「ぐわあああ！」

神楽坂

LP2500 2300 1100

翔のモンスター達がイエローの生徒……確か神楽坂のモンスターを薙ぎ倒し、神楽坂にダメージを与える。

これで神楽坂の場にカードは無くなった。

これで、翔が俄然有利になったと言えるが、翔のライフは500。

油断できない状況には変わらない。

「僕はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

神楽坂

LP1100 手札3枚

モンスター・魔法・罫

無し



翔

LP500 手札2枚

モンスター

『スチームジャイロイド』 攻撃力2200

『ジェット・ロイド』

攻撃力1200

魔法・罫

伏せ 2

「くそっ！俺のターン！ドロー！」

翔から神楽坂のターンに移り、神楽坂はカードをドローする。

そして、1枚のカードをディスクにプレイした。

「魔法カード『大嵐』を発動！フィールド上の魔法・トラップを全て破壊する！」

「なっ！？うわぁ！」

突如、巻き起こった激しい暴風により、翔の伏せカード、『聖なるバリア・ミラーフォース』と『スーパーチャージ』が舞い上がり、破壊される。

「俺は更に『古代の機械騎士』を召喚！そして、バトル！『古代の

機械騎士』で『ジェット・ロイド』に攻撃！これで俺の勝ちだ！」

「そうはいかない！」「『ジェット・ロイド』の効果発動！このカードが攻撃対象になった時、手札からトランプカードを発動できる！僕は手札から、『魔法の筒』を発動！」

「何だと!？」

翔の言葉に神楽坂は顔を青くする。

しかし、『古代の機械騎士』の攻撃は止まらない。

いや、『古代の機械騎士』が突き出した槍は筒に吸い込まれる事で、阻まれて無効になる。

そして、吸い込まれた槍が神楽坂に向けて射出される。

「うわぁぁぁあ！」

神楽坂

LP11000

神楽坂のライフが終わり、デュエルの決着が着く。

負けた神楽坂に三沢が近づき、声を掛けるが、神楽坂は何処かへ走り去っていった。

「ん？なんだなんだ？一体何があつたんだ？」

そんな中、人混みを掻き分けて十代が姿を現した。

「十代か、翔が決闘王、武藤遊戯のデッキの展示会の残り1つの整理券を賭けて、デュエルしてたんだよ」

十代に簡潔に状況を説明すると、十代は「え」と声にならない声をあげた後、叫び声をあげた。

「まさか……知らなかったのか？」

「知らなかったのかつて、貴志は知ってたのかよ!」

「今日、展示会の整理券を配るって昨日のHRで言ってたぞ」

「マジかよ」

俺の言葉に落胆する十代。

まあ、そんなに落胆する必要は無いんだけどな。

「あっ! アニキ!」

トメさんから、整理券を受け取った翔がこちらに駆け寄ってくる。

そして、落胆している十代に整理券を差し出した。

そう、翔は十代の為に整理券を手に入れようとしていた。

ラー・イエローの生徒を倒してまで手に入れたのだから、大したも

のだ。

翔には悪いが、正直に言っただけ、会った当初は、十代の後ろに着いていく取り巻きというイメージだったんだけどな。

制裁デュエルを機に変わったという事だろうな。

十代と関わった者は良い意味でなにかしら変わっていく……俺もそうだったしな。

「あつ、そう言えば貴志は整理券は持つてるのか？」

翔から整理券を受け取り、はしゃいでいた十代が気付いた様に俺に聞いてきた。

「愚問だな。何を隠そう一番最初に、整理券を手に入れたのはこの俺だ」

「……ホント、貴志ってその事を隠れて一人でやるよな」

「お前達が朝の3時に起きられたのなら、誘っていたが？」

「……無理だな」

「無理っス」

「だろう？まあ、今回は無理で良かったかもしれないがな」

俺の言葉に十代達は首を傾げる。

「何かあつたんスか？」

「ちよつと……な」

三沢から何故かピケルやクラン、各種霊使いのどこが良いかを延々と聞かされたり、聞かされたり、聞かされたりしただけだ。

時刻は午後10時、飯も風呂も済ませた後で、今は今日出たデュエル雑誌を読んでいる。

「エド・フェニックス、17連勝か……エドも頑張ってるな。ん？誰か来たのか？」

扉がノックされたので、応対する為に扉を開ける。

「なあ！これから見に行かねえか？」

「何を……ああ、デッキをか」

十代に言われて一瞬何と思ったが、今このデュエルアカデミアで寮を抜け出してまで、見たい物と言ったら、1つしか無いので、直ぐに言い直す。

「ああ！もう展示されてるらしいし、見に行こうぜ！」

「お前な……また制裁デュエルを受ける羽目になるぞ」

「見つからなければ大丈夫だって。それに、後ろの皆も行きたがってるみたいだぜ？」

「後ろ？」

十代に言われて後ろを見ると、其処には目を輝かせているマルスとゴーズ、カイエンが居た。

「お前等な……」

【良いじゃねえか。減る物じゃねえんだし】

俺が整理券を取った苦勞が無駄になる気がするんだが……まあ、良  
いか。

俺もマハードさんに相談したい事もあるし。

「分かった。俺も行く。だが、10分程時間をくれ」

「分かった。じゃあな」

十代が扉を閉めた後、俺はパソコンの電源を入れた。

十代達と合流し、校舎に向かう途中、同じくデッキを見に行く三沢



「マンマミーヤー!!」

俺が最後に通気孔から降りた時に、何処かの配管工が散る際に言う様な悲鳴が聞こえてきた。

「今の声は!？」

「恐らく、クロノス教諭のものだろう」

十代がそれに反応し、三沢が誰の悲鳴かを答える。

「今の悲鳴がしてきた方向ってまさか……行ってみるぞ」

俺達は悲鳴が聞こえた展示室に向かい、扉を開ける。

すると、展示室の中央にあるガラスケースは無残にも割られ、その前には立ち尽くしたクロノス先生が居た。

「クロノス教諭……まさか」

「ちちちちち違うノノノノーネ! わわ私じゃないノーネ!」

三沢の言葉を慌てながら、否定するクロノス先生。

冗談抜きで怪しく見える。



「（っ！マルス、ゴーズ、カイエン、武器を退け！）」

横で各々の武器を構え、今にも実体化して、クロノス先生に攻撃しそうなマルス達を制す。

【ですが】

「（多分、クロノス先生は犯人じゃない筈だ）」

【何でんな事が言えんだよ】

「（クロノス先生が犯人なら、わざわざ悲鳴をあげる必要は無い。下手をすれば、ガードマンが来かねないからな）」

【もしも違った場合は？】

「（その時は、煮るなり焼くなり凍らせるなり切り刻むなり好きにしる。だから、今は武器を退け）」

【【分かノりましたノったノったわ】】】

俺がマルス達を宥めている内に、十代がクロノス先生は鍵を持っているから、ガラスケースを割る必要は無いと言い、クロノス先生の無実を皆に証明していた。

その後、クロノス先生に事情を聞くとどうやら、後ろから突然殴られ、気絶。目が覚めるところになっていたらしい。

「この事が明るみになればクロノス教諭は……」

三沢の言葉にクロノス先生は青くしていた顔を更に青くする。

「お願いなノーネ！一緒に探して欲しいノーネ！」

「顔を上げてくれよクロノス先生。俺達も手伝うからさ」

額を床に擦り付けるクロノス先生に十代が手を差し伸べる。

「うう、ありがとうなノーネ！本当にありがとうなノーネ！」

「よし！さっさと行くぞ」

手分けして犯人を探す事になり、皆と別れた後、周りに人が居ない事を確認する。

今回の事は、かなり頭にきている。

だから、犯人捜しに対して、自重は一切しない。

マルス達はマルス達で既に散開して、犯人を捜しはじめている。

俺は俺で捜す……

「クシル、久し振りに飛ぶぞ」

【クエー！】

クシルをいつもの幼鳥の姿ではなく、本来の姿で実体化させて、背中に乗る。

月明かりで照らされて、下の様子を見るのには、不都合は無い。

そして、クシルの体の色は黒。

実体化したとしても、周りの風景に溶け込んで、肉眼で捕える事はできないだろう。

「行くぞクシル」

【クウエエー！！】

- ??? ? Side -

「ヴァンダルギオンの攻撃！！」

「うわあああっ」

百野真澄

LP10000

5年前……周りにモノマネ野郎、コピー野郎と蔑まれ、デュエルモンスターズが嫌になった時の事だ。

偶々、童実野町に住んでいる祖母の家に行った際に、決闘王、武藤遊戯のデュエルを生で見たのは。

そのデュエルを見て1つの思いが産まれた。

それはただ1つ……武藤遊戯に対する憧れだった。

後で知った事だが、あのデュエルは、人からレアカードを奪い、カードショップから、上納金を取り上げるストア・ブレイカーという集団を退治する為のデュエルだったという事も、その思いに拍車を掛けた。

俺の手には盗んで来た武藤遊戯のデッキがある。

正直、盗んだ事は後悔している

だが、もう後戻りはできない。

俺はこのデッキを使って、武藤遊戯に……憧れの武藤遊戯になるんだ！

- ??? ? Side End -

「見つけた……クシル、あの岩場の近くに降ろしてくれ」

【クエ！】

クシルの実体化を解き、マルス達と十代達に連絡してから、岩場の方へと向かう。

上から見たが、『有翼幻獣キマイラ』と『パトロイド』の姿があった。

恐らく、デッキを盗んだ犯人と翔がデュエルをしているのだろう。

「『有翼幻獣キマイラ』でダイレクトアタック！幻獣衝撃粉碎！！」  
「うわあああっ！」

翔

LP18000

「大丈夫か翔！」

膝を着いている翔に駆け寄る。

「貴志君、デッキを取り戻そうとデュエルを挑んだんだけど、負けちゃった」

「そうか……大した奴だよお前は」

普通、決闘王のデッキが相手と知れば、怯むだろう。

だが、翔は怯む事無く、逃げる事無く、立ち向かった。

入学当初だと考えられない事だ。

「おい！」

高笑いをしている見覚えのある犯人……神楽坂の方を向いて、声を掛ける。

「何だ？」

「次は俺が相手だ」

「フツ、お前がこの俺と？決闘王の「黙れ。闘うのか闘わないのかだけ答える」なっ、良いだろうやってやる！」

そう言うと、神楽坂はデュエルディスクを構えて、起動させる。

「翔、デュエルディスクを貸してくれ」

「でも、相手は決闘王のデッキっすよ！無茶っすよ！」

「心配すんな。あの”デッキ”になら、勝った事は何度もある」

「えっ？それって……」

戸惑う翔から、デュエルディスクを受け取り、デッキをセットする。

【何とか間に合いましたね】

【そうみてえだな】

「（早くカードに戻ってこい）」

【【ああ！／ええ！】】

マルス達が戻ったのを確認して、デュエルディスクを起動させる。

「神楽坂、言うまでも無いがお前が負けたら、デッキは返して貰うぞ」

「ふん！勝てるものか！この決闘王のデッキに……いや、この決闘王に！」

「勝手にほざいてろ」

「デュエル！」

そうして、デュエルの火蓋は切って落とされた。

第35話 展示会（後書き）

鷹

「さて、今回は主人公が翔を見直すの回でした。次で神楽坂戦ですが、ちよつと時間がかかると思います」

貴志

「何故だ？」

鷹

「モンスターの名前と色を一致させないといけないからね。ちよつと二動のお世話になってくるよ」

貴志

「MAD動画にはまって、更新が停滞しない様にな」

鷹

「.....」

.....  
それではまた次回！」

貴志

「オイ！」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1820v/>

---

遊戯の弟子は闇使い

2011年11月8日03時17分発行